

ひと葉　～ 弐の巻～

亜空@UZUHA

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

里を抜けたサスケと、故郷に戻った主人公。互いに想いは断ち切ったのか……。◆
『暁』の台頭により新たな道を歩み始めた主人公。姉との再戦を経て、ついにイタチとサスケの戦いを止めようと決意するが……。◆原作沿いですので『式の巻』からでもお気軽にどうぞ◆大戦前まで（以降は『参の巻』）

目次

第1章 砂の里編

侵入者	1
烈風	16
砂漠の月	20
空に舞う砂塵	30
二度落ち	41
野檻樓菊	48
約束	53
戻り風	73
柔らかなヒカリ	80
白い瞳	90
明けの頃	101

鍵

第2章 再戦編

籠の蝶	119
つくりわらい	128
哀傷	135
遠く of 空	141
退紅	156
二藍	174
銀鼠	179
焦香	190
海松色	203
半色	213
紺瑠璃	219
鍵	108

深淵	ひと包み	対極	望み	掲返し — がちがえし —	夢のあと	花の夢	夏の夢	母の夢	英雄の夢	明け方の夢	夢の旅路	秘色 — ひそく —
358	344	330	316	310	299	290	279	273	268	256	248	235

償い	辿り着いた場所	裁きの雷 (いかずち)	幻	秘かなる血	歴史	薄氷	哀願	第3章 血戦編	衝迫	忍道	悲哀	瓦解
492	478	467	455	435	426	419	408		393	389	378	367

棘	アキラリウム	鎖	第4章 暁襲来編	引き潮	禁忌	涙の答え	真実への入り口	兄	悪夢	残像	惨絶	最果て
609	590	577		567	558	551	540	529	524	518	511	502

英雄の帰還	輪廻転生	兄弟子	影	刻印	零地点	第三段階	第二段階	第一段階
689	683	677	666	656	640	632	623	615

第1章 砂の里編

侵入者

「風影様……そろそろ会議のお時間です」

風影……。

砂隠れの里の長を示すその名で呼ばれたのは、尾獣『守鶏』をその身に住まわす者……。

大蛇丸による木ノ葉崩しから三年。

大蛇丸に加担していたこの里は木ノ葉と和解し、新たなる同盟を結ぶことを許された。

新しい時代。

自ら望んでその頂に上ったのは、この里を良い里にしたい……そういう思いに違いなかった。

かつて、いや、今現在も周囲が「危険人物」という認識を拭い切れぬ現状は知っている。

だが、彼は変わったのだ。

あの木ノ葉という里で出会った、二人の忍によつて。

悪くない……

そう思う。

こんなふうはこの里を、誰かを守りたいと、そう思う自分が何故だか誇らしかった。周囲もそれを信じつつあるのだろう。

でなければ、いくら強大な力を持つものとして、里の長になることを許すはずが無い。彼は里に認められ、それに応える機会を得た。

だが、そんな彼を再び混沌が襲う。

「風影様!!」

先ほど会議を終えたばかりというのに、彼の部屋に飛び込む部下の声。

それは先ほどとは違う種類の声音だった。

「どうした」

落ちて着き払い、ゆっくりと立ち上がった彼の前に現れた部下は、

「里の北東より、不信な輩が侵入したとの報告が……」

「数は？」

「〃白袴〃に〃キツネの面〃を被った怪しげな者がただ一人……」

風影は腕を組んだまま一瞬黙った。

部下は『忍』という表現を使わない。

「状況は？」

「風影様との面会を希望しているようですが、素顔も見せず、名乗りもせず、不信人物として防衛隊が侵入を阻んでいます」

忍でもない、白袴姿の者……。

もちろん心当たりなどあるはずも無く、

「様子を見つつ、周囲に援軍の気配がないか調べろ」

そう命ずる……が、どこか引つかかるものを感じていた彼は。

「オレも行く」

そう言つて、窓から飛び出した。

一方、北東部の防衛線は、奇妙な侵入者の出現に、にわかに動揺していた。

純白の袴という異様で古風な成りをし、狐の面をはがそうともしない目の前の“敵”は、ただ風影との面会を要求するのみで、それ以上踏み込もうとも、立ち去ろうともしなかつた。

その身の丈は……まだ若い彼らの長よりも、さらに華奢だった。

仮面からはみ出す髪は黒く、無造作に後ろで束ねられている。

少年……いや少女か……。

面でくぐもった声では、そのどちらとも判断がつかなかった。

が、その者は腰に刀、背に弓矢を携えているにもかかわらず、彼らに対して殺気を放つこともなく立っている。

「風影様にお取次ぎを……」

三度目の言葉だった。

前の二回と同様、その目的は添えられない。

無論、聞いたところでムダだった。

だから侵入者は『不信人物』として取り囲まれている。

防衛隊を率いる忍は、この侵入者の語られぬ真意を推し量る。

いつまでこの押し問答が続くのか……。

砂の舞う中で、忍とそうでない者との間合いは少しも変わらない。

と、彼の肩に一羽の鳥が止まった。

砂隠れの本部から放たれた連絡用のその鳥は、隊長である彼に風影の言葉を伝える。

彼は直ちに、与えられた指示を部下たちに伝えた。

が、その声の届くはずもない侵入者が、部下よりも先に行動を起こした。

進むか引くか、推測はより悪いほうへ転がった。

「攻撃許可!! そいつを捕らえろ!!」

白袴に狐面の侵入者は、風のごとく防衛線への真ん中へ飛び込んだ。
無謀だ。

そう思っていたからこそその油断はあった。

が、十数名の忍を相手に、侵入者は砂塵を舞い上げ突き進んでいく。

「これ以上里へ踏みこませるな!!」

放つ忍の道具など、無意味なものかのように反れ、侵入者の身体に当たらない。

何の術だ?!

考える間は無かった。

里からは、風影が自ら向かっていると聞いたばかりだ。

これ以上踏み込まれば、正面からぶつかり合い、スキを突かれた風影の身に危険が生じることになる。

防衛隊の名に懸けて、侵入者を風影と接触させてはならなかった。
だが。

「くそっ!! 速い!!」

侵入者は身体の原型を留めぬほどの速さで駆け抜ける。

先読みしてクナイを放とうとも、その身体がまるで何かに覆われているかのように、

金属音と共に弾かれた。

無効化された武器。

原因を分析する前に彼らがやるべきことは、忍術をもって侵入者を排除すること。相手はたった一人。

突破を許して言い訳のたつ数ではない。

「岩を利用して取り囲め!!」

部下らも印を結んだ。

砂に立つ岩は大きく硬い。

追い詰めるには十分な壁となる。

だが、発動した砂隠れ由来の忍術は、進入者が抜いた刀の一振りで、文字通りなき払われた。

なんの術式も持たないはずの、ただの剣で……。

その現実にも目を奪われたスキに、白い風は彼の傍らを駆け抜けた。

「くっ……!!」

やっとの思いで放ったクナイは、斜め後ろから侵入者の右足を掠めた。

が、そのスピードは一瞬さえも衰えることなく、彼らを尻目に遠ざかる。

「追うぞ!!」

白い背から離される前に、彼は部下に命じた。
誰一人、侵入者からの攻撃を受けたものはいなかった。

風影は、理由も無い気がかりを抱えながら走っていた。

自ら現地へ出向こうとしている彼の身を案じ、後には一個小隊が続いている。

彼らが引き離さんばかりの速さでそこへと向かわねばならぬほど、風影は胸騒ぎを感じていた。

「風影様っ!!」

後ろで小隊長が叫んだ。

前方に激しい砂煙が舞い上がっている。

「防衛線を突破されたんだ……!!」

「我愛羅様、お下がりでください!!」

彼の前に、小隊が壁を作る。

疑惑を抱えたまま、我愛羅はその後方に陣取った。

そしてそう待つことも無く、彼の前に侵入者が姿を現した。

聞いていたとおり、全身白づくめで妖しい面を被った、忍の姿をしない者。

それは風のごとき速さで防衛隊を置き去りにし、彼の壁の前へ舞い降りた。

「取り囲め!!」

小隊長の合図で、侵入者は着地と共に取り押さえられる。
が、

「いないっ?!」

もう一度、そこに白い風が吹いた。

「風影様にお取次ぎを」

声のした方は、防衛隊と援護の小隊の中間点。

「い、いつの間に……!!」

その場にいた砂の忍は、総出で“風”を取り囲む。

だが、それを制するものがあつた。

それは、侵入者の攻撃ではなく……。

「待て、攻撃をやめろ」

狙われているはずの風影の一声だった。

「そいつは敵じゃない」

彼はもう一度言った。

その場から殺気が薄れ、忍たちは侵入者と風影を怪訝な顔で見比べる。

キツネの面は風影を向いて、少し笑った気がした。

「どういうつもりだ」

本部に戻り、不信を打ち消さぬ部下たちを下がらせ、彼は言った。相変わらず黙ってついて来る『侵入者』は、そこで初めてクスリと笑った。

「久しぶりだね、我愛羅」

彼の部屋で、キツネの面は初めてとり外された。

「どういうつもりだ、ナナ」

三年ぶりに見るナナは、少しも変わっていないかった。

ただ、黒い髪が伸びたくらい。

「我愛羅に会いたくて」

笑った顔も、そのままで……。

彼は小さくため息をつき、ナナを椅子に座らせた。

「何故こんな格好であんな無茶な進入をした」

白い袴の裾を赤く染める傷に、彼はきつく包帯を巻いていく。

「私は今、木ノ葉の忍じゃないから……」

ナナは半分だけ答えた。

「あのあと、木ノ葉を出て……修行してたの」

上から降る声は、徐々に深い吐息を混ぜる。

「……故郷で修行でもしていたのか？」

彼はあっさりとその口に出した。

「……やつぱり、我愛羅は知ってたんだ。私の一族のこと」

ナナは小さく笑った。

悟らぬはずは無い。

彼女の一族にしか持ちえぬ術を、この身で感じたのだから。

あの術がどういうもので、それを扱った彼女がどんな人間か、わからぬはずは無かった。

だから、彼は答えずに、ナナの次の言葉を待つ。

もうひとつの問いに答える言葉を。

「我愛羅……アナタはある組織から狙われてる」

ナナの答えは唐突だった。

彼は立ち上がり、ナナより目線を高くして問う。

「なんの組織だ？」

「『暁』っていう、各里の抜け忍が集まった小規模組織」

「何故オレを狙っている？」

ナナは一瞬うつむいた。

そして、彼の腹を指差し、呟いた。

「コレ……」

言わずともわかる、そこに住まうモノの存在。

ナナの目は切なげに伏せられた。

「修業と並行して、『暁』に関する情報を集めてたの。そうしたら一週間前に、近いうち
にアナタを狙うという情報をつかんだ……」

彼は何も言わず、ナナの隣に腰掛けた。

「この里の警備能力を確かめたくて、あんな無茶をしちゃったけど……実際、ここはもつ
と警備体制を強化しないと『暁』に対抗できない……」

砂で汚れた白い袴が、少し震えた。

「何故、ひとりで『暁』を調べていた？」

そう問うと、ナナは一度目を閉じ、決心したように息をついた。

良い予感はしなかった。

だが、彼は見上げてくるナナの瞳をまっすぐに受け止めた。

次の言葉も、ちゃんと受け止めるべく。

「『暁』は……」

ナナはゆっくりと口を開いた。

「ナルトも狙ってる……」

その理由を、彼は尋ねなかった。

ナナは言葉を繋げた。

「そこに……サスケの兄もいる……」

その目に、見たこともない影が浮かぶ。

「サスケの兄、うちはイタチを……私はよく知っている……」

思わず、組んでいた腕を解いた。

背筋が震えた。

ナナの瞳の影が、取り返しもつかないほど濃いことを悟ったから……。

そしてその影の本質を、今やっと、垣間見た気がしたから……。

「木ノ葉にいたら……、姉を倒す力も得られないし、『暁』を調べることができないから……」

ナナの心を打ち砕いた『姉』という者の影が目の前にちらつく。

そして、見たことも無い『サスケの兄』の影も。

「だから私、木ノ葉の忍としてじゃなく、*“和泉菜々葉”*としてココへ来たの」
初めて聞かされた彼女の本当の名……。

その名も、そんな言葉も、木ノ葉の人間には到底明かせはしないだろう。
一族のことも、『サスケの兄』のことも、恐らく伏せているはずだから。

ナナには背負うものが多すぎる。

そして、重すぎる。

我愛羅はナナの肩に触れた。

「ナナ……」

三年前、木ノ葉を発つ時に、ナナに言うべき言葉を見つけられなかった。

姉や兄のように、『早く怪我を治せ』とか『お大事に』とか『また会おう』とか、ありきたりな別れをすれば良かったのだ。

が、言葉はひとつも出てこなかった。

あの時何を言うべきだったのか、正解はずっとわからないままだった。
が、そうやって三年も悩まされていたわりに、案外簡単な答えが見つかった。

「*“ソレ”*ではお前をひとりにはしない」

ナナを侵す孤独を薙ぎ払いたかったのだ。

孤独だった自分に慈愛をくれたから。孤独ではないと教えてくれたから。

あの時、たったひとりで死んだはずの實の姉と戦ったナナ。誰にも明かさない力を使っただろう。

きつと、戦いの中で他者には言えないこともあつただろう。

そしてもつと暗い深淵には、ナルトたちにも言えない秘密が巣食っていた……。

「我愛羅……」

ナナはちやんとこちらを見た。

そして、

「アナタは私を知ってるもんね……」

ホツとしたように息をついた。

知っている……。それは確かに武器となった。

ナナが何者か知っていて、おそらく何のために木ノ葉隠れの里で忍になったのかに気

づいていて、ナルトへの想いもわかっている。

そして今、最も深く重い秘密を知らされた。

そんな自分だけが持てる武器。

「オレはお前を知っている」

それを「言葉」にすると、ナナは少し笑った。

秘密の共有は、絆となるはずだった。

「だから、ググでは、お前はひとりじゃない」
もう一度そう言おうと。

「ありがとう、我愛羅」

ナナの顔にようやく安堵の笑みが咲いた。

烈風

「暁の侵入経路の予測はつくか？」

砂の忍が『烈風』に尋ねた。

白い袴に、キツネの面をつけた『烈風』は、風影の隣より進み出て、地図に細い指をはわす。

「考えられるのはココとココ」

どちらも、里の入り口を主張するような場所だった。

「正面きって向かってくるとでも言うのか？」

砂の忍の中に、どよめきが起こる。

が、風影は何も言わない。

「暁は、それだけの力を持つている……ということですよ」

『烈風』は冷めた口調でそう言った。

辺りは急に静まった。

異様な姿から発せられるその声は、風影の横で冷涼に響く

「とにかく、そこに暗部に2小隊と、正規部隊を4小隊配置しろ」

風影がそう命じること、軍事会議は終了した。

「オレはまだ他のことで会議がある。お前は先に休んでいろ」

上役だけを残して他の忍が去る中、風影が『烈風』に言った。

キツネの面が少し傾き、『烈風』はカंकロウと共に会議室を出た。

「ナナ、砂は暮らし難いだろ」

早朝から日の沈む時刻まで、ナナは彼らと共に防壁警備の見回りに就いていた。

途中、砂嵐に見舞われることもあった。

ナナには経験のないことだろうと、彼は案じていた。

だが、ナナは面をとって笑った。

「厳しい土地だとは思うけど、砂とうまく付き合えば『忍の里』としては最高だよ」

『忍の里としては』……その言葉の響きが、何故か他人事のように響く。

『私は今、木ノ葉の忍じゃないから』

我愛羅に呼ばれ、初めて里を騒がす『侵入者』と面会したとき、面をとった彼女はこう言った。

頑なに、木ノ葉の忍としての自分を否定するナナ……。

その理由を、彼はまだ聞きかねている。

気になるのは、彼自身も把握できずにいる感情のせいだった。

中忍選抜試験の時……。

弟に理解不能な術をかける、ボロボロのナナを目にしたあの時からの……。だから彼は、ナナを引き止めた。

「ナナ……」

この三日間、迷った末に開いた口だった。

が、それは、ナナによってあっさりと遮られた。

「カンクロウにお願ひがあるんだけど……」

『何だ?』とも聞けない彼に、ナナは少し笑って言った。

「木ノ葉には、私がここに居たことを知らせないでほしい」

彼の胸に、不安に似た渦が巻いた。

が、ナナはそれを見透かしたようにまた笑う。

「休業中……の木ノ葉の忍が、勝手に他里に干渉しちゃマズイでしょう?」

少し、自嘲気味であることは隠しきれていなかった。

「やっぱ、報告はしてねーのかよ」

「うん」

理由を聞くことは当然の流れのはずだった。

だが、カンクロウはそうしなかった。

すでに、我愛羅から「ナナの願い」を聞かされていたというのものもある。

その時の我愛羅の顔が、風影になることを宣言した時と同じくらい真剣だったのもある。

「わかってる……」

だがしかし、自身の意思で答えた。

「お前が砂に『その姿で』居たこと……木ノ葉には明かさない……」

ナナはその返答に、『ありがとう』とだけ言つて、宛がわれた部屋へと消えて行つた。

砂漠の月

防衛計画の再構築のため、連日、真夜中まで会議があつた。

だがこの日、ようやくそれが完成し、22時頃に仕事を終えることができた。

テマリに聞いた、最近里で流行っているらしい『チャイ』という飲み物を手に、我愛羅はナナの部屋の戸を叩いた。

取り寄せた材料とレシピを元に、自らが淹れたものだ。

ナナの方にはミルクを多めに入れ、うんと甘くしてある。

そのほうが好みだと思つたのだ。

ナナはまだ起きていて、歓迎してくれた。

必要な客人が宿泊するこの部屋は、絶壁に面しているため、窓からの見晴らしは良かった。

といつても、砂漠地帯が広がるばかりで殺風景である。

それでもナナはこの部屋を気に入ってくれているようだ。

窓辺に敷かれた絨毯の上に、ソファーにあつたクッションを全て並べ、ローテーブルにいくつものキャンドルを灯して、くつろいでいるようだった。

そこにちょうど、窓の外から月の光が射しこんでいる。

「おいしい！ 何ていう飲み物？」

「『チャイ』という。最近、里で流行っているようだ」

「牛乳とお砂糖が入った……お茶？ なんか不思議な香りもする」

「スパイスが入っている。この辺りで昔から飲まれていたミルクティーらしい」

並んで絨毯に座り、クッションに寄りかかりながらチャイを飲んだ。

ナナは猫舌なのか、息を吹きかけて冷ましながら飲んでいる。

それでも、我愛羅の淹れたそれを存分に味わっていた。

その様子を横目で見ているうち、我愛羅自身の身体も温まった。

ろうそくの灯火と薄い月の光とが混ぜ合わさり、不思議な空間にいるような気分になった。

ナナもそうだったのかはわからない。

が、カップの中身が半分ほどになった頃、唐突に自身のことを語り始めた。

『三年間、ほとんど誰ともしゃべっていないから、うまく話せるかわからないけど』とことわって。

再会の時に話したこととは比べ物にならないほど、長い物語を……。

ときおりカップに口をつけながらゆっくりと語るのは、彼女がいる「闇」だった。

一族のこと。その特異で禁忌とされる力のこと。

与えられた使命のこと。ナルトとの関係。

姉との戦いのこと。

うちはイタチのこと。

そして……、サスケへの想いも……。

その全てが、木ノ葉隠れの里では口にすることを許されぬ言の葉。

少女がたつた独りで抱え込むには、大きすぎる「闇」たち。

想像していたよりもずっと、それは濃く、深く、冷たかった。

が、慄きはしなかった。

「私、逃げるために木ノ葉を出たんだ」

ナナはそう自嘲した。

「みんなには『姉を倒すため』なんて言ったけど、本当は逃げるためだった」

強烈に「孤独」が香る。

「力や術は身に付いたけど、なんにも解決しなかった」

歪んだ笑みを浮かべるナナに、否定や慰めの言葉を差し出すつもりはなかった。

ナナ自身が言う通り、ナナは逃げたのだ。

まとりつく「闇」を持って余し、仲間たちとわかり合えない現実からも、逃げ去った

の
だ
ら
う。

だが、それを愚かだとは思わなかった。

自らを孤独に追い込んで、なおさら闇を濃くしたとしても、決して愚かだったとは思わない。

そうせざるを得なかったことを、哀れにも思わない。

何故なら、それでもナナは強いと知っている。

あの時、ボロボロになって心を閉ざしたナナは、そのまま全てを投げ出すこともでき
たはずだ。

怒り、怨み、全てをぶちまけることもできたはずだ。

だがナナは、全てを抱え込んだまま、ちゃんと前に進んだのだ。

選んだ道が「逃げ道」だったとは思わない。

その道が今、「ここ」に繋がっているのだから。

「ナナ、「ここ」ではお前はひとりじゃない」

自説を説いても、感想を述べても、想いを語っても……、ナナの心は少しも軽くなり
はしないだろう。

だからまた、二日前の台詞を繰り返す。

ナナが「この地」で全てを語ったことの意味を知っていた。

自分にだけ語った意味を。

術をかけた者と、かけられた者……、ただそれだけではない、二人の間にだけ存在する「交感」があると信じていたから。

それはきつと、この世に産み落とされる前から力を背負わされていたという、互いに重なる過去が繋げる絆なのだ……。

だからナナにとつて、今、一番必要なものを与えたかった。

木ノ葉の地で、無償の愛……慈愛の存在を教えてくれたナナに。

それが、ナナから与えられたものと同じ慈愛か、そうでない別のものなのか……。知らないふりはしていたけれど……。

全身に「孤独」を纏わりつかせたナナに、今、この瞬間はヒトリじゃないと、そういう時を与えたかった。

「ありがとう、我愛羅」

ナナはこの間と同じように笑んだ。

だが、今夜はほうつと息をついて言葉を続けた。

「私、アナタに会えてよかった」

少し肩をすくめて。

「『理由』は全然良くないのにね」

その「理由」……『暁』の目的である我愛羅自身、まだあまり自覚が無かったから、何も言わなかった。

と、ナナはすっかり冷めたカップの中身を一気に飲み干して、言った。

「私なんて完全に不審者なのに、みんな私を信じてくれてるし、カンクローも優しいし……。「ここ」は……なんだか居心地がいい」

まだ、返す言葉はなかった。

ナナが不意に窓を見上げて、呟いたから。

「砂漠の月は、綺麗だね……」

その明りに照らされるナナの横顔は、何物にも代えがたかった。

だが、こみ上げた感情と同じ言葉を、ナナが先に口にした。

「我愛羅……、私、アナタを護りたい……」

漆黒の瞳に月が映る。

儂くも、強い光だ。

それを見つめて、ようやく想いを零す。

「オレも護りたいんだ、お前を」

光は揺れた。

「アナタは護られる側なのに……!」

「それでも、そう思う」

「私は平気だよ! ちゃんと修業したし」

強がりではなく、本心なのだろう。

だがナナは気づいていないのだ。

今まで護られたことがないから。

無償でそうしてくれるはずの父や母という存在からも、護られたことがないから。

自分がそうだったからわかる。

仲間の存在すら否定し続けていた日々、慈愛をくれる者が現れた。

友と呼べるものが現れ、やがて姉兄が現れ、支持者が現れ、仲間たちが現れた。

そうして、彼らを護りたいという気持ちが自然と芽生えるのと同時に、彼らが自分を

護ろうとしてくれて知っていることを知った。

親愛や姉兄愛、師弟愛、信頼、友情……いろいろな情が集まって自分の盾になってく

れていることを、あれから学んだのだ。

「オレはお前の心も護りたいんだ、ナナ」

だから、そのままの想いを伝えた。

深く傷ついたままのナナには届かないだろう。それでも祈りを込めた。

この“情”がナナの盾となるように。

「だったら……」

ナナは瞬きをして少し考えた後、こう答えた。

「今、私はアナタに護られると思う……」

媚びや気休めや同情じゃない。

その視線はまっすぐだったから、そう確信できた。

不思議と胸の奥が熱くなった。

まるで力がみなぎるようで……。

「ナナ、疲れているだろう？ そろそろ休め」

今はそれを溢れさせてはいけない気がして、そう言いながらナナの手から空になったカップを取った。

自分のカップと合わせてテーブルに置いたとき、初めてろうそくの火がいくつか消えていることに気づいた。

「うん……」

素直にうなずきながらの、ナナはクッションに身体を沈めた。

そして、

「我愛羅も、もう部屋に戻るでしょう?」

そう尋ねながら、体重をこちらに傾けた。

「明日も忙しいもんね」

「お前も、視察があるだろう」

「うん。連れて行ってもらえることになってる」

そうつぶやきながら、身体はどんどん埋まって行く。

ろうそくの残り火を見つめる目は、まどろみ始めていた。

「ナナ、ベッドに……」

そう言いかけて口を閉じた。

クツシヨンの波が揺れて、わずかに肩が触れたから。

“それを奪ってはいけない気がした。 ”それをナナが求めている気がした。 ”
それを与えなければならぬ気がした。

そして、きつと自分も求めていることを……。

だから。

「戻って明日の準備をしないとな」

そう言いながら、思い切り体勢を崩した。

「そうだね……。戻ったほうが……。いいね……」

ナナはゆっくりと同意し、瞼を下ろした。

「そうだな……」

我愛羅はナナが見つめていたともし火を眺め、窓の外の月を見上げ、それからナナの顔を見て、目を閉じた。

温かく、少し悲しい二人だけのこの空間は何故だかとても心地よく……。

『*~~~~~*は……。なんだか居心地がいい』

先ほどナナがくれた言葉を思い出しながら、自らもまどろみに身をゆだねた。

翌朝、鳥の声が聞こえて、二人同時に目を覚ました。

互いの身体が完全にクツションに埋もれているのを見て、二人で笑った。

月明かりでなく、朝日に照らされたナナの笑顔は、ここへ来たときよりずっと柔らかかった。

空に舞う砂塵

袴の裾で舞い上がる砂を気にも留めず、ナナは里の砦へと疾走していた。

その姿は、『烈風』そのもの。

追いつける砂の忍はほんの一握りだった。

(嫌な予感がする……)

砂へ来てから、カンクロウらと警備体制を見回りつつ、里の周囲に張り巡らせておいた陰陽式の結界。

それが破られた兆候を察知したのが、つい十五分前。

ナナは風影に、周囲の警備を最高レベルにするように言って、*“侵入者”*の存在する方へ飛び出した。

『烈風』だ!!」

その姿を見止めた警備隊は、すぐさま砦の見晴台へと案内する。

そこに居た者に、未だ*“侵入者”*の気配は察知できていなかった。

「来る……」

「……………え……………」

眉をひそめてキツネの面を凝視する彼らをよそに、ナナは手すりから身を乗り出した。

案の定、真正面の砂漠から向かって来る、ふてぶてしい気配。

「正面を……」

ナナは指差した。

見張りの男が、望遠レンズを覗く。

しばらくして……。

「何者かが二人……歩いて来ます!!」

その姿が明らかになった。

「黒いマントに赤い雲の模様……『烈風』のおっしやったとおり……!!」

「『暁』か……!!」

砂の忍が嚴戒態勢を布く中、ナナは背にしていた弓矢を手にした。

「うかつに手を出さないで」

周りに低い声でそう命じ、ナナは矢を放った。

高い唸りを響かせて、矢は二人の足元へと瞬く間に到達する。

矢が起こした風が砂ぼこりを散らし、二人の侵入者の姿が鮮明になった。

ナナはもう一度、それぞれの足元へと矢を放った。

「なるほど……」

「忍の里にも、変わり者がいるってわけか……うん」

暁の衣は、不気味に揺れた。

そして、

「みんな、さがって!!」

ナナが言い終わらぬうちに、一人が放った。小さな物体が岩を襲った。

「……………?!」

突然響き渡る爆音。

「起爆札……いや、爆弾か……?!」

忍の一人がつぶやく間もなく、再び謎の物体が放たれる。

「打ち落とすまでだ!!!」

忍は当然、クナイを構える。

が、

「クナイはダメ!!」

ナナは叫んだ。

しかし、一人の放ったクナイがそれに命中する。

当然、それは岩の砂壁に到達する前に爆発した。

だが、それは彼らの予測を超える爆発の規模だった。爆風は、仕込んであった忍武器を雨のように降らせた。

「……………!!」

ナナは背にしていた刀で、それらを弾く。

そして、そのまま一気に壁を駆け下り、二人の侵入者へと斬りかかった。

(我愛羅……………!)

彼を護りたかった。

だから夢中だった。

それに、その黒いマントに浮かぶ紅い雲を目にした瞬間、身体はじつとしてなどいられなかった。

『暁』の二人相手に一人で斬り込んで、敵う相手とは思わなかった。

今は同じ組織に所属するというイタチの強さを、誰よりも知っていたから……………。が、援護があつた。

この里へ来て強化した防衛隊。

彼らが背後にいるはずだった。

だが、悲鳴が上がったのは自分や目の前の敵じゃなく、その背後から……………。

岩を振り返ると、最も信賴していた軍事参謀が薄く笑っていた。

(我愛羅……!!)

信頼して任に就けたはずの彼を思った瞬間、身体に痛みが走った。

そして、すぐに駆け巡る不快感。

(毒……)

すぐにわかった。

マントから不気味な「尾」さらけ出した男が、笑っていた……。



それから間もなく、風影は侵入者の一人、『デイダラ』と対峙していた。

奇妙な術で宙に浮く『鳥』を操るデイダラに対し、彼は砂を巧みに扱って乗っかっていら
れるだけの雲を造る。

ナナは……？

絶えず渦巻く感情を抑え、砂を操っていた。

いち早く里外の異変を感じ取り、烈風のごとく飛び出していったナナの安否が気にか
かる。

彼女は、今日の前にしている者を里へ入れさせないために出て行ったはずだ……。

が、ここに敵は居る。

「…………ちつ…………」

狙われているのが自分自身だとしても、ナナの身が気にかかった。

だが、『暁』の者が集中を欠いた状態でやり合えるほどの敵であるはずもなく……。

彼の扱う奇妙な起爆物は、彼の周囲で爆音を響かせる。

彼は見慣れぬその術に眉をひそめた。

手元から次々と繰り出される爆発物。

そして、彼を乗せる鳥のカタチを成した物体。

いったい何を元にして生成しているのか。

が、その時。

彼が睨み据えていた『鳥』が、下から現れた一筋の閃光によって貫かれ、泡のように

消えた。

「なんだあつ?!」

デイダラは空に投げ出される。

すると今度はその身体を狙い、再び下方から閃光が放たれた。

デイダラのみならず、我愛羅の眼もくらんだ。

と、すぐに彼の後ろに浮いていた砂の塊に、軽い足音がたった。

「…………ゴメン…………我愛羅…………」

少々息を切らして現れたのは、ナナだった。

左手にはまだ、今使ったばかりの弓を持っている。

「…………侵入…………させちゃった…………」

ナナは面越しに、デイダラを睨んだ。

「もう一人は…………結界術で…………足止めしたから…………」

そう言いながら、ナナは顎から滴る汗を片手で拭った。

「ナナ、怪我をしているのか…………？」

「平気…………ただちよつと…………」

「何だ？」

「『内通者』が…………計算外だったから…………」

「内通者…………？」

ナナは、軍事参謀の名を口にした。

「…………ユウラが…………？」

こめかみがズキンと痛んだ。

が、感傷に浸っている間などない。

新たな『鳥』を生んだデイダラが目の前まで来て笑った。

「さっきのヘンなヤツだな。コイツを貫くとは、面白い矢を射るな……うん」

我愛羅は不敵に笑う。デイダラに身構えた。

砂の里上空での戦闘は、再び激しく展開した。

忍らしからぬ術を使うデイダラと、忍の力を超えた術を繰り出す我愛羅と、そして忍でない術を扱うナナ。

三人の戦いは、地上で見守る者たちの想像の範疇を超えていた。

しかし、どんな戦いにも「オワリ」は訪れるもので……。

「我愛羅っ!!」

我愛羅は、ナナが爆発物を刀でなぎ払ったスキに、砂でデイダラの片腕をもぎ取った。

しかし、デイダラは一瞬のひるみも見せず、『とっておき』の術を放つ。

それは、二人ではなく……。

「里へ……?!」

「下」に向けられた。

「……くっ……」

我愛羅はとつさにチャクラを全開にし、砂を傘のようにして里を覆う。

この瞬間、デイダラが主導権を握った。

「これでオワリだよ……うん」

小さな『鳥』が、大量のチャクラを放出した我愛羅の元へと飛んだ。

「我愛羅っ!!」

が、一陣の烈風が吹き、白い布が我愛羅の身体を包んだ。

「……ナナっ……?!」

今度はデイダラの放った閃光が、砂隠れの里の空に煌めいた。

「我愛羅……」

デイダラの放った爆発物は、確かに自分に当たるはずだった。

この身で確かに、我愛羅を包み込んだはずだった。大切に。

が、その衝撃は無く、ナナの視界は何か塞がれていた。

「我愛羅……?」

顔を上げると……、汗を流し、息を乱した我愛羅の顔が暗闇に浮かんでいた。

周囲は真昼の空だというのに暗かった。

(砂の……防御……)

その空間が、『彼の砂の中』と知るのはたやすかった。

だが、『彼の腕の中』ということは信じがたかった。

が、自覚すると同時に胸がズキリと痛んだ。

「我愛羅……ゴメン……」

せめて、涙は我慢した。

「ナナ……無茶は……ヤメロ……」

彼は怒ったように言い、少し笑った。

「我愛羅……」

ナナはつられて、小さく笑った。

「待っててね……、私がケリつけるから」

護りたい……。

また、そう強く思って、ナナは陰陽の印を結んだ。

毒の回った身体で、練り上げられるだけの霊力を。

片腕の忍一人くらいなら、倒すことが可能な術を。

だが、それが発動されることはなかった。

小さな羽音がナナと我愛羅の耳元で鳴り、気づいた瞬間、ナナは我愛羅によって思い

切り突き飛ばされていた。

「……………?!」

放り出された空中で、爆発音を聞いた。砂の絶対防御が崩壊するのを見た。

そして、自分と反対側に投げ出されていく、力を失った我愛羅の姿を見た。

「ガア……………ラ……………?」

彼女が護ろうとした者は、最後の力で砂の傘を里の外へ出し、彼女が倒すはずだった者の手に捕らわれた。

ゆっくりと下降しながら、ナナはなすすべも無くその光景を見ていた。

二度墮ち

割れた仮面の残骸が、パラパラと空から降ってきた。

今、目にした光景がにわかには信じられず……、カंकロウはただ、後から墮ちて来た白い袴の少女を、夢中で受け止めた。

「……………お、おい……………」

仮面を破られた『烈風』の顔は、蒼白だった。

遠ざかる我愛羅を視界に入れたまま、彼が抱きとめなければ地に落ちててもその状態でいただろう。

「……………!」

彼は思わず呼びかけた本当の名を、後ろから砂の忍が駆けつけるのを気取り、慌ててひっこめた。

「カंकロウ……………! 『烈風』は……………?!」

しかし、その中にバキがいた。

カंकロウはとっさに『烈風』の顔を体で隠したが、バキの目はその顔を捉えていた。

そして、彼はその顔を知っていた。

「お前は……木ノ葉のいずみナナ……!?!」

カンクロウの腕の中、なかば放心状態だった『烈風』が身じろいだ。

その青ざめた絶望的な表情は、この状況を如実に表していた。

「くそっ……!」

彼はナナを下ろすと、我愛羅を追った。

バキが引き止めたが、その言葉を聞き入れる余裕や道理など彼には無かった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ナナの視界から我愛羅が消えた時、ようやく我に返った。

そして知った。

護るべき者に護られたということ。

「我愛羅……!」

小さく叫んだ。

声を出したことによって体に痛みが走り、逆にそれがナナを正気にさせた。

「行かなくちゃ……!」

喘ぐようにそう呟き、自由の利かない体を起こす。

集まってきた砂の忍の視線には目もくれず、ナナは外壁に向かう最後の風となった。

爆風で所々が引きちぎられた白い布が、うぎったいくらいにはためいた。

もつとタチの悪いのが、体を駆け巡る毒。

それはもう、視覚や聴覚にまで支障をきたしていた。

それでもナナは走った。

走ることができたのは、〃恐怖〃でしかなかった。

自分が我愛羅を救えなかったこと。

その事実への恐怖だ。

だから、カンクロウともう一人の『暁』の忍を残して去ろうとするデイダラの姿を視界に捉えると、何の躊躇も無く、ふところから『和泉』の紋の入った〃札ふだ〃を取り出した。

「ナナ……?!」

背後から突然風のごとくに現れ、飛び去ろうとしているデイダラに向かつていくその姿に、カンクロウは思わず叫んだ。

「じゃ、先にいつてるよ、ダンナ」

それには目もくれず、デイダラを乗せた『鳥』は我愛羅を連れて飛び立つ。

「ま、待て！」

追おうとするカンクローを止めたのは、立ちはだかるサソリではなかった。

「待って、カンクロー！」

「ナナ?!」

ナナは前方上空を睨んだまま言った。

「私が追う！」

そして、手にした札を放り投げ、短く印を結び呪しゅを唱えた。

「……………?!」

すると、札は一畳ほどの大きさに広がり、砂地の上に水平に浮き上がった。

カンクローだけでなく、サソリもその様を凝視する。

「私が追う。追跡部隊が来るまでカンクローは無理をしないで……………」

ナナはその札に飛び乗りながら言った。

「ナナ……………?!」

「何者だ……………?!」

そして、カンクローとサソリの視線などお構いなしに、札はナナを乗せて舞い上がった。

「あれを追え……!」

ナナは前だけ見据えて、自分を乗せた札にそう命じた。

振り返ったデイダラは一瞬驚きを隠さなかったが、ニヤリと笑ってそのまま飛び続けた。

ナナは懐から再び紙切れを取り出し、デイダラに向かって投げつけた。

「何だか知らないけど……」

それが「何」であるかはどうでもいいというように、デイダラは残った片手でそれを捕らえる。

「……………!?!」

しかしその紙切れは、クナイのように鋭く深く、彼の手に突き刺さった。

「へえ、面白い術だな……うん」

デイダラはかすかに興味を覚えたようにそれを眺めたが、すぐに手から引き抜いて地上に捨てた。

ナナは何度もそれを繰り返した。

だが、デイダラの逃亡を止めるほどの効果を得ることはなかった。

「あまり無理すんな……すでにサソリのダンナの毒で死にかけてんだろ……うん」

彼の言うとおり、強力な毒であることは間違いないと実感していた。

がナナは毒に耐性がある。

常人なら死に至るほどの毒でも、持ちこたえられるはずだった。

かつての『毒受け』の儀式に感謝せざるを得なかった。

「……………くっ……………」

だが毒に侵された体では、強力な術を扱うのは難しかった。

体力も尽きかけている。

ナナはフラリとよろめき、ついに札の上で膝をついた。

同時に札の浮力が奪われる。

「……………我愛羅っ……………」

叫ぶほどの力すら、ナナには残されていなかった。

「面白いヤツだったが……………、そろそろダンナも追いついて来る頃だ、追いかけてっこは終わ

りだな……………うん」

デイダラは面白そうにそう呟き、フワリと飛び上がった。

着地した先は、ナナの目の前だった。

ナナの乗る札の端で、彼は笑った。

「じゃあ、『一尾』はもらって行く。お前ももう楽になりな……………うん」

そして、ナナを遥か地上へと蹴り落とした。

同時に消えた足元の札から『鳥』の背に戻ると、我愛羅を連れただま飛び去って行ってしまった。

野檻樓菊

この地に赴いてから絶えず吹いていた砂交じりの乾いた風が、やんだ。

彼は一瞬、紅く染まった雲を見上げた。

そして、おもむろに立ち上がる。

「イタチさん？ どこかへ行かれるんですか？」

相棒というべき関係にある男が彼に言った。

「……ああ……」

低く答えながらも、イタチは四方八方に首をめぐる。

「一尾の捕獲には成功したらしいですからね、明日にはアレが始まりますよ？」

「……わかつている……」

背にかかる男の声に気半分に返事をし、向かうべき方向を知り得て歩き出した。

彼の脳内にある考えを完全に理解したためしの無い相棒は、それ以上何も言わない。

「……『集合』 までには戻る……」

イタチはそう言い残し、その場から消えた。

イタチの駆ける速さは、砂交じりの乾いた空気を切り裂いた。やみくもに走っていたのではない。彼はあるものを追っていた。

鬼鮫には見えるはずもない、瑠璃色の可憐な蝶だ。

組織から『一尾の捕獲成功』の連絡を受けてすぐ、それは現れた。

それが何を意味するのか、容易に想像がついた。

そして日が落ちた頃、彼は川原で足を止める。

乾燥地帯を流れる川の周辺は、ゴツゴツとした岩が転がる殺風景な場所だった。

だが、空気には先ほどまでは無かった湿り気が含まれている。

岩肌もかすかに湿って黒ずんでいた。

そこに、隠しきれない人の気配が漏れていた。

イタチは身構えることも無く、そのままの姿勢で、ゆっくりと身の丈の半分以上もある

岩の間を歩いた。

早い流れのおかげで、彼の足音も、潜む人間の身じろぎも聞こえはしなかった。

しかし彼の目は、岩の影でいつそう黒く染められた地面に落ちた“点”をとらえた。

(……血か……)

そう判断した瞬間だった、

「……………!!」

殺気が……。

今までかろうじて押さえ込んでいたかのような、膨れ上がった殺気が、一気に岩陰から放たれた。

キンツ……

辺りに鳴った音は一回だけ。

イタチは低い位置から喉もとに突きつけられた凶器を、クナイでなぎ払っていた。

見下ろしたその「敵」は、血走った双眸で彼を見上げ、片手は払われた状態のまま、荒々しい息でそこに立っていた。

あまりに幼稚な攻撃と、あまりに無防備な今の姿。

奇襲を容易にかわされて、絶望的な状況にさらされた「敵」という、安易な構図……。

一瞬だけ眉を寄せ、イタチはゆっくりとクナイをしまった。

そして、その動作を身じろぎもできずに待つ「敵」の肩に、両手をおいた。

ビクン……

細い肩が揺れた。

その手を知らないもののように、受けとめきれずにいる。

イタチはもう一度眉を寄せた。

彼はこの「敵」を知っていた。

「敵」も彼を、よく知っていた。

なのにその瞳には、彼は『イタチ』として映っていない。

「……ナナ……」

だから彼は、その名を呼んだ。

「ナナ……」

もう一度。

ナナは小刻みに震えたまま、まだ彼を認識できずにいる。

「ナナ……」

イタチはナナの乱れた呼吸をなだめる様にささやいた。

本当は彼自身も、動揺していた。

ナナの尋常じゃないこの様子は、その様相を一目見れば予測がついた。

彼女の白い着物は、ところどころに黒ずんだ模様をつけ、あちこち破けている。

イタチはなるべくゆつくりとした手つきで、まだ中途半端に上がったままのナナの右手を下ろそうと触れる。

が、細い手首は彼に捕らわれることはなく、ドン……と、彼の胸へと叩きつけられた。

「……してよ……」

同時に動き出す、ナナの心。

「返してよっ……」

彼の胸を拳で打ちながら、

「我愛羅を返してよっ……!!」

ナナは泣いた。

「我愛羅を返してっ!!」

繰り返し叫びながら、ナナは彼の胸を叩き続けた。

イタチはその拳を受け止められることもせず、黙って立っていた。

そしてナナが彼の胸に泣き崩れたとき、彼はようやくやく、震える肩を抱きしめた。

約束

ナナを抱きとめた時、迷うことはなかった。

鬼鮫に、『集合』には参加するが、しばらくは戻らないと連絡を入れ、そのまま岩影に身を隠した。

持ち合わせの布や傷薬で手当てすると、ナナはうつすらと意識を取り戻した。

水を飲ませると、『また毒が』と真つ白な顔で自嘲したので、解毒薬も飲ませた。

木ノ葉にいるはずのナナが何故ここにいるのか、何故忍の恰好でなく、懐かしい袴姿なのか……。

理由はわからない。

だが何をしていたのかは、砂まみれの白袴を見た瞬間にわかった気がした。

この地は砂隠れの里と『暁』の集合場所との直線上に位置する。

だから、砂を襲撃したはずのサソリやデイダラと戦ったのに違いなかった。

だとしたらその『毒』はサソリのものであるはず。

であれば、持っている解毒薬はそれに効くものであった。

ただ、相当な『力』を使ったようで……、その身体は死人のように冷たかった。

火を起こすわけにはいかず、ただマントでくるんでやることくらいしかできなかった。

ナナは虚ろなままもそもそと動いて、マントに包まったままイタチの膝に頭を乗せた。

まるであの頃のように……。

あの頃と違うのは、疲れて甘えているのではないということ。

今のナナは、疲れて、悲しんで、諦めている……。

ナナはそのまま、目を閉じた。

一尾を封印する儀式、『幻龍九封印』が行われているときも。

『象転の術』で、カカシやナルトと対峙している時も。

ナナは眠り続けた。

そして全てが終わった時、ナナは目を覚ました。

全てが終わるのを見ていたかのように。

ナナは気だるそうにふたつ瞬きしたのちに、抑揚のない声でつぶやいた。

「我愛羅は……死んじゃったの……？」

目は合わない。

「我愛羅……死んじやったの……？」

もう一度、同じ調子で問われ、

「……ああ……」

うなずいた。

ナナはやはり全てを知っているかのように、ゆつくりとこちらを見た。

目が合った。

ナナの瞳に、怒りはなかった。

あつたのは、ただの絶望……。

「……私は……我愛羅を護れなかった……」

ナナは大きく息を吐き、深くうなだれた。

まるで、地中に沈んで行くように。

「何故、お前が砂にいた？」

が、二人の間に沈黙は無意味と知っていた。

だから、今は風影である……風影であつた“一尾”の名を親しく呼んだ理由を問う。

「アナタたち『暁』が、我愛羅を襲いに行くつていう情報を得た。だから知らせに行つた」

ナナは『アナタたち』をわずかに強めたが、あとは機械のように平坦な口調で答えた。

「その恰好……、和泉の里からか？」

「そう。私はこの二年、あそこにいた」

「お前があそこに……？ 当主の命か？」

「違う。私の意思」

「……何があつた？」

ナナがあそこを好んでいなかったことは良く知っている。

幼いナナは、早くあそこを出て木ノ葉で暮らしたがっていた。

あそこに親族はいても、親しいものは一人もいなかった。

だから、自らの意思であそこへ戻るとは思えなかった。

そうせざるを得ない事情があるとすれば……。

「新たな術を会得する必要があつたのか？」

それだった。

「ねえ、イタチ……」

ナナは答えず、こちらに視線を向けた。

が、合っているような気はしなかった。

「姉上を、覚えてる……？」

ナナの姉……、美しいが冷たい目をした少女だった。

冷えて乾いた心を隠しもせずに生きていたのを、よく覚えている。

「琴葉……、だったな」

「そう。その姉が、怨睨オニになって私の前に現れたの」

「オニ……？」

ナナの目つきが変わった。

虚ろな中に、怨の炎が揺らめいた気がした。

「サスケが……、里を抜けたことは……？」

その目で口にしたのは、姉の名ではなかった。

「今は、大蛇丸の元にいる……と」

「やっぱり、知ってたんだ……」

情報は得ていた。

木ノ葉の忍が追手をかけた予測もできた。

だが、その時ナナがどうしたか……、ずっと気がかりだった。

ナナはそれを語り始めた。

怨睨オニと化した姉の話は、恐ろしかったが不思議と驚きはしなかった。

あの冷たい視線と乾いた声に何が込められているのか、初めから知っていた気がした。

それをナナには言わなかった。

言ったところでどうにもならない。

それに、

「その時に……」

ナナが唐突にマントを払いのけ、着物の襟を開いた。

「ナナ……」

乱暴に下げられたさらしの下……、露わになった肌には醜い傷痕があった。

思わず奥歯を噛みしめたのは、その痕から傷の深さがわかってしまったからではない。

それがただの傷でないと知っていたから。

そこにあるはずのものが壊されたことを知ってしまったから。

「刻印を破られた」

ナナは着物を直しながら、ついでのように付け足した。

「アナタにもらった赤いさらしも、クナイも、姉上に奪われた」

こちらの反応などまるで興味を示さず、

「だから、刻印が無くても尾獣を封印する方法と、姉を倒す術を得るために、和泉に戻ってた」

白袴の意味を明かす。

最初の問いと繋がっても、イタチは言葉を出せずにいた。

「その間、式神を使って『暁』の情報を集めたけど……、アナタのことは何もわからなかった。アナタたちの目的も……」

それを見透かして、ナナが問う。

「ねえ……、尾獣を集めて、何をするつもりなの？」

答えられるものは無い。

「尾獣を扱える人なんていなくせに、どうするつもり？」

ナナの声には力がこもり始める

「アナタはそこで何をするつもりなの？」

あの打ち捨てられた仏堂で飲み込んだものが、吐き出される。

「どうして木ノ葉を抜けてそんな組織にいるの？」

あの時、無理矢理に飲み込んだモノが……。

「アナタが一族を亡ぼしたのは本当なの？」

全部。

「どうしてサスケを生かしたの？　なんであんなに傷つけたの？」

答えも言い訳も持ち合わせてはいなかった。

目を逸らすことさえできずにいた。

が、ナナはそれらを望んでいたわけではなかった。

小さな刀を振り上げただけで、斬りつけはしなかった。

少しの沈黙ののち、ナナは失望したようにため息をつき、またうつむいた。

そして、薄く笑った。

「わかつてる。答えてはくれないんでしょう？」

急に大人びた顔になり、

「何も言わずに私を和泉に置き去りにして行っちゃったアナタが。今さら答えてくれるわけないよね」

そう皮肉をぶつけた。

仏堂で飲み込んだんじゃない。もつとずっと前……、滝の上にいた時から、ナナは全てを飲み込んできたのだ。

それを思い知った瞬間に、「あの時」、きつく結んだものがほどけてしまいそうになるのを感じた。

言葉はないまま、手が、ナナの肩に触れそうになる。

だが、ナナの手が先にイタチの膝に触れた。

そこにはまだ、ナナの涙が染み込んだ跡があった。

「ねえ、イタチ……。ひとつだけ教えて」

新たな雫を静かに零しながら、ナナはつぶやいた。

「我愛羅は……どうなるの？」

膝が冷えて行くのを感じながら、イタチは知り得ることを答えた。

「木ノ葉の忍……、カカシさんやナルトたちが、“一尾”の封印場所に駆けつけたはずだ」

「みんなが……?!」

「そこでデイダラ、サソリと戦っているだろう」

「あの人たちと……」

ナナの瞳に生気が戻った。

が、それも束の間のことだった。

「でも……、我愛羅は、もう……」

「ああ……」

「みんなは……、無事なの？」

「わからない」

ナナは立ち上がろうとはしなかった。

「オレは少し前、足止めのためにカカシさんやナルトと交戦した」

「戦ったの……？」

「ああ……。だが、こちらがやられた」

「影分身だったの……?」

「少し違うが、そのようなものだ」

それどころか、すでに興味を失ったかのような顔で聞いている。

「カカシさんはもちろん、ナルトも決して弱くはなかった」

自分でも滑稽な慰めに聞こえたが、事実を伝えた。

「でも……」

その真実も、ナナの予測で上塗りされる。

「ナルトが勝ったとしても……、我愛羅はもう……戻らない」

暗い声とともに、ぼたぼたと雫が落ちた。

『アナタたちのせいで』と責めもせず、ナナはただ悲しんでいる。

いや。

「私は……、我愛羅を護れなかった……」

後悔を繰り返す。

「護りたかったのに……」

イタチの膝の上の手が、握りしめられる。

「ナナ……。 “一尾”とは親しかったのか?」

卑怯な問いなのは承知していた。

ナナが「九尾」と親しいことは知っている。

だから「九尾」を奪われたときの絶望はわかっているはずだったが、「一尾」もそうだとしたら……。

「我愛羅は……」

ナナは絞り出すように告げた。

「我愛羅には全部話した。アナタ以外に、「私のこと」を全部話せる人だった……」
わずかに心が揺れた。

「一族のことも、使命のことも、姉のことも、サスケのことも……、アナタのことも」
向けられた視線は、どんな手練れの殺気よりも鋭く、イタチの胸に突き刺さった。

それがどういう意味か……、『わかっているでしょう？』と責められているようだった。

もちろんわかっていた。

だから、足元が崩れかけて行くようだった。

「ナナ……」

ナナをこんなところまで追い詰めたのは、全て自分のせいだ。

今さら自覚した。

「私は……」

ナナは目を伏せ、静かに流れ出る涙をそのままにつぶやく。

「……忍として……サスケを救えず……。陰陽師として……我愛羅を救えず……」

ナナの辛苦の深さを、改めて思い知らされた。

「私は……忍としても陰陽師としても……生きられない……」

強かったナナは、もういない。

絶望を飲み込みながら可憐に笑ったナナは、もう居ない。

「イタチ……」

力を失ったナナの腕は、イタチの首にすがりついた。

「お願い……私を連れて行って……」

ナナは言った。

あの時、小さい時分に飲み込んだ言葉を……今になって言った。

「お願い……イタチと一緒にいたい……」

肩の上に、ナナは新たに温かいものをこぼす。

「……ナナ……」

「お願い……連れてって……」

最後は消え入るように……。

「……ナナ……」

抱きしめながら、イタチは喉の奥にぶら下がる言葉を感じた。

それを見透かしたように、ナナは言う。

「……イタチ……アナタの想いを……私は知ってる」

最後の賭けにでも使うようなセリフを、まだ幼げなナナは言う。

「そうじゃなきゃ……二度も奇跡は起きないもん……」

「……」

「二度も……助けに来てくれるはずないっ……」

「……ただの……偶然だ……」

子供のような言い訳じみた言葉に、ナナはしがみつきながら言った。

「……だったら私を殺してっ……!」

脅しではなない、ナナの叫び。

「あの時や今のが『ただの偶然』ならっ……今すぐ私を殺して……!」

「ナナ……何を……」

「どうせもう『敵』なんだったら、今すぐ殺してよ……!」

心の悲鳴は、受け止めきれぬほど鋭く……。

「イタチの想いしか……もう私にすぐれるものはないからっ……!!」

忍としての自分……。

陰陽師としての自分……。

全てを失い、もうそれしか生きる糧がないのだと……ナナは泣く。

「お願い……!」

もう、彼しか無いのだと……ナナは叫ぶ。

「ずっと……側にいるからっ……!!」

痛いほどにしがみ付き、想いをぶつけて来るナナが……、哀れで愛おしかった。

満月の下……幼いナナに伸ばしかけた手と、言いかけた言葉が……、長い年月を経て、今喉元まで出掛かっている。

ナナを手放したときに認めたこの想いを、イタチは止めるすべを知らない。

何を手に入れてもナナに勝るものは無いのだと……悟った自分を否定することはもうできない。

こんなふうに、すぐるナナを、今の今まで、戦い続けてきたナナを、あの時、けなげ

に笑んだナナを、もうこの腕から離したくはない……。強く想った。

そしてナナが掠れた声でもう一度……。

「……イタチと一緒に……いきたいよ……」

そう独り言のように呟いたとき、

「ナナ……」

イタチはようやく口を開いた。

強い想いを、胸いっぱい抱きながら。

「オレは……お前が愛おしい……」

「……」

ナナはにわかに身じろいで、彼の肩に手を置いたまま、彼の目を見つめた。濡れたその瞳から、もう逃げることはせず、イタチは言った。

「ずっと……お前が愛おしかった……」

ナナの唇がかすかに動く。

それさえも、この想いを突き動かすのに……。

「だが……今はまだ、お前を連れては行けない……」

彼はそう言った。

見る間にナナの顔が曇ってゆく。

が、彼はナナの言葉遮るように続けた。

「……お前には……まだ道がある……」

「……っ……」

「まだいくつも道がある……」

こんな、虚無の時だからこそ、ナナには選べる道があった。

ナナを愛おしいと、ずっとそんな存在だと思いつけてきたからこそ、はつきりとそれが見えている。

黙って横に首を振るナナに、それを指し示す。

「木ノ葉へ帰り……もう一度木ノ葉の忍として生きるか。木ノ葉で、忍ではない者として生きるか……」

仲間とあるナナ……。

「……このままどこか、知らない場所で暮らすか……」

新たな地で生きるナナ……。

「和泉へ戻り、陰陽師として生きるか……」

運命さだめを生きるナナ……。

「このまま……オレと生きるか……」

腕の中のナナ……。

そして……。

「……サスケのところへ行くか……」

最後の『道』を突きつけられた瞬間に、ナナは彼の肩にあつた手で顔を覆つた。

否定する気力すら殺ぐ残酷さ。

だが、今だから選べる道であることも確かだつた。

そして、本当はそれがナナにとって一番「正しい」のかもしれないと、彼が思う道でもあつた。

肩を震わすナナを、彼はゆっくりと抱き寄せた。

「ナナ……よく聞け……」

嗚咽は罪の意識を貫くが、イタチはできるだけ静かに、彼女の耳もとでささやいた。「明日の夜明けごろ、オレはこの場所に居る……」

「……………」

「お前が……『オレと生きる道』を選んだのならここへ来い……」

ナナは子供のようになんの手で乱暴に涙を払い、イタチを見上げた。

「……やり残したことがなければ、それを選べ……」

「……イタチは……私が好きじゃないの……?」

幼子のような声に、イタチは少し笑った。

「オレは誰より……お前を想ってきた……」

だからこそ……。

「それでも……今すぐ連れて行ってくれないの……?」

「ちゃんと……、もう一度ちゃんと全てを見て決めるんだ……」

今すぐにさらっていききたい気持ちを抑えることができる。

「……もう……なにも見たくない……」

「ちゃんと見ろ。お前の仲間も、お前が護ろうとした者も、お前の師も……お前自身の心も」

「いや……。見たくない……!」

だからこそ、突き放すことができる。

「『砂漠の我愛羅』のことも……このままにしておけないだろう?」

「……」

「ナルトたちがどうなったかもわからない」

「……」

「やり残したことを終わらせて……ここへ来ればいい」

「……そうしたら本当に……連れて行ってくれるの……？」

「ああ……」

温かいものが、突き刺す何かを和らげる。

「……そして二度と、お前を離さないだろう……」

本当の気持ちを言うことの、疲れと温もりを彼は感じた。

「本当に……？」

「約束だ……ナナ……」

イタチは冷えたナナの頬に手を沿え、笑った。

そして、まだ不安げなナナを残し、立ち上がった。

「……イタチ……」

「……約束だ……」

「……私はきつと……ここにいますよ……」

ナナの瞳に迷いはなかった。

「……明日から……ずっと一緒なんだよね……？」

ナナはマントを脱いで、こちらに押し付けた。

精一杯こちらを見上げているナナは、壊れそうに見えた。

愛おしい……。

また、想い……、イタチは再びかがんで、そっとナナの頭を撫ぜた。

そして……。

「お前が例えどの道を選んでも……オレの心は変わらない……それだけは覚えておけ」
そう言い残し、ナナの前を去った。

戻り風

瑠璃色の蝶が、少し前をひらひらと舞っている。

ありったけの力を与えて、我愛羅を探すよう命じた。

命は失っても、魂はまだ “ここ” にあると信じていた。

そして、自分がそれを送るのだと……。

足は思うように進まなかった。

イタチがくれた解毒薬が効いたおかげで、ほとんど毒は抜けている。

だが、力を使い過ぎていた。

彼の元で休んだというのに、四肢に力が入らなかった。

それでも、立ち止まることはなかった。

今見てきたものも、これから見るものも、この足を止めはしなかった。

明日の約束……それがあから。

イタチは言った。

『ずっと……お前が愛おしかった……』

と。

ずつと、そう言ったのだ。

それがいつからかなんて、考えなくてもわかる。

やはり、あの温もりは幻ではなかった。

どんなに遠く離れて行っても、嘘ではなかった。

その真実が明らかになっても、感動はしなかった。

わかつていた気がするのだ。

自惚れでなく……、彼に愛されていると、わかつていた気がする。

そうでなければ、朱いさらしは自分からとうに捨てていた。

サスケにだって……打ち明けられたかもしれない……。

いや、もうサスケのことを考えるのはやめよう。

もう、道を決めたのだ。

明日からは、約束の道を行くと。

イタチはもう一度ちゃんと全てを見て決めろなんて言っていたけれど、別れ際、彼が髪に触れた瞬間に決まっていた。

懐かしい手つき。

最初からそれにすがっていればよかったのだとさえ思う。

どのくらい歩いたか……。

河を渡り、森を抜け、荒地を過ぎた。

乾いた地に、草原が現れる。

蝶はそこで、フツと消えた。

そこに彼らがいた。

「烈風だ……！」

「烈風様……？」

「生きていたのか……！」

大勢の砂の忍たちが、ナナの姿を見てざわめきたった。

「あ、あのお姿は……」

「まだ子供……？」

面を外しているとか、顔を見られたとか、もうどうでもよかった。

ナナはただ静かに進んだ。

見なくてはならないものを見るために。

冷たくなった我愛羅を見るために。

『砂漠の我愛羅のこと……このままにしておけないだろう？』

イタチの声が蘇る。

そう、このままにはしておけない。

彼が『一尾』でなく『砂漠の我愛羅』と言った意味もわかっている。ちやんと、我愛羅の魂を送らねばならない。

それが、和泉の人間としての自分がする、最後の事。

その決意を胸に、ナナは進んだ。

その耳に。

「ナナ?!」

彼女を『烈風』でなく、そう呼ぶ声が聞こえた。

『覚悟』はしていたから、砂の忍たちの中に『彼ら』の姿を見ても驚かなかった。

「ナナ、な、なんでここに?!」

「ほ、本当にナナなの?!」

大きな声はひどく懐かしかった。

「ナナ、大丈夫か?!」

「怪我してるのか?!」

「お前、どうしてここに……!」

彼らは砂の忍たちをかき分けて、こちらに走り寄って来た。

皆、驚いた顔をしている。

カカシとガイでさえも。

カンクロウが約束を守ってくれたのだとわかった。

「みんな……」

だが、応える気は無かった。

再会を喜ぶつもりさえ。

ただ、やるべきことを済ませたかった。

大切な人を護れなかったことを懺悔して、どうか安らかにと送って、終わらせたかった。

「ひさしづり……」

だから、ありきたりな言葉を返す。

「無事でよかった……」

イタチと戦い、『暁』と戦い、無事だったことには心から安堵した。

「お前も無事でよかったつてばよ！」

「馬鹿！ 無事じゃないわよ、しゃーんなるー！」

「どこをどう見ても怪我をしています！」

再会を喜んでくれていることも、心配してくれていることも、素直に嬉しかった。

が、ただ、それだけ。

ひと言も言わずにこちらを見ているカカシの視線も、全てを見透かされそうな白い眼も、晴天の空みたいな蒼い目も、居心地が悪いだけ。

彼らに、三年間どうしていたのかも、我愛羅を護れなかったことも、今まで「どこにいたのかも、話すのは億劫だった。」

そして、別れを告げることもきつとできないと思った。
だから。

「ナナ、早く手当を！」

「私に診せて！」

差し伸べられた手から目を逸らした。

このまま静かに我愛羅を送って、そつと立ち去ろう……。

この再会が幻であるかのように、そつと。

そう思って、再び足を踏み出した。

だが。

「ナナ……」

また、砂の忍たちの輪の中からこの名を呼ぶ声がした。

「……………!!」

ナナは目を見開いた。

「…………我愛羅…………？」

これから『送りの儀式』をするはずだった我愛羅が立っていたから。

「ナナ…………、よかった…………」

カンクロウとテマリに支えられてはいたが、彼は自分の足で立っていた。

「なん…………で…………」

気づくべきだった。

ナルトもリーも、我愛羅が死んだというのに、その姿を見たはずなのに、悲愴感がなかった。

我愛羅を置き去りにしてこちらに駆けて来た。

その時に、輪の中心で何かが起こったのだと気づくべきだった。

「へへっ、コイツつてば派手にやられちまつてよ！ でも生き返った…………んだつてばよ！ 砂のチヨ…………」

隣でナルトが言った。

が、ナナはその言葉が終わる前に、

「我愛羅っ…………！」

温かさを取り戻した我愛羅の体にしがみついた。

柔らかなヒカリ

我愛羅はいつもの部屋まで送ってくれた。

が、あれから毎晩そうしていたように、絨毯に並べたクッションに座ろうとはしなかつた。

二人、立つたままで向き合つた。

我愛羅の瞳には柔らかいヒカリが灯っている。

ナナはそれを見上げながら、ただ突つ立つていた。

死んだはずの我愛羅は、ここにいる。

また、目の前に存在している。

また、話をすることも、触れることもできる。

それはこの上ない喜びだった。

彼に使われた禁術が、また『和泉』によつてこの外界げかいにもたらせたものだと思つた時、

ナナの心は少しだけ乱れたけれど。

否応なしに、姉の笑みが蘇つたけれど。

言葉が見つからないのはそのせいじゃない。

喜びと同じくらいの後悔と懺悔が胸に渦を巻いている。

だから、何から話せばいいのかわからずにいるのだ。

草原で再会した時から、最初のひと言を決められずにいる。

我愛羅も何も言わなかった。

彼も迷っているのだろうか……。

いや、瞳に浮かぶ光にぶれはない。

きつと、待っていてくれていたのだ。

『オレはお前の心も護りたいんだ』

彼は数日前にそう言った。

そう……、今も。

(護られてる……)

実感したとたん、胸が締め付けられた。

だから絞り出すように声を出した。

「我愛羅……、ごめんね……。私は……」

『私はアナタを護れなかった』と続ける前に、彼の指が唇に触れた。

乾いた手が、言葉を塞ぐ。

「ナナ、ありがとう……」

言うべき言葉は喉に引つかかったまま、彼の優しい笑みを見つめた。

「オレはお前に護られた」

首を振った。

彼の手が離れたので、思い切りうつむいた。

「護られたのは……、私のほうだった……」

情けない言葉を、絨毯に落とすだけ。

「ナナ……」

が、両頬をまた温かい手に包まれて、上向かされる。

「お前がオレに『護られた』と思うのなら、オレも同じものをお前からもらっているとい

うことだ」

(同じもの……?)

『オレはお前の心も護りたいんだ』

だとしたら。

「私も……アナタの心を……?」

そつとたずねる。

と、我愛羅は笑った。

「ずっとそうだ。ナナ」

ずっと……。つい最近、誰かもそう言っていた。

「お前はオレに、誰かを愛することを教えてくれた……」

思い出す前に、彼は大人びた顔で言った。

「誰にも愛されなかったはずのオレがそうだったのは、お前のおかげなんだ」

そして、自らの額……『愛』に触れる。

「我愛羅……」

「ナナ、木ノ葉でオレを鎮めたお前は、敵であり、仲間を傷つけたはずのオレに、無償の愛をくれたな……」

彼が柔らかく話すので、それが遠い昔の話に聞こえた。

「そして今は、理由のない愛を教えてくれた」

「理由のない……」

理由の無い、愛。

彼の言葉をなぞる。

「オレは死に逝くときの中で、確かにそれを感じたんだ」

だから……。だから『ありがとう』なのか。

だから『オレはお前に護られた』なのか。

だとしても……。納得はできなかった。

「ちがうよっ……いっ！」

柔らかいはずの光が眩しかった。

「そんなじゃないっ……いっ！ 私はず……」

それに照らされる資格なんてないのだ。

「私はただ、アナタにすがっただけ……いっ！」

三年間、和泉の里で修行して……ひとりで……。

サスケへの想いとか、姉への恐怖とか、そんなものを忘れるために、独りでいて。

和泉の人間である運命も受け入れようと、木ノ葉の忍でもなくなつて……。

強くなろうと……。

そんなふうに変われた自分を実感しなかった。

だから、『暁』が砂を襲撃する情報を掴んだ時、我愛羅を護ろうと思った。

今度は和泉のチカラで、彼を護るのだと決めた。

きつと、それすら変われた自分を実感するための口実だ。

それなのに、我愛羅はずっと続いていた孤独を癒してくれた。

彼にはなんでも話せたのだ。

自分と同じ、望まぬ力を持たされて生まれしてきた我愛羅に。

自分と同じ、運命に抗い生きようとしてきた我愛羅に。

和泉の自分を少しだけ知っている我愛羅に。

そして、サスケと自分のことを知らない、木ノ葉の忍でもない我愛羅だから……。

だが、なんでも話して自分の不遇を押し付けただけだった。

全てを話せて、少し楽になって、彼の言葉に甘えた。

護られてる……なんて満足して、本当は彼の優しさを利用していた。

『グニグニは居心地がいい』なんて言つて……それが錯覚じゃないと思ひ込もうとしていた。

護ろうとして、彼に優しさをもらっていただけだった。

本当は……すがっていただけだった。

だから……。

「だから……そんなふうに言わないでっ……」

謝らせてほしかった。

優しいことばかり言わないでほしかった。

死の間際にそんなことを思つて、満足したような顔をしないでほしかった。

(我愛羅……ぐめん。ぐめんね……)

だからといって、どうすることもできない。

簡単な謝罪の言葉も陳腐すぎて、声が出ない。

頭も身体も心もバラバラで……、いつそ逃げ出したくても足は動かない。

口をつぐみたくても何か言わなければと思っている。

目を逸らしたいのに、あのヒカリにまたすがりたいと……性懲りもなく探してしま
う。

「ナナ……」

醜く混乱しているのに……、我愛羅はナナをしつかりと抱きしめた。

もうずっと、何度もそうしてくれていたかのように。

優しく。あつたかく。強く。

そして、*“ここ”*に留まっついてはいけけないと抵抗するナナの心に、我愛羅はそつと、
ささやいた。

「……すぎることは、傷つけることじゃない……」

傷……。

そう言われた瞬間、逃げ出したい気持ちが収まった。

「お前はオレを、傷つけたわけじゃない」

彼の目を見た。

「誰かにすぐることを、恐れるな」

後悔、痛み、混乱……全ての正体を、彼はあつさりと教えてくれた。

(そうか……、私、怖かったんだ……)

蘇った彼を見た瞬間。

蘇った彼の目に映る自分を見た瞬間。

そこから今までずっと、怖かった。

彼を護るだけの力が足りなかった、その後悔よりずっと……。

彼にすがってしまったことの後悔が恐怖に変わっていた。

それを、彼は全てわかってわかっていてる。

泡立つ心をそつとなだめてくれている。

「ナナ。オレは、お前の心を、少しでも癒すことができているか……？」

すがりついた手は、優しく握られた。

そのまま引き寄せ、抱きしめてくれた。

柔らかな温もりが、全身を包み込んだ。

やっぱり……、”ここ”は心地よかった。

今まですごしたどんな場所よりも。

錯覚なんかじゃなかった。

これは、真実だ。

「うん……とても……」

彼の目を見ることはできなかつた。

涙が溢れてきたから。

それをまた、彼に押し付けた。

やはり彼は、頭の上で少し笑って、触れるだけの強さで頭を撫でてくれた。

(我愛羅……)

恐怖は消えた。後悔さえも。

“ここ”では全てが許されるのかもしれないと思つた。

使命のこと。一族のこと。忍のこと。仲間たちへの嘘も。サスケのことも。イタチのことも……。全部。

我愛羅が生き返って、きつと“もうひとつ”道が現れた……。

“”に。

「我愛羅、私……」

ナナはそつと、目の前にある彼の心の奥に向かって呟いた。

「(ナナ)に……いてもいい……う」

きつと拒絶なんてしないだろう。

傲慢にもそう思つて眩いた。

我愛羅の指が顎に触れ、彼の瞳を見上げた。

優しいヒカリ。

柔らかいそれはやはり眩しすぎて……、目を閉じた。

白い瞳

夜の庭……。

砂の地で、大切に、大切に育てられている草花が、何の苦しみも知らず、静かに眠っていた。

名も知らぬ乾いた葉に手を伸ばす。

指先が震えていた。

それを眺めて、目を逸らす。

そこに残る温もりから、目を逸らす。

我愛羅は言った。

『オレは、ナナとここで過ごさせて、ナナを愛することができてよかったと思っている』

それは、答えじゃなかった。

『これからお前が望むなら、ここで共に生きよう』

そう言ってくれたのに。

『だが……、ちゃんと別れを告げて来い。 “木ノ葉の忍”に』

彼のヒカリは少しもくもらないのに、ナナの視界は曇った。

『自分自身も含めて……』

それは決して拒絶ではないはずなのに、失望した。

願っているのは我愛羅の方だ。

それがわかつているのに、失望していた。

『それができたら、ここにきてくれ、ナナ』

その失望を知っている。

これで二度目……。

だから何も言えなかった。

こんな目をして、こんなことを言う人の想いは、良くわかっているから。

『ナナ。お前が何を選んで、オレはずっとお前を“護る”』

そう言つて、我愛羅は頬の涙を吹き、手をとった。

そして、指先にそつと口づけた。

黙つたままそれを見ていた。

彼は優しい笑みをたたえたまま、部屋を出て行った。

離れていく指先は、とても名残惜しそうだったのに。

彼は行ってしまった。

ナナは引き留めることもなく、そこに立ち尽くしていた。

(我愛羅……)

温もりを握りしめた。痛いくらいに。

わかってている。痛みを感じなければならぬほど、酷い拒絶ではない。

きっと、明日の朝、目の前に立ったとしても、我愛羅はもういちど抱きしめてくれるだろう……。

たとえ、『別れは言えなかった』と告げても、きっと優しく抱きしめてくれる。

たとえばもし、ナルトたちと木ノ葉へ向かって、穏やかに笑って見送ってくれるんだろう。

だからこんなに、必死で涙を堪える必要なんてないはずなのに……。

「……ナナ……？」

不意に声がかけられた。

庭に先客が居たなんて気づかないくらい、どうかしていた。

「なんで……ここに……？」

大きなヤシの向こうから現れたのはネジだった。

「風影は……いや、なんでもない……」

ネジは何か言いかけて、顔を逸らした。

笑おうとした。

きつと、涙はもう乾いた風が消してくれているはずだ。

だが、声がかうまく出なかった。

今ここで交わす言葉が、明日にはどうなるのか……、頭をよぎった。

まだ、我愛羅の言葉に満たされてもいた。

「久しぶり……だな……」

先に口を開いたのは、ネジだった。

「……うん……」

まだうまくしゃべれない。

「修行は……うまくいったのか……?」

気のせいだろうか。彼も少しきこちない。

「……うん……」

が、白い瞳はまっすぐにこちらを見ていた。

逃れられない、見透かされる……

「明日は……」

ほら、もう「核心」をついて来る。

「明日は、木ノ葉に帰るのか……?」

言いよどむのは、全てを見透かしているから。

「砂に……残るのか……?」

この人はとつくに知っている。

今、答えられないことも、きつとわかっている。

「ナナ……」

わかつてるくせに……。

「これは、お前のだ……」

ネジはそつと近づいて、銀色に光る小さな塊を差し出した。

「もう一度使うにしろ、捨てるにしろ、お前が決めればいい」

木ノ葉を出る時、彼に押し付けた家の鍵。

受け取ったそれは、彼の熱で温かかった。

「この三年で、何かが変わったのか、変わらなかつたのか、オレにはわからない。が……」

（お願い、やめて……）

頭の中に警報が鳴る。

「オレは……お前に『戻って来い』とは、もう言えない……」

（やめてよ。アナタまで……）

「お前が、決めることだ……」

(ネジくん……アナタも……)

齒を食いしばった。

そうでなければ、こんな夜更けに叫び出してしまいそうだった。

「私……」

思い切り、食いしばったはずなのに。

「みんな、私に選べ……、決めろ……」

熱くて冷たいものが、喉を一気に駆け抜けた。

「私はどうしたらいいかわかんないよ……!!」

もう限界だった。

『ちゃんと別れを告げて来い。『木ノ葉の忍』に。自分自身も含めて……』

『お前が何を選んでも、オレはずっとお前を『護る』』

『もう一度ちゃんと全てを見て決めるんだ……』

『お前が例えどの道を選んでも……オレの心は変わらない……』

「ちゃんとって、なに?!」

我愛羅がずっと抱きしめてくれなかったことに苛立っていた。

イタチが今すぐここに来てくれないことを呪っていた。

ネジまで『自分で決めろ』と言う。

「わかんないよー！」

手にあつた鍵を投げ捨てた。

「ナナ……」

それは乾いた土に、音もなく転がった。

「無理だよ……もう……」

「……ナナ……」

「もう……」コから一步も進めない……」

同じように、そこにしやがみこんだ。

立って歩く力なんて、もう残っていない。

イタチと逢った時、すでにそうだった。

もう限界だ。

考えることも、もう限界。

アタマが痛い。

「ナナ……」

うずくまり、情けなく頭を抱えた。

その傍らに、ネジは膝をついた。

こんな姿を見られても、見られなくても、どっちでもよかった。

彼が今すぐ“ここ”から引き剥がして、何処へでも連れて行ってくれたら……なんて性懲りもなく願ったり。

もう放つておいてと突き飛ばしたかったり……。

あの時のように、『戻つて来い』と言われたら……、きつと素直にうなずけるのに。我愛羅の側に居ればいいと言ってくれたら、今すぐ我愛羅のところへ走って行けるのに。

だがネジは、どちらも指し示すこともなく。

触れることもなく……。

その二つ以外の道を、捨てることすらできず。

だからといって、今すぐあの河原へ行つて、独りで朝を待つ気力も残つてはいなくて……。

いつそ和泉に逃げ帰る決心もつかなくて……。

(……たすけて……)

無責任、情けない、弱い、嫌な自分に、

「ナナ、迷う必要はない……」

ネジは静かに言った。

「お前の心の『一番奥』を、見つめればいいだけだ……」

前よりずっと、ずっと大人びた声でそう言った。

「……………いちばん……………おく……………?」

奥に何かあるのか。

痛みが邪魔して、そこを見つめることができない。

「今、一番想うことを……………力に変えればいいだけだ……………」

やけに寂しげな彼の声が、痛みを少し和らげた。

独りになって、強くなるうとして、そのために鎮めてきた心なのに、

なんて渾然としてるんだろう……………。

「ゆっくりでいい……………ナナ……………」

ネジにも見えているのだろうか。

この手がつけられないくらい、始末の悪い心……………。

その白い瞳には、見えているのだろうか。

奥に何かあるのか。

それが見えたら、道は選べるのだろうか。

『一番想うこと』が、その道に繋がっているのだろうか。

「ナナ……………」

『コワイ』と思ったときに、彼の手が髪に触れた。

その手は導くわけじゃなく、後押しするようで……。

(私は……)

「ネジくん……」

彼の目には隠せないことを、もう一度思い知った。

「私は……」

奥にあるモノを、ずっと……奥にあつたモノを……。

「……逢いたい……」

知っていた。

知らないフリをした。

忘れたフリをした。

忘れたつもりでいた。

「……ナナ……見つけたか……？」

ちがう。

見つけたんじゃない……。

「……それとも、思い出したのか……？」

やはり……ネジの白い瞳には、この心も映っている。

「うん……『忘れたつもり』でいただけだった……」

(ごめん。逢いたいんだ……)

「私……」

心の奥に陣取って、剥がれない想い……。

「……サスケに逢いたい……」

明けの頃

私はサスケに逢いたい……。

言葉にして、急に視界がはつきりした気がした。

『負け』を見とめてすがすがしくなったような……。

一番愚かな自分をさらけ出して、どうでもよくなったような……。

必死で否定してきたものが、変えようとしたものが、何ひとつ変わらなかつた。今までの足掻きがバカバカしくなった。

「……ハハ……」

つい先ほどまでネジが居た地面を見つめて笑った。

気がおかしくなつたみたい、泣きながら笑った。

進まなくちゃ。

決めなくちゃ。選ばなくちゃ……。

この庭に朝が来る前に。

もう、答えは簡単だった。

この、心の奥底を思い知つた今、想うのは、願うのは……。

が、ネジは止めもせず、静かに目を伏せた。

我愛羅はそれ以上何も言わず、彼らを見まわしたカカシも、ただ黙っていた。

出立の時間になった。

里へ帰る木ノ葉の忍たちと、彼らを見送る砂の忍が里の門に集まっていた。

ナルトらはやはり出発時間ギリギリまでナナを探したが、どこにもその姿はなかった。

我愛羅の言ったとおり、ナナはもう砂には居なかった。

うなだれるサクラと、懸命に気を取り直そうとするナルト。

戸惑うリーとテンテン。それに、テマリとカンクロウ。

彼らを黙って見守るカカシとガイ。

そして、どこかさっぱりしたような表情の我愛羅とネジ。

互いに何も語らなかつたが、二人には共通の覚悟と、共通の想いがあつた。

二度とナナに逢うことはなくとも、ナナは歩き出せたのだと。

それが正しいかどうかなんて関係なく、ナナがナナの進むべき道に、初めて自ら歩き出せたのだと……。

そんな安堵が、二人をこんなにも落ち着かせていた。

寂しきは、きつと後から来る。

いまはただ、ナナの幸福を願う。

「じゃーなっ……!」

少しの未練を振り払い、ナルトは我愛羅に手を振った。

サクラも、無理矢理に笑顔を取り戻した。

我愛羅は、そんな彼らを穏やかに見送った。

そこに、緩やかな風が吹いた。

緩やかな……、砂漠には吹くはずのない、春風のような……。

「はあ……、間に合った……!」

風は、間の抜けたため息を連れてきた。

「ゴメン、少し遅くなっちゃった」

そして、懐かしい笑顔を運んできた。

「ナナっ?!」

真っ赤に充血し、腫れた瞼で、それでも笑っているナナが居た。

「ナナ……お前……」

ナナは言いたいことがまとまらずにいるナルトの肩にポンと手を置き、彼の横をすり抜けた。

そして、

「我愛羅……」

ナナは我愛羅の正面に立ち、言った。

「私、木ノ葉に帰る」

今の今まで泣いていたのだろう。

ナナの頬には、まだ涙の跡があつた。

「また、木ノ葉の忍になるよ」

ナナはそれでも笑つた。

「我愛羅、ありがとう……」

その言葉だけは、少し無理矢理に笑んで。

「ナナ……」

彼にはわかつていた。

ナナにとつて、何が一番苦しい道なのか。

傷を負つたナナが生きるのに、最も辛い道がどれなのか。

何が一番楽で、何が一番ナナの望む道で……。

ナナの言葉を全て聞いた彼は知つていた。

だから、少しの痛みと、さつきまでとは違う安堵を抱え、

「……………ナナ……………」

我愛羅はナナを抱きしめた。

ナナの指先が、彼の背をキュウとつかんだ。

そして二人が離れたとき、互いの瞳は想いを交わした。

(オレはいつでも「ココ」に居る……………)

その想いを。

(ありがとう……………)

その想いを……………。

やがてナナは、木ノ葉の輪に戻って行った。

元気に手を振り、木ノ葉への道へと戻って行った。

その数時間前。

明けの頃。

約束の場所。

そこに黒い影がひとつ、あった。

水の香は、『和泉』の滝の上を思い出させた。

あの香りに包まれて、待っていたのは幼いナナ。

逢いに行つたのはイタチ。

この朝は、逆だった。

やがて、その水面は白く輝き始め……。

光はやがて、彼を包み込んだ。

闇にしか生きることのない彼は、チラリと上流を見やり、そして穏やかに笑んで、その場を去った。

あんなにもすがりつき、泣いていたのに、ここに来ることはなかったナナを、いつそう愛しく想いながら……。

鍵

「ナナ、よく帰って来たな」

カカシの治療を終え、そして任務の報告を受け終わると、綱手はナナを執務室に呼んだ。

綱手はあからさまにホツとしたような笑みを浮かべていた。

「連絡も入れず……申し訳ありませんでした」

ナナはペコリと頭を下げた。

その物腰が三年前よりも大人びていて、いつそう忍と思えぬ儂さをかもし出していた。

その分、女の綱手から見ても惹かれる独特の美しさが増していた。

そして、ひと目その瞳を見ただけで、この離れていた間にナナがどれほどの深い傷と向き合って生きてきたのかが悟られた。

「修行は……うまくいったのか……？」

和泉の里での修行は、忍の綱手にはおおよそ予測もつかぬ内容でありため、遠慮がちに

尋ねた。

「……はい……」

案の定、ナナは躊躇いながらうなずいた。
が、

「消された刻印は元通りにはなりませんでしたが……、木ノ葉での役目を果たす力は得られたかと……」

かすかに微笑を浮かべて、そう述べた。

『木ノ葉での役目』。

それが何を指すか、知っている綱手はため息を吐く。

「アレはいわば当主たち一族の者が、私にかけた術」だったので、今度は「私自身」の封印術を使います」

静かに淡々と言葉を発すナナは、割り切っているようでも、諦めているようでもあった。

「効力は同じはずなので、きつと大丈夫です」

ナナはその役目を以前と変わらず果たすつもりでいる。

その意味を、綱手は聞くことを恐れた。

三年前、あれほど傷つき、全てを失い……、半ば何もかもを捨てたかのように木ノ葉

を去ったナナが、変わらずにその立場で戻って来たのか。

正直、綱手にもその真意は全く予測不能だった。

当時、真つ青な顔のままここに来たナナは、失った霊力を回復し、消されてしまった刻印に変わる術を身につけるために故郷に戻ると……そう告げた。

それを全て信じる訳ではなかった。

ナナはあまりにも多くのものを奪われていたから。

再び『ナルトを殺す力』を手にするために故郷に戻るなどと……、そんな言葉を吐き出せる状況ではなかった。

だから、その言葉は全てを手放す意味なのだという気もした。

引き止める言葉はいくらでもあった。

ナナが木ノ葉に戻ってくる可能性も、再び忍として仲間と共にすすす可能性も、限りなく薄いと感じてもいた。

故郷に戻ることを許可しない……それもできた。

だが、綱手は焦燥の微笑を浮かべたうつろなナナの瞳に、ナナ自身の未来を託した。信じることしかできなかつた。

願うことしかできなかつた。

そして、何があつたにせよ、また深い傷をつけたにせよ、ナナは戻って来た。

「雰囲気はだいぶ成長したようだが……相変わらずチビのままだな」

「そうですか？ ナルトの背がかなり伸びててビックリしましたけど」

ナナはまた、ここで笑っている。

「報告はもういい。帰って休め」

「三年も何処で何をしていたか曖昧なうえに、砂でのこともちゃんと話していないのに、報告不十分のまま帰しちゃっていいんですか……？」

(……ああ、変わらん。よかった……)

綱手は口の端を上げた。

からかうように苦笑するその仕草が、以前のままでったから。

「いいんだよ。私はお前を信頼してる。この里の誰よりも」

「里の外から帰ったばかりの私を？」

自嘲と皮肉が混じった複雑な笑みも。

「お前は部下というより、同志に近い」

ナナの瞳が、少しだけ淡い光を持った。

「じゃあ、お言葉に甘えて帰ります」

「ああ、今後のことは追って連絡する」

「はい」

清爽な空気を残し、ナナは去った。
綱手は再び、ホツとしたように深く息をついた。



「わあ……久しぶりだ……！」

ナナは嬉しそうに両手を広げ、里の空気を一杯に吸い込んだ。
道中も、今も、ナナの笑顔に嘘はなかった。

何かひとつ欠けたようでも……無理矢理の笑みではなかった。

カカシを入院させ、そのまま帰還報告を済ませると、火影はナナを執務室に呼んだ。
三年間、彼女がどこにいたのか……、それがわかっていたから、皆は素直にナナを見送った。

明日もあさっても……これからは毎日会えるのだと、
そんな別れだった。

だが、火影の執務室から出て来るナナを、ネジは待っていた。

帰国途中、二人だけで会話することはなく、ナナは少し照れくさそうに笑った。
つられてネジも、少し笑う。

「あのさ、ネジくん……」

おかしな空気の中、それを発したのはナナだった。

「なんだ……？」

「ちよつとだけ、つき合ってくれる？」

ネジは小さくため息をつき、

「あたりまえだ……」

そう言つて、ナナの後に続いた。

「お前は本当にここが似合うな……」

皮肉か、そうでないのか、ナナは受け止めかねたように苦笑した。

この場所、火影岩のてっぺんには、今日も下から吹き上げる冷たい風が吹いていた。

「何から……」

ナナは久しぶりの景色を眺めながら言った。

「何から話せばいいのかわかんないや……」

ひどく、幼く見えた。

「だから、ネジくんが聞いてくれる？」

言葉を良く知らない子供のように……。

「あのあと……どこへ行っていったんだ……？」

だからもつともわかりやすい言葉を、躊躇いを省いて投げかけた。

ナナは微笑した。

そして急に……大人びた。

「私……暁にやられた後……ある人に救われたの」

急な時間の遡りと“ある人”の登場は予想外だったが、ネジは黙って聞いていた。

わずかな覚悟を握り締めて。

「幼い頃から……私の全てだった人」

風が、彼の拳からそれを奪い取ろうとする。

ただ、ナナの言葉が自分にだけ向けられていることが救いだつた。

「我愛羅を守れなくて、和泉で修行したことの無意味さを感じて……、私は全部を捨てて

……その人と行くつもりだった」

ネジは、ナナから目を逸らしそうになる己と戦った。

「我愛羅を送って、始末をつけたら……朝にはそうするつもりだった」

ナナはフッと笑った。

「でも、我愛羅は生き返り……みんなが居た」

その葛藤を、風影が蘇った夜の宴に抱えていた。

改めてそれを知り、ネジの胸は痛む。
痛む……が、どうしようもなかった。

「生き返った我愛羅は……『ちゃんと別れを告げて来い』って……。それができたら、側にいさせてくれるって……」

風影の気持ちを、今更深く知る。

「そしてネジ君は、私が決めることだって……。心の『一番奥』を見つめろって言ったよね……」

砂漠の夜の庭……鍵を投げつけてうずくまったナナの姿が蘇り、さらに胸を締め付ける。

あの時、伸ばそうとした腕を必死で押しとどめた苦しさが、また……。

「私は……『サスケに逢いたい』って答えた」

その言葉を聞いたとき、ネジは確かに満足していた。

二度と、もう二度とナナと逢うことはないと悟りつつ、うずくまった彼女を残して庭を去った。

『これでよかった』と、そう思えたはずだった。

「オレは……サスケの元へ去ったのだと……そう思った」

ナナが消えた朝、『これでよかった』と自分に言い聞かせて、騒ぐナルトたちを傍観し

ていた。

『ナナにとって一番よかった』と、必死で平静を装った。

ナナが里の城門に戻ったときは、歓喜したナルトたちをよそに、我愛羅と瞳を合わせた。

互いに少し……絶望していた。

選べなかった、ナナの強さに。

「……自分を……試してたの」

ナナは彼を見た。

「『あの人』の元へ行けば……『あの人』は全てを忘れさせてくれる。私は全てを捨てることができる……。それを知っていたから」

『あの人』が誰なのか、彼にはきつと知らされることはないだろう。

だが、不思議とそんなことはどうでもよかった。

『あの人』が誰でも、ナナに『あの人』が存在していたことを今更知っても、大して気にはならなかった。

「そこへ……『行きたいと思う自分』を試していたのか？」

「そう……」

「だが……行かなかった……」

「うん……」

『なぜ』と聞くには勇気が要った。

が、一瞬の迷いのうちに、ナナが凜として答えを出した。

「一番楽に生きられる道を捨てられるなら……一番苦しい道も進める……、そう思ったから」

ネジはどうとう目を伏せた。

『決めろ』と言ったことを後悔した。

あの夜に戻って、今すぐ『サスケの元へ行け』と言いたかった。

今からでも『あの人』のもとへ行つて欲しいとも思った。

が、そう言う勇氣すらないうちに……ナナは明るい声で言った。

「木ノ葉の忍として生きるのは……私にとって一番苦しくても……、一番私らしくいられると思ったから」

「ナナ……」

顔は上げられなかった。

ナナがこちらを向いて笑っているから。

「それが……、私が最初に自分で選んだ道だったから」

いつの間にか、ナナは彼の目の前に立っていて……。

うつむいたままの彼の視線の先に、手を出した。

小さな手に乗っていたのは、銀の鍵。

「これ……預かっててくれてありがとう」

ネジはゆつくり顔を上げた。

ナナは風に乱された前髪をそのままに、微笑んで立っていた。

「ナナ……」

「ここには……みんなが居てくれるから……私は大丈夫」

ゆつくりと、まるで彼を説得するようにナナは言う。

「ありがとう」

ナナはまたそう言って、鍵をぎゅつと握り締めた。

ネジは無理矢理笑みをつくり、やっと小さくうなずいた。

第2章 再戦編 籠の蝶

執務室に戻って来るなり、綱手はシズネさえも下がらせ、大きくため息をついた。

つい今しがた、年寄りどものせいで不愉快にさせられたばかりである。

彼らの言うことはもつともだった。

シズネの懸念も的を射ていた。

だが……。

砂隠れでの任務を終えて帰郷後、サクラがある情報をもたらした。

『暁』のスパイが大蛇丸の元に潜入しているという。

明かしたのはサクラが対戦した『暁』のサソリ。

サソリはそのスパイと『天地橋』で接触する予定があると言っていたそうだ。

それは重大な情報だった。

そのスパイを捕らえれば、大蛇丸の情報が手に入るかもしれない。そうすればサスケの情報も……。

綱手はその任に『カカシ班』を就けることにした。

が、それに待ったがかかったのだ。

『ナルトは“人柱力”だ。里から出さず、監視下に置くのが当然であろう』

『万が一、暁が“人柱力”を手に入れてもした場合、木ノ葉の脅威になる可能性は否定できぬ』

確かに、『暁』を相手にした任務に、標的である『九尾の人柱力』のナルト自らを向かわせるのはリスクが大きかった。

だが、それを恐れてナルトを檻に閉じ込めたとしても、その檻がある木ノ葉そのものが『暁』の標的となる可能性も考えられる。

そちらもリスクだった。

天秤をかけ、どちらが重いか決められるものではなかった。

綱手はナルト自身に希望を持った。

彼の想いは、この任務の成果の先に在る『サスケ奪還』に対する最高の武器であり、彼の強さはすでに木ノ葉の未来を託すに値するものだった。

それに賭けた綱手は、コハルとホムラ、里のご意見番を押し切った。

ただ、二つの条件があった。

ひとつは、『カカシ班』にサスケの代わりの人員として、ダンゾウの部下を補充することだった。

ダンゾウは綱手の師である三代目火影と親しい間柄であり、かつ、表と裏のように相反する関係でもあったと記憶している。

彼は『根』という暗部養成部門の創設者であったが、その組織はすでに解体されているはずだった。

養成システムに倫理上の問題が見受けられたから……と綱手は聞いている。

忍の世界でそういうことが多々存在するのはもちろん知っているから、詳細を聞かずとも何が起こっていたか想像はつく。

だが実際は、彼が組織を存続させ独自に取り仕切っているという噂があった。

そんな男が人を送りこんで来るとなれば、穏やかでないのは明白だ。

しかしその条件を飲む以外、ナルトを任務に向かわせる道はありそうもなかった。

そしてもうひとつの条件は、『いずみナナを木ノ葉の監視下に置くこと』だった。

「いずみナナです」

「入れ」

相変わらず顔色は悪かったが、どこか吹っ切れたようなナナに、綱手は少なからず安堵する。

だが、今しがた聞いてきたホムラ、コハル両ご意見番の悪態を思い起こし、もう一度

ため息をつく。

「綱手様、悪い知らせですか？」

ナナは楽しげに言った。

仕方なく、綱手は重い口を開く。

『カカシ班』の新しい任務内容を告げてから。

「しばらく『カカシ班』の任務からお前を外さざるを得なくなった……」

そう言った。

ナナは瞬きですら反応を示さなかった。

「そうですか」

「理由は……わかってるようだな……」

「ハイ」

苦渋の綱手と反対に、ナナは涼しげに言う。

「砂での活動を木ノ葉に報告しなかった件で、ですよね？」

「ああ。無期限の謹慎処分という形になった」

ナナはもう一度『申し訳ございませんでした』と言いながら深々と頭を下げた。

「私としては不本意だ」

「何故ですか？」

「お前はあの時、里を出ていた身だ。いったん里を離れることが必要な時期もある。私もそうだったからわかる」

やっと、ナナと目が合ったような気がした。

「だが……、年寄りどもは理解しようとしな。お前は木ノ葉に不利益をもたらしたわけでもなく、同盟国の里長を護ろうとしただけなのに」

その視線が一瞬どこかへ彷徨い、すぐに納得した様に瞬いた。

「ナルトが『暁』に関係する任務に出るのに、私が一緒に行かないってことは……」
そして、落ち着いた声で言う。

「ホムラ様とコハル様には、私はもう信用されていないってことですね」

不機嫌さも出さずに。

「刻印を失ったから、九尾を封印する力は無くなったと思われてるんですよね」

「……お前の言葉は伝えたんだが……」

「いくら私が自分で『力があります』と言っても、信じてもらえるわけじゃないですよね。実際、砂で…… “一尾” を護りきれませんでしたから」

怒りや悲愴感もなかった。

むしろこちらを慰めるように笑むナナが、もどかしくて苛立った。

『だが、“一尾の人柱力”をみすみす暁に奪われたではないか……！』

『三年前、あやつが“九尾を封る刻印”を失ったのはワシらも見た。その時点で、和泉一族当主との協約は破綻しておるのだ』

『いくら自身が他の封印術を会得したと主張したところで、信用できるはずもない』『いや、砂の件ではつきりしておる。あやつに尾獣を操る力などない!』

矢継ぎ早に吐き出された年寄りたちの主張には怒りをおぼえた。

自身の客観的な部分が、半分だけ彼らの言うことも理解している。

“一尾の人柱力”を暁に奪われたのは事実だ。

ナナが事前に警告し、側で警護したにも関わらず、である。

全て終わった後で、『刻印は失っても、別の方法で九尾を封印する術を会得した』と言われて、信じられないのも無理はない。

が……、かといって『敵に奪われる前に自身が封印すればよかった』などと論じるのは乱暴すぎる。

そんな選択が最善だったと言い切れる者などいないのだ。

結果論ではあるが、ナナがもしその選択をしていたら、風影もナナ自身もこの世にはいないはずだった。

綱手があちら側に立たないのは、ナナという人物を知っているからだ。

未熟な部分や弱い部分も含めて、ナナを尊敬している。

シズネやサクラと同じくらい、信頼している。

だが、それがあの二人に伝わるはずもない。

そればかりか。

『だいたいあやつは里を出て何をしておつたのだ？』

“姉”の亡霊を倒す術を会得する

ためと言っていたそうだが、それは本当なのか？』

あらぬ疑いまで持ち始めている。

『和泉の人間が故郷に戻って力をつけて、どうするつもりだ？』

『砂隠れの件も、こちらに連絡もせず独自で砂と組むつもりだったのだろうか？』

『何か企んでいるのではないのか？』

彼らにとつて、ナナは木ノ葉の忍ではなかった。

未だ『和泉の人間』であったのだ。いや、『和泉の力で九尾を封じる人間』か……。

せめて救世主であるはずが、仲間どころか、厄介者を通り越して裏切り者のレッテル

さえ貼りつけられようとしている。

それを目の当たりにした綱手は、怒りすら忘れて愕然とした。

「綱手様、もちろん処分には従います。もう、掟に背くことはしませんから」

綱手は椅子に座りなおした。

べつに掟を破ったわけでもないのに……、ナナの落ち着きが居心地悪かった。

「お前は木ノ葉を……、相談役たちを理不尽だとは思わないのか？」

だからつい、ちつとも憤りを共有してくれない本人にそうたずねた。

「いいえ。信用していただけないのは私自身のせいですから」

ナナは、むしろ申し訳なさそうにそう言った。

「私をもっと強ければ、九尾を封印する力を失うことも、我愛羅を失うこともなかったし、いろいろ迷うこともありませんでしたから……」

全ては自分自身の責任なのだ……。

「でも今は、もう一度、木ノ葉でやり直すと決めたので」

ナナは笑った。

「……ナナ……お前は……」

『お前は強いな』。そう言いかけて、綱手は黙った。

それを言われることが、ナナを苦しめる気がして。

「私にとって、お前は最も信頼する木ノ葉の忍だよ」

代わりにそう言った。

本心だった。

誰より大きなものを背負い、重い運命を受け入れ、深く傷つきながら、それでも前を向いて立っているナナを……同じ忍として、女として、尊く思った。

「そう思われるように頑張ります」

ナナはその意味をカケラも信じずに、ふわりと軽く笑った。

つくりわらい

晴れて任務再開……という知らせを受けて集まったというのに、ナルト、サクラは不機嫌だった。

それもそのはず、欠員の補充メンバーとして彼らの『カカシ班』に加わった人物が、つくり笑いを浮かべた毒舌の少年だったからである。

「とりあえず自己紹介から始めようか」

カカシの代理で隊長を務めることになったヤマトが、苦笑いをしながら命ずる。

「うずまきナルト……」

「春野サクラです……」

「サイです」

「いずみナナです。今回の任務からは外れたけど、よろしくお願いします」

ナナはサイにニコリと笑いかけた。

が、ナルトとサクラは不満げな顔で彼を見ている。

「懇親会を開いてる時間はないよ。早速任務に向かわなくちゃならないんでね」

ヤマトは彼らに任務の難度と重要性を説くが、だからといって急に結束力など芽生え

タイトルの無い絵が壁にかけられた自室で、サイは出立の仕度を再会した。

たつた今去ったばかりの『根』の先輩格である男の言葉を、もう一度心に刻む。

『木ノ葉と言う大木を目に見えぬ地中から支えるのが、我々“根”の意志だ。それを忘れるな……』

『根』には、名前は無い、感情は無い、過去は無い、未来は無い、あるのは任務……。

そう教えられてきた。そうやって生きてきた。

今回も、己に課せられた“真の任務”を完遂するまでだ。

「名前も無い……か……」

『根』の掟の一部を何気なく呟いて、彼はテーブルの上の本を見下ろした。

一冊の、そう新しくもない絵本だった。

もちろん、表紙にタイトルはついてない……。

「そんなところからじゃなくて、玄関から来れば良かったのに」

そして彼は唐突に窓の外を向いて言った。

屋根に居たのは、

「来るような気がしてたよ、いずみナナさん」

カカシ班のメンバーのひとりである、いずみナナだった。

「あ、バレちゃってた？」

「君と別れてから、変な蝶が後ろにくっついて来てたからね」

「ごめん、アナタと話したいことがあって」

「どうぞ、入って」

「あ、じゃあ、おじゃまします」

二人はにこやかに会話を交わす。

「僕のが気になる？　　いずみナナさん」

「ナナでいいよ。サイ」

その笑みが意図的につくられたものだということとは、互いに分かっていた。

「気になるっていうか……」

「何？」

同じような“つくり笑い”。

どちらも、当たり前前のように浮かべている。

「何をするつもりなの……？」

「何って……？」

二人の表情とは正反対の、どす黒い空気があたりに漂った。

『『うそくさい笑い』って、わりと見破る自信あるから』

「君もそうやって生きてきたんだものね」

沈黙……。

互いに相手の次の言葉、次の仕草を待つ。

先に動いたのはサイだった。

「殺すはずの相手と『仲間面』するのって、どんな気分なんですか？」

ナナの表情は少しも変化無かった。

「……べつに、もう慣れた……」

「へえ、残酷だなあ」

サイはさらに続けた。

「サスケ君を助けられるかもしれない任務から外されたっていうのに、ずいぶんのん気なんですわね」

「しょうがないよ」

「一緒に行きたいとは思わないんですか？」

「仕方ない。里の意向はわかってるから。アナタの上司、ダンゾウ様も含めてね」

「へえ……、ずいぶん物分かりがいい」

そのまま、不適に笑むナナに近づいた。

そして耳元でささやく……。

「君のサスケ君に対する感情って、その程度のものなんですわね」

ナナはようやく、わずかに身じろいだ。

そして小さく言う。

「アナタが誰に何を聞いたのか知らないけど、そんな感情はもうどうでもいいの」

ひどくつまらなそうな声。

サイは体を離して向き直った。

「私はアナタに忠告しに来ただけ。言い争うつもりじゃない」

「忠告って、何をです?」

ナナの顔に、先程までのつくり笑いはもう無かった。

「ダンゾウって人がアナタに何を指示したのか知らないけど……ナルトとサクラちゃんを傷つけようとするなら私が許さない」

冷たい瞳。

「『仲間』だからですか?」

「アナタにはわからないかもしれないけど」

「わからないな。なぜ君がそれほどまでに彼らに固執するのか」

「『仲間』だから」

「君のことを理解し得ない存在でも『仲間』だと……?」

ナナは答える代わりに息をつき、瞳を伏せた。

そして、再びサイと視線を合せた時、

「……………」

サイはわずかに息をのんだ。

もう彼も、作った笑みなど浮かべてはいられなかった。

「サイ、あなたも気をつけてね」

「えっ……?」

「きつと、何かを企みながらこなせるほど、簡単な任務じゃないから」

「心配……してくるんですか?」

「あたりまえじゃない」

ナナは柔らかに微笑んだ。

それが作られたものかどうか……サイにはもう判断できなかった。

それを知ってか、ナナは軽く首を傾けてますます笑い、静かに彼の目の前から消え去った。

哀傷

「はい、先生」

ナナは器用な手つきでリングゴをむき、彼に渡した。

ぎこちない空気は無かった。

砂から木ノ葉へと還る道中、気がかりだったナナの心中も……。

どうせ推し量ることはできないのだと思い知り、彼はあくまで何も聞かないことに決めた。

「サイって人が、カカシ班に入ったよ。嘘くさい人だけ……」

ナナはあからさまに、『サイ』なる人物についての疑惑を口にする。

「ダンゾウ様の部下なんだって。綱手様も疑ってたけど、絶対に何か企んでると思う

……。何も無ければいいけどね」

少し、他人事のよう……。

が、カカシはリングゴをほおぼりながら、それすら気づかぬフリをする。

主導権はナナに譲ろうと決めていた。

「先生……今回はだいたい写輪眼を使ったんだね……大丈夫？」

ナナは里に戻った後、髪を切った。
出会った頃と、同じ長さに。

あの頃よりほんの少しだけ大人びた顔で、ナナは彼を見ていた。

「……ナナ……」

少し迷った。

が、迷うことさえ、主導権を握らぬ彼には許されない気がした。
全てはナナに……ナナに委ねる。

そのために、彼は重い口を開いた。

「砂に向かう途中でさ、また『うちはイタチ』と戦ったんだよね」

「……」

案の定……ナナは黙った。

驚いた顔もせず。

長い忍生活で、カンは冴えるほうだった。

だから……主導権を手放しつつも、試すようにそう告げた。

「うん……」

ナナの瞳に、陰が籠もった。

そんな彼女の瞳は、初めてじゃない気がした。

が……かすかに手に汗が滲む。

「ナルトも戦ったんでしよう……?」

どこか諦めたような声色。

諦めがついたのは彼のほうだった。

ナナは……、うちはイタチを知っている……。

いや、そればかりか……。

「ナルトに聞いた?」

ナナは首を振った。

「イタチに聞いた」

驚くことは止めにしよう……そう思っても、声がかすれる。

うつむくナナはそれでも、言葉を隠そうとはしなかった。

「あの時、私は……イタチのところに行った……」

「……?!」

驚愕は久しかった。

「一緒……に……?」

ナナの世界が……わからなかった。

わかって良いものでないと知っていても、ここまでそれが歪み、霞んだことは無かつ

た。

「デイダラにやられてフラフラ彷徨ってた私を助けてくれたの……」

「うちは……イタチが……?!」

ナナは……どこで生きているのだろう……。

すぐ側にいるくせに……果てしなく遠く感じる。

ナナの過去も現在も……全てが陽炎のように思えた。

「うん。イタチが」

イタチ……と、そう呼び慣れたように言うナナは……。

「私……イタチを知ってるの。……ずいぶん小さい頃から……」

ついにそう告げた。

「先生に……いつも言おうとして言えなかった……ごめんなさい」

そして困ったように笑う。

泣きそう……だった。

彼の脳裏にふと……何か言いかけて止めたナナの姿が蘇る。

ずっと気になっていた。

それこそイタチにやられて……ツナデのお陰で目覚めたとき、側には蒼白な顔で、泣くこともできずに立ち尽くすナナがいた。

同じ頃に目覚めたはずのサスケじゃなく、自分のところに駆けつけたナナ。真新しい中忍ジャケツトに身を包み、かすかに震えていたナナ。

『先生に……まだ、言っていないことが……』

揺れる瞳で、ナナはそう言った。

あのナナと……今のナナが繋がった。

「サスケには……結局怖くて言えなかった……」

ナナは穏やかに呟いた。

そんな彼女を、誰が責められよう。

「でも……私……」

それを抱えて、ここに立つナナを。

「木ノ葉の忍として……ココに戻ったから……」

そうやって、笑うナナを。

「……ナナ……」

手を、伸ばしたかった。

その手にナナが、すがらないことは知っていても。

それを必要としないと、知っていても。ただ、どうすることもできなくて……。

「だから、信じて。先生……」

笑顔を残して去るナナを、見送ることしかできなくて……。

「ナナ……!」

一片の勇気で彼はナナを呼び止めた。

そして、

「オレは、いつでももお前の味方だよ」

そんなありきたりな言葉を辛うじて贈った。

ナナは笑って手を振り、静かに扉を閉めた。

それはまるで、彼を慰めるような笑みだった。

遠くの空

長引いた会議のあと、シカマルとナナは食堂で遅い昼食をとっていた。

「結局、今日も決まんなかったな……第2次試験の概要」

「『今日も』って……そんなにずっと話し合ってるの？」

「先週の頭からずっとだ……」

「ふーん……」

中忍試験、準備委員会。ナナは、その新委員として入って来た。

三年ぶりの再会だった。

が、シカマルは単純に再会を喜ぶことはできなかった。

その少し前、ナルトが『カカシ班』の任務に誘ってきたから、彼らが里を出たのを知っていたのだ。

当然、その任務に就いているはずのナナが委員会なんかに入ってきた。

どこか大きな怪我をしているようにも見えなかった。

だが、ナナは彼を見つけたるなり嬉しそうに笑った。

なんでもないことのように、『任務から外れた』と言って。

詳しい理由はなんとなく聞けなかった。

ただ、ナナはちやんと、笑っていた。

「懐かしいね、中忍試験」

「……そーだな」

「あれに合格したの、シカマルと私だけだもんね」

ナナは配給された弁当をほおぼりながら、明るい口調で話しかける。

『外れた任務』のことを気にしている様子はない。

「でも、私はそのあとすぐに里を出ちゃったから……、まだ新人みたいなもんだね」

冗談交じりで話すナナは、新鮮な気がした。

「……よく……ちやんと戻って来たな……」

箸を置きながら、シカマルは呟いた。

言ってから、気まぐずくて麦茶を飲み干すと、ナナは笑いながら答えた。

「やっぱり、戻って来ないと思った？」

「……な、なんとなくな……」

シカマルは空のコップをテーブルの上に置きながら、バツが悪そうに言う。

ナナは、和泉の里で修行して来ると、砂の三人を見送った時に彼に告げた。

『戻って来る』と、はつきり言った。

が……、それをすんなり信用するほど、シカマルはナナを知らないわけではなかった。この三年……ナナが戻って来ることと、二度と会えないこと、

その思いを交互に繰り返し返す日々だった。

今ナナはここに居る……。

ここに居るナナが、果たして彼の望む姿だったのか……、それはまだ判断しかねていた。

「……任務、気になんねえのかよ……」

いつの間にか、食堂には彼ら二人しかいなかった。

「……気にならないわけではないけど……」

笑っているナナに影を落とすつもりはなかったが、モヤモヤを抱えたままナナと向き合うのは面倒くさかった。

「お前らにとつて、重要な任務……なんだろう……?」

「……極秘だから……ちゃんと知らされてない」

ナナも麦茶を飲み干した。

「木ノ葉は……この血を持つ私の『裏切り』を恐れてる」

「……………」

「だから、しょうがないよ」

シカマルは、そんなふうには素直に状況を吐露するナナに、かすかに驚いていた。

以前のナナなら、ただ『気にならない』とだけ言うはず……。

それに、里の上層部の意向を漏らしたりしない。

すべてを独りで抱え込んでいたはずだった。

が、ナナは言葉を詰まらすことなく語った。

「本当は、ナルトやサクラちゃんと一緒にいきたいけど……木ノ葉の忍としては、木ノ葉の意思に従わないとね」

そう決めた……その決意がわかった。

「というわけで、しばらくは委員会の仕事に専念するから、よろしくね」

ナナは笑って立ち上がった。

シカマルは頷きながら、食器を持ってさっさと行ってしまったナナの後を追った。

翌日……。

その日も早くから委員会の仕事があった。

過去の資料を整理したり、参加メンバーの性質をあらったり、実際に予定されている試験の検証をしたり……。

砂の事件があつたから、なおさら入念に実行計画を練り直す必要があつた。

「……じゃあ、手分けして資料集めよっか」

「……面倒くせえ……」

委員会の中でも新米中忍である二人には、何かと面倒な仕事がいっつけられた。が、その「砂の事件」に関わっていたというナナは、前向きに取り組んでいた。

せっかく委員会が早く終わつたというのに、居残りで資料集めを言い渡され、二人は里の図書館にいる。

この地下3階の書庫は、中忍試験関係の書物が置かれているため、限られた時期にしか使用されない。

つまり、カビとホコリが酷かつた……。

「じゃあ私、各里の関係記録を集めるね」

「……おう……」

シカマルはいたってやる気のない声で答える。

が、ナナがあちこちと急がしそうに動き回っているのを見て、サボるわけにもいかなかった。

「そつちの棚に、『霧隠れ』の資料ある？」

「『霧』はあっちだ」

「わかった」

薄暗い中、懐中電灯で本棚を照らしながら、地道に目当ての資料を探していく。

探して終わりならいいものの、そのあと、集めた資料をもとに分析をする作業も言いつけられていた。

こちらのほうで、ナナは頼れない……。

シカマルはため息をつき、過去数年分の『2次試験の記録』を手に取った。

「うわっ……」

と、ナナの声があった。

ほぼ同時に、明らかに分厚い本が数冊床に散らばる音……。

「つたく……なにしてんだ……」

「ハハ……ゴメン……」

ナナは尻もちをついたまま、照れたように笑った。

仕草はひどく幼なかつた。

「脚立使えよ……」

「壊れてたんだもん」

シカマルは手にしていた資料の山を床に置き、ナナに手を貸した。

起き上がって直ぐ、自分の巻き起こしたホコリでくしゃみやみをするナナ。鼻をこする仕草が、なんだか懐かしかった。

「もう……、必要ないのまで落ちてきちゃった……」

ナナはぶつぶつ言いながら、床に散らばる何冊かを手にとつて、上の段へしまおうとする。

三年経つても、ナナの身長は殆ど伸びてはいなかった。

目一杯身体を伸ばしても、もう少しのところでは届かない。

「貸せよ……しまつてやつから……」

小さくため息をつき、シカマルはナナの手から資料を取り、そのまま上の段へしまつた。

「ありがとう」

ナナはその体勢のまま彼を見上げ、笑った。

頼りない電灯の下、ナナの笑みは彼の鼻先にあつた。

「これとこれも隣にしまつてくれる？」

「あ、ああ……」

その距離を広げず、ナナは左手に持っていた資料を差し出す。

「シカマル……背、伸びたね」

そして、彼の横顔に向かって言った。

何の意味があるのか、さすがの彼にもわからなかった。

いや、意味があるのか考えるほうがどうかしていた。

ただ数年ぶりに再会した……それだけで、そんな言葉が出るのは自然なはずなのに……。

「お、お前は全然伸びてねーな……」

ついでもりがちになる。

「そう？ これでも伸びたんだよ、2センチくらい」

笑うナナから目を背けてしまう。

「……つつつてもチビのままじゃねーか」

「しっつれー!!」

普通の女の子のように、膨れてみせるナナは新鮮だった。

不安もあつたが、安心もした。

変わらなくても、前とは違っている。

それが良いことか悪いことか、今はまだ判断できなくても……。

「さっさとやつつけて、メシでも食いにいこうぜ」

「シカマルがサボらなきやすぐ終わるよ」

ナナの言葉にニヤリと笑い、彼はまた資料の山を抱えた。
そして振り返り、

「お前は高いとこの取るときは呼べよ」

そう言った瞬間……、抱えた資料の山を床へ放り出した。

「ナナ?!」

今まで笑っていたナナが、苦しそうに胸を抑えている……。

「おいっ！ ナナ!!」

本棚にもたれかかり、身体を支えようとするナナに、慌てて近寄って肩を抱いた。
布越しでも、その肌が恐ろしいまでに冷たいことがわかった。

「ナナ?!」

「だ……大……丈夫……」

ナナは苦しそうに言った。

「待ってろ！ すぐ医療班を呼んで……」

「大丈夫……だから……」

ナナは片手で引き止めるように彼のベストを握り締めた。

「ナナ……!!」

ナナは真つ青な顔で、無理に笑おうとしながら彼を見上げた。

「医療班……とかじゃ……なくてっ……」

息を切らし、嫌な汗をかきながら……必死で彼に伝えようとしている。

「……ナルトがっ……戦ってる……」

「……ナルトが……っ？」

意味がわからなかった。

苦しきで歪んだ顔に、無理に笑みを浮かべようとするナナと『ナルト』の名がなぜ結びつくのか……。

「……シカ……マルっ……」

が、ナナは両手で彼のベストにすがりついた。

「ごめん……」

「あ、謝ってる場合かよ！ それより、お前……」

“次の手”を、思いつくことはできなかった。

が……そんな彼を慰めるように、ナナは切れ切れに告げた。

「ナルトの……“中”のチャクラと……私の血は……」

必死で理解しようとするが、追いつかない

「繋がって……るの……」

ナナはまた、小さくうめきながら片手で胸を抑えた。

その、心臓の辺り……。

「……………!!!」

脳裏にあの光景が蘇った。

そこは……その場所は、あの時、赤黒い傷をつけられた場所……。

あの、カカシに抱かれて里に戻ったナナが……つけられていた傷……。

「ナナ……!!!」

あの傷が、ただの戦いの中で生じた傷ではないことくらい、彼は知っていた。

それほどまでにおぞましく、残酷な傷の形。

見た瞬間、ナナへの深い恨みが伝わってきた。

彼はナナを抱きしめた。

己自身の恐怖も、今さら否定はできなかった。

あんな傷をつけるヤツが、ナナの前に現れた……。

そしてそれが自身の“死んだ姉”だとナナは明かした。

その真実を知って、かすかな恐怖も抱かないほうがおかしかった。

そしてあの傷が……ナルトと関係するのだという不可思議な事実。

ナナの抱えた闇がまた、彼の目の前に広がった。

「シカマル……」

しばらくして……ナナは息を整えた。

シカマルは何もできず、何も言えず、ただ、ナナの冷たい肩を抱いていた。

「ごめんね……」

ナナはまた、謝った。

「……もう……平気なのか……？」

身体を起こしながら、シカマルはようやくナナの顔を見た。

「うん……鎮まった……」

治まった……じゃなく、鎮まった……。

ナナはそう答えた。

彼の頭は、それがただ『痛みが』という主語につけられた言葉じゃないことを見抜いてしまう。

「ナルトが……戦ってたって……言ったな」

「うん」

ナナは彼から無理に離れようとはしなかった。

肩を支えられたまま、逃げずに答えようとしていた。

「なんで……わかる？ 繋がってるって……なんでだ？」

だから、そのままそう聞く。

ただ、彼はナナの瞳を見られずにいた。

「私の血……」

「……和泉の血か……？」

汚れた床に視線を落としながら、シカマルは平然としたフリでナナの言葉を待つ。

「……ナルトの力を抑えるために……あつた……から……」

意味がわからなくなつて、逆に彼はナナを見た。

悲しげな瞳で、ナナは彼の視線を待っていた。

「ココ……」

そして、己の心臓に手を添える。

「ココに……ナルトを封印するための刻印があつた……の」

ナナの言葉は過去形だった。

『あつた』というその表現と、脳裏に焼きついたあの傷が再びリンクする……。

あの時……ナナはそれを失った。

姉によつて、それを奪われた……。

真実が見えた。

「なんで……そんなもの……」

が、まだ見えぬものもある。

「ナルトの力を抑えきれるのは……この血だけだったから……」
ちがう……そんなことじゃない。

ナルトの力……ナルトの存在……ナルトの中の存在……。

そんなもの、とうに気づいている。おそらくサクラも。

だから、そんなことじゃなく、

「なんでお前が……そんなモノを背負わされてるんだよっ……！」

そのことに苛立った。

「……だって……私は……」

ナナは、彼を慰めるように言った。

「そのために、産み出されたから……」

真実……。

知って……後悔する……。

「コレ……私の存在理由だったの……」

火影岩の頂上で、頼りなく風に吹かれていたナナ。

「死んだはずの姉」と戦ったのだと告白した、そのさらに胸の奥……。

「存在理由」を奪われたという事実も背負っていた。

あの時痛んだ胸が、また余計に痛んだ。

「刻印はなくなっても……まだ、ココは『九尾』のチャクラとつながってる」
ナナははつきりとその存在を口にし、切なげに目を伏せた。

「どこか遠くで……ナルトが『九尾』の力を使って……戦ってる」
どうしてやることもできなかった。

「暴走……してなきやいいけど……」

ナナはそう憂いながらも、独りで立ち上がった。

「シカマル、なんか……ごめんね」

「……謝んな……」

謝るのは……オレたちの方だ。

何故だかそんな言葉が胸に湧いた。

「もう大丈夫だから、仕事の続き……しよ？」

今度は、そんな彼にナナが手を差し伸べた。

白い手は彼を引つ張り上げた。

もうずっと前から、ナナはこうして独りで立ってきたのだと……。

痛みをこらえ、何事もなかったように笑って来たのだと……。

……改めて思い知らされた。

退紅 —あらぞめ—

「サスケ!!!」

三年ぶりに会った彼に、ナルトは叫んだ。

全身から千鳥を発する、サスケの強さ……、本気で切りかかってきたサスケの気まぐれ……。

ヤマトですら、彼の刀に血を流した。

大蛇丸が止めなければ、もっと恐ろしい力を放っていただろう……。

「行くわよ……」

「……フン……」

大蛇丸とカブトに促され、サスケは再びナルトの前から去ろうとしていた。

その時に、焼け焦げそうな喉の奥から、ナルトは彼の名を呼び叫んだ。

「サスケ!!」

《《気まぐれ》》に、サスケは視線をよこす。

その眼に……ナルトは言った。

「ナナは……待ってるっ!!」

里で待つナナの姿が、彼の絶望に侵食される心を支えていた。

「ナナはっ……何も言わないけど……!」

大蛇丸がサスケの隣でニヤリと笑ったが、ナルトの目には入らなかった。ただ、サスケだけを見上げた。

サスケの心の、奥底だけに叫んだ。

「本当はっ……お前を待ってたってばよっ!!」

サクラが少し後ろで涙を浮かべた。

同じ切なさ、ナルトとサクラの胸を去来した。

もしナナが……ここに居たら……?」

「サスケ君っ……ナナはっ……!!」

サクラも訴えた。痛みを振り払うように。

だが……。

「知らねえな……そんなヤツ」

サスケはそう言い捨てて……、大蛇丸たちとともに姿を消した。



……気が重かった。ナナに会うのは……。

サスケと会った。だが連れ帰ることはできなかった。

そう告げることも。

サスケは躊躇うことなく、自分たちを排除しようとした……。

それを話すことも。

ナナがどれだけ傷つくのか……、考えただけでもゾツとした。

それほどの恐怖。

ナルトもサクラも、まだナナの“決心”を信用していなかった。

そして、ナナの想いを本人より深く知っていた。

だから、躊躇った。

サスケの吐き棄てた、最後の言葉も……。

「おかえり」

中忍試験準備委員会のある建物を、ナルト、サクラ、そしてサイは訪れた。

ナナは笑顔で迎え、彼らの無事を喜んだ。

そのキレイな笑顔を向けられるのが、後ろめたかった……。

「ナルト……平気……？」

ナナはそんな彼らとの距離を壊すように、ナルトの肩に手を置いて、顔を覗き込んだ。

「……………」

ナルトは見上げるナナの瞳を探った。

ああ……知ってる……

そして、そう感じた。

隠しきれない、不安の色。

ナナは、『九尾』の力が暴走したことを「知っている」。

それは単なる直感だった。

でもそう感じた自分に、ナルトは驚かなかった。

何故だか当たり前のように思えた。

「だ、大丈夫だってばよ！」

ナナは笑った。

その笑顔を、傷つける……。

その言葉を、告げなければならぬ……。

「あのさ……ナナ」

「なに？」

ナナからは聞いてこなかった。

だから、ナルトは大きく息を吸って言う。

「オレたち……サ、サスケに会ったんだってばよ……」

ナナの両目が見開いた。

案外、素直な反応だった。

素直すぎて、ナルトもサクラも戸惑った。

「ご、ごめん……会えたのに……、連れて帰れなかった……」

ナナは、うなだれたナルトとサクラと、サイを順に見回した。

そして、小さく呟いた。

「……ちゃんと……生きてたんだ……」

たったそれだけ……。

だがナルトとサクラは、ハツとして顔を上げた。

ナナが、どれだけサスケを案じていたのか……思い知らされた気がした。

「ご、ごめんね、ナナ」

サクラも言った。

だが、言うてから……三年前にナナが彼女に言った言葉と、同じであることを知った。

同じ思いであることに気づいた。

あの時彼女は、ナナに何と言ったか。

『ナナのせいじゃない。謝らないで』

そう言ったはず……。

が、ナナは何も答えなかった。

そして、重苦しい雰囲気振り払うような明るい声で言った。

「戦ったの……？ 強くなってた……？」

ナルトはナナの瞳をもう一度探った。

そこに、絶望とか、悲壮とか……そんなものはなかった。

ただ……。

「今度はナナも一緒に……今度こそ、あいつを連れ戻そうぜ！」

気を取り直したように言ったナルトに対し、

「うん、そうだね」

そう笑顔で答えたナナの……、その他人事みたいな空気が、ナルトとサクラの心に暗い影を落とした。



数時間後。

「ちよつと、いいですか？」

委員会の作業を終えて帰宅する途中のナナを、サイは呼び止めた。

「……サイ……？」

サイはにこやかにナナに近づく。

「こんばんは、ナナ」

「こんばんは」

互いにつくり笑いを交わし、同時にそれを引つ込めた。

「君に話があるんだけど」

「そう……、じゃあ、もう遅いからうちで話す？」

「君がいいなら」

「私お腹すいてるんだけど、サイは？」

「……そういえば……昼から何も食べてないな」

「じゃあ一緒に食べよう」

サイは黙って、ナナの後に続いた。

ナナは、数日前にサイの家を訪れて見せた“警戒”を……いや、“威嚇”を完全に解

いていた。

ナルトとサクラとともに、木の葉へ帰った。

それだけで、彼女にとって十分な「答え」だったのかもしれない。

だからサイは、あえて二人と『ちゃんと仲間になりました』などとは言わなかった。が、数年来の友のように二人で台所に立ちながら、彼は真実を告げた。

「本当は僕……サスケ君の暗殺を命じられていたんですよ」

ナナは包丁を持つ手を止めて、サイを見た。

「そうなんだ。『暗殺』か……。そこまで予測できなかつたな」

そして、笑った。

「怒らないの?」

「やめたんでしよう?」

ナナは再び手を動かした。

器用な手で、キュウリが綺麗に輪切りにされていく。

「そんな目的を持つてた僕を、『仲間』として認めるの?」

「……サイ……」

また、ナナの手が止まった。

「ご飯炊けたよ。混ぜて」

「ナナ……！」

やりすぎす……。その点について、ナナはサイよりも数段上手のようだったが、はぐらかされてばかりもいられない。

「ナナ、君はなんとも思わないの？」

ナナは困ったように笑った。

そしてようやく答えた。

「『ナルト』と一緒にいたんだもの。アナタが変わらないわけないよ」

「……ナルトくん……？」

ともに戦ったナルトの姿が、ナナとダブって見えた。

「ナルトといったら、『仲間』ってなんて大事なんだろうって、思えるでしょう？」

ナナは嬉しそうに言った。

「彼は『つながり』を……信じてるって、言ってたよ。サスケ君との……」

サスケの名を口にして、案外声が小さくなる。

が、サイは続けた。

「そんな彼を見て……、僕も死んだ兄とのつながりを……知った気がするんだ」

ナナは一瞬彼の目をのぞきこみ、フツと笑った。

「ナルトの想いは……人を変えるの」

まるで自分の家族を自慢するかのようになんか、サイはまたナルトの『つながり』の強さを感じる。

「サイ、ほら、ご飯混ぜてよー！」

ナナは思い出したかのように、彼にしゃもじを押し付けた。

サイとナナ、二度目の出会いで二人は食卓を囲んでいた。

もともと友と呼べるものもなかったサイは、そのことに違和感を覚えはしなかった。ナナはどう思っているのか知らないが……。どんなつもりかもわからないが……。

「それで……話って何？」

そう深刻でもない声で、ナナは箸を運びながら切り出した。

自然な口調に、サイは「ちゃんと告げよう」と決心して来たにもかかわらず、一瞬だけ躊躇った。

「さっきの……サイのことじゃなくて、他に話したいことがあるんでしよう？」
気づいていた……。さすが……。というべきか……。

サイは苦笑して箸を置く。

そしてナナの瞳を見つめた。

『九尾』が暴走したとき、それを封印するために、和泉の里から少女が使わされた……。

その歴史を『根』で知らされた。

物心ついた頃、読んだ絵本の中に出ていた陰陽の術を使う『和泉一族』。

その「実在」とともに、そこから同じ年頃の少女が「九尾封印」のために送り込まれたのだと彼は知った。

ただ、『九尾』を封じるため……。

だがその『九尾』は、ナルトという少年の中に在る。

そのナルトの存在自体をも封じるために、少女は木ノ葉へ来た。

それが、目の前の少女……。

感情は沸かないはずだった。

それを持たない術は、叩き込まれてきたはずだった。

だが、言葉が詰まるのは……紛れも無く感情が動いているからか……。

サイは喉の奥に引っかかる言葉を、今さら吐き出すことに躊躇いを覚えていた。が、ナナは何も言わずに彼のそれを待っている。

まるで……もうこれ以上、傷が増えても痛みは感じないともいうように。

「サスケ君の言葉を……君に伝えようと思って……」

ナナは微笑した。

「わきゃわきゃー」

からかうように。

「ナルトとサクラちゃんは、何も言わなかった。だから、私が聞くことは何も無いんだと思ってたのに」

見透かすような瞳で、サイを見つめ返す。

サイは目を逸らした。

改めて、感情が存在している己の中身を実感する。

確かに、ナナの言うとおり……。

昼間、任務の報告をしに三人でナナのところへ行つたとき、ナルトもサクラも『サスケの言葉』を明かさなかった。

そればかりか、サスケの様子には触れなかった。いや、触れられなかったのか……。

ナナも詳しくは聞こうとしなかった。

それが、三人の今の『ライン』なのだと言いは思った。

だが……。

まだ親しくもない彼だったが、どうしてもナナに伝えたいという意思が働いた。

「ナルト君とサクラさん……サスケ君に言ったんだ」

ナナは茶化すような視線を止め、静かに聞き入った。

「……『ナナもサスケ君を待つてる』って……」

ナナの瞳に、揺れ動くものは無かった。

それが我慢なのか、本当に何も感じていないのか……。

サイは自分より感情を気取らせないことに長けたナナの心中を、図ることはできなかつた。

だから、ただ言葉が続けることしか許されなかつた。

「二人とも……必死だったよ。僕にでも、二人がどれほど君を……そしてサスケ君を想っているかわかつたんだ」

「……そう……」

素直な彼の言葉に、ナナも素直に頷いた。

躊躇いは棄てた。

「でも……」

罪の意識……初めて感じるそれが、サイの中に芽生えた。

その存在に、言いかけてから改めて気づいた。

だが、ここで終わらすわけにはいかなかった。

どんなに、ナナを傷つける言葉を吐くことになっても……。

その罪に苛まれることになっても……。

「でも、サスケ君はこう答えた」

サイはナナの瞳を見て言った。

「……『知らねえな、そんなヤツ』……って……」

ナナは、とっさにうつむいたりはしなかった。

表情はまだ、変わらない。

サイは黙って、ナナの言葉を待った。

「……そっか……」

少しして、ナナは小さく息を吐くように言った。

「ずいぶん嫌われちゃったな、私」

困ったような微笑。

サイは息を呑んだ。

ナルトやサクラが、ナナに対して持つ感情が、わかった気がした。

「でも……」

だから、自分を落ち着かせながら言う。

「そうじゃない……」

「なに……?」

「そうじゃないと思うから……僕はここへ来たんだ」

ナナは首を傾けた。

不思議そうな顔で、サイの言葉を待っている。

「最初に彼に会ったのは、僕だった」

サイはできるだけ客観的に話した。

「サスケ君は、僕を殺すような眼をしていた」

ナナは黙って聞いている。

「僕はそこで、ナルトくんの名前を出したんだ……けど」

あの禍々しいサスケのチャクラを思い出し、一瞬間をおいてから、サスケの言葉を告げる。

「『いたな、そんなヤツも』って、言ったんだ」

ナナはさらに首をかしげた。それと、今の話の流れと、何が関わるのかわからないといった様子で。

サイはそんなナナの仕草で、ようやく小さく笑えた。

「サスケ君は……ナルト君のことは『いたなそんなヤツも』って言ったのに、ナナのことは『知らねえな、そんなヤツ』って言ったんだよ」

「それが……何……？」

ますます自分が嫌われたということ……。ナナがそう思っているのは手に取るようにわかった。

だからサイは、一息に語る。

「ナルト君の存在は否定しなかったのに、ナナの存在は否定した。だから……、きつとナナのことは断ち切れてないんだと、僕は思ったんだ」

「……意味がわかんないよ、サイ」

ナナは少し眉をひそめ、真剣に彼の説明を待つ。

「存在自体を否定しなきゃ『断ち切ったつもりになれない』ってコトでしょ？」

「……………」

ナナはまだ、困ったような顔で彼を見る。

それは彼の憶測に過ぎない。

あくまで彼らのことをよく知らない、客観的な考えでしかない。

だが、自信はあった。

「君の存在は、あえて『否定』を口にしなきゃならないくらい、彼の中で消しきれてない……って思ったんだ」

サイの見つめる目の前で、ナナの瞳がゆっくりと見開かれた。

「『否定』……しないと……？」

呟く声は、掠れていた。

「君の存在は……サスケ君の中で、彼自身が思うよりも断ち切れてない……。そんな気

がするよ……」

その意味をゆつくりと理解して……ナナは唇をかんだ。

「……なんで……サイはそんなふうに思うの……？」

今夜のナナに、偽りの色は無かった。

「なんで……そんなこと言いに来たの……？」

目を伏せ、影を隠しもせず、ナナは眩く。

「サスケ君の帰る場所は……君なんだなって、感じただけだよ」

「……サイには関係ないじゃない……」

「だから、僕は僕が感じたままを、ただ伝えに来ただけ」

ナナは両手を膝の上で握った。

「意外と……おせっかいだったんだね……」

「ごめんね」

サイは余裕を持っていた。

ナナが小さな女の子のように見えた。

が、次の言葉を言ったとき、ナナは逆に大人びた。

「……私はもう……いいや……」

すぐに『何が』と聞き返せなかつた。

ナナの深みに引き込まれ、溺れそうな錯覚を受ける。

「私はもう…… “それ” から逃げ出したから……」

申し訳なさそうにサイを見たナナは、彼の言葉を待たず、

「デザートに桃食べよう。昨日、八百屋のおじさんに貰ったの」

台所に去つた。

二藍 —ふたあい—

今でも容易に、あの青い月を思い出せる。

下から吹き上げる冷たい風も、足元にざわつく下草も。

暗い瞳も、低い声も。

残酷なほどに優しかった、あの腕も……。

サスケが今でも何処かで生きている……

それがわかっただけで、力が抜けた。

彼が今、どれほど強くなっているようにも、どれほど狂っているようにも、……どうだつてよかった。

ただ、生きていてくれた……。

それが、ナナにとってはまだひとつ、重要なことだった。

彼を利用してしようとしている大蛇丸が、彼をまだ殺す訳がないとわかっている、……殺されていやしないかと不安だった。

彼の身体を奪うのが、まだ少し先とわかっていても、……もう彼は皮と成り果て、大蛇丸にその魂を譲っていやしないかと不安だった。

今日はずいぶん……懐かしい顔を見た。

が、心は揺れてなどいなかった。

ただ……あそこに居なかった。ただ一人。が、ほんの少し……ほんの少しだけ心を震わせていた。

『ナナ……』

どうしても捨て切れなかった不安が、木ノ葉を出たあの日から “不快” のカタチで残っていた。

捨てたにもかかわらず、心にこびりつくモノの不快さを嫌というほどに思い知った。

ナナの姉という者に渡されたボロボロの額当て。

アレについていた血の匂いは、今も鼻をつく。

それを捨てても……不安は捨て切れなかった。

ずっと案じていた。捨てたはずなのに。

捨てても……死んでは欲しくなかったから。

傷つけても……どこかで誰かと、笑っていてほしかった。

ちやんとどこかで……生きていて欲しかった。

大蛇丸も情報をくれなかった。

からかい半分で嫌味な情報を伝えて来てもおかしくはなかったのに。自分から聞くことなどできなかった。

だが結局、一度もナナの行方について話題にしなかったのは、本当に何の情報も得ていないのだろうか」と確信していた。

琴葉は……、『力を取り戻す』と言ってしばらく姿を消した後、突然目の前に現れた。ナナによく似た顔で不気味に笑いながらちよつかいをかけてきた。

イタチの話もした。

幼い頃のナナの話も……。

聞かないようにしていたが、勝手にしやべってはどこかに去って行った。

だが琴葉も、ナナの案否については「答え」を知らないようだった。

いや、『答え合わせ』はもう少し後』とか言っていた……。

だが今日……かつての仲間……、ナルトが言った一言で、その呪縛は解けたのだ。

『ナナはっ……何も言わないけど！ 本当はっ……お前を待ってたってばよっ!!』

ナナは……、生きている……。

ナナがまだどこかで生きている……。きつと木ノ葉で。彼らと一緒に。

それを知っただけで、確かに三年の間ずっと渦を巻いていた心は鎮まった。

本当に、ナナが生きていてよかった……。

もう二度と、あの頃のように会えないとしても。
次に会うときには、殺さねばならぬ相手にだとしても。

銀鼠 — ぎんねず —

「ヤマト隊長」

あまり聞き慣れない声に、ヤマトは振り返る。

火影邸の前で彼を呼び止めたのは、いずみナナだった。

「ナナ？」

ナナはニコリと笑い、走り寄る。

「ヤマト隊長、これからナルトの修行ですか？」

「あ、ああ……そうだよ」

ナナに落胆している雰囲気は無かった。

おそらく、ナルトたちからサスケのことを聞いているだろうに……。

カカシ班の事情を火影から聞いていた彼は、心の奥底で彼女の心中を案じていた。

「気をつけてくださいいね。ナルトは無茶ばかりするから」

逆に、妙にサバサバとした感じに違和感を覚えた。

「ヤマト隊長の方が先にへバっちゃうかもしれないですよ？」

クスクスと笑うナナ。

過去の彼女を知らずとも、なんとなく不自然に思う。

火影やカカシから聞いていた「ナナ像」とも、あるいは『和泉』から来た者として暗部内で囁かれていた噂ともたいぶ異なる空気を、ナナは纏っていた。

「まあ、少しくらい無茶をしないと、カカシ先輩の修行にはついていけないからね」
調子を合わせて応えようと、ナナは『それもそうか』と、また笑った。

「それじゃあ、私は綱手様に用事があるので……二人にも頑張つてねって伝えておいてください」

「ああ、わかったよ」

ヤマトはナナにつき合うように笑みを返し、背を向けて歩き出した。

その背に……。

「ヤマト隊長」

ナナはもう一度呼びかけ、

「ごめんなさい」

初めて影のある笑みを見せてそう言い……火影邸の中へと消えた。

「……………」

その言葉にどんな意味があったのか、一瞬彼はわからなかった。

が、彼女が去つて緩い風が吹いたとき、やっと彼女が「何」だったのかを思い出した。

火影から言い渡された自分が果たすべき「役割」は、『九尾の暴走を抑えること』である。

それは本来あの少女が成すべきことだった……。

『この間』の任務と、これからの修業での「役割」が、その事実と結びつく。さつきの言葉は、自分が「役割」を果たせないことへの償いの言葉だった。

やがて彼は、ナルトとカカシの居る修行場に着くと、こっそりとカカシにナナの言葉を告げた。

カカシは悲しげに苦笑して、少し離れて準備運動をするナルトを眺めながらこう言った。

「失う前と後で……どっちが辛いのか、結局オレにはわからないんだよネ」

さらりと言ったふうでいて、カカシが苦しげに拳を握っていたのを、ヤマトは見逃さなかった。

ヤマトの中でナナのあの笑みが儂くゆらいだ。

「おーいナルト！ そろそろ始めるぞお……！」

「オッス!!」

「テンゾウもよろしくな」

「お久しぶりです、静葉様」

出された茶には口をつけず、ナナは真正面の老婆を見据えた。

彼女は、この『和泉神社』を何十年も守り続ける和泉一族の女だった。

木ノ葉と和泉の橋渡しとして役目を果たしてきた……といえば聞こえは良い。

が、ナナはこの和泉静葉という女が、どれほど一族以外の人間を卑下し、どれほど和泉に戻りたがっているかを知っていた。

それに、和泉の里で暮らす誰より、当主の権力にすがっていることも。

「……お元氣になられて、本当に何よりでございます」

静葉はもつともらしく、しわがれた声で言う。

が、そんな上辺の言葉など、ナナにとつて意味は無かった。

いわば一族の、一番醜く、閉鎖的で古びた考えをもつ老女……今さらそれに対してどうこう気を回すのも馬鹿らしい……。

「静葉様もご存知のとおり、私は三年前、怨睨オニとなった姉と戦いました」

「まこと恐ろしきことにござります……」

視線を色の変わった畳みに落とし、静葉はナナの言葉を交わすように答える。

「私は姉の怨睨オニを祓うことはできませんでした」

「お命がご無事で幸いでした……。さすがは菜々葉様にござります……」

しらじらしい……。

ナナの心の奥がそう嘲った。

四年前、この場所でナナに『姉の自害』を告げたのはこの静葉だった。

あの時、『琴葉の怨念に気をつける』と、事態に対して迷惑そうに悪態づいていたクセに……。

うんざりだった。

この、ナナが嫌悪する和泉の体質がこびり付いた女が……。

だが、それでもわざわざ火影の許可を得てまでここへ来た理由があった。

「今日は……静葉様に、お聞きしたいことがあって参りました」

「……は、はあ……」

静葉の眉間の皺が濃くなった。

困惑……銀鼠の体から、それを発散させる。

「……『和泉成葉』とは……どれ程の陰陽師だったのですか……？」

ナナは少しだけためらい、その名を口にした。

静葉は目を見開いて、動揺を隠しもしなかった。

そして直後、嫌悪の表情へと変わった。

「な、なぜ……あの娘のことをお聞きなさる？」

「知りたいからです」

「なぜ私に……」

「和泉の里で、成葉の記録は全て抹消されました。誰も語る者が無く……。アナタに聞くしか知るすべが無いのです」

怒りすら含むしわがれた声に、ナナは毅然と答えた。

どうしても、聞いておかねばならぬことだった。

和泉に帰って調べても、「彼女」に対しては何一つ情報が得られなかった。

予想はしていたが、まるで禁忌のごとく抹消されたその存在……。

それを命じた者の執念さえ感じた。

執念……。仕方のないことだった。

和泉成葉に関する記憶の抹消、及び口にすることを密かに禁じたのは、和泉当主その人なのだから。

自分を捨てて木ノ葉に去った女……。そして、当主である自分よりもチカラを持つ女のことなど、記憶から消し去りたい……。そう思うのも無理はなかった。

薄笑いながら、ナナはそう思う。

「あの娘は……あなた様もお聞きのとおり、天才と謳われるだけの才を持った娘でございました」

静葉はまるで悪態づくように、わずかばかりの言葉をこぼす。

「……体さえ万全であったなら……あの禁術を忍などに伝えることもなく、自らの力で九尾を封じこめられたのに……」

独り言……。

そんなふうには、静葉は言った。

憎々しげな冷気は、老いた身体に不釣り合いな冷たさだった。が、ナナにそれを咎める気はなかった。

和泉全体が抱えるモノ。

今、静葉はそれを代弁しただけなのだから。

成葉がおとなしく当主と結婚していれば……。

木ノ葉の忍などでなく、成葉が九尾を封印していれば……。

和泉の失墜も、木ノ葉への負い目も存在しなかった。

もつとも……、そうなれば『ナナ』の存在もなかったが……。

わかりきった想いは今さら取り上げる必要もない。

今さらそんなことに考えを巡らすつもりはなかった。

だから、ナナは淡々と次の問いを口にする。

「私は……和泉成葉を越えられると思いますか……？」

静葉は少し驚いた顔をしてから、ナナの瞳を探るように見つめた。
こんなにもちゃんと視線を合わせたのはきつと初めてだ……。

そう思っているうち、静葉はゆつくりと、静かに、こう答えた。

「……はい。あなた様ならば……」

陳腐な気休めか、それとも畏怖を込めた本音か……。

皺の刻まれたその顔は、すでに感情を忍し隠していた。

「ありがとうございます」

ナナは静かにそう言っ立ち上がった。

ギシリ……。

軽く床板が鳴った。

「……では……」

軽く頭を下げて陰気な境内に出た。

ここでの目的はもう何も無かった。

「菜々葉様……！」

背後から静葉の呼び止める声がした。

振り返ると、静葉は一瞬だけためいながら言った。

「……琴葉様の怨睨を……鎮めに行かれるのですか……?!」

こんな静葉の様子は見慣れていなく、ナナはわずかに戸惑った。

それがナナに対する人間らしい“心配”と、素直に捉えることはできなかつた。

だが、

「……ハイ……」

少し笑んで、ナナは答えた。

「……次の……赤舌しゃくぜつ日に……」

そして、静葉の言葉を待たずに立ち去った。

『私は……和泉成葉を越えられると思いますか……?』

たったそれだけ……聞きたかつた。

不安だつたわけじゃない。自信がないわけでもない。

まして、たったそれだけの言葉にすがりたいほど、怯えているわけでもない。

単に聞きたかつたのだ。

和泉成葉に対する言葉を……。

彼女のチカラを知る者の言葉を。

街に降りるころ、すでに日は暮れていた。

家路に着く人々の喧騒に身を置くと、なんとなく安堵した。

心地よい、人の気配。

ふと、今頃はカカシやヤマトと修行しているはずのナルトを想い……、胸に手を置いた。

絆は失っていない。

姉に奪われはしなかった。絆も、そして力も。

だから大丈夫だと思えた。

自分でも驚くほど……静かな心のまま、姉を殺せそうだった。

焦香 —こがれこう—

「……ナナ……」

心の奥底で待ちわびた再会……。

「……サスケ……」

掠れた声に、彼は笑う。

「逢いたかった……」

暗がりの中、差し伸べられた手はやさしくナナの頬に触れた。

「もう……お前を離さない……」

そして、そう言う。

言葉など、出るはずもなかった。

その声も、抱き寄せる腕も、ぬくもりさえ……、あの時のまま。

「……サスケ……」

別れの日……すぐることのできなかつた腕を、サスケの身体に添わず。

「ナナ……ずっと……そばに居てくれ……」

耳元で囁かれる言葉に、涙が自然とあふれ出た。だが、ナナは知っていた。

このサスケの体温は……サスケのものじゃない。

この身体はサスケであっても、心は……魂は……記憶は……、もう……大蛇丸のもの。

「……ナナ……」

ナナはその瞳を見上げた。

時折……金色に光るその双眸。

知らないイロが、確かにゆらめいていた。

「オレは……ずっとお前が好きだった……」

目の前のソレは……、サスケの声で、サスケの顔で、甘い言葉を囁く。

わかっている……。コレは……。コレはもう、サスケじゃない……。

だが……。

「……サスケ……」

ナナの「記憶」が、それを受け入れようとしていた。

モウイイ……

サスケを求める心が、『それでもイイ』と呟いた。

だから、

「カカシ先生」

ヤマトが会計を済ませ、再び修行場へ向かおうかという時、

「ん？ ナニ？」

「ちよつとだけ、話が……」

ニコリと笑つて、ナナは言つた。

花が散るような笑みに、一瞬だけ動揺が訪れた。

ナルトに気づかれぬよう、それに対して身構える。

「お前ら、先に行つて修行の続きやつといてくれ」

ヤマトと目配せした後、二人を先に行かせ、カカシはナナに向き直つた。

ナナは穏やかに笑つていたが、その顔色の悪さと「ナナからの話」ということに、あまりいい予感はしなかつた。

ついこの間も、病院でイタチのことを告げられたばかりだ。

ナナはいつも、誰にも明かせない傷を抱えているから……。

だが、だからこそ、自分にだけ話してくれるのは救いだつた。

二人は慰霊碑の前までやつて来た。

相変わらず静かな場所。

「ナナ、ずいぶん顔色が悪いけど、大丈夫？」

ここまで来て、カカシは素直にこう尋ねた。

自分では気づいていなかったのか、ナナは少し驚いた顔をした。

そして、慰霊碑に視線を向けてうつむき、困ったようにこう答えた。

「今日……悪い夢をみちゃって……」

ハハハ……と笑う細い背が、ただの悪夢で済まされないうことを予想させた。

「……大丈夫？」

きつとサスケの夢……。

聞かなくてもわかる。

「うん……ただの夢だから……平気……」

ナナはそう言ってくるりと反転し、彼を向いた。

「そんなことより先生……」

そして、自分のことよりずっと影のある声で言う。

「実は綱手様に言われて……報告に行くところだったの」

「オレに……？」

「うん」

違和感を覚えた。

火影から言い使った任務で彼を呼び止めたのなら……わざわざ慰靈碑こんなとこの前まで来る必要はなかっただろうに。

そう思う彼の耳に、驚愕の事実が飛びこんだ。

『『火の寺』が……暁に落とされたって……』

「え……」

もちろん、火の寺のことは知っていた。

元守護忍十二士のひとりだが、そこにもいたはず。

だが、暁はそれをも殲滅したというのか……。

「アスマ先生とかシカマルたちが、昨日から討伐に向かっているって」

「そうか……火の寺が……」

予測より事態は悪化の速度を速めていると、そう感じた。

「先生たちも、ナルトの修行が終わり次第、後援に加わるかもしれないから、そのつもりでいるように……だって」

「……わかったよ。知らせてくれてありがとうとね」

恐らしく動揺を伏せてナナに言う。

ナナはまた、少し表情を変えた。

そしてひとつため息をついた後、

「私は……後援部隊にも入れてもらえなくて……先生に報告するのが今のところの任務……」

自嘲気味にそう言つて笑つた。

「ナナ……」

「でも……」

言葉をかけようとした彼を遮り、ナナは再び顔を上げた。

「私には……やらなくちゃいけないことがあるの」

ナナの瞳には強い光があつた。

それは……決して清々しいものでなく、黒い光。

そしてその言葉は、カカシにとって明らかに不安だけでもたらずものだった。

「やらなくちゃ……いけないこと……?」

「うん。昨日、綱手様に許可をもらったの」

安心させようとしたのか、ナナはそう言つた。

だが、彼の不安がそれで拭われるわけもなく……。

「それって、お前がこの数年、和泉の里に戻つて修行してきた『目的』のため?」

あえてそれを隠しもせず、彼は戸惑いがちにこう問う。

「うん」

ナナはあつさりと言った。

「私……姉を倒しに行つて来る」

「……………!!」

柄にも無く……あれから悪夢を見るようになったカカシの、その惨い光景がまた甦る。

ボロ布のように、川岸に捨てられていた、血まみれのナナ。

背負つた宿命であるはずの『刻印』を、めちやくちやに挟られていたナナ。

そして、三尾の白い狐……。

同じ夢を最後にみたのは……つい7日前。

当たり前だが、もう二度と……アレをみるのはゴメンだった。

「遅かれ早かれ、決着をつけなくちや」

そう他人事のように言うナナは、急に大人びていた。

「今度は私から、あのヒトに会いに行く」

姉という繋がりを断ち切ることに、何の迷いも無いようだった。

「……………ナナ……………」

一瞬、彼の脳裏で、白い狐が鳴いた。

「修行、うまくいったんでシヨ？」

心配していると……不安なのだ伝えてしまうと、ナナはもつと苦しむから、カカシは必死で悪夢をかき消した。

「大丈夫だよ先生。今度はちゃんと、帰って来るから」

ナナは笑った。

「私が……どれほどのチカラを持つて産まれてきたのか……『和泉』に帰ってから思い知った」

彼も今さら、改めて思い知らされる。

ナナが望まぬチカラを持つて生み出された存在だということ……。

「私は……陰陽術ではもう、絶対に誰にも負けない……」

たとえそれが望まぬチカラでも、ナナが再びあんな姿にならないことを、カカシは願っていた。

「絶対……帰って来るんだな？」

「うん。約束する」

自信……いや、確信さえ漂わせ、ナナは宣言した。

「約束だよ……？」

それでも消えぬ不安は……何度もみた悪夢のせい。

今日の前に居るナナは、あそこまで追い詰められた相手に再び対峙するとは思えない

ほど、落ち着いている。

情けない……。

今こそ自分が、ナナを安心して行けるように送り出さねばならないのに……。

「カカシ先生」

だが、カカシがいつもの間延びした口調を取り戻す前に、ナナは言った。

『和泉成葉』を、知ってるよね？」

その名がナナの声で耳に入った瞬間、カカシの胸を、懐かしく切ない風が吹き抜けた。

「和泉……成葉……？」

「うん。……知ってるよね？」

キレイに笑ったナナに、その名の主が重なった。

昔……師の隣で笑っていた、その人の顔が。

「……会ったこと、あるんでしよう？」

「……ああ……あるよ」

いつからか木ノ葉へやって来て、和泉神社の巫女だった女。

美しく、聡明な女。

「和泉成葉は分家の人だったんだけど……百年にひとりって言われるほどの天才だったら

しこの」

「ああ、知ってるよ……。四代目に、九尾を封印する術を教えたのは彼女だ……。あれほどの技を使う女が並の人間でないことくらい、当時まだ子供だった彼にもわかった。

あの後、四代目の後を追うようにして死んでしまったけれど……。

「わたしは『転生術』で、その和泉成葉のチカラを与えられて産み出されたの」

「……え……」

彼の回顧を裂くように、ナナは唐突に言った。

「だから私は……和泉成葉の生まれ変わり……ってことになるのかな……」

その双眸から、ナナの感情は読み取れなかった。

いや、彼に読み取る余裕はなかった。

「あのヒトの力を受け継いだ私が……負けるわけないでしょう?」

余裕の無い彼に、ナナはとどめを刺すかのように笑った。

「……ナナ……お前……」

「カカシ先生」

ナナは彼の言葉を遮って、一瞬だけ……ほんの一瞬だけ目を伏せ、それから言った。

「和泉成葉は……どんなヒトだった?」

四代目の隣で咲いていた、あの笑顔……。

もうずいぶん、思い出そうとしていなかったことに、今さら気づく。そして、今さらナナに良く似ていると感じてしまう。

「キレイなヒト……だったよ……」

ナナのまつすぐな瞳に、記憶を分け与えるように、カカシは言った。

「四代目とは、本当の兄妹きょうだいみたいに仲が良かった」

それを聞き、ナナは満足そうに吐息をついた。

「よかった……」

ナナはサラリと髪をかき上げた。

「ずっと、聞きたくて……聞けなかったから……」

はにかんだようにそう告白したナナの気持ちを、カカシは知った。

望まぬチカラ……。

転生……。

その前世の女……。

もう一人の自分……。

聞きたくて聞けなかったという理由は、その四つの言葉でわかってしまう簡単なことだった。

だがナナは今、自らチカラを望んだ。

和泉成葉の生まれ変わりとして産み出されたことを、完全に受け入れた。

己の存在理由を認め、それを超越してみせた。

その苦しみは尋常じゃなかったに違いない。

葛藤も、絶望も、虚無も……たつた十数年の間にどれほど向き合わされてきたか……想像できるものじゃなかった。

それをただ、彼女の「強さ」という言葉で片付けてしまうには、あまりに無作法だった。

「ナナ……」

カカシは手を伸ばし、再び短く切られたばかりのナナの髪に触れた。

成葉と良く似た、硬い漆黒の髪……。

「お前がちゃんと返って来るって……信じるよ」

あの人のチカラを越えて……。

「うん。大丈夫だから」

ナナだけの強さで……。

もう悪夢は……みたくないから……。

カカシは心からそう願ひ、ナナと別れた。

海松色 — みるいろ —

月に照らされた慰霊碑に、故人たちの名がいくつも浮かび上がっていた。
いくつも、いくつも……。

ここに、刻まれたばかりの名があった。

今日、見送った……、猿飛アスマの名が。

葬儀は厳かだった。

泣きじやくるアスマの甥の木ノ葉丸の姿にも、涙を堪え毅然とした態度で墓石に花を手向ける紅の姿にも、胸が痛んだ。

近い人を亡くしたことはなかった。

赤ん坊の頃に、自らの手で親族を殺したことはあっても……。

だから、彼らの悲しみを押し量ることはできなかった。

もし、カカシが……、ナルトが……、任務で命を落としたり。目の前で敵に殺されたら……。

この卑小な心はどうなってしまうのか。

わかるはずもないのだ。

いくら想像しても、目の前で家族を殺されたサスケの心はわからなかった。ずっと、彼がどんなに苦しんでいるか理解したかったのに。

結局、わかつてあげられなかった。寄り添うことができなかった。

だから……、葬儀に現れなかった。彼”の想いも、わかるはずがない。

夜風を吸い込み、深くため息をついた。

と、嗅ぎ慣れないタバコの匂いがかすかに漂ってきた。

「シカマル……？」

振り向くと、夜気の中に、彼”が現れた。

葬儀には出なかったのに、まだ喪服を着ている。

「よお……」

いつものようにのんびりとした様子で歩み寄る彼の目を見た。

どこかうつろで、危うかった。

「眠れねえのか？」

彼から漂うタバコの香りを吸い込み、素直に答えた。

「うん」

「オレもだ」

彼も素直だった。

二人、並んで慰霊碑を見つめる。

「墓と違って、こっちはひっそりとしてるよな」

「そうだね」

彼の言う通り、墓地と違ってこちらで式事はない。

葬儀の後、人知れず名が彫られるだけだ。

だがナナは、こちらのほうが「彼ら」に近いと感じていた。

理由は無い。ただ「彼ら」を強く感じるのだ。

だから今も、ここにいます。

「静かだな」

「うん」

しばしの沈黙。

ナナから彼に言えることなどなかった。

沈黙の中、一瞬だけこう思った。

アスマと話を……。

そういう術も心得てはいるのだ。

が……、やはり、^{コトワリ}理に反することはしたくなかった。

そんな自分がおこがましかった。

それに、彼らが喜ぶとも思えなかった。

「ナナ……」

不意に名を呼ばれ、ドキリとする。

「オレは……」

シカマルは気だるそうに、ポケットに入れていた手を出した。

その手には、小さな銀色の塊が握られていた。

「オレはもう逃げねえ」

それを見つめながら、彼は言った。

「前みたいに逃げねえ」

「シカマル……」

「オレはお前が死にかけた時……、忍を辞めて全部から逃げようとした」

「私……?」

それは初めて聞く想いだった。

「だが……、親父にどやされて、大事なもんを見失わずにすんだ。それに……」

うつろな彼の目がこちらを向いた。

「それに、お前は逃げなかった。逃げたくても、また……、ちゃんと向き合った」

その視線があまりにまっすぐで、言い訳も反論もできなかった。

「アスマからも……生き方を教わっちゃまったしな」

そう言うのと、シカマルはひとつため息をついて、銀の蓋を開けた。

かすかに響く金属音は、ナナの心を震わせた。

「この戦いはまだ終わっちゃいねえ。アスマの死が『結果』だなんて思っちゃいねえ」

彼の声も、低く、震えていた。

「オレは……、きつちりケジメつけて来る……！」

言うと同時に火がついた。

炎は力強く燃えていた。

「シカマル……」

見上げると、彼はこちらを見ていた。

その目には、強い炎が灯っていた。

「帰って来て……、ぜったい……」

無意味な言葉とわかっている。

が、言わなければならなかった。

「ちゃんと帰って来て……、いのちゃんとチョウジと一緒に、アスマ先生のお墓に報告して……」

「ああ、わかつてる」

まだ、墓参りには行けてないであろう彼に。

「私も……、ちゃんと帰ってアナタに報告するから」

手向けの言葉ではなく、約束の言葉を。

「ナナ、お前……、まさか……」

察しの良い彼に。

「明日」

「明日……？」

「明日、私も戦う」

「戦うって……」

決意と約束を。

「姉を倒しに行つて来る」

キン……という高い音とともに、火が消えた。

月明かりがかろうじて照らすのは、困惑したような気難しい顔だ。

「私たち……、必ず『勝つて』、また話そう。この里で……」

が、彼は口を引き結び、うなずいた。

「この里で……」

「うん」

決意を確かめるように、互いに笑んだ。

作り笑いなんかじゃなかった。

もつと頼りなくて、歪んでいた。

が、ここに眠る御霊たちが、見守ってくれている気がした……。

翌朝、不安と諦めの混じった顔の綱手を、執務室の前で迎えた。

「ナナ？」

「おはようございませす、火影様。シカマルたちは出発しましたか？」

「お前……、知ってたのか？」

綱手は少し驚いた顔をしたが、何かを悟ったように視線を細めた。

「ナナ、お前の気持ちはわかってる。が、後援部隊には入れられない……」

「はい、わかっています」

「カカシが隊長として同行している。それに……、ナルトの出来次第で奴らを向かわせるつもりだ。だから……心配するな」

「心配ですけど……、きつと大丈夫です」

きつぱりと『除外』を言いわたしつつも、気遣ってくれていることは承知している。

だからナナは背筋を伸ばして言った。

「私には……、やらなければならぬことがありますから」

できるだけ、些末なことのように。

「ナナ、それは……」

「これから行つてきます。姉を倒しに」

「これから……?」

すでに許可は得ていた。

木ノ葉の忍としての任務からは除外されているが、姉との再戦はあくまで“私怨”だ。

御意見番たちも口を挟む理由はなかった。

得体の知れないモノが狙うのはナナだけなのだから、木ノ葉は関係ない。

だからその戦いを止める理由はないのだ。

それに……、あわよくばナナの敗北をも望んでいるのかもしれない。

「ナナ……」

だが、身を案じてくれている人もいる。

「大丈夫です!」

その人に、ナナはきつぱりと言う。

「私はもう、負けせんから」

「確証があるんだな？」

「はい。必ず勝ちます」

心から言っているのだから、強がりと思われたいはずだ。

「本当に、増援はいらないのか？」

「これは個人的な戦いなので、増援はいりません。それに、陰陽術での戦いになりますし

……」

「そうか……、そうだったな」

それでも、綱手が火影の立場からだけじゃなく、「仲間」として心配してくれている

ことには心から感謝した。

「カカシ先生と、シカマルと、約束しましたから」

だから、「約束」を明かす。

「ナルトとサクラちゃんには……、帰ってからちゃんと全部話します。他のみんなにも」

探るような目に見つめられる。

だが、「約束」の想いをしっかりと胸に抱き、その視線を受け止める。

「わかった」

綱手は言った。

「私もお前を信じよう」

もう一度、感謝の念を込めて頭を下げた。

「行つてきます」

そしてできるだけ軽やかに、火影の前を辞した。

半色 — はしたいろ —

「久しぶりね、サスケ君」

新たな隠れ家に着いて早々、サスケの部屋に気配無く現れた者があった。

気配無く……そう、“彼女”には気配などあるはずもない。

「何の用だ、琴葉……」

蠟燭が一本ともされただけの、薄暗い地下室。

そこに、琴葉はぼんやりとした光を纏って立っていた。

「ナルト君たちに会ったそうじゃない？」

楽しそうに口の端を上げる琴葉は、不気味な美しさを持っていた。

「菜々葉……『ナナ』は居なかつたみたいだけど」

「わざわざそんなことを言いに来たのか？」

舌打ちを控えて睨みあげると、琴葉はクスリと笑って言った。

「あのコが生きているのを知って安心した？」

「……………」

もともと、ナナを殺そうとしたのは……殺しかけたのはこの女の女。
生き伸びたか死んだか確かめもせず、その結果も『ゲームの一環』だと言ったのもこの女。

「良かったな。ゲームとやらが続行できて」

サスケも口の端を上げた。

「フフ……そうね。とても嬉しいわ」

琴葉は足音も無く、サスケの座るベッドに並んで腰を下ろした。

「あのコには……もつともつと、楽しませてもらわないと」

どす黒い言葉。

思わずサスケは横顔を睨みつける。

「あら、怖い顔。もうあのコのこととは関係なかったんじゃないの？」

「……ああ、関係ない……」

「額当ても……捨てちゃったんだものね」

サスケの反応を、面白そうに試す琴葉。

それに付き合う義理は無い。

「お前がアイツに何をしようが、オレには関係ない」

だからそう言い放つ。

嘘じゃない。本当に関係なかった。

もう……切り捨てたのだから。

「……じゃあ……もう一度あのコと遊んで来るわ」

しかし琴葉は、今までの皮肉めいた態度を突然引つ込めた。

「呼んでいるの、あのコが……」

薄ら笑いは影を潜め、琴葉は恐ろしく無表情で呟いた。

「もつと、もつと、もつと……ちゃんと苦しんでもらわなくちゃ。私を呼びつけるなんて

高慢なああのコの鼻をへし折ってあげなくちゃならない」

サスケに言うのでもなく……独り言のように琴葉は言った。

「憎いのよ……あのコが……。憎くてたまらないのよ……」

そして、初めての……言葉を。

「誰より哀れな存在のクセに……、チカラも……『イタチ』も持っていたあのコが……
！」

サスケさえも呑み込まれそうな憎しみの深さ……。

深すぎて覗けなかった。今まで見えなかった。存在に気づけなかった。

琴葉はそれを今、全てさらけ出す。

「お、お前……………」

冷えた汗が額を伝った。

霊気すら出して、琴葉は影をさらしている。

「菜々葉はもつと……………堕ちるべきよ……………」

呪いの言葉は、呟いただけでチカラを持つているようだった。

改めて、この女が「生」を捨てた存在だということを思い出す。

「アイツを自分より哀れな存在にすること……………それがお前の『目的』か……………」

努めて冷静に言っていると、琴葉はゆつくりと彼を向いた。

黒い炎が揺らめく瞳。

「……………お前こそ、哀れな女だな……………」

「ええ、そうよ。私は自分が崇高な存在だなんて思っていないわ」

「アイツの「チカラ」にも「イタチとの繋がり」にも……………ただ嫉妬しているだけだろ……………」

「ええ……………そうね。……………結局、私はただの「嫉妬」に捕らわれているだけ……………」

一番哀れなのは……………。

「わかってる。私は醜いわ……………。命を捨ててまでもチカラを欲し、妹を苦しめたかった。

その動機がただの「嫉妬」だなんて。本当に哀れで醜くて無様よね」

琴葉は小さく嘲り笑った。

それが皮肉にも、彼が見た中で始めての高貴な笑み。

「だから……せめてもう一度、楽しんで来るわ……。そこへ堕ちてまで果たしたかった
目的を……ね」

ひんやりとした空気を残し、琴葉は立ち上がった。

「……お前じゃ……。ナナは堕とせない……」

低い声で言った後、サスケは奥歯をかみ締めた。

何故か……。

「あら、心配してくれるの？ それとも、まだあのコを信じているのかしら？」

振り返った琴葉はもういつもの嫌味で傲慢な笑みに戻っていた。

「じゃあ、私が目的を達成した証として、『ナナ』の死体を持って来るわね。今度こそ、
額当てなんかじゃなくて、ちゃんと本体を持ってきてあげる。ぐちゃぐちゃに壊れ
ちやつてるかもしれないけど。でももう『関係』ないからいいのよね？ どんな姿でも
むしろ醜い姿を見た方が、あなたの気が晴れるかもしれないわよ？」

琴葉はかすかに興奮してまくしたてるように言うと、笑いながらドアをすり抜けて消
えた。

紺瑠璃 — るりこん —

物心ついた頃から、周りの空気が奇妙なバランスであることに気づいていた。

和泉一族本家の長子として産まれ、その血族の神秘性と崇高さを叩き込まれ、誇りと気品を身につけた和泉琴葉……。

その地位に見合う高尚な術を身につけるべく、言葉を話さか話さないかの時分より、厳しい修行を当然のように課せられてきた。

厳しい父。優しい母。

本家を崇拜する分家の者たち。

そんな環境の中で生きていた。

その、周囲のバランス。

微妙な均衡は、幼い琴葉の心にひんやりとしたカタマリを抱かせた。

その原因が「何」であるかわかったのは、父との修行の時だった。

何ということはない、式神を扱う陰陽術の基本をおさらいしているとき。

父に、灰色に濁った瞳を向けられた。

あれは「幻滅」の色。

見守っていた分家の大人たちは、父と同じ色を瞳に浮かべながらも、次期当主である琴葉に齒の浮くセリフを浴びせかけた。

琴葉のチカラに対する父の「見限り」と、それでも本家というだけで敬わなくてはならない分家の大人たちの心境。

そして、そんな出来損ないを長子に産んだという、母の「負い目」。
心を塞ぐのは簡単だった。

塞いでしまえば、周りが見渡しやすかった。

色の無い世界で生きながら、琴葉は冷たいカタマリを静かに抱いていた。

ある冬の朝。

まだ暗いうちに、本家の屋敷で産声が上がった。

琴葉は縁側に座り、慌しく動く大人たちを横目で見ていた。

凍てつくような風が吹いていた。

乳母が羽織を持って来たが、琴葉はそれを着なかった。

寒さなど感じなかった。

つい今しがた、『姉』という立場になったという事実にも、何も感じ得なかった。

ただただ、また複雑に揺れだした周りのバランスを傍観していた。

「産まれたか……」

「は、はい……おめでとうございます当主様……」

「……………」

気配も無く、背後を父親が通り過ぎた。

乳母の祝福に不機嫌そうな……いや、憎々しげなため息だけ返して。

琴葉はその後姿を見送った。

父にとって、二人目の娘となる者。

その存在に対する父の感情は、不思議と幼心にも良くわかった。

なぜなら……。

1年前に、木ノ葉の里に現れた妖魔、『九尾の狐』。

その凶事を鎮めることができなかつたのは、この里の『落ち度』であった。

和泉の口伝の大術を扱ってそれを収めたのは、和泉の人間ではなく……、その血を一滴も持たぬ木ノ葉の忍者だった。

秘境に身を置き、その存在を神秘に変えてまで崇高なチカラを示そうとしてきた和泉。

それが、いざというときに何の役にも立たないということ、和泉の存在を知る者た

ち全てに露呈した結果となった。

未知ゆえに神秘、……ゆえに崇拜する。

その価値が地べたに堕ちた瞬間だった。

その和泉の崇高な歴史に泥を塗る結果となった現当主が、負い目を補おうとして木ノ葉に提案したのが、次なる“保険”だった。

つまり、封印された九尾が再び暴走したとき、それを再び抑えつける力を持つ者を送り込む……ということだった。

今度こそ、和泉が力を発揮してみせると……。

哀れ……。

琴葉の、まだ小さな胸の中にあつた冷たいカタマリがうすら笑った。

あいにく、当主にも自分自身にも、そんな才覚は無かった。

本来ならば誰よりもそれを持っているべき者たちのはずなのに。

その禁句は一族中が知っていた。

が、自分たち親子がそれを一番わかっていた。

だから、その役目を果たす者が居ないという現実に当主がとつた方法は……それを無理矢理に“作り出す”ということ。

哀れな愚者が体裁のために産み出したのは、哀れな『娘』という存在。

哀れ……。

琴葉は冷たい朝の風にそれを呟いた。

「琴葉様、妹君に会われなさいませ……」

乳母が遠慮がちに声をかけた。

琴葉はゆつくりと立ち上がる。

いつのまにか、赤子の声は止んでいた。

「さあ……」ちらですよ……」

なかば強引に押し込められた部屋には、怯えた顔で横たわる母と、すやすやと眠るサルのような赤子。

そしてそれを囲む分家の女たち。

父の姿はすでに無かった。

「おめでとうございます」

「かわいらしい妹君ですよ……」

女たちは遠巻きに、どこか強張った声で祝福のセリフを並べる。

琴葉は赤子の側に座らされた。

母は彼女を見ようとしなかった。

たった今、新しい命を産んだとは思えない表情で、赤子とは反対の壁を向いていた。

「母上、おめでとうございます」

案の定、母は答えなかった。

哀れ……。

琴葉は再び思った。

このヒトは、夫たちの「術」によって無理矢理に宿された命を『尊い』と思えるほど、
気の大きな女ではなかった。

それに……産んだのは夫が想いを寄せていた女の生まれ変わりである……。

哀れな女。

そう思っただけで、そう感じはしなかった。

琴葉は母から視線を逸らし、まだシワシワの顔で眠る赤子を見た。

『妹』という存在。

父が手に入れられなかった女の生まれ変わり。

母の憎悪の対象の再来。

いずれ木ノ葉に送られ、九尾を封じるための道具となる者。

なんて哀れな子……。

琴葉は心からそう感じた。

その時、障子の向こうで悲鳴が上がった。

和泉の里に久しくなかつた種類の声に、一同は反応すらできなかつた。

母は真つ青な顔で身体を強張らせ、周囲の女たちもその場で凍りついたまま。

琴葉はゆつくり立ち上がり、止める乳母を振り払って障子を開けた。

腰を抜かした下女たちが、縁から何かを見下ろしていた。

椿の花が風に揺れるその庭に……全ての視線を集めてたたずんでいたのは……。

真白い狐だった。

「ふ……不吉なっ……!!」

引きつった声を喉から吐き出した侍女に構わず、狐は尾を雪に打ち付けた。

はなり……下ろされた尾は、三股に分かれていた。

琴葉は黙つて、その不吉だか神聖だかわからぬ生き物……いや、生き物かどうかすら

わからぬそれを見下ろしていた。

透けて見えるかというほどに白く長い毛。

朝日に照りかえる様は、確かに美しくも恐ろしかった。

そしてその瞳は、生き物が持つに許されるところと思えないような深い瑠璃色だった。

狐はかすかに鼻を鳴らし、再び尾を揺らして琴葉を見上げた。

「三尾の白狐に憑かれるとは……!」

いつの間にか、背後に父親が居た。

琴葉が初めて聞く、彼の驚愕の声色だった。

「なんと不吉な娘か……!」

その驚愕の対象は目の前の狐でなく、この世に生を受けたばかりの娘に向いていた。白い狐は三つの尾をもう一度緩やかに雪の上のうちつけ、瑠璃色の瞳で琴葉と父を見比べた。

そして、雪景色に溶けるように走り去って行った。

琴葉が室内を振り返ると、赤ん坊はまだすやすやと眠っていた。

『菜々葉』と名づけられた妹は、周囲の奇妙なバランスの中でも己を崩すことなく育つていった。

明るい表情、明るい声。

和泉の里にあって稀であるというその姿は、父の許婚だった女に良く似ている……と、侍女たちがコソコソ話しているのを琴葉は聞いた。

そればかりか、その和泉陰陽術の才能もそっくり転生していると。

幼少の頃から『天才』と囁かれてきたその女、和泉成葉は分家の娘だった。

次期当主であった父を遥かに凌ぐ才能と器量で、当主の妻になることは一族の暗黙の

了解だった。

父も、当主になった暁には同年代の天才少女を妻にするのだと、ひとつも疑わないで少年期を過ごしたという。

が、成葉は木ノ葉へ去った。

父を捨て、この一族を捨てて。

そして九尾が現れると、禁術を木ノ葉の忍なんぞに託してさっさと死んでしまった……。

父の憎悪と、後釜に押し込められた母の憎悪。

琴葉は幼い頃からそれらを見てきた。

その対象である者の生き写しが今、目の前に居て笑っている。

一族の誰より強いチカラを持ち、誰より無邪気で、誰より美しく。

そして誰より哀れ。

灰色の瞳でその世界を眺める琴葉にも、無垢の笑みを投げってくる。

……哀れなコ……

誰にも愛されず、誰からも恐れられ、母に気味悪がられ、父に憎まれて。

だが、ある日……。

外界から閉ざされた和泉の里に、客人が招かれた。

父の憎む木ノ葉の里からやって来た客人は、『うちは』の姓を名乗っていた。

「……………うんざりだ……………」

菜々葉の許婚にされたうちはの男は、隣でそう呟いた。

「血も、名も、力も……………」

彼の視線の先には、苦しそうに熱い息を吐く菜々葉が眠っていた。

その日、菜々葉は『毒受け』の日だった。

毒で簡単に命を落とさぬよう、身体に免疫をつくるため、わざと毒を飲む修行である。

三月に一度の習慣だったが、今回は薬師が調合を誤り、幼い菜々葉は熱を出して寝込んでいた。

うちはの男……………イタチは心配そうな顔を隠しもせず、菜々葉を見つめていた。

この男が、父にも知られぬ方法でときどき菜々葉に会いに来ていたのは知っていた。

外界から決して入り込めぬよう、強力な陰陽結界術をめぐらされたこの地であつて、菜々葉がどうやってそれを成し得たかは知らないが……………。

一族の者たちに見つかれば、どんなことになるかわからぬ二人ではないだろうに、二人は菜々葉の修業の地であるこの滝の上で会っていた。

“客人”としてこの里に来たその日から、幼い妹とイタチの間に心の交流が芽生えたことも知っていた。

許婚……親の野望に冷めきった感情を持つていることも。

「同じですね」

琴葉は息を吐くのと同じ労力で、そう呟いた。

イタチがコチラを向いたのがわかった。

「くだらない粹だ……」

そしてそう言った。

退廃的なセリフ。

きつと、幼い菜々葉には吐かないはずのセリフ。

「ええ……」

琴葉は彼に同意した。

少ないイタチの言葉の中に、彼が何を言わんとしているのかわかっていた。

「……親しき友も、昨夜、死んだ……」

簡単には払拭できぬ濃い影が、イタチを覆っているのもわかっていた。

それが……自分がずっと纏っていたものと限りなく近い濃度ということも。

「ただ……、眼が痛いだけだ……」

掠れた声……。

「それを、このコに言いに来たのですか……」

呟いても、イタチはもう答えなかった。
答える気力も影に吞まれたかのように。

ただ琴葉の取り替える手ぬぐいを、じっとみつめていた。

彼の菜々葉に対する感情を、琴葉は何と呼ぶか知らなかった。

絆……想い……。

その単語すら知らなかったから。

だが……それが何であるにせよ、菜々葉が得たものに違いなかった。

哀れな妹が……得たもの……。

イタチが帰った翌朝……、琴葉はようやく気づいた。

哀れな妹にも得たものがある。

それはたとえ望まなかったにしろ、自分には到底持ち得ぬ“チカラ”。

そして……イタチという存在。

それに比べ、自分は……。

「そう……ね……」

朝靄に呟いた。

「私には……何も無い……」

哀れな妹にすら劣る自分に気がついたのだ。

あるとすれば……時期当主としての地位？

だがそれも、チカラが無ければ水物にすぎず……。

未来……それすら無いに等しい。

だったら……。

「……チカラが……ほしい……」

灰色だった琴葉の世界が、何にも犯されぬ「黒」に染まった瞬間だった。

それからすぐのことだった。

当主から一族に、『うちは』との婚姻決裂が告げられた。

その理由は……うちは一族滅亡という信じがたいもの。

しかも、婚姻の当該者であつたうちはイタチがそれを成したのだという。

その日から……、妹から無邪気な子供らしさが掻き消えた。

危うい無防備さを剥ぎ取られた妹は、予定通り、十一になる歳に木ノ葉に送られた。

『九尾封印』の宿命を背負わされて和泉の里を出る菜々葉……。

それでも琴葉の瞳には、その小さな背に白い羽根が見えていた。

この、すさんだ世界から飛び立てる妹。

チカラがあるから……。

別れの日、菜々葉は琴葉の部屋に立ち寄った。

「姉上……お別れのご挨拶に参りました」

畳に手をつく様は、幼くても気品があつた。

まぎれもなく、和泉本家の娘……。

そしてそれが、唯一二人の共通点。

「……ご自分の務めを果たされますよう……」

「……はい。姉上も、どうぞお元気で……」

今生の別れのように、言葉を交わした。

実際、菜々葉にここへ戻つて来る気がないのは知っていた。

一族の間も、それを望んではいなかった。

だから、

「……さようなら、菜々葉……」

琴葉も、二度とこの妹に会うことはないのだらうと思ひ、最後の言葉を贈つた。

「さようなら、姉上」

菜々葉もそれに答えた。

が、言い終えた瞬間に見せた、久方ぶりのその笑顔。

「姉上……今日までお世話になりました……」

その言葉があまりに……清々しく、美しく……。

逆に黒く淀んだ琴葉の心を照らし出した。

菜々葉にとつて、それは唯一自分の面倒をみてくれていた者へ対する最後の敬意だったのだろう。

昔のような無邪気な笑みは、穢れなき妹の心を現していた。

それを琴葉もわかつていた。

どれだけ周囲に疎まれ、恐れられ、虐げられようとも、失わない凜とした心。

一番近くで見えてきたつもりだ。

自分にはないその“強さ”を見てきたつもりだった。

だが……それは今、琴葉にとつて嘲りの笑みだった。

宿命を背負いつつ、チカラと自由を手にした者への……湧き上がる嫉妬。

自分ももてなかつた強さのまま、キレイに笑える妹への、深い……憎しみ……。

「……それでは……」

もう、部屋を出る妹にかける言葉はみつからなかった。

生まれて初めて湧き上がる、激しい『感情』というものに支配されていた。

皮肉にも、それで自分にも血というものが流れていることを初めて感じることがで

きた。

琴葉は熱を冷まそうと、障子を開いた。

庭に、春の風が舞い込んだ。

この心と間逆の、まるであの妹のような、清々しい緩風……。

「……………!?!」

ふと、整然と整えられた植え込みに、白銀の光が蠢いた。

若葉の影からこちらをじつと見ていたそれは……、あの白い狐だった。

「お前は……………」

琴葉の心を見透かすような、深い深い、瑠璃紺の瞳。

それはしつかりと、琴葉の双眸を捕らえた。

そして、琴葉の心を凍りつかせたまま、たおやかに三つの尾を振って、何処へともな

く消えて行った。

秘色 — ひそく —

赤舌日……陰陽道において、凶日とされるその日に、琴葉は死んだ。
しゃくぜつにち

本家に伝わる短刀を、喉に一刺し……。

迷いなどなかった。

“和泉の血”とともに溢れ出すのは、開放感。

初めて知った『喜び』という感情を得て、琴葉はこの世から去った。

7日後。

再びこの世に戻った琴葉は、肉体のない魂だけの存在だった。

そういう存在になり、初めにしたことは、時空を越えて“過去”を見ること。

遠い過去でなく、最近の11年間を……

そう……知りたいのは、妹『菜々葉』のことだった。

菜々葉が産まれてから、自分の知らないところで何をしてきたか。何を思ってきたか

……それが知りたかった。

そして、菜々葉が“何”を得て、“何”を望んでいるのかも。なぜなら、それらを全て壊したかった。

それしか“楽しい”ことを知らなかったから。

“木ノ葉のナナ”は想像していたよりもずっと、幸せそうに笑っていた。九尾の子供と友達ごっこを楽しみ、仲間の柀にはまったような顔をする。

師という存在を得たふりをして、忍の皮をかぶっていく……。

そしてなにより……サスケの隣で、嘘で固めた己をさらす。

琴葉はそれらを見て、知って、笑った。

矛盾に満ちた菜々葉の生が、面白かった。

菜々葉が苦しんでいるのも知っていた。

が、それも面白かった。

“哀れなコ”は羽を得て飛び去ったにもかかわらず、新たな地でも影を引きずっていた。

小さな身体に耐え得るはずもない、黒く重い影。

飲み込まれないのが不思議だった。

が、琴葉は菜々葉の影がどんどん濃くなっているのを知った。

何故なら、いくら嘘を纏っていても、菜々葉は孤独ではなかったからだ。

九尾のコ……サスケ……そしてイタチ。

菜々葉は寸でのところで、彼らに救われていた。

彼らの存在こそが、菜々葉の闇そのものだというのに……。

だから琴葉は菜々葉を壊すことに挑んだ。

“楽しむ”ため……に。

決して崩れない菜々葉の強さが憎しみの対象なら、それを壊すことが琴葉の楽しみだった。

そしてついに果たした再会の時、気が済むまで痛めつけた。

実際、琴葉の力も限界だった。

死してまで手にした力に、菜々葉が敵うことは癪だった。

それでも最後は、菜々葉の瞳に絶望の色が浮かんだ。

とうとう影に吞まれる、哀れで強い妹……。

琴葉は初めて、心から笑えた気がした。

あれから、大蛇丸のアジトでナルトと別れたサスケに会った。

イタチに良く似た弟。

彼に“菜々葉”のことを告げ、ポロポロの額当てを手渡し、最初の宴は終わりを告げ

た。

限界を超えた琴葉は菜々葉の生死を知らぬまま、陰の世界に籠もった。

再び現世に現れる力を得たのは、半年も経ってからのことだった。

改めて菜々葉の力を思い知り、苛立った。

それから初めに確かめたことは、菜々葉が生きているのかどうかではなく、サスケが額当てをどうしたか……だった。

サスケの手元に、“菜々葉”の額当てはなかった。

大蛇丸の元でどんどん強くなっていくサスケを見ているのは、ある意味爽快だった。

まるで、菜々葉を痛めつけているときのような楽しさ……。

それは多分、強くなるほど憎悪を濃くするサスケが、己自信に似ていたから。

決して影に生まれなかった菜々葉と違い、自ら影に染まっっていく。

原動力は、憎悪と嫉妬。そして復讐の心。

似ている……というより『同じ』だと思った。

イタチと菜々葉が持つていて、サスケと琴葉にはチカラが無かった。

イタチと菜々葉は絆で結ばれていたが、サスケと琴葉は孤独だった。

だから、サスケを見ているのは楽しかった。

やがて……。

気まぐれに吹いたつむじ風の中に、*“菜々葉の生”*を感じた。

今まで和泉の里にでも隠れていたのだろう。決して感じ取れなかったその *“魂”*を
ようやくみつけた。

そしてそれは、同じく琴葉を見つけて、激しく呼びたてた。

必然の再会……。

赤舌日を待って、琴葉は川辺に向かった。

3年前、菜々葉につけた傷と、菜々葉の流した血の匂いが、まだ濃く残る川辺に。
最後に、サスケにだけ心を打ち明けて。

終末の谷から程なく近い川辺で、琴葉は笑った。

あの時と少しも変わらない、澄んだ瑠璃の瞳。

それがたつた今、琴葉の前に現れた。

そしてまた同じように、何の意味を持つのかわからない視線をよこす。

「お前の主人は、ちゃんと生きていてくれたようね」

薄く笑うと、瑠璃の眼の持ち主は、3つの尾を振った。

「私は『ホクト』の主人じゃない……」

同時に、聞こえてきた声。

「お久しぶりです、姉上」

草間から現れたのは、冷たい目をした妹だった。

「ちゃんと、生きていてくれて嬉しいわ、菜々葉」

「姉上もお元気そうで」

ホクトの周りで、皮肉めいた姉妹の会話が成される。

「あの時……この狐が、木ノ葉の忍にあなたのことを知らせたの？」

菜々葉は答えなかった。

ただホクトを見下ろし、ホクトも菜々葉を見上げた。

それだけで、会話をしているようだった。

この不思議な三尾の白狐が、「何」であるか、琴葉は知る由もなかった。

菜々葉を護っているのか、それとも菜々葉に憑いているのか……。

不吉な存在なのか、神の化身なのか……。

「ホクトは私の分身」

菜々葉は琴葉に答えを与えるように呟いた。

「敵でも味方でもなく、私自身のような存在……」

白い狐はそれを解したように、ゆっくりと琴葉を向く。

「あなたの分身？ ……なるほどね……」

瑠璃の双眸を見返して、琴葉はうなずく。

菜々葉という存在の『分身』と聞いて、急に狐の視線の意味が解せた気がした。

菜々葉の誕生と共に現れ、庭から琴葉を見つめた意味。

菜々葉が去った日に現れ、庭から琴葉を見つめた意味。

そのホクトが、菜々葉の分身だったのだとしたら……。

「……哀れな」……」

琴葉は狐につぶやいた。

その時、ホクトは初めて小さく鳴いた。

澄んだ声は、美しくも禍々しかった。

どちらとも決し難いその声は、善とも悪とも知れない菜々葉の力そのものだった。

「……姉上……」

菜々葉は、一歩前に出て言った。

「アナタの言うこのゲーム……もうアナタに勝ち目はない……」

琴葉は苛立ちもせず、菜々葉を見た。

菜々葉の漆黒の瞳は、静かに琴葉を見つめていた。

「……私は……アナタを倒します……」

言われた瞬間、琴葉は口の端を上げた。

「ずいぶん自信があるのね……和泉の里で、そんなにいい修行ができたの？」

呪われた故郷へ舞い戻った哀れさを皮肉つても、菜々葉の表情は変わらない。

「父上や母上はお元気だった？」

案の定、これにも菜々葉は答えない。

そして次の言葉をぶつけても、菜々葉の瞳は少しも揺れ動きはしなかった。

「私……さつきまで大蛇丸のアジトで、サスケ君と一緒にいたのよ」

滑らかな肌に傷を入れる瞬間の興奮……。

しかし、前回のようなそれは、琴葉の中に湧き上がらなかった。

あの時はたしかに、“その名”は菜々葉にとって凶器だったはず。

菜々葉が初めて絶望と恐怖に慄いたのは、その凶器が菜々葉の心に突き刺さったからだ
だった。

それなのに、今の菜々葉は少しも表情を変えなかった。

だが、失望することはなかった。

「サスケ君は……まだ菜々葉のこと、好きみたいよ？」

そう告げた瞬間に、別の種の興奮が沸いた。

菜々葉が浮かべた、“笑み”を見て……。

「姉上。残念だけど……アナタはもう、ゲームを『楽しむ』こともできない……」
菜々葉は確かに笑っていた。

その瞬間、この手で菜々葉に傷を負わせることはもうできないのだと、琴葉は知った。だから本来なら、琴葉の中には「失望」が沸いて出るはずだった。

が、沸いたのは別の興奮……そう……。

「姉上があの時みたいに、『私の矛盾』を責めても、私はもう傷つかない」

菜々葉の漆黒の双眸はどす黒い影に侵され……、

「『私が我愛羅を救えなかったこと』を責めても、『私がまたイタチに救われたこと』を罵っても……残念だけど私は平気」

清らかさなどカケラもなく……。

「私は知ったの……姉上に教えてもらった……」

その笑みは影を背負って冷たかったから。

「私はもともと……傷つけられるほどキレイな存在じゃなかった」

ついに……。

ついに菜々葉を汚した……。

ついに菜々葉は影に吞まれた……。

ついに菜々葉は闇に堕ちたのだ……。

沸いたのは、そんな喜び。

「……哀れね……」

もう一度、琴葉は菜々葉に向かって呟いた。

九尾のチカラを封印すべく、産みだされた妹。

あの日……、その存在意義をむしり取ってやった。

この手で、菜々葉をめちやくちやに傷つけた。

菜々葉の心の、ありとあらゆる場所を抉ってやった。

爽快な残酷の下で、菜々葉は確かに恐怖に震えた。絶望に慄いていた。

ゲームの続きがはたしてあるのかどうか……。正直、半信半疑で文字通り楽しみに結

果を待った。

だが、菜々葉はゲームの“続行”を許した。

あれ程の傷を無理矢理塞ぎ、絶望の淵から引き返して来た。

壊す寸前まで追い込んだという感触はあったのに……。

が、琴葉はその事実には驚愕も失望もしなかった。

いつかこうなることを知っていた。

あの日も……。

それだけのチカラが欲しくて、短刀を己の喉に突き刺したあの日も……。

いや、もつと、ずっと以前から……。

菜々葉が生まれて、白い狐が現れたあの日から……こうなることはわかっていた。何を犠牲にしてチカラを得ても、菜々葉には敵わない。

たとえ、死して禁忌のチカラを手にしても。怨^オ睨^ニになり果てても。

菜々葉はいつか自分を“消し去る”だろう。きれいさっぱり。

わかっていた。

そして、菜々葉はどんなに傷つけられても、決して壊れない……。

壊れることすらできない。

そんな、哀れなコ……。

それも全てわかっていた。

だが今、菜々葉は影に呑まれたのだと確信した。

背負った影と共存し、立ち直ったかのように見せても……“姉としての繋がり”が皮肉にもそれを見抜いていた。

菜々葉は……、菜々葉は影を見つめることをやめた。

影に打ち勝つことを諦めた。

それを背負って生きることを放棄したのだ……。

『サスケの想い』と、『サスケへの想い』。

『イタチの想い』と、『イタチへの想い』。

そして、『九尾』と『宿命』……。

護ることもできずに、ただすがって傷つけた砂の忍……。

それらを凶器として振りかざそうとした刹那、菜々葉は笑ったから……。

清らで高貴な笑みなどでなく、黒く残酷な笑みで。

全ての矛盾と罪からとうとう目を背け、醜く笑ったから。

見た瞬間、強かった菜々葉の心が折れたと知った。

美しかった菜々葉の心が、穢れたのだとわかった。

手折ったのは姉である自分。

穢したのは姉である自分。

その目的は叶ったのだ……。

だから、菜々葉が最期の光を放つとき……琴葉は初めて穏やかな心で笑った。

やっと終わる……そんな心境で。

こどわり理に叛いて現世にしがみ付いていた魂が、あっけなく引きちぎられる瞬間……、
琴葉

は妹の瞳を見つめていた。

菜々葉の瞳は……白い狐に向けられたのと、同じイロ。

濃い、深い、瑠璃の色。

菜々葉は美しくも禍々しいそのイロを得て……静かに琴葉の瞳を見返していた。生まれながらに背負った影に、ついに吞まれた菜々葉。

この手で傷つけ、汚した菜々葉。それでも壊れなかつた菜々葉。

最期に見たのは、そんな妹の美しい瑠璃色の瞳だった。

夢の旅路

緑の匂いと緩い風。木々のざわめきと下草のそよぎ。

ナナは懐かしい感覚の中、ゆっくりと目を開いた。

静かな森の中だった。

植生には見覚えがある。其処は確かに、火の国の森だった。

だが、見慣れた種の木にしてはやけに丈が長い気がして、幹に手を添える。

と、自分の手に驚いた。

それは見慣れたサイズではなく、ひとまわり……いや、ふた回りも小さかった。

ナナは首をかしげながら己の姿を見下ろす。

白い袴、藁の草鞋、そして長い髪は後頭部で束ねられ、腰まで垂れていた。

幼き姿……。

(どうして……)

懐かしさと嫌な記憶が胸を過ぎってから、初めて疑問が湧いた。

夢か現うつつか……どちらともわからないまま、幼い頃の姿をしたナナは、太陽の位

置から木ノ葉隠れの里へ向かって歩き出した。

しかしいくらもしないうちに、人の気配を感じて木陰に身を隠す。足音は少なくなかった。

下の山道を通ってゆつくりと近づいて来る。

忍ではないようだが、普通の人間とも違うようだ。

その自身の感覚には、やけに現実味があつた。

やがてそれらはナナが身を隠す場所に差し掛かった。

(……この人たちは……！)

伏せて笹の葉の隙間から山道を見下ろしていたナナは、思わず息を呑む。

一行は皆、淡色の袴を身につけ、似たような顔立ちをした男たち。

そして行列の中央には8体の式神が輿を担いでいた。

(……和泉の……！)

彼らがどここの分家の者たちで、何の目的でここを歩いているのかなど知らなかった。が、姿を目にしただけで穏やかな気分を失わせるのがこの一族だった。

(……木ノ葉へ向かっている……?!)

行列が向かう方角を悟って、さらに胸に湧いたのは嫌悪だった。

その時、

(……止まった……?!)

行列は静かに止まった。

十人あまりの人数にしては、不気味な静けさだった。

気配に気づかれたはずはなかった。

もともと気配を殺すことには長けていたし、姿は幼き頃に戻っても、忍として過ごした記憶はあった。気配を完全に経つ技術は発揮しているはずだった。

が、行列は確かにナナの近くで止まり、輿からは一人の人間が現れた。

「また鬼ですか？ 実葉様……」

「里から木ノ葉まで、一体何匹の鬼を相手すればよいのやら……」

男たちが呆れたように話し始めた。

が、ナナの耳は『実葉』の名だけをはつきりと捉えていた。

(『実葉』……様……?!)

知っている名だった。

もつとも、会ったことはない。

なぜなら、ナナが産まれる前に死んだ人物だったから。

「すまぬお前たち……だが、ほうつてはおけぬだろう」

輿から降りたのは、千草色の袴を穿いた老人だった。

老人……和泉実葉は穏やかな声で、周囲の者たちに笑った。

「邪の鬼などではない……かわいい小鬼だよ」

実葉は杖をつきながら、ゆっくりとした足取りで、しかし迷わずナナの隠れる木の方へと歩いて来る。

彼には自分が見えている。

ナナはゴクリと唾を飲んだ。彼の眼からは逃れられないと悟った。

「案ずるな、わしはお前の敵ではないよ」

好々爺……。

一瞬三代目火影のことを思い出し、ナナは素直に木の陰から出た。

「ほう……これはこれは……鬼の『姫』か」

ナナを見て、実葉は目を細めた。

驚きも疑問も無く、一瞬にしてナナのことを見透かしたようだった。

「あの……」

ナナは口を開こうとした。

が、実葉のシワだらけの手がそれを止める。

「声を出さぬほうが良い……また『時空』を彷徨うはめになるぞ?」

にやりと片目をつぶってみせる様に、ナナはぼかんと口を開けた。

「“声”をあげて己の存在を主張すれば、またお前の周囲に歪みができ、他の時空へと飛ばされることになろう」

難しい内容を、なだめすかすように言う。

実葉はナナの頭に手を置いた。

「元の時代に帰れるとも限らぬからのう……」

一呼吸おき、温かい手のひらの下で、ナナはゆつくりと頷いた。

実葉の言った言葉の意味はわかった。そして、この状況をいつぺんに理解した。

ナナは時空を超えて“過去”に来たのだ。

時空をも超える存在となった琴葉の魂に触れたことで、それが叶ったのだろう。

つまり、これはまぎれもなく“あるはずのない現実”であった。

そう悟っても焦りはなかった。

今は不安定な存在ではあるが、実葉の言うように、時空の歪みに呑み込まれさえしなければよい。

琴葉に施した術によって乱れたナナの周囲の時空が、再び秩序を取り戻せれば、いずれは元の時空に戻ることができるはずだ。

それまで大人しく、まさに言葉を発して己の存在を主張しなければいいだけのこと。

実葉はナナが理解した様子であることに、満足げに微笑んだ。

「そのお姿……、本家の姫様であらせられますな?」

実葉の嫌味のない声音に、ナナは素直に頷いた。

幼い姿になっている理由はナナにもまだわからなかった。

「未来」から飛ばされてこられたのか……?」

ナナは再び頷いた。

淡々と問う実葉の眼尻には、和泉の人間が持ち得ない温かみがあった。

「時空を越すほどの事態ともなれば……相当の大術を扱っておられたのであろう」

今度は首を縦に振らなかった。

今となってみれば、それほど大術とも思えなかった。

「わしは用があつて木ノ葉に向かつておりますが……姫様も来られますかな?」

しかしこの問いかけには、ナナはゴクリと唾を飲んで大きく頷いた。

「実葉様、その子鬼は祓われなのですか?」

「御本家の方のお姿に化けるとは、いたずらが過ぎる子鬼ですな」

実葉に手をひかれて一族の行列に加わると、次々と男たちが群がつて来た。

「しかしこの顔立ち……子鬼というよりは御本家の姫君のような……」

「そういえば、琴葉様によく似ておる……」

「馬鹿を言うな! 琴葉様は御本家の御堂で修行中であらせられるぞ!」

「だいたい本家の姫君の名を軽々しく口にするな!!」

ナナは彼らの言葉に、一瞬顔をしかめた。

が、実葉は彼らを蹴散らすように威勢よく笑う。

「この子鬼は悪さはせぬよ。わしの『式』にして供に連れて行く」

老人から出た思わぬ強い笑い声に、一族の男たちは言葉を治めた。

ナナはそのまま実葉の輿に乗せられる。

「ちと狭いが、我慢してください」

そして彼の膝に乗せられた。

初めての扱いに、ナナは少々戸惑った。

「一族の者たちも、姫様を『鬼』と思つて疑わぬ……姫様が時空を超えた存在であられることに気づくことができる者は、今の和泉にはおらなくなつてしまつた……」

輿は戸が閉められ、外からはこちらが見えなかつた。

ナナは首を回して実葉を見上げる。

「そのおかげで、騒ぎにならずに済みますがのう」

『今』の和泉の無能さを嘆いたかに見えた実葉は、朗らかに笑つた。

「姫様は木ノ葉隠れの里なる地を『存じですか?』」

かすかに頬を高潮させ、ナナは頷いた。

おかれた状況を差し置いて、胸が高鳴った。
そんなナナに、実葉は言った。

「そうでしたか……今あの里は若い四代目火影が治めております」

明け方の夢

一行はやがて木ノ葉隠れの里の門に到着した。

この訪問を人目から隠すかのような新月の夜だった。

門番のチエツクを通過すると、ナナは輿の小窓を開き、よく見知った光景を眺める。

闇夜も見通すその忍目に映るのは、知っているよりも新しい建物だった。

一行は木ノ葉中心部への道を逸れて林道に入る。

『和泉神社』への道だった。

ナナは小窓を閉め、再び実葉の膝におとなしく収まった。

実葉はそこに用があるという。

翌朝、四代目火影との会合があるのだと……。

(四代目火影様……)

火影邸で写真とやらを見たことがある。

己の命と引き換えに、九尾から里を救った英雄。

和泉の秘術で九尾をナルトの腹に封印した男。

彼のチカラが及ばなくなつたときのために……という目的で産み出されたナナにとつて、その感慨は人一倍強かつた。

(会いたい……)

和泉の里を出て、初めて木ノ葉へ来た時のような興奮。
今夜は眠れそうにもなかつた。

やがて、輿は静かに降ろされた。

式神が扉を開けたと同時に、ナナは飛び出る。

早く木ノ葉の空気を吸いたかつた。

そこが木ノ葉の中で、最も木ノ葉らしからぬ場所だつたとしても。

だが……。

「あら、かわいいコ」

境内を見回す間もなく、掛けられたのは若い女の声。

「おじいさま、このコをどうされたんですか？」

振り返ると、拜殿の前に美しい巫女が立っていた。

「なに、途中で拾つた『子鬼』だよ……」

供の男に手を借りて籠を出た実葉は、意味ありげに笑いながら答えた。

そして、

「かわいいだろう？ 成葉なるは」

成葉……。

実葉は確かにそう言った。

ナナは目の前にかがんだその女を凝視した。

「いらつしやい、はるばるようこそ “子鬼” ちゃん」

彼女がやわらかく笑んだことなどどうでも良かった。

彼女が、自分が鬼などではないとひと目でわかっていることも関係なかった。

ただ彼女の名が “成葉” と……そういう名であることがナナの気を振るわせた。

「珍しい拾い物ですね、おじい様」

成葉は実葉に言いながらナナの頭を撫ぜた。

不思議な感じがした。

当然初めて出逢ったのに、ずいぶんとよく知っているような感覚。

まるで母の手に撫ぜられているような感触。

「お疲れ様でございました、実葉様」

ナナは銅像のように直立不動で固まっていたため、供の者たちと話していたもう一人の女の存在にすら気づかなかった。

が、成葉の少し後ろに立った姿が視界に入り、ようやく我に返る。彼女はナナの知っている人間だった。

とつさに実葉の袴の陰に隠れた。

「途中で珍しい子鬼を拾われたとか……それがそうですか？」

冷たい口調は変わらない……。

ナナはこつそりとその女を見上げた。

知っているより少し若い、和泉静葉だった。

「式にするおつもりと伺いましたが……御本家の装束を着た鬼など、不吉ではございませんか？」

「そう言うな静葉よ、邪気は持つてはおらぬだろう？」

温和に笑う実葉とは対照的に、静葉の声にはトゲがあった。

『相変わらず』……いや、『この頃から』といったほうが正しいか……。

ナナは皮肉の笑みをこつそり浮かべた。

その時、

「大丈夫よ」

実葉の袴の陰に、成葉が突然割り込んで来た。

「……………?!」

ナナは声をあげそうなのをこらえる。

「あのお婆さんを知ってるんでしょ？」

ゴクリとつばを飲み込んで、ぎこちなく頷いた。

「あなたの世界で、あなたと関わる人？」

成葉の瞳は、全て見通すように透き通っていた。

それを前にして、自分の躊躇いやちっぽけな推測は無駄だった。

ナナは素直に頷き、成葉の言葉を待つことにした。

「大丈夫。ここで今、知っている人に出会っても歴史が変わることはないわ」

「やはりそうか、成葉」

静葉が供の者たちを案内するために立ち去った後、実葉が話しに加わった。

彼も成葉の言葉を待っていたようだった。

「ええ。今はこのコの時空に歪みが生じ、*“ありえない事”*が起こっているってだけで
すから」

成葉はそう大それたことでもないように言つてのける。

「このコの時空が秩序を取り戻し、元の時代に返れば、このコがここに居たという事実は
全て *“無かつた事”* になります」

「すべてが元通りになるといふわけか」

「そう。今は特別な冒険をしてるところって感じね」
成葉は片目を瞑って笑った。

成葉が実葉とナナを通したのは、ナナの知らない8畳ほどの和室だった。
ナナはずっと成葉を見つめていた。

意識して……というより、目が離せなかった。

その顔立ち、肌の色、声、仕草。

全てが知らないはずなのに知っているようで……不思議な感覚から抜け出せずにいる。

改めて、自分がこの女の「生まれ変わり」なのだと思い知らされる。
が、思い知ったところで、それが不快なのかどうかわからない。

それにその……美しい成葉の姿を一部歪める部分。
わずかに膨らんだ腹が気になった。

「よしいしょつと……」

少し窮屈そうに座り、成葉はそこをさすった。

「腹が出てきたか……予定日はいつだったかの？」

実葉がにこやかに成葉に言った。

ナナは思わず瞬きを大きくする。

「11月の初めよ。あと三月もすれば産まれます」

成葉は急に「母」の顔になって答えた。

ナナの背に、嫌なものが伝った。

幸福そうな孫と祖父を前にして、態度に出すのは押しとどめた。

が、頭の奥で記憶が嫌な音を立てて押し寄せる。

たしか、和泉成葉は子を産んで死んだはず……。

「父親のことは、和泉には知られておらぬ。安心してよい」

「良かった。それだけが心配でした……」

成葉と実葉は初めて影を漂わせた。

ナナも、その腹の子の父親については知らなかった。

生きているのか死んだのかさえ、知らなかった。

和泉一族はこの事実を完全に「無かった事」として無視してきたから、ナナなどに教

える者は無かった。

「それより、身体を労われよ……」

「わかってます。ちゃんと産んでみせますから」

ナナの耳元で、空気がザワワと嫌な音をたてた。

この目の前で笑う二人は、ナナが産まれた時代にはもういない。会うはずのない者たちに、時を越えて出会っている……。

急にこの場が、夢の中のような感覚に襲われた。
が、

「大丈夫よ」

成葉が先ほどと同じ言葉をナナにかけて。

「私たちは、残念ながら自分の行く末が見えているから」

彼女の細い手が、ナナの頭に乗った。

「あなたが気を使うことはないわ。時の流れには誰も逆らえないのだから」

すべてを悟った瞳が四つ、ナナを向いていた。

優れた陰陽師であるがゆえ……未来を見通す眼を持つてしまった。

それでも、それを受け入れ気高く生きていく。

二人は、ナナの知る和泉の人間とは違っていた。

「やがて木ノ葉は大変な事態に陥る……。避けられない未来だが、その未来からお前が来たというだけで、少しは希望が持てたよ」

「でもこのコは和泉本家の子孫でしょう？ 木ノ葉とは関係がないんじゃない？」

「いやいや……木ノ葉を知っておるようだ」

ナナは実葉に促されて頷いた。

二人は未来について聞かなかった。

聞いてどうなることでもないし、聞くのは自然の理ことわりに背くことだった。

だからナナも、聞かれたこと以外は答えなかった。

その「答え」が、二人が喜ぶ内容ではなかったというのもあった。

「それにしても……」

成葉はまた腹をさすりながらナナに笑いかけた。

「あなたは本家のコにしてはずいぶんと雰囲気が違うのね」

「わしもそう思ったよ。このコはどちらかというとお前に似ておる」

曖昧な笑いを漏らしそうになったが、成葉に悟られそうですぐに引込めた。

が、それを見た成葉はナナの腕をつかんで引き寄せた。

反射的に身を強張らせると、成葉はクスリと笑って言った。

「そうね……。とつてもかわいいし、かしこそうなところが私にそっくり……!」

意味ありげな笑みは、ナナを逆に安心させた。

「あなたは何も聞かないし、何も語らないんだもの。ちゃんと自分のチカラを使う術を

知っているコだわ」

ナナは小さく頷いた。

ここに来て、してはいけないことは知っている。

そして言っても無駄なことも知っている。

ただ今はこの「ありえない」状況を、良くも悪くも、見て聞いて受け止めなければならぬ。

それが、こんなチカラまで手にした者の道理だと思った。

自然の理に背くチカラは大嫌いだった。

例えば「姉」の蘇生ように……そして大蛇丸の転生術のように……。

「初めから……己の身に起こった事柄を受け止めておったしの……」

ナナは成葉を見上げた。

それから、かすかに膨らんだ腹を見た。

急に心が落ち着いた。

受け入れられた気がした。

遙か遠い時代に来てこんな気持ちを味わうのは皮肉だったが、まるで心の隅っこの欠けていた部分が埋まったような気分だった。

……家族……たとえこんな感じなのかと思う。

成葉はナナの手をとった。

「……私は命と引き換えにこのコを産むけど……後悔なんかしてないの」

ナナの手は、成葉に導かれるがままにその温かい腹に宛がわれた。

「このコが……あなたみたいに和泉の血を正しく使うように祈るわ」

切ない風が、温かさに包まれた。

ナナは成葉を見上げて、ほほ笑んだ。

実葉を休ませてから、成葉はナナを自室に連れれた。

まるで本当の親子のようにひとつの布団に入ったが、ナナが寝付けずもなかつた。

成葉もそれをわかってか、あるいは彼女もそうだったのか、自分のことを語った。

和泉当主の許婚の立場を蹴つたため、一族から破門されたこと。そして親戚の静葉がいる木ノ葉の和泉神社へ来たこと。

ずっと和泉の里から出たいと思っていたこと。

今はとても幸せに暮らせていること。

そして、腹の子をどうしても産みたいことも。

誰だろう……。

そう思うのは当然だった。

ナナは成葉の腹にある命の行く末を知らない。

“今”どこにいるんだろう……。

単純に、知らなかったことを悔いた。

だが、考えても仕方ないことだった。

静葉がナナに教えるわけもないし、和泉一族の誰かが引き取っていたとしてもナナが知るわけがない。

木ノ葉に居場所があるはずも無い。

おそらく、そのどれからも身を隠す術を実葉が与えたのだろう。

ナナは黙って成葉の話聞いていた。

何を思って成葉が自分に全てを話すのか、深く考えもしないで聞いていた。

ナナからは何も聞くことはなかった。

聞いて答えてくれたとして、その内容を自分の世界に持ち帰ったとき、平気でいられる自信はなかった。

空が白み始めたころ、ようやく二人は同時に寝入った。

時空を超えて、小さくなつて、会えるはずもない人に会えたというのに……、ナナは心から安心してぐっずりと眠った。

英雄の夢

陽光のさす縁側で、ナナは成葉に髪を梳かされていた。

朝食の後ということと、ほとんど眠っていないせいで、ついまどろみがちになる。成葉もそうだったのか、二人は同時にあくびをした。

「あれだけきつく結われていたのに、全然クセがついてないのね……」

成葉はナナの巫女風に結われていた髪を、三つ編みに結びなおしてから言った。

ナナはその毛先を振り回しながら笑う。

こんな髪型にしたのは初めてだった。

「似合ってるわよ、おさげ……！」

成葉はもうじき母となる女の、穏やかな笑みでナナを見ていた。

訪問者が現れたのは、そんな時だった。

「四代目がいらっしやいましたよ、成葉」

静葉の言葉に反応する間もなく、拝殿の方から歩いて来る人影にナナは目を奪われて

いた。

(四代目……!)

首の皮がひきつった。

「いらつしやいミナト。時間通りね」

成葉が縁から降りて親しげに迎える。

『ミナト』と彼女に呼ばれた四代目火影は、ナナの耳に初めての“声”を吹き込んだ。

「おはよう成葉、身体は大丈夫？」

眠たげな声だが、慈しむように成葉を見て、その腹を見る。

そして……。

「あれ、今日はかわいいお客さんがいるんだね」

その瞳がナナに向いた。

心の揺れを、表に出してはいけない……。

ここに来た時から心がけていたものの、今、この瞬間には無理な注文だった。

「かわいいでしょ？ ウチの本家のコよ。はるばる時空を旅して“未来”から来たの」

成葉はあつさりとなナの正体を彼に明かしながら、縁に腰かけたままピクリとも動かなくなつたナナに歩み寄る。

「へえ……そりや珍しいお客さんだね」

そしてミナトもまた、あっけなくその言葉を受け入れて感心する。

「『ホクト』って呼んであげて」

「ようこそ、ホクトちゃん」

次の瞬間、ナナは自分の身に何が起きたのかわからなかった。

四代目火影の、写真でしか見たことのない蒼い瞳が近づいたかと思うと、急に空が近くなった。

「それでオレにあんな式神おつかいをよこしたの？」

「そうよ。ちゃんと持って来てくれた？」

二人の会話など耳に入らなかつた。

四代目に抱きあげられていると気づくことで精いっぱいだった。

「あとで持って来てもらうことになってるから大丈夫！」

「センスはいいんでしょうね……」

「バツチリだつて！」

すぐ近くに、四代目の顔があつた。

綺麗な金の髪。強い光を奥に秘めた蒼い瞳。

「かわいいなあ……女の口もいいよね」

彼はナナを向いてつぶやいた。

「ミナトのところは男の子でしょ？ クシナは元気なの？」

「うん、クシナは成葉ナツより丈夫だからね。……にしてもカワイイなあ。ホクトちゃん見てたら女の子もいいなって思うよ……」

まぶしい笑みは誰かに似ていた。

「どことなくナルに似てるよね」

彼はナナと成葉を見比べた。

ナナが産まれる由縁となった二人に見つめられ、ナナの胸は熱くなった。

こんな気持ちは初めてだった。

それをもてあまし、ナナはギユツと四代目火影の首にしがみついた。

なぜ自分は“この時代”に来たのだろう。

なぜ姉は、“ここ”に自分を飛ばしたのだろう。

同時にその疑問も強くなった。

“ここ”は、想うことが強すぎる……。

「ホクトちゃんは、ホクトちゃんの世界で頑張つて生きてるんだね」

そんなナナの幼い背を抱きしめながら、四代目がそう言った。

「キミの瞳はそんな瞳をしてるよ」

なぜ……？

「こんな小さいのに、そんな瞳をしてるんだからさ……」
なぜ、そう言うのか……。

声を出しそうになりながら彼の目を探ると、すべてを見通した聡明な瞳がナナをなだめすかした。

「僕たちは、キミの世界を護るよ」
知っている。

彼も、すぐ先の未来を知っているのだとわかった。

成葉も悟ったような微笑を浮かべていた。

胸の熱さは少しだけ、無力感に変わった。

ナナはもう一度、遠慮がちに四代目にしがみついた。

「大丈夫だよ」

四代目はささやいた。

この声も、この髪も、目も、腕も、言葉も、何もかも……、忘れずに持って帰ろうと、心に強く思った。

母の夢

「ほおう……こうしてみると、お前たちが親子のようだな」

やがて、縁側に実葉が現れた。

「やめてよおじいさま。ミナトなんかと……！」

「ちよつとナルちゃん、それはないじゃない……」

ミナトに肩車をされていたナナは、声を出さずに笑った。

ナナの瞳に映る二人は、夫婦というより兄妹に近かった。

想像していた雰囲気とは少し違ったが、そこにはナナが信じていた絆が確かにあった。

「わざわぎ木ノ葉へ来ていただき、ありがとうございます」

四代目は火影としての言葉を実葉に言った。

「いや……わしの最後の務めだ……」

実葉は少し、目を伏せた。

目じりの皺が苦しげに濃くなったのを、ナナが見逃すはずはなかった。

「あとのことは全ておじい様にお任せしてるから……」

「木ノ葉のことも、三代目をお願いしとくよ」

二人も夢げに笑った。

ナナは四代目の肩の上で、膝に添えられた彼の手を握りしめた。

実葉が和泉を出て、わざわざ木ノ葉へ来た用事がはつきりとわかった。

この時期、この場所で、この面々……。

これから三人が何を話すのか、何を始めるのか……。

わかりすぎて苦しかった。

その「結果」すら知っているのが皮肉だった。

「ところで、「お使い」はまだなの？ ミナト」

「そろそろだと思うよ……。あ、来た来た……い！」

縁に上がりかけたミナトと成葉は、拜殿の方を振り返る。

するとそこからタイミングよく一人の少年が現れた。

「相変わず気配を殺すのがうまいのね、あのコ」

成葉がクスリと笑って言った『あのコ』もまた、ナナが知っている人物だった。

「ご苦労さん、持って来てくれた？ カカシ」

ナナはミナトの肩の上から下ろされて、少しよろけた。

ここに現れた少年は、まぎれもなく若き日のはたけカカシだった。

「先生、オレ今日は一カ月ぶりの非番なんですけど……」

少年のカカシは不機嫌そうに言いながら、手にした風呂敷包みをミナトに突き出した。

そしてチラリと、ミナトの足もとにまわりつく小さなナナを見やった。

(……カカシ先生だ……)

ミナトの影に隠れるようにしながらも、師の若い姿に息をのむ。

「ごめんねカカシ君。私はミナト先生に頼んだんだけど……。でもカカシ君の方がセンスよさそうだから良かったわ」

ミナトが受け取った包みを、成葉は横から取り上げた。

「それを何に使うんですか？ 成葉さん……。まさかこのコの……。？」
知っているより高い声……。

それに聞き入っていると、カカシはナナをはつきりと見下ろした。

「そうなの。着替えを持ってなくって」

「誰なんです？」

「成葉の親戚のコだよ……ほら、あそこにいらつしやるのがナルのおじいさん」

カカシの視線は、ミナトが指した縁に逸れた。

が、実葉にペこりと頭を下げると再びナナに向いた。

すでにその左目は額当てで隠されていた。よく知るはずの右目は、興味なさそうにナナを向いている。

「ホクト、カカシ君の持つて来てくれた服に着替えましょ？」

師の、どことなくのんびりして、かすかに慈しみを感じる瞳とはかけ離れていて、ナナが小さく笑ったところを、成葉が手を引いた。

「そうそう、それを着て里を見てまわりなよ。カカシに案内してもらってさ」

「なっ……なんでオレが?!」

「いいわね、それ。カカシ君、ちゃんと面倒みてあげてね」

マスクの下で口をとがらすカカシを尻目に、成葉はナナを引っ張って部屋に戻った。

「さすがカカシ君。いいセンスしてるじゃない」

成葉は畳の上に包みを広げ、満足げに言った。

風呂敷の中には、白地に水色の蝶をあしらった浴衣と、濃紫の帯が包まれていた。

成葉はナナの白い袴を脱がせ、それを着せた。

彼女の式神はよほど詳しくナナの特徴をミナトに伝えたのか、丈も色合いもナナに
ぴったりだった。

後ろで成葉が帯をしめると、ナナには自然と笑みがこぼれた。

再び、夢心地な感覚に襲われる。

もしこのまま、元の世界に戻れず、ここで過ごすことになったとしたら……。

それでもいいのかもしれない……と、ふと思つた。

実は、今までいたところが夢の世界で、ここが本来居るべき処なのだとしたら……。

だが、すぐに頭にちらつく「矛盾」は、ナナを現実に引き戻した。

この時間がなければ、ナナは産まれることはなかった。

ミナトと成葉が死ななければ、ナナは産まれることはなかった。

残酷な運命を思い出し、ナナはうつむいた。

「ねえ、ホクト」

それを察したかのように、成葉は静かに眩き、ナナを正面に立たせた。

「いつ……あなたが元の世界に帰るかわからないから、今のうちに言っておくわ」

強い光が、その双眸に浮かんでいた。

聞きたくない気持ちと、受け止めたい気持ちに揺さぶられながら、ナナはそれを見つ

めた。

「私たちは、これから起こることの結果がどうであれ、決して後悔はしないわ
いつのまにか、両手は成葉の冷たい手に握られていた。

「『あの人』の子を産めて、幸せだと思ってる」

強くて、清くて、美しい。

「あなたの世界で私たちは『過去の人間』でしかないかもしれないけど……それだけは
知っておいてね」

成葉は……おそらく産まれて来る子供に伝えたいことを、ナナに言っていた。

「私たちが、あなたたちの世界を護るわ」

ミナトと同じ言葉を……。

「だから、強く生きて」

成葉は初めて、瞳に光るものを浮かべながらナナを抱きしめた。

一度も抱けない我が子の代わりに……想いを込めて、強く。

だからナナも、『母』を感じて精一杯がみついた。

聞こえないくらい小さい声で、成葉が『ごめんね』とささやいたとき、ナナの瞳から
も滴が伝った。

夏の夢

「じゃあカカシ、オレはナルとナルのおじいさんと大事な話があるから、そのコをよろしく頼むよ」

ミナトはカカシに言つて、ナナの頭をなでた。

どこか、名残惜しそうに。

「木ノ葉を見せてやればいいんですか？」

カカシは面倒くさそうに言う。

「そうそう。あ、それともう一個おつかい頼まれてくれない？」

悪びれずに面倒事を追加する師には慣れているのか、カカシは呆れたように溜息をついた。

「ハイハイ、なんでも言つてくださいよ。一カ月ぶりの非番だけど頼まれますから」

ナナは聞きなれないカカシの口調に声を出さずに笑つた。

それに眉を潜めたカカシに見下ろされ、さつとミナトの後ろに隠れる。

するとミナトは、ナナの頭に手をのせたままカカシに言つた。

「警務部隊長さんの家に二人目の男の子が産まれたらしいから、オレの使いでお祝いを
持つて行つてくれる？」

なるほど……警務部隊の隊長ともなれば、子が生まれると火影が祝いの使いを出すの
か……と、ナナは単純に思った。

居心地の良い、ミナトの側で。

が、次の力カシの言葉で、ナナは瞬時に身をこわばらせた。

「うちはの家ですか？」

『うちは』……と、聞き間違はずもない名が、ナナの耳に飛び込んだ。

残念ながらナナの脳はそう鈍くは出来ていなかったから、それが“誰”を意味するか
すぐに察してしまった。

この年のこの季節……。

九尾襲来の少し前に産まれた『うちは』の名を持つ子など、ひとりしかいない……。

「そ、フガクさんに二番目の子が産まれたらしいから」

「そのコを連れて……?」

「和泉神社の巫女の親類つて言えば、フガクさんならわかるから。連れて行っても大丈夫だよ」

ナナはミナトのズボンの裾をきつく握った。

二人の会話はもう、耳に入らなかつた。

強い好奇心と不安感に揺さぶられ、自分の足で立っている実感を失った。

「カカシはぶつきらぼうだけどいいコだから、大丈夫だよ、ホクトちゃん」

気づけばミナトがしゃがんで視線を合わせていた。

「木ノ葉をゆっくり見ておいで」

蒼い瞳に浮かぶ温かい光に、次第に緊張を解かれていく。

金の髪が風に揺れた。

脳裏に再び、大切な仲間の姿が映った。

今、自分は知り得るはずのない過去に来ているのだと……改めて実感する。

ここで起きていることも、ここで見ているものも、出会った者も、聞いた声も、手の温もりも……本来は知ることなどできないのに。

「ちゃんと、楽しんで帰らなきゃね」

子供のようにそう言ったミナトに、ナナは自然と笑みを返した。

敵わない……。

憧れていた「英雄」の姿にそう思った。

彼も知っているのかも知れない。

すぐ先に起こることも、すぐ先に産まれてくる自分の子を抱けないことも。

「せっかく来たんだから、いろんなモノを見て帰るのよ」

成葉がナナの肩に手を乗せた。

心に夏の風が流れた。

ナナは強く頷いた。

二人の姿を心に留めて、ちゃんと持って帰ろうと、そう思った。

ナナはカカシに手をひかれ、和泉神社の鳥居をくぐった。

振り返ると、ミナトと成葉が手を振っていた。

これから二人が、実葉を交えて何を話すのか、そして「何の修行」をするのか……わかつてしまう自分が恨めしかった。

それでもナナは、心に刻んだ二人の姿を想い、笑って手を振り返した。

たぶんもう、ここに帰ることは無いという予感がした。

二度と二人に会えなくとも、得られるはずの無かった二人の姿がしつかりと心に在る

から平気だった。

「あのさ」

長い長い和泉神社の階段の中腹で、カカシは初めて立ち止まり、口を開いた。

「君、小さいわりにずい分と鍛えてるみたいだけど……」

歩き方でわかるんだよね……と呟いたカカシを、ナナがきよんとして見上げると、

彼はいきなりナナを担いで言った。

「先生のお使いの前に行きたいところがあるんで、ちよつと急ぐから」

そしてあつという間に、階段を風のように駆け下りた。

ナナの鼻先で、彼の銀髪が靡いた。

「……怖かった？ ごめんね」

あまり感情のこもらぬ声で言われたときは、すでに里の街道だった。

ナナは笑いながら首を横に振った。

これまで興味なさそうだったカカシの右目が、自分を探るように見ていることに気づいた。

が、彼はそれをすぐに引つ込め、先に立って歩き出した。

両手はすでに、ポケットに収まっていた。

ナナは小走りで彼について行く。

なんとなく、その行き先はわかっていた。

だから距離が離れないようにしながらも、懐かしいようで見慣れないような町並みを
いちいち見回しながら行つた。

日は頭上にあつた。

人通りも多かつた。

時折、見知つた者が若い姿で歩いていた。

やがて、立ち並ぶ建物から、遠くに火影岩が垣間見えてきた。

ナナは思わず立ち止まつた。

また、初めてそれを見た日の自分がリンクした。

「疲れたの？」

ふいにカカシの声が近くで聞こえた。

ナナの足が止まつたことにすぐに気づき、そばまで戻つて来ていたのだ。

ナナは首を横に振つた。

「そういえば結構歩いたね……少し休む？」

声は淡々としているのに、言葉はナナの言っているカカシと同じ種類のものだった。

ナナは笑つてまた首を振つた。

「じゃ、行くかうか」

カカシは一瞬ナナの瞳を探り、『もうすぐだから』と小さな声でつぶやいた。そして……やはり、向かった先はナナの思った場所だった。

森の中、川岸の少し開けた場所にある、三本の丸太。

その奥の、慰霊碑。

カカシは無言のまま、じつと慰霊碑を見下ろしていた。

ナナも隣で静かに佇んだ。

刻まれた名は、見慣れた数より少しだけ少なかった。

かすかに胸の奥が痛み、ナナは思い切ってカカシの手を握った。

カカシはちらりとナナを見ただけで、手を振りほどきはしなかった。

しばらくの間、二人は身じろぎもせずそうしていた。

祈りでもなく、話すでもなく、ただじつと見つめていた。

やがて、カカシがマスクの下で口を開いた。

「ヤ」(キ)……」

ナナはまだピクリとも動かず彼の言葉を待った。

「神社を出るとき……先生も成葉さんも、まるで君がこのままどつかに帰るみないな感じだったよね」

追求のような強さは無かった。

だからナナは、ゆっくりと彼を見上げた。

「君も、先生たちが何の用事であそこに集まったのか知ってるみたいだし」
そういう彼も、知っているようだった。

「不思議なコだね、君」

突き放すようにそう言いながらも、彼は手を放さなかった。

ミナトは彼に、おそらく何も話してはいないだろう。

それでも側にいる彼には、何となくわかってしまうのだろう。

この夏草が散った時、みんなの運命が大きく動く……。

そう思うと苦しかった。

が、大丈夫だと伝えたかった。

未来は彼らに護られた。

だから強く生きて欲しいと。

ミナトと成葉の、自分に対する気持ちが出来てわかった気がして、ナナは彼の手を強く握った。

伝えるすべは、それしかなかった。

カカシはその手を握り返しはしなかった。

戸惑いを淡々と押し込んで、何事も無かったかのように言った。

「さて、そろそろ先生のお使いをすませるか……」
ただ、歩き出しても二人の手は離れなかった。

心底面倒くさそうにしながらも、カカシはちゃんと火影の「お使い」として申し分ない手土産を買った。

合間に彼は、ナナを団子屋に連れられた。

飄々としながら自分を氣遣ってくれていることに氣づかぬほど、ナナは実際のなりより幼くなかった。それに、カカシという人間の本質を良く知っていた。もともと「知り合い」でもあるためか、なんとなく氣が合っているような氣がした。

はたかれ見れば、子守を負かされた里の天才忍者が、その子供に懷かれて迷惑している風に映っただろうが、實際ナナは、彼が先に自分の手を引いてくれていることを知っていた。

やがて二人は、兄妹のように歩きながら『うちは』の集落に入った。

一族の子の誕生に、そこは慌しくも浮き足立った雰囲気の流れていた。

カカシはまっすぐに目的の家へ進んだ。

彼がほんの僅かだけ身構えていることに、ナナだけが氣づいていた。

が、ナナも彼を氣遣う余裕を無くしていた。

ナナの知るこの場所は、閑散として寂しい風が流れていた……。

すれちがう者たちの中には、他にも大勢祝いを述べに来た者たちが居た。

カカシを知っている者も多く、何かと声をかけてくる。

当然、連れている小さな子に疑問を投げる者もあつたが、カカシはさり気なくかわしていた。

ナナはひたすら額が引きつりそうになるのをこらえた。

繋いだ手から動揺が流れ伝うのを、互いが押しとどめていた。

そしてついに、最も多く人が集まる家にたどり着いた。

この集落で一番大きなその家は、外門が開け放たれてひっきりなしに人が出入りしていた。

カカシは一瞬ためらつて、忍服に警務隊の紋章をつけた男に火影の使いで来たことを告げた。

そしてナナのことを、和泉神社の巫女の使いと話した。

男はすぐに二人を案内した。

間違いなく、彼にはうちは一族の面影があつた。

そしてカカシを知っていたし、カカシに敬語を使っていた。

ナナはゴクリと唾を飲み込んだ。

手入れの行き届いた庭は、枯れる前の一族の繁栄を現すようで心が打ち震えた。

やはり、カカシの手を振りほどいて立ち去ろうかと思つた。

声を上げて、ここではない別の時空に去ろうかとも思つた。

が、カカシの冷たい手を放すことはできなかつたし、開いた玄関の扉の向こうにあつた影に、釘付けになつた。

「こんにちは、カカシさん」

あどけなく言つたのは……、まだ幼いうちはイタチだつた。

花の夢

「弟はさつきまで泣いてたんですけど、ちようど寝ちやつたところですよ」

忍の力、忍の性、うちはの名、己の運命、弟の未来……。

何も知らない幼いイタチを前に、ナナはじつと畳を見つめていた。

「ここ」へ来て何度も心を揺さぶられたが、今ほどそれが強かったことは無い。覚悟を決めてきたはずだったのに、まともに顔を上げることさえできなかった。

「もうすぐフガク隊長が来ますからね、もうちよつと待つててくださいな」

一族の女が、カカシとナナの前に茶を置いた。

「イタチ、このかわいいお嬢さんに柵にあるお菓子をあげなさい」

「はい、おばさん」

高い声、駆けて行く軽やかな足音。

それはすぐに戻つて来て、ナナの目の前に小さな手の平が差し出される。

そこには美しい和菓子が乗っていた。

「はい、あげる」

かすかにはにかんだ声に、ナナは思わず顔を上げる。
漆黒の瞳は影を知らず、ただナナを映していた。

「イタチ……！」

彼の名を呼ぶ声が、喉を通りかけた。

その時に

「四代目の使いとは……わざわざすまなかつたね、カカシ君」

部屋に男が入って来たおかげで、ナナはまだここに留まることを許される。

「四代目の使いできました。お子さんのご誕生、おめでとうございます。心よりお喜び申し上げます」

横で、カカシが祝いの品を差し出しながら大人びた口調で祝いを述べると、男は手をついて答えた。

「お心遣い恐縮です。我が子ともども、ますます木ノ葉の繁栄に力を尽くす所存でございます」

ナナは火影の使者に対する答辞を述べるフガクを、じつと見た。

彼には幼い頃に和泉の里で会ったことがある。

イタチと、そしてサスケの父……、うちはフガクだった。

改めて見ると、二人とはあまり似ていない。

形式的な挨拶が交わされると、彼は自分を食い入るように見つめるナナに視線を移した。

「そのお嬢さんは、和泉成葉様の親類の方と聞いたが……」

ナナは逃れるようにカカシを見上げた。

フガクの視線より、きよとんとして自分を見つめるイタチの視線がむずがゆかった。

「ハイ……そうみたいです」

「では『和泉』の……?」

フガクは愛想よく笑った。

ナナも曖昧に笑みを返した。

ふと、この頃から『うちとはと和泉の結びつき』を考えていたのだろうかと思っただが、それはあいにく知る由もなかった。

「うちの次男坊をぜひ見て行ってもらいたかったが……ちようど寝ついてしまったところ……」

フガクが申し訳なさそうに言うのと、イタチが無邪気に言った。

「猿みたいな顔をしてるんですよ!」

ナナは思わず笑った。

兄になった彼の、そんな自慢げな姿が可愛らしかった。

が、そんな息子の頭を笑いながらなでるフガクの姿は、ナナの胸に小さな痛みを起こした。

「御名前はもう決まったんですか？」

「ああ、ちょうど君たちがここを訪れた頃に決まったよ」

ナナはフガクの口からその名が発せられるのに身構えた。

だが、

「サスケっていうんだよ！」

二人にそれを告げたのは、イタチだった。

「いい名ですね」

「大きくなったら君の部下になるかもしれない、よろしく頼むよ」

フガクの何気ない言葉に、運命の悪戯がそうすることを知らぬナナは、気づかれぬよう

に諦めのような微笑を漏らした。

もとの世界がひどく懐かしくなった。

膝の上で、手を強く握って堪えた。

と、

「そのコはなんていうんです？」

イタチが言った。

ナナが彼を見ると、彼は強く目を瞬いた。

「ホクトだよ」

「へえ、ホクトか……」

カカシが答えると、イタチは笑った。

ナナは精一杯、胸に込み上げるものを押しとどめた。

ナナも今すぐ、イタチの名を呼びたかった。

「では、我々はこの辺で……また日を改めて、今度は四代目が直々にうかがうでしょう」

その気配を悟ったかのように、カカシはフガクに別れを告げた。

「今日はありがとう、四代目にくれぐれもよろしく伝えてくれ」

「わかりました」

短い訪問が終わろうとしていた。

ナナはカカシの隣でフガクに手をつき、頭を下げた。

そして、手を振るイタチを横目に立ち上がった。

屋敷にはまだ訪問者があり、その世話を焼いたり、祝いの宴の準備に追われる一族の人間たちが慌しく動いていた。

ナナは、供に居たのがカカシでよかったと思った。

彼に挨拶する者たちをなるべく視界に入れぬよう、彼の背だけを見上げて歩いた。

この幸福に満ちた一族が……あの幼い無垢な子によつて滅ぼされることになるうとは……。

ナナ自身、まだその「事実」を信じてはいなかったが……、それでもやはり、心は痛かった。

だから、ようやく玄関の扉を開いて外に出たとき、産まれたばかりのサスケに会わなくてよかつたと、そう思った。

思わず息をつく。

カカシが振り返つて言った。

「行くよ、ホクト」

ナナは小さくうなずいた。

だが、

「待って！」

カカシに並ぼうと出した足が、背中からかけられた幼い声によつて押し留められる。

「待って、ホクト！」

庭から回つてきたのか、大人用の大きなサンダルをつっかけて現れたのはイタチだった。

ナナは喉の奥が引きつるのを感じた。

が、イタチはニコリと笑ってまっすぐナナに近づいた。

「これ、あげるよ」

差し出された小さな手には、摘みたてのクロユリが一厘、握られていた。

「今朝、初めて咲いたんだ」

花茎の先端に、暗紫色の釣鐘状の花が3つついていた。

「へえ……クロユリなんて珍しいね」

後ろでカカシが感心したように言うと、イタチは得意げに応えた。

「うん！ 前にシスイが種を持って来て、今年初めて咲いたんだ！」

そしてナナに、それを突き出した。

クロユリ……。

北の地や高山に咲く花が、何故かうちはの庭で今朝、その花を開いた。

ナナはふと、和泉の山の岩間に咲いていた群れを思い出す。

花言葉は、『秘められた恋』と……、『呪い』。

「ホクトにあげるよ。サスケが産まれたキネンだから！」

ナナはクロユリの花びらと、イタチの瞳とを見比べた。

無邪気な瞳には、何の意図も無い。

だが、ナナは皮肉な運命を感じた。

それを精一杯押し殺し、ゆつくりと手を伸ばす。

肩と肘が錆付いたように、動かし辛かった。

指先が、冷たい茎とあたたかいイタチの手に触れた。

「キレイでしょ？」

イタチがはにかむ様に微笑んだ。

ナナはゆつくりとうなずいた。

三つの花が、鐘を鳴らすように揺れた。

その時、屋敷から、赤ん坊の泣き声があがった。

「あ、サスケだ……！」

イタチが嬉しそうに一度屋敷を振り返り、ナナに言った。

「サスケが起きたみたいだから行くね！ バイバイ、ホクト」

弟の存在を心から喜ぶ兄……。

一体誰が、この兄弟に訪れる残酷な未来を予想できただろう……。

兄を憎む弟の紅い眼を、誰が想像できただろう……。

ナナは「現実」の残酷さを改めて思い知る。

そしてその「現実」を憎んだ。

今のこの幸福な一族が、何故滅びなければならぬのか……。
怒りにも似た感情が心を溢れ出た時、

「イタチ……!!!」

ナナは弟へ向かって走り出そうとしたイタチの背に向かって、その名前を呼んで
いた。

瞬間、イタチはナナを振り返った。

目が合うのと同時に、ナナの視界は白い霞に覆われていった。

夢のあと

白くて温かい空間。

ひどく懐かしい気がして、ナナは吐息をついた。

自分が何処にいたのか、一瞬思い出せなかった。

立っているという感覚が無く、空間を漂っているような身のあやふやさ。

自分の肉体が存在するのかどうかも不確かなくらい、実体であるという感じが無かった。

一度、二度と瞬きし、時空の旅をようやく思い出す。

まるで今まで長い夢をみていたようだった。

が、あれは現実に見て来たこと。

その証拠に……、右手には黒い百合が一厘、しっかりと握られていた。

「おかえり……菜々葉……」

深い紫の花が鐘を鳴らしたとき、目の前で声がした。

「……過去への旅は、どうだったの……？」

声の主は姉だった。

「姉上……」

その身体は霞がかかり、今にも消えてしまいそうだったが、琴葉にこの状況に抗うという気配はなかった。諦めたような表情で、静かにナナを見つめていた。

「……どうして……」

久しぶりに話したせい、上手く声が出なかった。が、掠れた声で精一杯消えゆく姉の姿に想いを投げる。

「どうして、あそこに……私を……?」

何故……あの時空に……?

何故、あの人たちに逢わせたのか。

幼い姿いっばいに浮かべた疑問を、ようやく問いかける。琴葉は微笑した。

それはナナが見た中で一番の、美しい笑みだった。

その顔からは、姉の意図は読み取れなかった。

和泉成葉、四代目火影……逢えるはずのない者たちに逢い、触れ合った意味。若き日のカカシと……そしてイタチに逢ったことの意味。

それが、サスケが産まれたその日だったという意味。

妹の辛苦に餓えていた姉が単純に思いついたのだとしたら、彼らに逢ったナナがまた、時の皮肉に苦しむことを意図したのかもしれない。

だが、それだけではないような気がした。

確かに心は大きく震えた。

痛みが無かったといえば嘘になる。

その痛みに揺り動かされ、『イタチ』の名が溢れ出たといっても相異なる。

しかし、姉は穏やかに笑んでいる。

それにナナの心の奥には、知らなかつた温もりも産まれていた。

成葉の言葉も、四代目の言葉も……痛みの奥にはちやんと在った。

だから……。

「どうして、私をあの日に飛ばしたの……？」

もどかしさで、思わずイタチにもらつた黒百合を両手に包んだ。

琴葉はもう一度、クスリと笑った。

ナナの知らない、たおやかな表情だった。

そして琴葉は、ナナの胸の前で揺れた花を見て、静かに口を開いた。

「……イタチには……逢えたの……？」

その声は、かすかだが切なげに震えていた。

ナナは息を呑む。

今にも霞に包まれそうな琴葉が、次に何を言うのか……予感で胸が苦しくなった。

「……兄」になつたイタチは……どんな子だったの？」

姉の問いに悪意など無かつた。

ただ、ナナの応えに対する渴望が垣間見えた。

ナナは唇を震わした。

「……どうして……私に聞くの……？」

眉根が引きつった。

首の辺りがひやりとした。

姉の問いは矛盾していた。

時空を越えることができるのはそもそもナナではなく、怨睨オニと化し、禁忌の力を得た

琴葉のはずだった。

そのチカラを手にしてから何度もそうして旅してきたのだと、得意げに言っていたはずなのに。

「……」

何故、今になってナナをそこへやり、ナナにそれを聞くのか……。

「姉上も……見て来たんでしよう……？」

その問いの後、長い沈黙が流れた。

ナナにとって、そこは居心地の悪い空間と化した。

琴葉はただ、微笑をたたえたまま目を伏せていた。

やがて、黒百合がナナの胸元で小さく揺れたとき、琴葉は何もかもを諦めたような口調で言った。

「……………見られたかったのよ……………イタチの時間だけは……………」

わずかに自嘲を含む大人びた声は、ナナを惨めな気持ちにした。

「イタチの時間だけは……………こんな存在になっても行くことはできなかったの」

「……………そんな……………」

それが……………琴葉のその告白が何を意味するのか、不思議とナナにはわかってしまった。

「姉上……………そんなに……………イタチのことを……………?」

琴葉は視線を上げた。

姉と妹……………二人に初めて、同じ光が浮かんでいた。

「……………自分でも……………知らなかったのよ……………そんなこと」

ナナは奥歯をかみ締めた。

死して魂になった姉。

命と引き換えに手にしたチカラで、時空をも越える存在となったはずなのに……イタチの時空だけは行けなかったその理由。

魂という、浮世離れた存在であるにもかかわらず、『イタチへの想い』だけがその存在を俗世で汚した。

魂が「想い」を持った瞬間に、ただの塊になってしまった。

だから……チカラを使うことなどできるはずもなかった。

それ程に強い想いを、イタチに対して抱いていたというのか……。

「姉上っ……」

ナナは言葉を詰まらせた。

哀れみと、説明のつかない罪悪感が心に溢れた。

が、琴葉は淡々と語った。

「あなたがイタチに去られた夜も、イタチに救われたことも……あなたを介してしか知ることではできなかった……」

姉というより、ただの女として、琴葉は告白した。

「イタチが暁で何をしているのかも、木ノ葉を抜けた日にどうしていたのかも、産まれた時はどうだったのかも……何一つ、見られなかった」

「本当は……逢いに……行きたかったのに……？」

弱々しく吐くのはナナの方だった。

琴葉は素直に頷いた。まるでナナを慰めるようだった。

「自分を殺すための存在である『弟』が産まれた日……イタチはどうしていたの……？」

そしてまた、ナナに問う。

「兄になったその日……イタチはどんなだったの……？」

うちは一族の……そして兄弟の運命の日。

サスケが産まれなければ、イタチは復讐者を産むことはなかった。

兄と弟が在ったから、現在の悲劇が産まれた。

そして琴葉とナナも……。

出口のない迷路に閉じ込められたような感覚で、ナナは首を横に振った。

白い靄が、ゆつくりと動いた。

そのせいで、姉の姿がより白に包まれる。

「姉上……!!」

ナナは思わず叫んだ。そして、駆け寄った。

が、近づこうと思っても、少しも姉との距離は縮まらない。

その空間に物理的距離は存在しなかった。

「……姉上……!!」

「教えて、菜々葉……」

琴葉の口調は淡々としていたが、ナナにはその願いの強さが痛いほどわかってしまった。

かといって姉の知りたいたいことを、単に伝えきれないことも知っていた。

ナナは大きく息をついた。

そして言った。

「イタチは……サスケが産まれたことを、心から……喜んでいた……」

幼いイタチの、嬉々とした姿を思い出した。

その姿はナナに痛みをもたらしたが、それでも嬉しかった。

サスケの名を少し得意げに口にするイタチが、嬉しかった。

たとえ今……こうなっているとしても、嬉しさに心震えた。

だから……。

「す……く……幸せそうだった……」

そう告げた瞬間に、琴葉が満足げな笑みを返したとき、ナナの瞳からは雫が零れ落ちていた。

姉も……同じ願いを持っていた。

皮肉にも、この最期のときに初めて姉妹の心は繋がった。

イタチに対する同じ想いを持っていた。

ナナは強く目を閉じた。

霞の中で、琴葉が『よかった』と呟いた。

「姉上……」

再び目を開いたとき、ますます消え去りそうな琴葉に、ナナは言った。

「……ごめんなさい……」

「……ごめんね」

互いに疲れきったような声色だった。

「姉上を苦しめたのは……間違いなく私だった……」

「私が愚かだっただけよ」

「……私はイタチに甘えて……被害者ぶっていただけ」

「被害者ぶっていたのは私……」

が、琴葉は消えそうな姿と逆に、だんだんと声を強くした。

「私は結局、最初から最後まであなたに嫉妬し、八つ当たりしてた……」

ナナはうつむいた。

琴葉につけられた傷は、決して浅くはなかった。
が、今さらそれを責める気力もなかった。

影に吞まれたのは自身の弱さと感じていたから。

「あなたの清らかさは私のせいで穢れたわ……」

琴葉の強い口ぶりに、ナナはフツと笑った。

力を削がれるようだった。

「だから……私はそれで満足」

容赦のない言葉に、ナナは小さく頷く。

が、琴葉は言った。

「怨みなさい、憎みなさい……菜々葉」

「……………え……………」

琴葉は台詞とは裏腹に、清らかな声でナナに言った。

「もがいていい、叫んでいい、愚かでもいい、もつと醜くてもいい……………」

「姉上……………」

「それでも生きなさい……………」

思わず目を見開くと、姉はいよいよ霞に消えながら言った。

「穢れても、あなたは手折られず……………、強くて美しい……………」

「姉上!!」

「だから、生きて……」

最期の言葉は、隠そうとしない嫉妬と、そして姉として妹を誇る笑みで贈られた。

「……さようなら……」

「待つて……!!」

琴葉がついに別れを告げたとき、ナナは黒い百合を突き出した。

「これを……!!」

幼いイタチが摘んだ、うちのは庭に咲いたばかりの黒い百合。

サスケが産まれた日に、初めて花開いたそれを、ナナは琴葉に贈った。

「イタチがくれたの……持つて……行って……」

掠れた声が、届いたかどうかわからない。

その茎を、姉が手にしたかはわからない。

が、クロユリは確かに、白い霞に吸い込まれて行った。

「さよなら……姉上……」

ナナも別れを呟いた時、脱力感と供にナナの身体も霞みに包み込まれていった。

褐返し —かちがえし—

火影の前に、無事2小隊8名が帰還した。

シカマルとカカシはチャクラを使い切つて疲弊し、ナルトは新技によつて右腕を激しく傷めていたものの、暁の二人『角都』『飛段』を倒すという成果をあげていた。

「ご苦労だったな」

火影は彼らにそう言った。

しかし残念ながら、それで安堵できる状況にはなかつた。

「動けるものは……サクラにヤマト、それにサイか……」

なぜなら、すぐにでも彼らに次の任務を言い渡さねばならぬ事態だったからである。

「お前たちで手分けして、ナナの援護、及び救助に向かえ」

『援護』と、とりあえず火影は言ったものの、それが自分たちに可能でないことくらい皆わかつていた。

サイも、それが自分などには成し得ないことと割り切っている。

彼はサクラ、ヤマトと別れ、川沿いの森を走っていた。

ナナが今、何を相手に戦っているのかは聞いている。

いや、すでにその戦いには決着がついているのかもしれない。

三年前、ナナがどんな状態で発見されたかサイは知らない。

が、例の刻印が失われたこと、それが死んだはずの彼女の姉によって奪われたという

ことは、ダンゾウを通じて知っていた。

想像もつかないような内容……。

感情を知らぬあの頃は、なんとも思わなかった。

だが、今はわかる。

その「おぞましき」と「絶望」が……。

『意外と……おせっかいだったんだね……』

ついこの間、そうやって儂く笑ったナナの顔がちらついて、サイは思わず足を止めた。

アレを抱えて、再びソレとたった独りで戦っているというのか……。

考えようとしただけで、何かに吞まれそうだった。

それを頭の隅に追いやるように首を振り、サイはわざと歩みを緩めて進んだ。

サクラは三年前にナナが発見されたという場所へ向かった。

ヤマトはその下流域へ……。

サイは心を落ち着けて、藪を分け出る。

水の流れる音が激しい、大滝の淵へと出た。

『終末の谷』そういう名のついた場所だった。

ここで、同じく三年前に発見されたのは、ナルトだったという。

サイは再びその時に思いを馳せた。

サスケを連れ戻せなかったナルトと、ナルトを殺さなかったサスケ。

どんな思いで、二人はここにいたのか……。

そしてやはり、同じ刻に戦っていたというナナに思いは行き着く。

『意外と……おせっかいだったんだね……』

再びあの青白い顔がサイの脳裏によぎったとき、彼は視界の端に白い影を捉えた。

それは醜く崩れた崖の際で白いしぶきを当てられ、今にも消えてしまいそうにフラリ

……揺らめいた。

「ナナ……!!」

かつて出したことのない大きな声で、人の名を呼んだ。

そして、あと少しの所で濡れて黒ずんだ岩に倒れかけた細い身体を抱き留める。

「ナナ!!」

人間の体温ではなかった。

それは決して、冷たい飛沫に濡れそぼったせいなどではなく、説明のつかないコトの顛末であると嫌がおうにも悟ってしまふ。

思わずゾツとし、蒼白の頬に手を置く。

「ナナっ!!」

だがナナは、ゆっくりと凍った睫毛を揺らした。

その目を見て、秘かに息を呑んだ。

かつて見た漆黒ではなく、瑠璃色だったからだ。

しかも曇りかけている。

が、サイはナナの名を呼び続けた。

「ナナ！ わかる?」

ありえない冷たさでも、ナナはちやんと彼を見た。

そして、彼の不安をなだめるように微笑した。

「……サイ……」

紫色の唇から洩れた掠れた声に、サイはようやくやく息をつく。

「大丈夫?」

動揺を押し殺し、ナナの頬の水滴をぬぐう。

「大丈夫……だよ……」

と、ナナは弱く笑んだ。

「少し……遠くへ……行つてた……」

その意味がわかるはずもなく、ただ彼は、死人のような身体を抱えなおした。

「急いで火影様に診てもらおう」

が、ナナは視線を宙に彷徨わせ、穏やかに呟いた。

「私……姉を……殺した……」

サイの瞳に映るナナは、悔恨も懺悔もなく、かといって歓喜や安堵があるはずもなく、ただ、それが必然であったかのように淡い表情を浮かべていた。

「姉を……殺したの……」

ナナはもう一度呟き、サイに視線を合わせた。

その瞬間、サイは身体を中心に冷たい柱を感じた。

まるでナナの体温が彼を凍えさせたように。

「ナナ……僕も……」

そして彼自身も“過去”に吞まれそうになった時、白い飛沫がナナの頬に飛んで伝つた。

それがまるで、ナナの零した涙のように見え、彼は再び言葉を失くす。

ナナは彼の言葉を探らず、ゆっくりと瞼を閉じた。

「ごめん……サイ……」

徐々に力が抜けていく。

「疲れ……ちやつた……」

サイは腕に重みを感じたことで、ようやく我に返る。

そして飛沫がまたナナの頬に飛んだとき、彼はナナを抱えてその場を去った。

望み

自らの術で腕を負傷したナルトを自宅に送った後、サクラは再び木ノ葉病院にとつてかえした。

すでに日は暮れていた。

向かったのは、ろうかの端の一室。ナナが眠る場所だった。

サイに背負われて集合場所に現れたナナの顔は蒼白で、呼吸しているのかさえも定か
でなく、まるで死人のようだった。

三年前、カカシに抱かれて里に帰りついたナナの姿が否応なしにフラッシュバックし
た。

幸い、あの時のような目立った怪我はなかった。

医療忍術も学び、あの時より冷静な診断を即刻下すことができた。

ナナはただ、チカラを使いすぎて眠っているだけだった。

呼吸も拍動も弱ってはいたが、異常はなかった。

ただ……。

それでも未知のチカラを使った上での結果であって、異常な体温の低さや精神の状態はわかりかねた。

改めて、ナナが相手にした者と、ナナの持つ血の不明瞭さを実感した。

「サクラか？」

突然、ろうかに知っている声が響いた。

「シカマル……あんた、今日は安静にしてなきやだめって……」

暁との戦闘でチャクラを使い切り、今夜は病室での安静が言い渡されているはずのシカマルだった。

「……ナナの様子、見に来たの？」

決まり悪そうに目を逸らした彼に、サクラはそう尋ねた。

シカマルは頭に手をやり、ぶつきらぼうに「まあな」と答えた後、言った。

「ちようどいい、お前に『聞きたいこと』と、『話しておきたいこと』がある」

サクラはそれがナナの事であると直感し、無言でうなずいた。

そして病室の扉を開けた。

やわらかいライトの灯りが、ベッドを灯していた。

「いつ頃、意識を取り戻しそうなんだ？」

シカマルが尋ねると、サクラは首を振った。

「そうか……」

ため息をついた後、シカマルは呟いた。

「『特殊な術』だからな……わかるわけねーよな」

相変わらず、ナナの顔に色は無かった。

サクラはナナの脈をとり、ほっと息をつく。

「安定してる、心配ないわ……。体温はまだ低い状態だけど……」

「そうか……」

二人は同時に、傍らの椅子に腰を下ろした。

「それで……」

ナナを見つめながら、先に口を開いたのはサクラだった。

「聞きたいことって？」

躊躇うのは『面倒くさい』とでもいうように、シカマルはすぐに言った。

「前の任務で、ナルトの『九尾のチカラ』は暴走したのか？」

サクラは彼を見た。

彼の口から『ナルト』と『九尾』が並列で出ることには、何の違和感もなかった。

今やナルトの腹に九尾が封印されていることは、仲間たちの中では暗黙の了解になっている。

ただ、その事実をシカマルが言い当てていることには驚いた。

いくら先読みの上手い彼でも、遠く離れた場所で彼の知り得ぬ力で戦う者のことなど、わかるはずもない。

「どうして知ってるの？」

だからサクラはそう尋ねた。

と、彼女の予想もしない答えが返って来る。

「ナナが言っていた」

二人は再び、ナナの静かな寝顔を見た。

「ナナが……どうして……？」

サクラはわずかに胸騒ぎを覚える。

と、シカマルは目を伏せ、あの地下書庫であつたことを語った。

突然、胸を押さえて苦しんだナナ。

それでも「心配ない」と笑ったナナ。

ひどい汗、紫色の唇、下がる体温……。

何もできずにただナナを抱えていた自分。

そしてようやくそれが治まったとき、ナナは言った。

『ナルトの力と、私の血は……繋がってるの……』

「『繋がってる』……って……?」

サクラは破壊衝動に駆られて見境なく暴れるナルトを思い出す。

続いて、サスケを取り戻しに行った時の、カカシに連れられて来たナナのおぞましい傷の場所を……。

「ナナの心臓の上……そこに九尾を封印するための『刻印』が在った……と言ってた」

「……『刻印』……? 九尾を封印するって……?」

一体どうして……。

うつむくシカマルにそう言いかけて、サクラは口をつぐむ。

残念なことに、その答がはつきりと脳裏に浮かんでしまった。

「まさか……和泉の力で……?」

シカマルはうなずきもしなかった。ただ黙って、両の手を握り合わせた。

サクラは息を止めた。

ナナが絶滅したときされる『和泉一族』の人間であると知ったとき、はつきりいつてピンとこなかった。

ナナの特異な技を見知っていたわけでもないし、だいたい和泉一族自体が『伝説上の生き物』という認識だった。

彼女らは勿論、その親、いや、祖父母の世代すら、彼らはおとぎ話の中の存在という

認識があたりまえだった。

だから、ナナがその一族の血をもち、『死んだはずの姉』と戦って死にかけた……と知らされても、完全に理解できるわけではなかった。

だが、

「ナナに『自分は和泉一族の末裔だ』と聞かされて、オレも一族についての資料を漁った……」

シカマルは疲れた笑みで言った。

「木ノ葉図書館の地下資料庫に忍び込んで、探しまくった……。だが、さすがに里……いや『国レベル』の機密らしく、誰でも知ってる『おとぎ話』くらいしか見当たらねえ」

サクラはシカマルの横顔を見た。

考えたことは、二人とも同じだった。

『和泉一族』とは如何なる存在なのか……。

「お前のことだ、火影の司書室で資料でも漁って、和泉一族について調べたんだろ？ 何かわかったのか？」

サクラは普段は面倒くさがりの彼が向ける、苦悩に似たまなざしを受け止めながら答えた。

「他の種族には扱えない術を持つ、陰陽師の一族……」

できるだけ淡々と、一般的な『おとぎ話』の解釈を述べる。

その特異稀なる力を持った一族の歴史……その栄華と衰退。

そして、現代における彼らの神秘性と役割。

外部が記した文献だからこそ、それは手に入りやすい情報だった。

だが、二人の知りたいのはもつと先だった。

本当に知りたいのは、『和泉一族が何者か』ではなく、『ナナが何者なのか』である。

「これは、かなり古い忍術入門書に書いてあったんだけど……」

サクラは火影の居ぬ間にこっそりと探し当てた、ボロボロの書物に書き記されていたことを告げる。

「結界術、封印術、幻術、口寄せの術、分身の術はもちろん、火・土・雷・水・風の性質変化を要する忍術はすべて、和泉一族の陰陽術をその祖とする……。ここまでは他の書物にも書かれてるし、知ってる人は知ってるわ……。でも、続きがあった」

「続き……?」

サクラはもったいぶらずに言った。

「和泉一族の人間は、すべての性質変化を持つ……」

「すべて……?」

寝息すらたてないナナの静かな寝顔。

その、まだあどけなさすら残す少女の中に、『最強の血』が流れている。

「そりゃあ……現存することが世間に広まれば、その『血』を求める輩が出るだろうーぜ……」

シカマルは軽い口調でそう言った。

が、その眉間の皺が深くなっていることは、サクラの目にも明らかだった。

自分たちとは完全に異なる存在……。

知れば知るほど、成長すればするほどに、それを目の当たりにさせられていく気がした。

「ナナは……風遁を使つてるところしか見たことないけど……」

「今のところ、使えるのは風の性質変化だけだっただけだろ……」

サクラは小さく微笑した。

ナルトも同じく、風の性質ということがわかったばかりだ。

偶然か……必然か……。

「それで……ずっと考えてたんだけど……」

サクラは小さく両手を握りしめて言った。

「その和泉一族のナナが、なんで極秘で木ノ葉に来たのか……」

シカマルは大きいため息をついた。

「ま、当然考えるところはそうなるな……。特殊な血を持ち、外界と表立つた関わりを避けてるはずの一族の子供が、何で忍の里に居るのか……」

少し風が強くなり出したのか、外で木が揺れる音がした。

サクラはつられるように窓の方を見る。

カーテンに映ったナナの影が、なんだか薄い気がして、また拳を握った。

「里の機密事項に違いないから、火影様やカカシ先生には聞けなくて……。私、里のはずれの『和泉神社』に行っただけけど……」

眩くようにそう言うと、シカマルは意外にもこう言った。

「ああ……。オレも行ったぜ……」

二人は顔を見合わせた。

そして結果が同じだったことを悟って溜息をつく。

そこに居た老婆は、何一つ気の利いた事を言わなかった。

「でも……」

サクラはナナに視線を戻した。

言葉が喉の奥に引っかかった。

「だが、その理由がわかっちゃった……」

シカマルが代わりに、かすれた声で呟いた。

「どうしてっ……」

言いようのない感情に揺さぶられ、サクラは歯を喰いしばった。

ナナが木ノ葉に来た理由。自分たちと出会った訳。

それが……。

「ナルトを封印するためだったなんてっ……!!」

どうしてナナが……？

二人とも、アカデミーの頃からナルトとナナが一緒に居る所をよく見かけていた。

根性の悪い隣のクラスのくのいちたちは、ドベ同士でお似合いだと陰口をたたいていた。
た。

ナナは、ナルトの隣りで幸福そうに笑っていたのに……。

自分たちがどんなにナルトを馬鹿にしても、励ますように、信じるように、彼のそばに居たのに。

「どうしてナナが、そんなこと……!!」

それを背負って、木ノ葉に連れて来られたのか、送り出されたのか……。

シカマルは、少し躊躇って……だが、決心したように低い声で言った。

「それが、ナナが産まれた理由だからだ」

「え……………？」

サクラは両目を見開いた。

シカマルはサクラからもナナからも視線を逸らし、まるで呻くように言った。

「『そのために産み出された』と……、『それが存在理由だった』と……ナナが言っていた……………」

華奢なナナの笑顔……一瞬ふわりとサクラの胸を過ぎつては消えて行った。

「…………それをナナは……『姉』との戦いで奪われた……………」

誰かを殺すために産まれ、その誰かとかげがえのない仲間になり……そしてその存在理由を実の姉に奪われた。

ナナはたったひとりで、それを抱えていた。

今更ながら、ナナの苦悩がサクラにリンクした。

大切な仲間を、いつか殺さなければならぬ日が来るかもしれない……そう思いつつ、ナルト自身の強さを信じ、願ひ、覚悟も決めた。

ナナのことだから、罪悪感にさいなまれ、自分で自分を傷つけていたに違いない。

誰にも言えず、うつむくことすらできなくて……それでもきつとナルト自身に救われて笑うことが出来ていた。

「ナナ……!!」

何も知らず、ナルトの駄目っぷりを馬鹿にし、ナナの面倒を見ていたつもりの方が情けなく、悔しかった。

そしてそれを実の姉という人に奪われたナナは、何を思ったのか。

その戦いの後、発狂したかのようにナルトにしがみついたナナの姿、忘れようにも忘れられない。

心を失い、人形のようにうつろだったナナも。

あれは、こんな大きく深い傷を負ったから……。

どんなにそばにいても、理解してやることはできなかった。

「……ばかね……」

一粒、言葉と一緒に涙がこぼれた。

「サクラ……?」

「いつそナナが、そんな宿命に耐えられるような強いコじゃなかったら良かったのに……」

シカマルは小さく笑った。彼の同意だった。

いつそのこと、ナナが弱かったらよかった。

泣き喚いて、周りを傷つけてでも、自分自身を守ってくれるコだったら……。

そう思うと、そのあり得なさに自然と笑えた。

「『九尾のチカラ』を封印するなんて……ナナの身体には無理に決まってるわ」
目の当たりにしたからわかる。

ナルトの身体を喰らい尽くすかのような、禍々しくも膨大なチャクラ。

まだ完全に封印は解けていなかった筈なのに、破壊衝動に駆りたてられ、完全に理性を失った狂気。

「ヤマト隊長だつて『抑える』のがやつとだったのに……」

「こんな細工身体に『封印する』なんてな……」

それでも、『刻印』とやらを失ったことに対し、二人は喜べるはずもなく……。

また同時にナナを見つめてため息をついた。

やがて、

「ナナは……何を望んでいたのかな……」

そう呟いたサクラに、

「……ナナは、自分の『望み』なんて言わねえからな……」

シカマルは少し笑ってこう言った。

「ただそれを口にしたときは……」

サクラは彼の横顔を見た。

ナナを見つめる彼の視線は、大人びた影を帯びていた。

「仲間」としてそれを叶えてやりてえ……」

サクラはため息に似た微笑をこぼした。

「そうね……」

そしてそう呟いた時、ナナを思っただけ冷えた心が少しだけ温まった気がした。

対極

珍しく、夢はみなかった。やけに頭が冴えていた。

夢か現実か、もっと分かりづらい時空へ迷い込んでいたせいもある。見慣れた病室の天井は、『現実』そのものだった。

「おはよ」

あたりまえのようにかけられた声も、ちゃんと知っている。

「おはよう、カカシ先生」

ただ、〃さつき〃会った彼よりずっと大人で、右目も穏やかで、馴染みの姿だった。

「大丈夫？」

そつと彼が額に触れた瞬間、ナナは思わず嘖き出した。

「ん？ どうしたの？」

安堵しつつも戸惑うカカシに、ナナはさらに声を出して笑った。

「なんでもない」

起き上るナナに手を貸しながらも、カカシはそれ以上何も聞かなかった。

話したいことと懐かしさを、ナナも飲み込んだ。

姉が与えたあの時空が、これから先また胸を締め付けても、それでも彼らに出会えてよかつたと今は思うから……。

「ただいま、カカシ先生」

ナナは改めて彼に言う。

現実^{ココロ}で待つていた彼に。

「うん。おかえり」

やっと安心したように、カカシは椅子に座りなおす。

窓からさす朝の光が、以前と変わらぬ銀髪にそそいでいた。

「みんなは？」

「大丈夫だよ。けっこうキツかったけどね、ナルトとシカマルの活躍で『暁』を二人やった」

『暁』の名が出て、ナナは視線を落とさなかった。

ナナにはそれが『誰』か聞かずとも、『イタチではない』という確信があつた。

だから、気になるのは『彼』のこと……。

「ナルトは……修行の成果を出せたんだ……」

「ああ、新技がきまったよ。まだまだだけどね……」

旅の記憶を伝えたい、彼のこと。

「ただ、その新技が危険の高いヤツで……」

「大丈夫なの？」

「使いすぎると腕が使い物にならなくなる」

ナナはここで視線を毛布に落とした。

が、カカシは続けた。

「ま、本人もわかっていると思うけどね」

そう……ナルトはきつと、わかっているも正面から向かっていくのだろう。

もう二度と腕が上がらないとしても、忍の道を断たれると言われても、火影の夢が消

えかけても……。

それでも、未来を信じてまっすぐに突き進む。

決して折られず、自分に負けず……。

ナナの口元に、自然と笑みが浮かんだ。

そういう人に、会ったばかりだ。よく似たあの人に。

「ナナ……？」

黙りこんだナナにカカシが声をかけたとき、

「ナルトは今木ノ葉病院こばに居る？」

無性に会いたくなってそう言った。

はやく、あの金髪と蒼い瞳に会いたかった。

会って伝えられるわけではないが、どうしても会いたかった。

「いや、自宅療養中だよ。けど、あとで火影様の集合がかかることになってるから会えるよ」

が、カカシのその言葉に、ナナは笑みを引つ込める。

カカシの物言いには、さりげなくひっかかるモノが隠されていた。

「集合……？　あとで………？」

大した言葉ではない。

が、やけに気にかかって聞き返す。

するとカカシは、苦笑しながら言った。

「火影様から聞かされる前に、お前にはオレから言っておこうと思ってネ」

やはり……。

軽い口調のどこかに、何かが隠されている。

ナナは軽く身構えた。

「大蛇丸が殺されたらしい」

カカシはもったいぶらず、あつさりと告げた。

「大蛇丸が……死んだ……？」

だが、次第に彼の右目は色を濃くする。

「ああ……」

あの醜い不死の追及者を、誰が殺したというのか。

疑問に思うのは当然だった。

が、カカシの答えを聞くまでもなく、ナナは真実に辿り着く。

「サスケ……が……？」

大蛇丸の居所を知っていて、彼ほどの忍を殺せる者といって、浮かぶ名は皮肉なこと
にそれしかなかった。

カカシはゆっくりとうなづく。

その肯定に、残念ながら喜びはしなかった。

確かに大蛇丸が死ねば、サスケが身体をのつとられることはなくなる。

その事態の回避には安堵した……が

「でも……」

彼との距離に、なんら変わりはない。

彼の『目的』は、ナナに傷として刻まれている。

「サスケは戻って来ないよ……」

その傷が痛むだけだ。

「……おそらくサスケは……うちはイタチを狙って行動を開始するだろう……」
同じ傷を持ったカカシが苦しげに言った時、
「あの日」のうちはのけん騒が耳に鳴った。

一族の子の誕生を喜び、祝っていた彼ら……。

そして、誰より幸福そうだったイタチ……。

「オレたちは、『サスケ』だけじゃなく、そのサスケが狙う『イタチ』も追うことになる」
ナナをそこから引き戻すように、カカシは淡々と告げた。

「ヤマト率いる新カカシ班と、オレがキバたちを率いて2小隊で行くよ」

ナナは彼に応えるように視線を上げた。

「イタチを拘束するための、ベストメンバード」

そこにナナの名は連なっていない。

「和泉」の名を持つナナは、未だ木ノ葉上層部による監視下にある。正規の隊に入る資格はなかった。

が、カカシの想いはわかった。

「イタチを知っている」と告げたときから、彼にはナナの過去を背負うはめにさせてしまったから。

「イタチは強いよ、先生」

だから、ナナは笑った。

「そうだね」

カカシも諦めたように笑んだ。

それは続きをうながすでもなく、ましてイタチに関する情報を聞き出すとすのもなく、ただ知らされた事実に対する諦めのようなのだ。なぜならそれは、どうしようもない『過去の事実』だったから。

今までそれを口にするのことに対し、ナナは怯えていた。

一族から『禁句』だと釘をさされていたからなどではない。

その事実が、木ノ葉や火の国をも困惑させるからというわけでもない。

ただ、ナナにとって、サスケの前でその事実が禁忌であったから明かせなかった。

その怯え。

「先生」

ナナは今、それを振り払おうとした。

あの時空中で出会った、清く美しい者たちに恥じないよう。

「私とイタチは、許婚だったの」

カカシは瞳の色をいっそう濃くした。

「木ノ葉や火の国の権力を握るため、うちとは和泉が極秘で結んだ『契約』だった」
ある程度の予想はしていたのだろう。

カカシの表情には変化がなかった。

ただ悲しげにナナを見守っている。

だからナナは、今まで口にできなかつたことが嘘のように、淡々と語る。

「だから私は3つの頃からイタチを知っていた」

窓の外を2羽の小鳥が飛んで行った。

それを見送ってから、ナナは再び口を開く。

「ただ九尾を封印するために産み出され、そのための『道具』として育てられていた私にとつて、イタチはたったひとつの『外の世界』だった」

誰にも語つたことのない記憶。

懐かしくも、どこか虚しい過去。

カカシは黙って聞いていた。

「私を怒まず、憎まず、恐れない……たったひとりの人間^{ヒト}だった」

偽りない言葉を彼に伝えて、改めて実感する。

「イタチは私の……」

伝えてどうなるともわからないが、ナナは言葉を押し出した。

「……私のすべてだった……」

カカシの右目に映る己が歪まずに在ったから、ナナはまた笑えた。

「だからね、死んで欲しくなんかないの」

今更……偽っても仕方ない。

カカシはこの心を責めたりするような師ではない。

それに甘えるつもりで、ナナは何重にも鍵をかけていた扉を開いた。

「私は、イタチが一族を殺したなんて信じない」

初めて口にする言葉も、何度もその扉の奥で叫んでいたから。

「ナルトを殺そうとしているなんて信じない」

愚かと思われようと、信じるイタチの姿もまた、そこに居続けたから。

「だってイタチは……私にすごく優しくかったの」

それはただの過去じゃなく、想い出という淡いものでもなく、ナナにとっては未だ現実。
実。

揺るがぬ事実。

「サスケの話も……たくさん聞いた」

忍の話も、木ノ葉の話も、イタチはナナのせがむままに語ってくれた。

イタチの語るサスケに、幼いナナは焦がれた。

「弟」の話をする「兄」の顔を、忘れるはずがない。

「だから……」

信じない。

これがナナ以外の全ての人間にとつて「真実」だったとしても、絶対に信じない。たとえそれが愚かな結果になろうとも、まして総意に背くことだとしても。

「（めんなさい）」

ありきたりの6文字を、ナナはカカシに言った。

許されるはずもないのにカカシに甘えた。

カカシは深く息をつき、目を伏せた。

ナナが開いた扉の奥を見せつけられ、それに肯定も否定もしなかった。

ただ、かすかに悔しそうな語気を含んだように、呟いた。

「なぜ……和泉は『うちは』と？」

ナナは膝の間で組まれた彼の両手を見た。

軽く握られたようで、そこには確かにやるせなさが滲んでいた。

「警務部を仕切っていたとはいえ、うちははずでに全盛期より衰退していた……。他に和泉が手を組むべき一族はあつたはずだ」

それが何なのか、ナナは知っていた。

なぜ……ナナとイタチが出会わなければならなかったのか。

ただの偶然か、いたずらに引き合う運命だったのか……。

それを思っ、カカシは目を伏せている。

ナナはまた微笑した。

そして、答えた。

「『対極』だからだよ」

その短い言葉に、カカシは案の定顔を上げた。

「対極……？」

「和泉一族の人間には一切の幻術が効かないし、一族の特殊な陰陽術は写輪眼に破られる……」

一族固有にして最強の術が、唯一効かない相手……。

決して破られない高度な陰陽術を、うちのは眼は見切ることができる。

そして、決して解けない強力な幻術を、和泉の血は無効化する。

互いに相反する血族。

うちは一族に関する資料は、本家の蔵には無かった。

教えてくれる大人もいなかった。

ただ、乳母がぼろりと口を滑らせたことがある。それに、イタチは真実を知っていたようだった。

「イタチがあんまり教えてくれなかったからよく知らないけど……」

ナナは彼の、額当てに隠された眼を見つめて言った。

「『万華鏡写輪眼』の前では、どんな高等陰陽術も効かないみたい」

それを使えるようになったというカカシ。

うちはの血を持たぬ彼が操る眼。

「だからこそお互い、対極の敵と手を組んで最大の弱点を無くし……里や国をとろうと企んだんだと思う」

カカシの眼は何を見切っただろう。

和泉とうちはの大人たちの腹黒さか……それとも、それに巻き込まれたイタチとナナの哀れさか。

いずれにしろ、この事實はうちの木ノ葉へ対する造反だった。

そして、自ら俗世を離れ伝説の存在と化していたはずの和泉の蜂起、さらには木ノ葉への侵犯ともとれた。

片方が滅びた今、その事實は煙と消えた。

残った一方が、ただひたすらその過去を隠そうとしているだけ。

当人のナナも、堅く口止めされていた。

が、知っていて言わぬも木ノ葉からしてみれば罪……。

「今まで黙っていてごめんなさい」

が、カカシは穏やかな視線をよこした。

「お前は悪くないよ」

その言葉は、少し居心地が悪かった。

「私……今度こそ火影様に報告しようと思つて……」

償うようにそう言う。

今更……ではあるが、『イタチを知っている』という事実だけでも、報告せねばならぬ

現状になっている。

だが、

「いや」

やっとなつた決意が、カカシにやんわりと包み込まれる。

「後でオレから五代目の耳に入れておくよ」

償うことなどできない、長い沈黙だったはずなのに、

「お前のもつと、自分の意志で動いてんだ、ナナ」

カカシはそれをまとめて拾い上げ、別のものを指さす。

「そのためにオレは、ここに来ただからね」

彼が示した別の何か……それはナナにもわかっていた。

『自分の意志』……。わかっている。

あの時空で彼らと出会い、それは確かに固まった。

決して強くはないが、ようやく固まった。

「お前ももつと、お前の思うままに生きてごらん」

カカシの手が、ナナの頭に乗る。

何度も繰り返し与えられてきたそのぬくもりが、ナナの意志を後押しする。

「オレは……ナルトやサクラたちも、いつでもお前の“仲間”だよ」

わかっている。

「……うん……」

今度こそ……声に出す。

傷つけることを怖れていても、想いを裏切ることを学んだ。

独りの自分を遠くから見つめる、悲しい瞳を知った。

怯えはもう、消えたから……。

「ありがとう、先生」

ナナは師に、思い切り笑んだ。

ひと包み

木ノ葉に雨が降り出した。

火影の指令を受けた2小隊8名は、里の門で出立の時を迎えていた。

ナナもまた、彼らを見送るべくそこに居た。

「みんな、気をつけて」

「まかしとけてばよ、ナナ！ 今度こそ、ぜってーサスケを連れ戻して来る!!」

ナルトは力強く言った。

「うん」

雨に濡れても、彼の金髪は少しも色褪せなかった。

むしろ高ぶった気持を受け、鮮やかに映えた。

「ナルト」

ナナは突然、彼の首にしがみ付いた。

「ナナ?!」

ナルト本人はもちろん、周りの者たちも突然のナナの行動に、息を呑んで固まった。

「ごめん」

が、ナナは一人、小さく笑いながら身体を離れた、
「……………ナナ……………」

一言「ごめん」とはにかむように言っただけで、ナナには何の弁解もなかった。
ただ、その表情は滴を受けながらも満足げだった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

彼らが霞みに消えるまでしばらく見送り、ナナはようやく向きを変えた。
独り取り残されて、雨の中をとぼとぼと歩く。

孤独な風を装って……………。

二人……………。

先ほどからこちらを見ている忍がいることは気づいていた。

目的はナナの『監視』に違いなかった。

差し向けたのは、「いずみナナ」の存在を煙たがる里の上層部。

知っていてナナは、うつむきながら火影邸へ戻る道をゆっくりと歩いた。

やがて、火影邸の門をくぐる頃には、視線は消えていた。

やれやれと思いつつ、ナナは執務室の扉を叩く。

中にはシズネと自来也の姿はなく、綱手独りだった。

「ヤツらは行ったか」

「ハイ」

綱手が「何」と「何」を指しているのか悟り、ナナは苦笑しながらうなづく。

綱手はうんざりしたように溜息をつき、椅子に座りなおした。

彼女の後ろの窓は、水滴で景色が滲んでいた。

ナナは笑みを収めると、火影である彼女に言った。

「実は……綱手様にお話があります」

その言葉を待っていたかのように、綱手は表情を変えずにナナを見た。

そして、

「私もお前に話がある」

そう言った。

「なんででしょうか？」

「お前の話から聞こう」

ナナは綱手の瞳の奥を探った。

彼女はそれを防ぐように、顎の下で手を組んだ。

「私……」

だからナナは、己の告げるべきことだけを口にすることにした。

カカシに甘えたときののように、あの時決意したように。

「私も、『サスケ奪還』と『うちはイタチ拘束』の任務に就かせてくれませんか？」
初めて伝える意志。

「私が監視下に置かれていることはわかってます。でも、どんな形でもいいから、その任務に加わりたいんです」

任務……と言ったが、そんな形式ばったものではなかった。

熱く滾るような衝動でもなかった。

むしろ、今更と呆れるくらいにあたりまえの願い……。

綱手もそれを知っていて、小さく笑った。

そしてまっすぐにナナを見つめながら尋ねた。

「お前がそれを決意した本当の理由は何だ？」

逃れられぬ『火影』の視線。

ナナはそれを受け止めた。今更だから、それを問われても仕方ない。
が、もう誤魔化すつもりはなかった。すでに怯えは捨てたから。

だから答えた。

「サスケとイタチを戦わせたくないからです」

綱手もまた、受け止めてくれるはずだった。

「姉を殺して……そう強く思ったからです」

少しの沈黙が流れた。

部屋に雨だれの音だけが響いた。

遠い空の向こうで雷鳴が鳴ったとき、綱手はまた小さく笑った。

「それで……か……」

「え……?」

そして立ち上がり、戸棚の戸をいきなり開けた。

「それでカカシがこれを置いて行ったのか」

「カカシ先生が……?」

ナナはかすかに身じろいだ。

振り返った綱手が手にしていた風呂敷包みは、ずいぶん古びたものだった。

もちろん、それには心当たりなどない。

『お前に必要かもしれないから』……と、これを私に預けて行った」

綱手は机の上にそれを広げる。

「私の話というのも、このことだ」

そこに包まれていたのは、黒い装束と犬の面、そしてひと振りの忍刀だった。

「これって……」

ナナは面にそつと触れた。

白塗りに朱で文様が入れられている。

「暗部の……う？」

それは木ノ葉の暗部装束だった。

「カカシがガキの頃に身につけていた暗部装束だ。ちょうど今のお前くらいの背丈のときにな」

ナナは、机に腰掛けて腕組みした綱手を見上げた。

「今は……このサイズの暗部装束は貴重なんだよ」

綱手は「もう作られていないから」と説明しながら、通常より小ぶりで軽量の忍刀を手にする。

「この刀も今じゃ貴重だ。こんな短いのを特注したのは、たぶん『うちはイタチ』以来だろうな」

まるで試すようなその言葉に、ナナは自然と顎を引いた。

「カカシ先生は……どうして私にこれを……？」

綱手はまた、まっすぐにナナを見た。

「アイツは何も言わなかった。ただ『ナナに必要なだろうから』としか」

あの右目が心に浮かぶ。

「今お前の意志を聞いて、私もカカシと同意見だと思ったよ」

綱手の瞳も、同じ光を浮かべていた。

「里のエラそうにしている上層部がでしゃばろうと、火影直轄部隊である『暗部』なら、さすがに口出しできない。私がお前を暗部に選定すれば、お前は私の命令でいかようにも動ける」

「綱手様……」

そう、確かにそれは綱手も思っていたことだろう。

だが、

「だが、私はお前を暗部に認定することを迷っていた」

綱手がそうしなかったのは……。

「私に、『諦め』や『迷い』があったからですよね……?」

ナナにそれがあったのと、ナナを案じてのことだった。

わかるから、ナナは目を伏せて笑った。

綱手もカカシも、さすがに苦難を超えて来た偉大な忍だとナナは改めて思う。

「お前に今、これを身につける意志があるのなら、私はお前に暗部としての命令を下す」

ナナは面を取り上げ、綱手を見上げた。

「もう……迷いません」

たとえまた、心が折られようとも……。

その先に絶望が待つていようとも……。

「行かせてください」

行かねばならない。

二人を戦わせないために。

「お願いします」

それが、己のエゴだとしても。

「ナナ」

綱手は深く頭を下げたナナに、細い巻物を差し出した。

「これは暗部の心得だ。本来ならその証として肩に刺青を入れるが、それもこれも省略だ」

窓をたたく雨が、二人を急かすように強くなった。

「ただちに暗部として、単独で『うちはサスケの奪還』もしくは『うちはイタチ拘束』の任務に当たれ」

ナナは姿勢を正した。

「お前にしかできないことがあるかもしれないから」

ナナにしかできないコト……。

綱手がそれに期待しているのかはわからなかった。

だが、ナナは力強くうなずいた。

「はい。火影様」

そして、カカシの使っていた暗部装束を風呂敷包みごと抱えた。

これを着て、いく度も死線を潜り抜けてきた彼の日々を思い、それに背中を押されるように、ナナはニコリと笑った。

「行つてきます、綱手様」

綱手は初めて複雑な表情を見せた。

「無理はするなよ……」

暗部相手に似合わぬ言葉と思い、ナナは苦笑しながら頷いた。

そして、ドアに手をかける。

後ろで綱手が、もう一度ナナを呼んだ。

「ナナ」

「はい」

一呼吸おいて、綱手は言った。

「お前が戦わせたくないと想うなら、戦わせるな」

火影としての言葉でないことは、ナナにも伝わった。

は、彼らはまだ知らないのだろう。

だから単純に、知り得ないから監視下に置きたがっている。

やはり自分の未知なる力を恐れているがためか……。

だがそれでも、火影は体裁を保ったまま願いを叶えてくれた。

ナルトたち正規の隊に投入するのではなく、火影直轄の暗部のひとりとして、任に就かせてくれた。

任務……、というにはあまりにも個人的な衝動であるにも関わらず。

カカシが「イタチとの関係」を告げなかったというのが本当かどうかはわからない。

が、どちらにせよ、火影は「個人的な衝動」とわかつたうえで任務として命じてくれたように思えた。

感謝の想いが胸に溢れる。同じくらい、安堵も。

これで……、やっと前に進める。

そう思う。

ずつと目を背けてきた。考えないようにしてきた。自分を偽って来た。

が、これで後悔せずに済むのだ。

たとえどんな道になろうとも……。

前に進む決心がついたのは、姉のおかげだった。

あの時空を超えた旅で、全部を思い出してしまったから。

初めからずっと抱いていた、己の疑問、怒り、悲しみ、イタチへの思い、サスケへの思い……、そして、願いを。

二人を戦わせたくない……。

やつと、願いを認めて口にすることができた。

止められるかはわからない。止める方法なんて知らない。

が、自分にできることを……。

(二人に会わなくちゃ……)

周囲に生き物の気配が無いのを確認し、川辺の茂みに向かって小さく「名」を呼んだ。

その声はもちろん滝の音にかき消された。

が、呼ばれることを待っていたかのように、茂みから現れるものがあつた。

それは、純白の毛をした三尾の狐だつた。

「ホクト……」

ナナは少し離れて止まったそれに、小さく笑う。

言葉は無かつた。

口にせずとも、その狐はナナの意志を知つたかのようにかすかに尾を揺らした。

そして、自らの姿をぼんやりと燻らせた後、それは目の前で待つナナと同じ姿になった。

ただし、身につけているのは暗部の衣装ではなく、白い袴だった。

「よかった……うまくいったみたい……」

独り言のように呟いたのは、白い袴の“ナナ”だった。

「こういう術は苦手なんだよな……」

同じ独りごとを続けたのは、暗部装束の“ナナ”だった。

そして二人のナナは、同時に同じ印を結ぶ。忍の印ではなく、陰陽術の印だった。

すると、二人のナナの周りには、瞬く間に瑠璃色の蝶が数十匹現れた。

はたから見れば、荘厳な滝の前に瑠璃の葉が舞っているような、美しくも狂気じみた光景だった。

しばらく蝶たちは二人の周りをヒラヒラと舞い、それから散り散りに飛び去った。

また二人だけになり、暗部のナナは目の前の“自分”に呟いた。

「必ず……二人を見つけないきゃ」

白袴のナナも呟いた。

「ナルトたちが出会う前に……」

同時にうつむき、同じ強さで拳を握る。

「止めなきや……」

「戦いを……」

そして二人は同じ声で、苦しげにつぶやいた。

深淵

薄闇の中、サスケはすぐ側にあつた。壁に手をついた。それは彼の傷ついた手を受けて少し窪む。

デイダラが自爆した瞬間、サスケは大蛇「マンダ」を口寄せした。

ここはその腹の中……、異空間だった。

「くっ……」

全身を激痛が駆け巡った。

ギリギリのタイミングで退避したものの、受けた傷は浅くはなかった。

「くそっ……!」

再び身体は力を失い、バランスを崩す。

……と。

「……………?!」

何かが身体を受け止めた。誰も居るはずのない、異空間だというのに。しかし彼の眼には、暖かく彼の体を支える淡い光が見えていた。

それは徐々に光を弱め、逆に形を成していく。

視界の端に、瑠璃色が舞っては消えた。

それとともに、視線を脇にやった。

懐かしい香りがしたから、それがどんな姿へ変化するのか知っていた。

「何しに来た……」

身体を離しながら、サスケは低い声で「実体」となったそれに言う。

「……アナタに……会いに……」

強張った声で、だがきつぱりとそう答えたのは、白い袴姿のナナだった。

サスケはわずかな間を置いて、冷たく言った。

「オレはお前に用はない」

そしてナナから身体を離し、「壁」にもたれて座る。

「ひどい傷……」

ナナは彼の隣に膝をつき、たもと袂から薬を取り出す。

その薬の入れ物に、サスケは見覚えがあった。

「安心しろ……」

彼はこちらに伸ばされた手を掴み、残酷な笑みを浮かべて言った。

「『暁』とやり合ったが、イタチじゃない」

ナナの手から、葉が落ちて転がった。

サスケの言葉にはじかれたその手は、彼に押しやられるままだった。

硬直したナナは、やがて彼に触れることを諦めたかのように息をつき、両手を握り締めた。

「オレに会いに……と言ったな」

サスケはナナを見ぬまま言った。

「今さら何の用だ？」

かすかに震えるナナを横目に、声を少しも和らげず、皮肉るように言った。

「そんな術まで使って」

白い袴の袂が揺れた。

躊躇うように息をついてから、ナナはまた強張った声で答えた。

「私は……」

何かと戦うように、必死に答えていた。

『イタチとサスケの戦いを止める』と……そう決めたの」

その両手は、今度は膝の上で握られた。

「それを口にする『勇氣』が……やつと持てたから」

サスケはようやく、うつむいて己の言葉をかみ締めるようにしたナナを見た。

そして切り捨てるように言った。

「無駄だ」

ナナは歯を食いしばった。

「お前には止められない」

「叶わなくても……」

サスケが言い終わらぬうちに、ナナは搾り出すように声をあげた。

その双眸は初めてサスケの眼を見つめ、燦るものを露にした。

「そうすると決めたの……!」

「やっど持てた」という勇気を……意思を……決意を……、ナナは苦しげに、悲しげにサスケにぶつけた。

「サスケにイタチは殺させない……! イタチにサスケを殺させない……!」

サスケがそれらを受け止める間も無く、ナナは溢れさす。

「それが私の願いだから、叶わなくても止めるの……!!」
激しい心の揺れ。

ナナがそれをサスケの前で晒すのは二度目だった。

一度目は、姉が死んだことでナナの感情が溢れ出た。

ヒトリで抱え込んでいるようなナナに苛立ったサスケ。

自分の方こそヒトりで傷ついているくせに、優しいサスケに苛立ったナナ。

だがあの時とはずいぶんと遠く離れた場所に、二人は来てしまった。

ナナの苛立ちの本当の意味を、サスケは知ってしまった。

だから……。

「アイツの前に立ちはだかるなら……お前も殺す」

あの時とは違う苛立ちを込めて言い放つ。

ナナも、覚悟を決めていたかのようにその言葉を受け止める。

「イタチを殺すことがそんなに大事?!」

怒り……。

「仲間を傷つけて、繋がりを断ち切って、こんなに孤独になってまで……、イタチを殺す

ことがそんなに大事なの?!」

苛立ちを通り越したそれが少しの躊躇いもなくサスケに向けられる。

「自分の命まで捧げて……、そんな復讐に意味があるの?!」

初めて明け透けになったナナの奥底。激しい怒りともどかしさが瞳に宿っていた。

そして、同じものがサスケの眼にも浮かんだ。

「お前に何がわかるっ?!」

だから彼は荒ぶる声でそう叫ぶ。

その手はナナの襟を掴んでいた。

「チカラも、イタチも」持つていたお前に、何がわかるっ?!

かつてなく荒々しい彼の手に、ナナは首筋を引きつらせる。

サスケは躊躇わずに吐き捨てた。

「お前の姉が言っていた」

ナナは目を見開いた。

「お前とイタチは『全てを持つていた』が、自分とオレは『全てを奪われた』……と」

目の前で露わになる傷の深さに、目が眩みそうになった。

が、醜い感情は止まらなかった。

「姉上……が……?」

「琴葉は……、九尾を収める道具として大人の都合で産み出されたくせに、『チカラ』も

『イタチの存在』も手にしていたお前を憎んでいた」

サスケの一言一言に、ナナの怒りが憐れにひしゃげられていく。

「お前ももつと『墜ちるべきだ』と……オレにそう言っていた」

どす黒い空気が、二人の間に流れる。

「結局……お前はアイツを消したんだろう? その『チカラ』で」

ナナは遂に、目を逸らした。滾る怒りは完全に失せていた。

サスケはゆっくりと、手を離す。

「サスケ……」

掠れた声で、ナナは呟いた。

「アナタも……私が……憎い……？」

サスケもナナから視線を逸らした。

「……そうだよね……」

ナナは、サスケも良く知っている、耐えるような声で……、そして傷ついた笑みを浮かべていた。

「私はずっと……サスケに嘘をついて……裏切ってきたんだもんね」

サスケはナナの襟元から離れたばかりの手を、密かに握る。

「姉にイタチと私のことを聞いて……私を憎むのは当たり前だよね」

ナナのまとう空気が震えた。

「……アナタの傷を見て見ぬフリをして……、アナタの知らないところでアナタのその目的を否定して……」

今度は弱く。

「だって……恐かったの……」

サスケは顔を背けたまま。

が、ナナはうつむきながら全てを搾り出す。

「イタチの話をして、サスケに拒絶されるのが恐かった……！」

初めての告白。

ここに来るまでにどれほどの時間が必要だったか。どれほどの勇気を持ち出したか。

告げられるサスケもそれを知っていた。

「アナタの憎しみはあまりに深くて……、私が知ってるイタチの話をしたら、こ・ん・な・ふう・にアナタに拒絶されるとわかってたから……！」

今の……二人の間の距離のように。

「だから……恐かった……！」

すぐ側に居るのに、向き合えない遠い心。

「私はサスケに……！」

消え入るようなナナの声。

「拒絶されなくなかった……！」

サスケは奥歯をかみ締めた。

「……だから……！」

最後に言うナナの言葉は聞かずともわかった。

「……ごめんね……！」

ナナはそれを咄くと同時に、サスケが掴んで少しよれた襟に触れた。

視界の端にそれを捉え、サスケは目を閉じた。

そして静かに息を整えた。

「……………」

が、先に言葉を出せたのはナナだった。

「でもっ……………」

少し躊躇い……………やはりまだ怯えながらも

「どれだけサスケに拒絶されても、『二人を戦わせたくない』と……………、そう言える決意がもてたから、私はこんな和泉の術を使ってまでアナタとイタチを探したの……………」

ナナは一息に言い切った。

「『もがいても、愚かでも、醜くても生きろ』と、最期に姉が言ったから……………」

よれた襟は、さらに深く皺が入る。

「だから私は……………どんなに醜くても、叶わなくても、最後までもがいて……………もがいて……………二人を止めると決めたの」

願いは悲鳴のように吐き出された。

決して強くなく、まっすぐでもなく……………、ただ苦しいばかりの、たったひとつの願いだった。

瓦解

ナナの願いは二人の間に冷たい余韻を残した。

それを鎮めるように、サスケは低く呟いた。

「……何故だ……」

眉間の辺りに鈍い痛みを感じていた。

「何故それほどオレたちに関わる……？ そんなにアイツの存在が大事か？」

「サスケもだよっ……！」

その痛みに抗おうとして出た、止めを刺すような皮肉の言葉。

ナナはしかし、間髪入れずに言った。

「サスケのことも、大事だよ……」

サスケは再び息を整え、閉じていた目を開いた。

「お前はイタチに捨てられ……オレもお前との繋がりを断ち切った。……それでも関わるのか?！」

二人は同時に視線を重ねた。

「イタチは私の前から去ったくせに……何度も私を助けてくれた……」
それはひどく歪み、ぶれ合った。

「サスケも……断ち切つてはいないでしょう……?」

二人の瞳にある闇が、互いを飲み込まんとするように。
が、サスケは先にそれを避けた。

「あの夜……オレは全てを断ち切つた」

冷えた声を取り戻し、言い捨てる。

「木ノ葉も……お前も……今のオレにとつては過去の繋がりだ」

だが、ナナはそのまま闇を晒し続けた。

「嘘だよ」

「嘘じゃない。今、お前の存在など邪魔な……」

「だって呼んだじゃない!」

彼の言葉を切り捨てるように、ナナは言った。

「サスケの心が私の名を呼んだから……、だから私はこうしてアナタを見つけたのに
……」

今ここに居る理由を、そう説いた。

異空間にも関わらず、こうしてサスケの前に現れたその訳を。

……ナナ……

サスケの耳に、己の声が聞こえた。

ダイダラの爆風とマンダの口寄せ……あの刹那の音が。

「私を……呼んでくれたでしょう……？」

……ナナ……

だが、

「ただの思い過ぎしだ」

サスケは冷めた口調で、『ナナの問い』と『己の声』に蓋をした。

「お前への想いはあの夜に終わった」

あえてあの夜、月の下で告げた言葉を思い出す。

あの時零れたナナの涙も。

「今となつては過去の話だ」

それを瞼裏に浮かべたまま、目の前のナナに言い捨てた。

奇しくも、ナナの顔はあの夜と同じように青ざめている。

「もともと……、お前はオレから全てを奪った男を“大切な存在”だと思っている」

ナナは唇を噛んだ。白い袴に爪が立った。

それでも容赦なく、サスケは言葉で鞭のようにしならせて打ち付ける。

「オレが殺したい相手を『死なせたくない』と想っている」

「じゃあ……」

ナナはうめくように言った。

「私もサスケにとつて『憎しみ』の対象ってこと……?」

サスケは答えなかった。

「だって……」

血が滲み出てそうなほど、袴には強く爪が食い込む。

「だってイタチは優しかったの……私に……」

「……………」

「姉に聞いたんでしよう? ああ頃の私にとつて、イタチの存在は『私の世界の全て』だった」

そしてナナがイタチへの想いを吐露するにつれ、サスケの拳も震えだす。

「別れを告げられてからも……何度も……何度も私を助けてくれた」

「……………」

「私が木ノ葉の忍になって、イタチは抜け忍で……、敵同士であるはずなのに」

「……………」

「私はイタチに、次に逢う時は『敵』だと告げたはずなのに……」

「……………」

「だから……私は……」

ナナの言葉が詰まった時、サスケは次の言葉を遮るように言い捨てた。

「見解の相違だな」

その濁きに、ナナは鈍い動作で彼を見る。

「確かに、アイツはオレにとっても優しい兄だったさ……。『あの日』までは……」

その視線をサスケは完全に無視した。

「だが……、あの日見せたのがアイツの本性だ」

「サスケは……それを信じるの……?」

おそるおそる尋ねたナナに、サスケは返事をしなかった。

ただ蔑むような視線で彼女を見た。

それが彼の答えだった。

「……………私は……」

ナナは震えながらも、それを受け止め言った。

「私は信じない……」

「だから言つたら。見解の相違だ」

「……………」

「オレとお前は、結局平行線のまま……。最初から同じ道は歩めなかつた」

彼の拒絶は少しの沈黙をもたらしした。

息苦しい時間はサスケが終わらせた。

「オレを止めたいのなら……今ここでオレを殺せばいいだろう」

二人の距離は、さらに開いていく。

「そんな」と……………」

そう答えるのが精一杯のナナに、サスケは容赦なく言う。

「オレはお前の『大切な』イタチを殺しに行く……。止めたいなら、今ここでオレを殺せ」

その声は、怒りすら渴ききり、

「できないのなら……………」

まるでため息のようだった。

「もう帰れ……………」

空気が疲弊しきっていた。

「じきにオレの小隊のヤツがこの『マンダ』を口寄せする……。外に出れば、またオレはイタチを探し、殺しに行く」

ナナは疲れきったように指先一つ動かさないうで、サスケの言葉を聞いている。サスケはチラリとナナを見た。

心が枯渴したかのように黙って座り込んでいる。

「今、オレを止めないのなら……」

サスケはゆっくりと立ち上がった。

不思議と、全身の傷はひとつも悲鳴をあげなかった。

「二度とオレの前に現れるな」

吐き捨ててナナを見下ろした瞬間、ナナはゆっくりと彼を見上げた。

その顔は脆く危うげに見え、サスケはすぐに背を向けた。

「二度と……？」

後ろでナナが呟いた。

それが不思議と耳元で囁かれたように聞こえ、サスケは振り払うように歩き出す。

「二度……と……」

その背に、惚けたようにナナが繰り返して呟いた時、二人の居る空間が大きく上下に揺さぶられた。

サスケは身体のバランスを崩し、「壁」に手をつく。
「痛っ……………」

ようやく、鳴りを潜めていた痛みが全身を駆け巡った。

「…………オレの小隊のヤツがここを口寄せしたようだ……………」

揺れが収まると、サスケは振り返らずに言った。

「さっさと去れ」

すると……………」

彼の身体に再びの衝撃が走る。

それは空間の揺れではなかった。傷の痛みでもなかった。

「……………?!」

軟く、弱く、温かく……………」

大きくふたつ瞬きをして、彼はようやく気付いた。

背に……………ナナが居る。しがみ付いて震えている。

「サスケっ……………!!」

声にならぬ声で、ナナは言った。

「行かないでっ……………!!」

今までのどの想いとも違う類の、奥底から溢れ出る止めどないモノ。

「どうしても行くなら……!!」

最後に残されていたひと欠片を……ナナはサスケに差し出す。

「私を連れて行って……!!」

悲鳴のように絞り出して、ナナは泣く。

サスケの背は、ナナの感情に激しく揺さぶられた。

「……ナナ……?!」

そこに居るのは、意思を掲げ、怖れと戦い、拒絶に打ち勝ち、決意を口にしたナナではなく……。

「『あの時』……、私は嘘をついたけど……」

全てを剥ぎ取られ、たったひとつの感情だけで泣いている少女。

「……私の想いはっ……」

サスケの感情が追いつかないところで、ナナは嗚咽すら交えながら声を絞り出す。

「……『初め』から変わらないっ……!!」

「ナナっ……!?!」

危うさすら覚え、サスケはナナに向き合った。

ナナは肩を震わせ、うつむいたまま彼の腕を痛いほど掴む。

「止められなくてもっ……」

乾き始めた「床」に、いくつも雫が落ちた。

「その時」まで……「一緒にいさせてっ……!!!」

これがナナの言葉だと信じられず、これがナナの想いだと信じられず……、サスケは目を見開いて立ち尽くす。

「……サスケと一緒にっ……」

深く激しい感情を閉じ込めた心の最奥……。サスケはそこに引きずり込まれる。

そこを明け放ったナナは、まるで許しを請う子供のように、涙に濡れた顔でサスケを見上げた。

「私っ……!!!」

次の言葉を遮るように、サスケの指先がピクリと動いた。

そして意識など通わないところで、彼の手はナナの腕を掴む。

こわこわと……。触れたら壊れてしまうかのように。

「ナナ……!!!」

大粒の雫が、頬を美しく伝った。

サスケは新しい雫にそっと触れる。

その指は明らかに震えていた。

「お前っ……」

その刹那、二人の周囲が音を立てた。

二人が思わず息を止めて見回すと、「壁」に大きな亀裂が入っている。そして間髪いれず、再び爆音がしてさらに無数の亀裂が走った。

「サスケ……」

かすかに身を縮めたナナのすぐ後ろで、壁が剥がれ落ちた。

上方からも無数のカケラが降って来る。

「『マンダ』が限界か……い！」

この空間の主に、死が迫っていた。

「閉じ込められる前に出るぞ……い！」

一瞬だけ瞳を合わせ、サスケが先に歩き出す。

彼の傷ついた身体には、すぐにナナの腕が回された。

悲哀

何もかもが消し飛び、たった今地形が変わったような場所だった。

水月はそこで、大蛇丸の“マンダ”を呼び寄せる。

驚くことに、山のような大蛇の全身は焼け焦げ、すでに虫の息だった。

彼はその瞳を見るなり、大蛇丸すら扱いきれなかったというその大蛇に幻術がかけられていたことを知る。

「サスケも無茶するよなあ……まったく」

呆れたように呟く。

しばらくして、マンダの口元から人影が現れた。

サスケだけではない。もうひとりいる……。

「うわあ……、サスケのくせにボロボロじゃないか。時空間忍術で異空間に飛ばなきやならないほどだったの？」

水月は事切れたマンダにもたれかかって座るサスケに言った。

そして、その傷だらけのサスケに寄り添う見慣れぬ少女を見た。

「ていうか、このコ誰だよ」

サスケは一瞬答えを躊躇った。

そして不安げな視線を隠しもしないで自分を見つめる少女を向き、答えた。

「いずみ……ナナだ……」

水月は側にしやがみ、ナナをまじまじと見つめる。

「へえ……君がああ、いずみナナ」

ナナは白い袂を握った。

「大蛇丸の『妻』となり『母』となる人間……って聞いてたけど」

「水月……!!」

水月の言葉に、ナナは身を強張らせ、サスケは鋭く睨んだ。

「ごめんごめん……でも大蛇丸はサスケが殺したんだし、今となっては関係ないだろう？」
向けられた殺気を、水月は笑ってかわす。

「それで、このコをどうするの？ まさか連れて行くつもり？」

そしてそう尋ねた。

「木ノ葉の忍なんだろ？　なんか、そうは見えないけど……」

ナナは再び不安げにサスケを伺った。

サスケはしばしうつつむき、ナナに視線を合わせて口を開きかけた。

その時、

「サスケエ!!」

また二人……この場に現れた。

大柄な男と、眼鏡をかけた女。

「遅かったね、重吾、香燐」

水月が振り返ると同時に、二人は立ち止まった。

「誰だ、その女は」

香燐が低い声で言った。

「あの、いずみナナ」だつてさ」

水月が答えると、

「君がああ……」

重吾が感慨深げに眩き、香燐は口を引き結んで黙った。

空気がいつぺんに張り詰めた。

「連れて行くつもりか?」

「どうなの? サスケ」

重吾と水月がサスケを向く。

その隣で、ナナは香燐の鋭い視線を受けていた。

「……いつは……」

サスケは先ほど言いかけた言葉を出しかける。

ナナの視線が、サスケに戻った。

その時、

「お前、今さらサスケに何の用だ？」

黙っていた香燐が、ずいっとナナの前に出た。

「香燐……！」

遮ろうとしたサスケにも構わず、香燐はナナを見下ろして言う。

「お前、『うちはイタチ』の許婚だったんだろ？」

ナナは目を見開いた。

水月と重吾は顔を見合わせ、サスケは奥歯をかみ締めた。

「今さらサスケの味方についたのか？」

香燐は容赦なく、ナナに蔑むような視線を落とす。

「お前、『うちはイタチ』に何度も救われているんだってな。そんなお前が、そいつを殺そうとするサスケの味方になれるのか？」

彼女の眼鏡が光った。

「わ、私は……」

「いい加減にしろ、香燐……！」

初めて声を絞り出そうとしたナナに代わり、サスケが言った。
が、香燐は引かなかった。

「お前こそいい加減にしろ、サスケ！」

怒りを……いや、憎悪を露にする。

「目的」を忘れたのか？　うちはイタチを殺すというお前の目的のために、ウチらはお前について来たんだぞ?!」

香燐の後ろで、重吾も水月も黙っていた。

「わかってる……!!」

サスケは苛立ちを込めて言った。

そして、ゆっくりと立ち上がりながら、

「行くぞ」

そう言った。

「サスケ……!!」

離れ行こうとするサスケを、ナナは追おうとして立ち上がる。

が、伸ばそうとした手は、サスケの冷たい声に止められる。

「去れ……」

ナナが息をのんだのが、水月たちにもわかった。

「行くぞ」

サスケは再びナナ以外の者たちにそう言った。

「待って……！ サスケ……」

擦り切れそうなナナの声に、サスケはゆっくりと振り返る。

そして、二人の視線が再び重なり合った。

迷いを含む、サスケの瞳。

ナナの頬には、まだ乾ききらない涙の跡……。

互いがそれを確認した時。

「こいつはお前の『敵』だぞ、サスケ」

香燐が立ちふさがった。

「こいつはお前の隣で仲間のフリして笑いながら、お前からうちはイタチを護ろうとしてたんだぞ？」

嫌悪を込めた目をナナに向ける。

「サスケ、一度でもこいつからお前の願いを叶えるのを『手伝う』と言われたことであるのか？」

「サスケ、一度でもこいつからお前の願いを叶えるのを『手伝う』と言われたことであるのか？」

「サスケ、一度でもこいつからお前の願いを叶えるのを『手伝う』と言われたことであるのか？」

ナナの顔がひきつった。

サスケの身も強張った。

「いずみナナ……」

誰にも止められることなく、香燐はナナに向かって薄く笑いながら言った。

「お前、サスケについて来たとして、最後の最後でうちはイタチのほうにつく気じゃないのか？」

ナナの背が、ビクンと震えたのが目に見えた。

「ち、ちが……」

ナナはそうつぶやいたきり、自分を睨む香燐から視線を外せずに突っ立った。

二人とも、顔に色を失っていた。

息の詰まるような沈黙……。その後で。

「もう……いい……」

サスケはナナに背を向け、言った。

地を這うような重い声音で。

「……行くぞ……」

そして一歩、ナナから遠ざかる。

「……サスケ……!!」

反射的に、ナナはサスケに手を伸ばすが、

「もうオレに関わるな……!!」

全身に苛立ちを纏ったサスケが、振り向きざまにその手を払いのけた。

「……私はっ……!」

「もういい……!!」

ナナの叫びは完全なる拒否でもって弾かれる。

告げたい言葉は、もう一言も発することを許されない。

サスケの瞳は、悲しみと怒り……そして蔑みを交えてナナを見据えていた。

「お前もイタチを探していると云っていたな……」

必死に、己の荒ぶるものを抑えようとしながら、彼は言葉を吐き捨てる。

「オレたちより先にアイツを見つけたら、アイツの元に居ればいい……」

「……サ……スケ……?」

怯えたように袂を震わすナナに、容赦なく、

「オレがアイツを殺すのを止めるなら……」

憎悪の念と、

「オレの『前』に立ちはだかるなら……」

そして悲哀を隠しもせず……。

「……お前も一緒に殺してやる……!」

そう、告げた。

彼の眼はもう二度と、ナナを映そうとしなかった。

「行くぞ……」

そう言つて、総身を小刻みに震わすナナから遠ざかる。

「……サスケ……」

ナナの声は、千切れて荒れ地に落ちた。

「……待っ……!!」

かろうじて進みかけた足は、目の前に立ちはだかった香燐に遮られる。

「いい加減わかれよ」

眼鏡の奥に鋭い光を浮かべ、香燐は言った。

「今のサスケにとつて必要なのは、お前じゃない」

「香燐……行くぞ!」

「サスケに必要なのは、サスケを止めるお前じゃない」

「香燐!!」

「うちはイタチを守ろうとするお前なんかじゃない」

サスケの苛立ちは次の言葉を遮ったが、香燐は続けた。

「うちはイタチを殺すサスケの『手助け』となるウチだ」

ナナはぶちまけられた怒気に、思わずよろめいた。

「お前は初めからサスケにとって必要ないんだよ、いずみナナ」

「香燐! 行くぞ……!」

とどめを放った香燐に、サスケはついに怒りを露に振り返る。

その瞬間、彼の傷だらけの身体はバランスを崩した。

「サスケ!」

今度それを支えたのは香燐だった。

「……行くぞ……」

サスケは香燐に身体を預けたまま、呻くように言った。

二つの影は、あっけなくナナとの距離を開いていく。

水月と重吾もチラリとナナを見てから、二人を追った。

「……サスケ……」

ナナはひとり呟いた。

水月が振り返った瞬間、傍のマンダもとうとう消え失せた。

なにもかもが消し飛んだその荒れ地には、ナナ独りが残された。

「……サスケ……」

ナナは声にならぬ声で呟き、力尽きたように膝をついた。

涙の跡に、また新しい滴が流れた。

そしてもう一度彼の名を呟いたとき、その震える身体は儚く風に溶けた。

忍道

あとからあとから溢れ出る涙を止めるすべも知らず、ナナは声も出さずにうずくまっていた。

膝にじんわりと熱い雫が染み込む。

やつと……。

初めて伝えた言葉に、後悔はない。

己自身に驚くほど、素直に出た言葉。

ずっと前から心の奥に居座っていたのに、今さら気付いた想い。

やつと心から言えたのに……。

『お前は初めからサスケにとって必要ないんだよ』

香燐というあの少女の言ったことを、少しも否定できない。

イタチを殺すために生きるサスケにとって、初めから自分の存在など必要なかったの

だ。

むしろ、

『オレがアイツを殺すのを止めようとするなら……』

……そう……

『……お前も一緒に殺してやる……!!』

彼の憎しみの対象ですらある存在だったのだ。

イタチを大切に想い、護られ、“一族殺し”も信じようとしないうち自分が、サスケの隣で笑い、泣き……。ましてや“愛しい”と思うことなど、許されるはずもなかった。

想いを……持たなければよかった。

一緒に居なければよかった。

ナナは強く膝を抱える。

そして……。

(出逢わなければ……)

そう思いかけた瞬間、ぐつと奥歯をかみ締めた。

(意味はある……)

言い聞かせるように息を飲み込む。

(きつと、まだできる事はある……)

四代目火影と和泉成葉、そして幼いイタチ……。
彼らと出会ったことの意味を糧に。

(意志を……！)

ナナは乱暴に涙を拭った。

カカシの暗部装束を身にまとって、木ノ葉を出たときに掲げた意志を……。

「私はっ……」

サスケの拒絶に心が引き裂かれそうになっても。

頭が割れそうに痛んでも。

息ができないほどのどが締め付けられても。

「二人を止めるっ……!!」

無理やりに意志を吐き出し、ナナは傍らに落ちた面をとった。

涙はまだ留まるどころを知らなかった。

雫は面に落ち、流れた。

だが、歪んだ視界の端に瑠璃色の蝶を捕らえたナナは、血が滲むほど強く唇をかみ締め立ち上がった。

そしてもう一度涙を拭い、面をつけた。

肺が細かく痙攣していた。相変わらず怖れに竦みそうだった。

が、ナナは指を伸ばし、蝶を止まらせる。

この意志を……、決して言葉にしてはいけなかつたこの意志を、口にしたからには貫かねばならない。

全てを告げたカカシ、黙って認めてくれた綱手……、運命の連鎖に連なる四代目火影と和泉成葉、そして彼らに逢わせた姉。

彼らの想いに報いるためにも、醜くても、無様でも、無力でも、汚くても、進まねばならない。

足掻いてでも、生きねばならない。

敵わなくても、叶わなくても……。

「まっすぐ……」

チカラとなる、言葉を胸に。

「自分の言葉は曲げないっ……」

ナナは力の入らない足を無理矢理動かし、また竹林を駆け抜けた。

衝迫

「……イタチ……」

先に口を開いたのはナナだった。

「約束……破つてごめんね……」

予想通り……イタチは静かにこう答えた。

「それでよかった……」

「でも……」

かすかにイタチが笑った気がした。

「私が……連れて行つてと願つたのに……」

「選べ」と言つて去つたのはイタチだった。

だがあの朝、約束の場所にイタチが現れたのは間違いない……。

そこに現れなかった自分に対して、何を思ったのかもわかつてしまつていて。

「お前は来ないと思つていた」

大人びてそう言う彼に、ナナは手の面を握りなおす。

「でも……」

せめて、伝えなければならぬ言葉を言うべく、
「……連れて行ってほしいと思つたのは、本当だよ」

瞳を逸らさずにまっすぐ立つ。

「イタチは……」

縋りたかつた。護られたかつた。

誰にも言えない弱い言葉を、イタチにだけは吐けたから。

「ずっと、私のすべてだったから……」

そう思う心は、少しも変わらない。

『ずっと』、出会つたあの日からそうだった。

去られても、大罪を知らされても、冷たい紅の眼を向けられても……、それは少しも
変わらぬ想い。

が、イタチは目を伏せ、呟くように言った。

「お前は……サスケの元へ行くと思つていたが……」

彼の眼には、やはり全てを見透かされていた。

だからこそ……彼は選ばせた。

「木ノ葉に戻るとは……お前らしいな……」

そして今、軟く笑む。
ズキリと心が軋んだ。

彼を大切に想う部分が、キシキシと鳴いている。

「イタチ……」

あの朝……。

彼の待つ川辺の少し上流に立ち、耐えた水の冷たさが甦る。

彼の元へ “去りたい” と願う心に流されぬよう……。

サスケに “逢いたい” という想いに流されぬよう……。

挫けそうな心を流してしまわぬように。

「あなたが『選べ』と言ってくれて……」

だが、今はちゃんと地に足をつけている。

「生き返った我愛羅も……」

だから、頼ることを教えてくれた彼に、

「ネジ君も……そう言ってくれて」

心の深淵に向き合うことを教えてくれた彼に、

「私は自分がどうしたいのか……初めて知った」

まっすぐに向き合う。

「私はサスケに逢いたかった」

イタチは黙って聞いていた。

その顔は、昔、幼い自分を見下ろしていた時と同じ。

「それがわかつて……、あなたの待つ場所へも、サスケの元へも“逃げずに”いられたから、私は木ノ葉の忍として生きることを決められた」

流されずに立っていられたから、“なりたい自分”を選ぶことが出来た。

哀れでも、醜くても。

強がりじゃなく、ただ一歩足を踏み出せた。

「……それでいい……」

イタチは穏やかに言った。

また、ナナの胸が鳴いた。

なりたかった自分を、イタチは誰より知っていた。

「それで……、今日はオレに何の用だ？」

サスケと違う、大人びた口調。

ほら……知っている……。

「オレを……殺しに来たのか？」

ナナはもう一度手にした面を握りなおし、言う。

「私……あの後、姉を殺したの」

「……そうか……」

最初にイタチに別れを告げられた満月の夜を思い出した。

「それで、決めたの……」

イタチを失望させぬよう、精一杯強がって、涙を押し込めたあの頃の自分がリンクする。

「私は、イタチとサスケの戦いを止める」

そして、ほんの少し前に、同じことをサスケに告げた涙まみれの自分も蘇る。

「それが……私の願い」

イタチは顔色を変えなかった。

「ずっと言えなかった、私の意志だから……!」

ナナの声は、二人の周囲の空気を切り裂くように、切なく響いた。

それでもイタチは、僅かにマントを揺らしたただけで、黙ってナナを見つめていた。

「どうして……サスケを傷つけたの……?」

ナナは少し、顎を上げた。

「何で木ノ葉を抜けたの……?」

溢れ出す「問い」もまた、初めて口にするもの。

「ナルトを……九尾を狙うのはどうして……?」

今さらやつと口にする。

「一族を殺したのは……本当……?」

ずっと怖れていた言葉……。

イタチは初めて目を伏せた。

「お前は知らなくていいことだ」

「どうして?」

「……オレたちには関わるな」

彼の「今さら」な言葉に、ナナは思わず口の端を上げる。

「イタチが答えなくても……私はイタチを信じてる」

あたりまえのこと。

「信じてるけど……、本当にサスケを殺そうとするなら止める」

簡単なこと。

「私が信じるアナタを……殺そうとするサスケも止める」

ただ、ちよつと我が侘なだけだった。

木ノ葉の忍としても、サスケの仲間としても、口にできなかったというだけのこと。これがいずれみナナとしての言葉、意志、想いだった。

初めの誓いはただの強がりだった。

抜け忍としてイタチが現れるなら、木ノ葉の忍として戦う……と。

サスケの代わりにイタチを殺す……と。

自分と二人に誓ったのは、その想いを口にすることを怖れていたための、ただの強がり。

そして弱さだと気付いた。

「ナナ……」

やっと言い終えたナナを、まるでなだめるようにイタチは言った。

「また……強くなつたな……」

また、あの頃のような眼差しをよこす。

「サスケと戦わないで」

だからナナも、あの頃のように強く立つ。

「……もう遅い……」

イタチが何と言おうとも。

「オレたちの……呪われた歯車は廻り始めてしまった」

「私がそれを止めるから」

揺るがず、逸らさず、怖れずに。目の前の忌わしい齒車を見定める。

「たとえ敵わなくても……」

チカラが足りなくても。

「二人にとつて邪魔な存在だとしても」

『必要ない』と、知つても。

「私にとつては、何より大切な二人だから……!!」

イタチの眼に、一瞬だけ影が揺らいだ。

ナナは其れを見据えた。願いと想いを込めて。

「オレは一族を殺し、里を抜け、弟を復讐者にした男だ」

いくら冷えた言葉をぶつけられても、

「最初にお前が言ったように、オレはお前の敵だ」

目は逸らさなかつた。

「“止めたい”のなら……、サスケと一緒にオレを殺せ」

その代わり、無理に笑つてみた。

「サスケにも言われた……」

イタチの眼が、また揺れた。

「イタチが大切なら、イタチの元に居ればいいって……」

全身に、嫌悪と悲壮、蔑みを持って拒絶したサスケの言葉を、かみ締めながら呟く。

「そして『止める』なら……一緒に殺してやるって……」

小さな苛立ちが、腹の底に湧いた。

それを抑える術も義理も、もうナナにはなく……。

「私が死んで二人が止まるなら……さつきと私を殺してよ」

強さと共に現れるそれを、ナナは隠しもせずイタチに晒す。

「今さら『自分を殺せばいい』だなんて……」

鼻の奥がツンとした。

「……イタチがどれだけ優しいかを知ってる私に言わないでっ……!!」

強がりな誓いを立てた後も、何度も何度も救ってくれた彼の想いを、優しさを、信じ

て疑わないから、

「私……」

感情をむき出しにしても、それに懸ける。

「イタチと戦う瞬間まで、サスケと一緒に居たかったの……!!」

何も言わない、孤独なヒトに。

「そして『その時』が来たら、二人とも護りたかった……!!」

ひとつも打ち明けてくれないイタチに。

「叶わなくても、そうしたかった……!!」

深淵を覗かせてくれなくても、己のそれは曝け出す。

「だけどつ……アナタを殺すために生きるサスケにとって、アナタも護りたい私は必要なかった……」

傷も、想いも、苛立ちも……、全て知っている彼に、全てを伝える。

「……それでもっ……!!」

まるで魂をぶつけるように。祈りすら込めて。

「どんなに拒絶されても、私は……」

遠ざかるサスケの背に怯えても。

何も言わないイタチに怯えても。

「……二人を止めると誓ったから……」

まっすぐ……。

もう意志は曲げない。

「叶わなくても……」

最後にそう呟いた瞬間、冷えた涙の痕に、熱い雫が伝った。

それを……。

「ナナ……」

イタチの指先がすくった。

いつのまにか縮んだ距離。

ナナは面を手放し、彼のマントを握り締めた。

「戦わないでっ……サスケと……！」

懇願というより、威迫に近かった。

「戦わないでっ……!!」

イタチの眼に映る己の姿は、ひどく哀れな様だった。

が、まっすぐそれを睨みつけた。

醜くても、哀れでも、逃げることを辞めたかった。

「もう遅い……」

「わかってる……」

「サスケの憎悪は止まらない……オレはそれを受ける運命だ」

「それでも……！」

だから、今更なだめるイタチに向かって言う。

「それでも私が止める……!!」

イタチが……自分を傷つけまいとして、「関わるな」と言ったのは知っている。

いい加減、自分を氣遣う彼に対する感情は、齒がゆさと苛立ちでしかない。イタチはついに、諦めたように目を伏せた。

「どうしても……オレたちを止めたいというのなら……」

ナナは彼のマントを握りなおした。

「ここから西にある『うち』のアジトで、オレはサスケを待つ」

そして彼の言葉を聞く。

「そこで決着をつける」

冷たい光にも目を逸らさない。

「お前の意志を……もう揺るがせられないのなら……」

「……行かないで……」

涙が流れても、

「其処に来ればいい……」

「……行かないでっ……!!」

声が震えても……

「イタチっ……」

最後の願いを引きずり出す。

「お願い……!!」

イタチはまた、指をナナの頬に這わせた。
影が揺れた。

「……………ナナ……………」

そして、今までになく惨痛を露にし。

「お前には止められない……………」

無情の言葉で斬りつけた。

「……………だから……………其処には来るな……………」

二度と眼は合わさなかった。

「オレの……………」

彼はナナの手をマントから引き剥がし、

「それがオレの願いだ……………」

一歩、下がる。

「イタチ……………」

また一歩。

開いていく距離には、もううんざりだった。

「私、今度はちゃんと行くから……………！」

壊れそうな自身にもとどめを刺すように……………。

「絶対に二人とも死なせないからっ!!」

ナナはそう叫んだ。

イタチは最後に、また漫ろ笑む。

そして、彼の姿は弾けるように形を変え、乱れ飛ぶ数十羽もの鴉となった。

「イタチ……」

やがて鴉たちは、ナナを残して全て飛び去った。

疲れ果てたように膝を付いたナナは、突如、クナイを地に突き立てた。

「くっ……!!!」

無力さ……歯がゆさ……悔しさ……もどかしさ……。

湧き上がるそれらにチカラを奪われぬよう、強く、刃を突き刺す。

ひとつ、雫が手甲に落ちた。

それを拒むよう、ナナはぎゅっと目を瞑る。

瞼の裏には、遠ざかる二人の背……。

「行かなくちや……」

振り切るように、声に出して言ってみた。

「止めなくちや……」

イタチの分身が消え去った所を見据え、右手でむき出しの左肩を掴む。

結局、消えなかったこのクセ。

「叶わなくてもっ……っ！」

ナナは痕が残るほど強く、かつてイタチのサラシが在ったそこを掴み、吐き出した。そして再び、カカシから継いだ面を取り上げた。

第3章 血戦編

哀願

『サスケくんって、イタチに似てる?』

死に物狂いで森を駆けているというのに

『私もサスケくんと一緒に、イタチに手裏剣のお稽古つけてもらいたいな』

他の事を考える余裕なんて無いはずなのに

『サスケくんと私、どっちが強い?』

こんな時に限って

『ねえイタチ……』

幼い言葉が蘇る。

『いつか木ノ葉のお里で、三人で遊べたらいいね』

いつか、三人で……。

幼い自分が語ったささやかな夢は、切なる願いへと変わった。

こんなにも、心の奥底で悲鳴のように響く願いに……。

それがもう叶わぬと思ひ知らされても、願うしかないのなら、

「お願いっ……!!」

今更なんの力がなくとも、ナナはその場でそれを叫ぶしかなく

「お願いだからっ……!!」

願いを込めて、*“うちは”*の家紋の彫られた扉を勢いよく開いた。

扉は思いのほか簡単に開かれた。

その向こうは、血を分けた兄と弟が殺し合う、惨殺の場所だった。

「そ……んな……」

勢いよく扉を押しのけた手が、そのまま硬直した。

あれほど絶え間なく動かしていた足は、嘘のように竦んだ。

ナナの目が映すのは、椅子に座ったまま後ろから刀で貫かれたイタチと、背もたれのうしろから刀でイタチを貫くサスケだった。

サスケはその手を引かぬまま、ナナを見た。

滾る怒りが露わな紅い眼。

イタチは血を零しながら、ゆっくりとナナを見た。
何も映さぬ紅い眼。

二人が一つの光景としてナナの脳に届いたとき、驚倒は嚇怒へと変わった。

「こんなっ……」

ナナは乱暴に面を剥ぎ捨てた。

「こんなところが見たかつたんじやない……!!」

思い描いた小さな夢が、サスケの刃に貫かれた気がした。

「こんなところを見るために……」

怒りが……過去も、想いも、宿命も、なにかもを焼き尽し、ナナは千切れるように
叫ぶ。

「こんなところを見るために、私は二人に出会つたんじやないっ!!」

己の感情で、頭が割れてしまうようだった。

胸などどつくに張り裂けている。

「もうやめてっ……!!」

終わりにしてほしかった。

こんな想いに、もうこれ以上浸されていたくない。

「もうやめてよっ……!!」

だが、二人の一朱イロは変わらなかつた。

己の存在の無意味さを改めて思い知らされ、ナナは齒を食いしぼる。

無意味なことは知っている。

こんな光景に行きついてしまったなら、いつそ二人に出会わなければよかつたとさえ感じてゐる。

だつたら……どちらでもいいから、今すぐ殺してほしいとさえ思う。

ナナはサスケの刃を見た。

切っ先はイタチの血を滴らせた。

「イタチ……」

ナナはそれを受け止めるかのように、イタチの傍らに膝をついた。

サスケの刀は確かに、イタチの身体を貫いていた。

「ぐっ……」

イタチが苦しげに血を吐いた。

ナナは膝から床へと力が抜けていくのを実感しながら、その刃を両手で握つた。

これ以上、イタチの血が流れるのを見ていられなかつた。

「お願い……」

そして、かすれた声で乞う。

「もう……終わりにして……」

最後の最期、願ったことはひどく弱々しい声だった。

「ナナ……」

初めてイタチがナナを呼んだ。

そして、刃を握りしめるナナの手に己の震える手を重ねる。

「お願い……」

ナナは怯えた子供のように言った。

「終わりにしてやるさ……」

それを、容赦ない言葉が切り捨てた。

「この復讐を遂げれば全てが終わる……！」

「サスケ……」

イタチの向こうで零れる憎しみの声。

「そんなんっ……」

ナナはそれに染められぬよう、怒りを伴って叫ぶ。

「そんな終わり方っ……！」

だが、

「お前は黙ってる！」

「……………!!」

サスケは憎しみで返した。

「オレは最期にこいつに聞きたいことがある。お前は黙っている」

今度こそ、完全にそれに染められた。

払いきれない、深い深い色だった。

「『最期』か……」

イタチが抑揚の無い声で呟いた。

その口の端から、紅い血が流れる。

ナナはうなだれた。

「さいご」というたった三文字の言葉が、重く冷たく押し掛かる。

「聞きたいこととは何だ？」

それを悟っているのか、イタチは淡々としていた。

己の無力さとは逆に、刃を握るナナの手に力が籠った。

「もう一人の『うちは』一族とは誰だ……？」

サスケの言葉に、ナナはゆっくりと顔を上げた。

（もう一人の……『うちは』……？）

激しさを増すサスケの憎しみが、言い知れぬ不安を呼び醒ます。

「何故……そんなことを聞く？」

初めて意識するその存在が、黒い予感を掻き立てる。

「わかつてるだろう。アンタの次にそいつを殺す……！」

握った刃から、イタチの血よりも赤いサスケの憎しみが滴り落ちるようだった。

「一族を皆殺しにしたあの時、アンタはもう一人の“うち”の存在を口にした」

ナナの知らない過去がサスケの口から語られる。

「いくらアンタでも、警務部隊を独りで殺れるはずがない。そいつは協力者だったんだろ……？」

一族殺しの協力者……。

確かに、たとえイタチといえども、うちは一族ほどの忍の軍勢ををたった一人で全滅に追いやることなど容易ではなかっただろう。

だが、そんな者が存在したなど想像したことすらなかった。想像することは不可能だった。

何故なら、最初からイタチが一族を殺したなど信じていなかったから。

「イタチ……？」

ナナはゆつくりとイタチに視線を移す。

「ちゃんと、気づいたんだな……」

彼は背後のサスケを意識して呟いた。

そして、

「誰なんだ……?」

サスケの問いに平然と答えを与える。

「うちはマダラだ……」

ナナの手の中、刃の先がわずかにピクリと動いた。

「木ノ葉隠れ創設者の一人……。万華鏡写輪眼を初めに開眼した男だ」

「創設者だど? そのマダラなら、あの時はとつくに死んでいたはずだ!!」

サスケが否定するのも無理はない。

すでに、木ノ葉隠れの創設時に関わった人間が生きているような時代ではなかった。

「マダラは生きている。今も……」

だが、イタチはそう言った。

「ふざけるな!」

そしてサスケの苛立ちも静かに交わす。

「信じる信じないはお前次第だ」

彼が話すことで、刃から伝わる血はますます流れ落ちた。
が、ナナは彼の言葉に捕らわれていた。

「人は誰もが己の知識や認識が『現実』だと思っている。しかしそれらは曖昧なものだ。その『現実』は『幻』かもしれない」

刀を突き刺されながらも淡々としたイタチ。

彼が話すことに、自ずと身構えざるを得ない。

「何が言いたい?」

「人はみな、『現実』という思い込みの中で生きている……」

同じく、サスケも身構えていた。

ナナは小さく唾を飲み込んだ。

と、

「マダラが死んだと思っっているのは、お前の勝手な思い込みだ」

イタチはフツと笑った。

「かつてお前が……」

怖ろしいほどに妖しい笑みだった。

「オレを優しい兄と思ひ込んでいたように……」

空気がいつそう張りつめた。

ナナにはイタチの今のセリフと笑みを信じられるはずもなく、ただ目を見開いて彼の顔を見つめていた。

少しの沈黙が流れた。

「ガキだったオレは……、あの夜のことを『幻』だと思ったかった。酷い幻術の中に居るのだと、そう思いたかった……」

話し始めたサスケは低く声を震わし、そして、

「だが、あれはまぎれもない『現実』だった!!」

突然自身の後ろを振り返り、千鳥を発した。

壁が碎ける音がした。

「今のオレはあの頃とは違う!!」

ナナはその光の先に見た。

そこには、すぐそばに居るはずのイタチがもう一人、同じ椅子に座ってこちらを見ていた。

「オレの写輪眼は幻術を見抜く!!」

サスケの千鳥は椅子に掛けるイタチの顔をかすめ、後ろの壁に突き刺さっていた。

「写輪眼……か……」

イタチは血を流すことなくゆったりと腰かけていた。

そしてナナが触れていたイタチはゆっくりと消え失せ、背もたれに隠れていたサスケの姿が露わになった。

「……イタチ……?」

震える手をサスケの刃から離れた。

手袋には、ナナ自身の血だけが滲んでいた。

やはり、痛みはなかった。代わりに感じたのは、そこから何かがすり抜けた寒々しさ。そしてそれは、永遠に戻らないもののような気がした。

薄氷

すぐそばに居たはずのイタチが、向こうからこちらを見ている。

触れていたはずの手は、少しの温もりさえ残さず消えた。

胸を貫かれていた彼は、一滴の血も流してはいなかった。

そのことへの安堵より、何故か薄氷の上に立たされているような感覚が強かった。

ナナはその場に膝をついたまま、立ち上がることをすらできずに居た。

「アンタの小芝居に付き合うのもここまでだ」

サスケが吐き捨てるように言つて千鳥を収めた。

「サスケ……お前はまだ、オレと同じ眼を持っていないようだな……」

同じ眼……つまりは万華鏡写輪眼のことだ。

イタチはそれを持ち、サスケは未だそれを持たない。

ナナは目の前のサスケの背を見上げた。

「なら、さっさと万華鏡写輪眼とやらでオレを殺してみろ！」

その背に虚勢は無かった。

「それとも、オレでは『己の器』とやらを量りかねるのか？」

声にたっぷりの皮肉すら浮かべていた。

イタチはため息をついた。

「かなりの自信があるようだな……」

そして、ゆっくりと椅子から立ち上がる。

二人はナナの存在など忘れたかのように互いに向き合った。

少しの沈黙の後、

「万華鏡写輪眼……この眼は特別なもの……」

イタチは話し始める。

「開眼した時から闇へと向かう」

それはその眼の持つ秘密。

「使えば使うほど、封印されていく……」

「どういふことだ……?」

低く問いかけるサスケの後ろで、ナナは口を引き結んだ。

『闇』『封印』、二つの嫌な単語が心を暗くする。

だがイタチは、事実をあっさりと告げた。

「万華鏡は、いずれ光を失う」

その台詞通り、心は真つ暗だった。

だが、サスケに喫驚は無かった。

「失明か……」

そればかりか、ナナを震撼させる台詞を放った。

「それが九尾をコントロールする力を得るための代償ということか……」

ナナは己の耳を疑った。

「え……う？」

『九尾』『コントロール』……その二つの単語は、並べて聞くにはあまりにかけ離れる単語だった。

だが、ナナの驚愕は取り残される。

「フ……」

イタチは小さく笑み、ゆつくりとこちらへ向かう。

「『うちは』の集会場の石版を読めたようだな」

そしてサスケは彼をますます鋭く睨みあげる。

「その眼を最初に開眼したというマダラは一体何者なんだ?!」

イタチはまた一步、サスケとナナに近づいた。

「オレの相棒であり、師であり、不滅の男……」

告げるイタチの眼は、まるで知らない色をしていた。

「怖い」……単純にそう思った。

足元の氷は今にも割れそうだった。

そして、身体を強張らせて身構えたナナの耳に、イタチは信じがたい事実を告げた。

「そして九尾を手懐けた最初の男だ」

「どういふ……こと……?」

ナナは初めて口を挟んだ。

いや、勝手に唇がわなないた。

「九尾を……手懐けた……?」

サスケにだけ向いていたイタチの視線が、ようやくナナに移った。

その眼は、不吉な夜に浮かぶ紅い月のようだった。

「お前が『知らない』というのは不幸だな、和泉菜々葉」
まるで憐れむような声。初めての呼び方。

それらがイタチの口から発せられたことが信じられず、ナナは次に告げられる言葉を拒絶するように身を引いた。

だが、彼は言った。

「十六年前、木ノ葉を襲った九尾の事件は……」

薄く笑ってさえた。

「マダラが起こしたものだ」

氷は音を立てて砕け散った。

驚く間もなかった。

沈む身体を支えるかのように、ナナは床に手をついた。

「う……………そ……………」

受け入れられるはずもなかった。

九尾を呼んだのが、うちはマダラ……。

木ノ葉を混乱に陥れ、多くの不幸を生み、四代目火影を死に追いやり、そしてナルトと自分に宿命を背負わせた……その人物が『うちはマダラ』だという。

「だつ……………て……………九尾は……………」

声が喉の奥で掠れた。

「九尾は『天災』と言われてきたはずだ……!」

上手く話せないナナの代わりに、サスケが唸るように言った。

「木ノ葉も火の国も、他国も……そして和泉一族さえもそう思ってきただろうが、それは違う」

ナナの額にいつの間にか浮いていた嫌な汗が、前髪を伝い落ちた。

残酷なイタチの言葉は、呼吸すらも困難にした。

「九尾はマダラが呼び出した。それが事実だ」

疑念の欠片さえ持つことが許されぬイタチの声。

サスケは足を鳴らし、苛立ったように言った。

「うちはマダラとは、一体何者なんだ!?!」

その声に縋るように、ナナは彼の背を見た。

そして捕らわれたかのように、その向こう側のイタチの眼に吸い寄せられる。

そこにはすでに、ナナなど映ってはいなかった。

「何も知らないお前に、『うちは』の歴史を話してやろう」

彼は再びナナの存在を忘れたかのように、サスケに言った。

息が苦しかった。

割れた氷の下は、冷たく暗い水だった。

まるで、そこで溺れてしまうようで……それでもナナはもがくことすらできずにいた。

歴史

「“うちは”の歴史を話してやろう」

イタチはそう言った。

もうすでに、ナナの五感は鈍重になっていた。

万華鏡写輪眼の秘密。万華鏡写輪眼は九尾を操ることができる……という事実。それだけならまだ良かった。

木ノ葉に九尾を呼んだのは、うちはマダラだった。

九尾の襲来という“天災”を予知できなかったことで、和泉は負い目を背負い、ナナという『将来の保険』が産まれる由縁となった。

が、天災と恐れられてきたそれは、実は人間のもたらした禍だった。

己の存在の無意味さを突きつけられ、ナナは理を失いかけていた。

ただ事実を知ったというのではなく、残酷なそれがあのイタチによって冷たく告げられた。

そのことに対する衝撃で、目は眩み、呼吸は規則を失った。

しかし、イタチはそれを無視して続ける。

「マダラにも、かつて弟がいた……」

彼がそう言った瞬間、ナナとサスケの周囲は見覚えの無い古風な部屋の中に変わる。

ひと呼吸おいて、サスケが進んだ。

ナナの足はフラつきながらも立ち上がり、縋るように彼の背を追った。

『兄と弟は互いの力を高め合い、競い合ってきた』

イタチの姿は無かった。やけに遠くから声だけが響いて来る。

サスケが古びた木の柱を曲がると、その向こうで良く似た二人の男が組み手をしていった。

ナナもサスケの肩越しにそれを見た。

イタチとサスケに雰囲気がよく似ていて、ひと目で「うちは」の名を持つものだとわかった。

『二人は写輪眼を開眼し、一族の中でも中心的存在となっていた』

イタチの言葉に合わせて周囲の風景は変わり、二人の男は成長していった。

『そしてついに、万華鏡写輪眼を開眼した』

二人はイタチと同じ眼をしていた。

冷たく、紅い眼……。

ナナは無意識のうち、サスケの背に寄っていた。

『二人はうちは一族を束ね、マダラはそのリーダーとなった』

淡々としたイタチの口調が、これから見せられる光景への怖れを抱かせた。

『しかし、やがてマダラの身にある異変が起き始めた』

サスケとナナのの前には、眼を手で抑えて苦しがるマダラが居た。

先ほどのイタチの説明が蘇る。

万華鏡写輪眼は、使えば使うほどに封印され、やがて闇をもたらす……と。

強大な瞳力を得たがため、その代償を払わねばならなくなったマダラの苦しみが、サスケとナナのの目の前にあった。

『マダラはあらゆる手段を試したが、光を取り戻すことはできなかった』

もがき苦しむ兄。その傍には心配そうに寄り添う弟があった。

ナナはいっしょか震えだしていた手を握りしめた。

『マダラは絶望した……』

光を求めて、哀れなマダラの手は彷徨った。

そして、

「許せ……」

まさに『絶望』だった。

その手は傍に居た弟に伸び、その両目を抉り取った。

悲鳴がサスケとナナの耳をつんざいた。

血の飛沫がサスケにまで飛び散った。

ナナは後ずさることさえできず、サスケの肩越しに在る光景を見続けた。

『マダラは新たな光を手に入れた』

二度と絶えぬ光……。

永遠の万華鏡写輪眼を手に入れたマダラの向こうには“鬼”が居た。

四つの眼は、紅く光る。

『そしてそれは、二度と絶えることのない永遠の光だった』

イタチは淡々と語り続けた。

サスケも微動だにしなかった。

『その眼はさらに、特有の瞳術を生み出した』

ナナに身構える術はなかった。

『だがこの瞳のやりとりは一族の間でしか行えない』

呪われた事実が明かされても、今更ナナに“予感”を払いのける力などなかった。

『それに、誰もが力を手に入れることができたわけではなく……、多くの犠牲もあった』

これが、万華鏡写輪眼のもう一つの秘密……。

繰り返されてきた“うちは”の悲劇。

サスケとナナの前に黒い炎が燃え上がった。

マダラはその力によって忍たちを次々と束ね、最強と言われていた『千手一族』と手を組み、木ノ葉隠れの土台となる組織を設立した。

彼はその後、千手一族のリーダーであった後の初代火影と対立し、主導権争いに敗れた。

イタチによって展開されるその歴史は、何一つサスケとナナの知らないものだった。

だが、隠された真実はその意味が大きすぎだ。

『マダラは木ノ葉を追われてからも、“暁”を組織し、その陰に姿を隠して存在し続けている』

ナナが無理やりサスケの背に意識を集中させようとした時、二人は現実の場に帰った。

「マダラは千手に負けた……」

イタチがすぐそこに居た。

彼を向いたサスケにつられ、ナナも彼を見上げる。

「“うちは”の真の高みに行きつくのは、負け犬のマダラなどではない」

イタチはかつてなく高揚していた。

「マダラを超え、本当の高みを手にするのはこのオレだ」

“予感”に、ナナは抗えない。

脳に入り込む聞き覚えのないイタチの声を、ただ受け入れることしかできない。

「そして今、オレはマダラを超える力をようやく手にする！」

迫り来る“予感”は、ナナの膝を震わせた。

そして、イタチは言った。

「サスケ！ お前はオレにとっての新たな光だ!!」

“予感”は裏切られなかった。

さらけ出されたイタチの意志……。

聞きたくて聞けなかった、イタチの願い。

それが……、

「お前の眼で、オレは永遠の光を手にする!!」

目の前で、こんな風に剥き出しになる。

イタチの後ろに、マダラの背後にも在った“鬼”のようなものが浮かび上がる。

「今見てきたとおり、うちは一族は万華鏡写輪眼を手に入れるために友と殺し合い、永遠の瞳力を得るために肉親と殺し合い……、そうやって力を固辞し続けてきた汚れた一族なのだ!!」

いつもの静かな口調ではなく、もはや威圧的な声で叫ぶイタチ。

「その一族に生まれ落ちた瞬間から、お前もこの血塗られた運命に巻き込まれている!!」
そして鬼は、彼の勢いに乗って手を伸ばす。

サスケの身体は、ナナの目の前で鬼の手に握られた。

「弟よ!!」

鬼の手が彷徨いながらも、サスケの左目に伸びる。

「オレはお前を殺して一族の汚れた宿命から解放される。そして本当の力を手にする!!」

サスケを助けるどころか、ナナは身動きひとつ……、呼吸ひとつすらできずに突っ立っていた。

「オレは己の器から己を解き放つ……!!」

イタチの言葉も目的も、サスケの身に起こることも、目の前で展開されているはずなのに、ナナにとっては飲み込めぬ現実だった。

いや、理解などしたくなかった。

受け入れたくないという意識が、その目を閉じることすら不可能にしていた。
「オレたちは互いのスペアだ!!」

サスケの眼を抉らんと、鬼の鋭い爪が彼の皮膚に食い込む。
何もできなかった。

後に来る後悔は予測できるはずなのに、サスケの名を呼ぶことさえできずにいる。

「それこそが、〃うちは〃に生まれた兄弟の絆なのだ!!」

だが、悲しい宣告の後……闇に引きずり込まれるナナとは逆に、サスケはしかと眼を見開いた。

すると……鬼の姿は一瞬にして嘘のように消えた。

「……サス……ケ……?」

サスケは先ほどと同じように、ちゃんと立っていた。

ナナは解放されたサスケと、そして少し離れた所に立つイタチを見た。

イタチはいつもの冷たい表情で二人を見ていた。

「ちゃんと……心の中のオレが見えたようだな」

イタチは淡々と言った。

そこに、先ほどの彼らしからぬ昂揚は欠片もなかった。

「全ては……このためか……」

サスケもまた、イタチを見据えて静かに立っていた。

過去の残像、記憶、思い出……全てを現在へ結びつけ、彼は言った。

「やっど……辿り着いた……」

秘かなる血

『やっと、辿り着いた……』

サスケはそう言った。

(たどり……ついた……?)

ナナはその言葉を繰り返す。

(ここが……?)

ここがサスケとイタチと、そしてナナが行き着いた場所……。

本当にそうなのか。ここは本当に迎えるべき終末だったのか。

こんなふうに、こんな事実で……。

「なんで……こんな……」

ナナの膝にようやく力が入った。

削がれていた決意が、やっと腹の底に蘇った。

(違うっ……!!)

思い出したように湧き上がる怒りともどかしさ、そして後悔。

それらが混在したまま、ナナはイタチに向かって叫んだ。

「殺し合うことが兄弟の絆?! 何を言ってるの?!」

全てを否定したかった。今明かされたことを全部否定したかった。

否定できるだけの思い出を、ナナは持っている。

たとえ少なくとも、刹那でも、かけがえのないそれら突き出して否定できる。

「私に……」

今更それらを蹴散らされようとも、忘れられなかったから。

「あんなに優しい眼で……サスケのことを話してくれたじゃない!!」

弟のことを語るイタチの優しい瞳を。

せがむままに語ってくれたイタチの優しさと、彼の口から出る弟を想う声を。

忘れるなんてできなかった。

「自分の力のためにサスケを殺す?! それが本当にアナタの目的だったの?!」

あれを偽りなどと思えるはずがなかった。

突きつけられたイタチの意志より、ナナの記憶がまだ勝る。

「本当にそのために生きて来たの?!」

鋭い言葉は悲鳴のようにその場に響いた。

サスケはゆつくりとナナを向いた。

そしてイタチは、冷えた声で応えた。

「……お前はまだ信じられないのか？」

「信じない……!!」

ナナは即答した。

「まだ、思い込みの中で生きようとするのか？」

「思い込みなんかじゃない……!」

全身の力を己の心に集中させた。

「お前が信じようと、そうでなかつたらどうかまわさない」

冷たく言い放つイタチの言葉に、砕かれてしまわぬように。

「サスケはオレの新たな光……。オレはこれからそれを手に入れ、永遠の瞳力を手にする」

あの赤い眼に、染められてしまわぬように。

「邪魔をするな」

「私が邪魔……?」

強く、自身の想いをすべてここに曝露する。

「だったら……」

何度も与えられてきたイタチの温もり……。

それがある限り、イタチの言葉は信じない。

「だったらどうして……何度も私を助けたの?!」

邪魔というなら……最初からわかっていたはずなのに、何故何度も救ったのか。

何故護ったのか。

何故優しかったのか。

何故、愛を……。

「今だって……」

問えが取れたように、ナナは叫んだ。

「私が邪魔なら、その眼ですぐに殺せばいいじゃない!!!」

悲鳴のような声は、むしろ願いのように響いた。

サスケは黙ってナナを見つめていた。

イタチも表情を変えなかった。

ただひとり、ナナだけが荒ぶる気を纏っていた。

「お前は殺さない」

「なにを……今更つ……!」

イタチはそれを受け止めもせずと言った。

「お前を殺さず手懐けていたのは、目的があったからだ」
「……………?!」

「手懐ける」。

さつきも聞いたその語感に、今度はひんやりとしたものを感じる。

その単語が、イタチに突き放されていく感覚を大きくする。

「目的……………」

ナナは息を呑んだ。身構えざるをえなかった。

イタチはあっさりとその答を出した。

「お前は『うちは』の血を引く最後の女だから……………」

たつぷりとした間があった。

「……………どういうことだ?」

先に口を開いたのはサスケだった。

「こいつが何故『うちは』の血を引いている?!」

サスケの苛立ちにも、イタチは焦らさず応える。

「言葉の通りだ。ナナは『和泉』と『うちは』の混血だ」

ナナの指先が凍りついた。

先ほどまでの憤りは完全に剥ぎ取られ、代わりに未知に対する怯えが目覚める。

「だ、だつて……私は……」

「お前は、天才陰陽師『和泉成葉』の生まれ変わり……そう言われてきた」

天才陰陽師と恐れられた和泉成葉の力を受け継ぐため、その魂を転生させて生まれ落ちたのが自分だった。

それ以外の過去など知らず、自分をそういう存在と受け入れて疑いもしなかった。

「だがお前は、『純粹なる和泉の人間』でも、『和泉成葉の生まれ変わり』でもない」

しかしイタチは、容赦なくナナの生を否定する。

「だつたら一体なんなんだ……!」

サスケまでがイタチの言葉に侵されたように問う。

「和泉成葉の生まれ変わりでないのなら、こいつは一体なんなんだ?!」

揺らぐ命に耐えるように、ナナは血の滲んだ両手で胸を抑えた。

その下には、意味を失った刻印があった。

「和泉成葉は九尾襲来の後、木ノ葉で子を産み、死んだ……。それはナナも聞かされてきたことだ」

ナナの脳裏に、まだ新しい成葉の笑みが浮かぶ。

姉の力によって飛ばされた時空。そこで出逢った“もう一人の自分”……そう信じて疑わなかったはずなのに……。

「確かにそれは事実だ。だが……知らされなかったことは……」
イタチは成葉の記憶さえも覆す。

「和泉成葉が身籠っていたのは、“双子”だったということだ」
触れた成葉の腹の温かさは、今も容易に思い出せるのに。

「和泉成葉は子を一人産み、そして死んだ」

ナナは干乾びた唇を震わし、イタチを見た。

イタチはまっすぐにナナを見下ろし、告げた。

「お前は産み落とされることなく、母体とともに死んだもう一人の子の生まれ変わりだ」
瞬きをした。

それすらも酷く疲れる作業であるように、恐ろしくゆつくりと。

「でも……私は……」

受け入れる、受け入れられない、信じる、信じない……とか言う前に、その事実が考えもよらぬことだった。

「そんな……」

だから、ナナは今までの現実に縋るべく呟いた。

「だって、私はあの人だって……。だから父上も母上も私を憎んで……」

「確かに、和泉の者たちは初め、『和泉成葉』本人を転生させる術を行った」
が、イタチは跳ねつける。

「しかし……術者たちは途中で目的を変えた」

明かす事実によってナナに斬りつけるでもなく、ただただ淡々と。

「つまり……和泉成葉ではなく、彼女の『産まなかつた子ども』を転生させることにした。それがお前だ、和泉菜々葉」

カラカラに乾いた喉が、呼吸によってキリリと痛んだ。

が、ナナには唾を飲み込むことすらできなかつた。

「そして、お前の父親は『うちは』の人間だった。そういうことだ」

ナナは視線を床に落とした。

「そんなこと……」

成葉の笑みと、膨れた腹。父親である和泉当主と、産みの母。そして姉。

皆の目、声、言葉が、記憶の奥から押し寄せる。

「そんなこと、誰も……姉上も言っていないかつた……！」

和泉当主は木ノ葉へ去った元許婚の甦りとして、自分を憎しみの対象にしていたは

ず。

母も、そんな存在の自分を怖れ、疎ましく思っていたはず。

何より、真実を握った姉がそう言っていた。

そして一族の者たち全てが、畏怖の目で自分を見ていた。

「お前の周りの人間は皆、お前が和泉成葉の生まれ変わりと思ひ込まされてきたからだ」
が、イタチはその矛盾を解く。

「思ひ……込まされて……？」

解かれても、一向に安定しないナナの心。

そしてそれをさらに揺るがすイタチの台詞。

「和泉の誰も真実を知らなかったのは、ある者がその事象に『裏葉の術』うらはのじゆつを施したからだ」

「そ……んな……」

『裏葉の術』。

ナナには聞き覚えがあった。

それは和泉一族の中でも限られた者しかその存在を知らない、禁術に当たる高等陰陽術だった。

「ウラハノジュツ……だと……？」

聞いたことのあるはずもないサスケが問う。

が、同じく知るはずもないイタチが答えた。

「事実を捻じ曲げる禁術だ……。和泉本家ですら扱うことができない、分家のある一族にのみ伝わる一子相伝の陰陽術だ」

『事実を捻じ曲げる』……即ち、偽りの事実を信じ込ませる術。

幻術とは違い、『人』に対して掛ける術ではなく、『事象』に対して掛ける術だった。

当然のことながら、理に背く禁術。

それを分家のある一族が編み出し、一子相伝で受け継いでいた。

その術が使われた案件を、ナナは一つだけ知っていた。

というより、ナナだからこそそれを知らされていた。

なぜなら、『裏葉の術』を使ったのはあの和泉実葉だったから。

実葉は成葉が産んだ子を守るために、命と引き換えにその術を使ったと聞かされていた。

真実が永遠に隠されたから、未だその子の行方を誰も知らない。知ろうとさえしない。

和泉の人間も、木ノ葉の人間も、和泉神社に居た静葉でさえも。

それこそがこの術の効果を示していた。

だが、

「だって……私は和泉成葉の生まれ変わりだから……」

容易に信じられるわけなどなかった。

「だから九尾を抑えるほどの力があるって……」

背負わされた力は、和泉成葉のそれとして違わぬほどに大きいものだった。

何より色濃いその血を感じ、嫌悪してきたのはナナ自身だった。

「私は……」

それでも、『生まれ変わり』という生を受け止めた。

その生に背負わされた宿命と向き合った。ナルトという存在に希望すら見出し、戦った。

それは決して簡単なことではなかった。

だから、たとえイタチの言葉であっても、信じられるはずはなかった。
が……。

「なら……」

イタチはナナの全てを泡と化した。

「何故オレの幻術にかかった？」

ナナは一步、後ずさった。

「……え……？」

イタチの赤い眼が濃くなっていた。

「『うち』の万華鏡写輪眼による幻術に、唯一かからない存在が『生粋の和泉の血』のはず……」

そう……、対極の一族であることは知っていた。

互いに天敵だからこそ、イタチとナナが引き合わされたこともわかってははずだった。

「だが、お前はオレの幻術にかかった」

それなのに、今さら気づく事実。

イタチの言葉からもう逃れられないことを、否が応でも悟ってしまった。

「お前は純血の和泉の人間ではない」

彼から告げられる言葉に、今は恐れを感じる。

「お前には、半分だけオレたちと同じ『うち』の血が流れているのだ、ナナ」

長い長い沈黙の後。

「なんでだ……」

ふつふつとしたものを表す声が、ナナの隣で発せられる。

「なんでアンタがそんなことまで知っている……!!」

かろうじて目を動かすと、サスケがナナの前に立っていた。

「禁術で事実が捻じ曲げられたっていうのに、何故アンタは真実を知っている?!」
その場に響いたサスケの声が消えた後、イタチはナナを見つめたまま答えた。

「すべては……マダラが仕組んだことだからだ」

再び登場した「うちは」の名に、サスケは眼光を鋭くする。

「マダラが仕組んだだと……?」

「マダラは古くから、和泉の人間と秘かに手を組んでいた」

ナナの脳はもう、働きを失っていた。

力をつま先から抜けて行った。

「天才陰陽師『和泉成葉』と「うちは」の血を引く子を甦らせるため、マダラが和泉の人間を操ったのだ」

ナナは視線を落とし、ゆっくりと己の感覚の無くなった両手を開いた。

手袋が血を吸い込み、黒く滲んでいた。

『和泉成葉』ではなく、『和泉成葉の子』を転生させるよう、本家の当主や他の術者を仕向けろ……と」

その血の意味を、ナナは失いかけていた。

(私は……)

ナナの意識が揺らいだ。

「あるいはお前が写輪眼を開眼するのでは……とオレたちは見てきた。が、お前は『覚醒』を遂げ、和泉の血のほうを濃くした」

覚醒……それはナナがイタチに告げた。

その時も、イタチが救ってくれた。覚醒の苦の中、カプトと大蛇丸に捕らわれたところを、何故かイタチが現れて救ってくれた。

あれほど優しく、切なく……。

あの夜の想いが甦った瞬間、

「……………ぐっ……………」

ナナは歯を食いしばった。

力の抜けた身体に、痛みと苦しみだけが甦る。

「だが……まだお前の利用価値はある」

だったらそれは、イタチの気まぐれか……それとも演技か……。

「だから、お前は殺さず生かす。どんな形でもな……」

ナナは初めて生まれたその問いを感じずにはいられない。

「最初から……?」

思考と関係なく、ナナの唇から掠れた想いが零れ落ちる。

「わざわざ和泉の里まで会いに来てくれたのも?」

その想いは、すでに行き場を亡くしていた。

「カプトに捕まった時、助けに来てくれたのも?」

重ねた肌に、疑う余地などどこにもなかったのに。

「今度こそ……一緒に連れて行ってくれるって言ったのも?」

次第に窄んでいく心。

「私を……『愛しい』と……言ってくれたのも……?」

全て偽り……?」

「……っ……」

最後の問いは喉の奥で千切れた。

足もとが、ふらついた。まるで細い糸の上に立っているようだった。

今まで歩いて着た道が、どれほどイタチを支えにして来たか今更わかった。

イタチの優しさに甘え、イタチの愛に守られ、イタチへの想いに導かれて来たか……

そう思って来たのか？が嫌というほどわかった。

「お前はオレの幻術の中にいたのだ」

ナナはイタチを見た。

彼の眼に、かつての自分は映っていなかった。

「お前は『うちは』と『和泉』の血を引く者として、利用させてもらう」

今、彼の眼に居るのは、ちっぽけで衰れた自分。

全ては幻……？

(イタチじゃない……)

己の中で眩いた。

それこそが現実に留まる残された唯一の手段であるかのように。

(こんなの……イタチじゃない……)

動かなくなった頭の片隅で念じた。

イタチが自分にそんな事実を告げるはずはない。

あんなに冷たい眼で、あんなに乾いた口調で。

大切な過去を、想いを、全てを否定するなど。

「……イタチ……」

そだが、それを振り払う力などもう無い。

「すべては……このため……？」

滲む声。

「そうだ」

揺るがぬ答え。

ナナは己の身体を抱いた。

無意味な生を、これ以上晒したくなかった。

(イタチは……私を……)

優しく、温かく、守って、救ってくれたのに……。

しかし、想いを口にすることはできなかった。

これ以上、彼に否定されることが怖かった。

怖くて、怖くて仕方なかった。

今すぐに、泡となって消え果てたかった。

これが現実というなら、もう何も聞きたくなかった。

見たくもなかった。

ナナは目を閉じた。

今まで必死で受け入れてきた己の『生』。

それを手放すように。

「そういうことか……」

傍でサスケの、安堵とも蔑視ともとれる声でした。
そして、

「ナナ……」

彼は脱いだマントをナナに掛け、触れるように抱き寄せた。

「強くなれ……」

ナナはぼんやりと、サスケを見上げた。

「あいつの言葉にも……お前の宿命にも……」

サスケはじつと、イタチを見据えていた。

「これから……オレがお前につける傷にも……」

ナナは囁いた。

「……サスケ……」

今、縫れるものほもう、

「……サスケ……」

彼のこの腕しかなかった。

「お願い……」

だから、願うしかなかった。

「このまま私と……」

叶わなくても。

「……何処か……遠くへ……」

何処か、遠くへ。

この突きつけられた事実からも、宿命からも、これから先の悲劇からも……。

全てから逃げたいとナナはサスケに願った。

だが、

「ナナ……」

サスケは身体を離れた。

二人の視線が交差した。

ナナはサスケの眼に、別れを悟った。変えられない宿命が、音をたてて押し寄せる。

サスケは、ナナの身体を押しやった。

軽いその行為で、力を失ったナナの身体はフラフラと追いやられ、先ほど自らの手で

開け放った扉に背を打った。

そのまま、ナナはそこにへたり込む。

サスケはもう、ナナを見てはいなかった。

そしてイタチも、サスケの赤い視線を受け止めていた。

ここにはもう、ナナの居場所はなかった。

幻

「ようやく、目的を果たす時が来た……」

サスケの言葉は、全ての終わりを告げる言葉に聞こえた。

「残念だが、お前の目的は幻に終わる……」

イタチの声は心を冷たく冷やした。

呪われた一族の眼。

「万華鏡写輪眼を持たぬお前などに、オレは倒せない」

その赤は、すでに不吉な色でしかなかった。

「万華鏡写輪眼なんかなくとも……、このオレの憎しみで幻は現実になる！」

現実……。

「現実とは……アンタの死だ！」

それが何なのか、ナナにはもうわからなかった。

(なんで……?)

無数の手裏剣が散った。それらがぶつかり合う高い金属音が鳴り響く。

が、耳をつんざく音も、ナナの鼓膜は鈍くそれらを受け止めた。

互いに向けて放たれる凶器も、殺気を滾らせて組み合う姿も。

サスケの千鳥も、イタチの分身が鴉になって飛ぶ様も、何もかも……現実とは別の世界で起きていることのように傍観していた。

(なんで……?)

空になった己の中で、唯一その声だけが廻旋する。

何故、二人は戦うのか。

今更それを思う。

何故、イタチはあんな言葉を言ったのか。

まだ信じられずにいる。

何故、自分はここに居るのか……。

初めからわからなかった気がする。

目を閉じ、耳を塞ぎ、記憶を閉ざし、生を捨てられればそれで良かった。

が、ナナの瞳は殺し合う二人を映し、耳は憎しみと殺意の言葉を聞いた。

そしてその記憶は、自分を救ったイタチを蘇らせる。

だから、心は目の前の現実と記憶の狭間で大きく震えていた。

偽りのはずはない、あまりに鮮明なイタチの記憶。疑う余地のなかった温もり。

ナナがせがむまま、弟のことを優しい瞳で語ったイタチ。心が折れそうな時、計ったように現れて、傍にいてくれたイタチ。

苦しげな眼で、別れを告げたイタチ。

戦わせてもくれず、サスケをまた傷つけて去ったイタチ。

似合いもしない冷たい言葉を吐いたイタチ。

にも関わらず、カブトに捕らわれたナナの前に現れ、救ってくれたイタチ。

そして、優しく、切なく、抱きしめてくれたイタチ。

我愛羅を護れなかったナナの前に再び現れ、手を差し伸べたイタチ。

今度こそ、連れて行ってくれると言ったイタチ。

『オレは……お前が愛おしい……』

イタチは遂にそう言った。

あの瞳を疑えるはずがない。

『オレは誰より……お前を想ってきた……』

己惚れじゃなく、彼の想いを知っていた。

『……そして二度と離さないだろう……』

約束のあとに触れた手。

あの熱は確かに真実。

『お前が例えどの道を選んでも……オレの心は変わらない……』

「変わらない」と言ったイタチの心。

イタチはそれを今更になって、「うちは」の血を受け継ぐという自分を利用するためだったと言った。

その開眼を待っていたということはつまり、ナナもサスケ同様『新たな光』と……『スペア』として見ていたということ。

そして、開眼をせず、和泉の陰陽師として覚醒したナナにまだ『利用価値』を見出すとは、即ち『“うちは”の血を継続させる者』として見ているということ。

そんなことを、信じられるはずがない。

何より、「道具」として周囲から扱われていた自分にとって、唯一そう扱わない存在がイタチだったのだ。

そのイタチが、自分をそんなモノのように見ているなど、有り得ることではなかった。イタチは自分の全てだった……。

ナナはそう、カカシに言い切った。

大切な、大切な存在。

彼がいなければ、今の自分もつと脆く、哀れな存在になっていた。宿命も、受け入れて生きることとはできなかった。

ナルトに対して向き合うことすら、きつとできなかっただろう。

その想いがあつたから、ナナは木の葉で聞いたイタチのことを、何の迷いも無く否定し続けた。

一族を殺し、里を抜け、サスケを苦しめたなどと……。

木の葉じゅうがその事実を当然としていても、ナナだけは否定していた。

あれほどサスケの傍に居たにも関わらず。

サスケがその事実によって、大きな傷と払えぬ濃い影を負わされたとしても。

それに惑わされることはなかった。

少しも。

一度も。

まるで、そのことに対する罪を突きつけられているようだった。

サスケに焦がれながらも、彼の運命を捻じ曲げた事実を信じなかった。

サスケの傷を否定し、己の記憶を肯定した。

サスケの心に寄り添えなかった。

サスケの憎しみを怨んだ。

サスケの敵に救われ、守られた。

サスケが殺したい相手を、守りたかった。

そのことへの罰。それが今の痛み。

だとしたら……涙を流すことすら許されるはずもない。

(二人を……止める……?)

願いはあまりに浅はかだった。

そんな願いを抱くことなど、傲慢でしかなかったのだ。

だが、

「許せ……サスケ」

もがいていいと、愚かでいいと、そう言つて消えた姉の言葉通り、ナナの心は醜く足掻いた。

「やめて……」

イタチがサスケの左眼に手を伸ばしていた。壁に抑えつけられたサスケに、動くすべはない。

現実が、結末を迎えようとしていた。

「やめて……」

心がもう一度動いた。

「やめて……!!」

そんな資格など無くとも、ナナは叫んだ。

それは「意志」などという立派なものではなかった。

足を動かしたのは、その先にある現実への「恐れ」だった。

逃げたかったからこそ、ナナは二人へ向かって行った。

そして、

「もうやめてっ……!!」

その手は背の刀を抜き、サスケの眼に伸びたイタチの腕に切りかかっていた。

初めて彼に刃を向けた。

願いと後悔、そして少しの憎しみを持って。

しかし……。

「サスケを守るのか……?」

耳元に冷笑があつた。

「オレを殺すか?」

目の前でサスケを捉え、こちらを見ているイタチ。

刃は彼に届かなかった。

分身のイタチが、後ろからナナを拘束していた。

「お前には無理だ……」

後ろで嘲る声があったと同時に、目の前のイタチはナナから目を逸らし、サスケに言った。

「これがオレの『現実』だ」

そして、

「光をもらう……」

その手は遂に、サスケの左眼を抉り取った。

「ぐあああああつ!!」

サスケが絶叫した。

「……………!!!」

ナナの声は悲鳴にもならず、千切れ落ちる。

サスケの血が頬に飛んだ。

先ほどイタチが見せた、マダラとその弟の光景と同じだった。

手から刀が零れ落ちた。身体から力が抜け落ちた。

膝をついたナナの後ろで、もはや役目を失ったイタチの分身が解けた。

(サスケ……)

彼の左目から流れる血が、やけに鮮やかに目に映る。

「だから言ったのだ。万華鏡写輪眼を持たぬお前が、オレに勝てるはずはないと」
イタチの言葉は最後の宣告だった。

これが『現実』。

(これが……)

「もう片方ももらうぞで」

再び伸びるイタチの手。

落とした刀は手を伸ばせば届くところにあつた。

拾い上げて、イタチに斬りかかれる間合いに居た。

だがナナにはもう、指一本動かすどころか、一言も発する力さえ残ってはいなかった。

初めから叶うはずなかったのだ。サスケを守ることも、イタチを止めることも。

喉の奥がヒューヒュー鳴った。

この『現実』の終焉を予感した。

だが、サスケは呪印の力でイタチを遠ざけた。

彼の顔にはあの忌まわしき痣が浮かびあがり、右肩の後ろからは醜い腕が生えていた。

その腕が起こした疾風が、ナナの髪を切った。

が、それでも動くことはできなかった。

初めから叶わぬことだったのだ。サスケを止めることも、イタチを守ることも。

イタチの拘束を解いたものの、息を荒げて左眼があったところを抑えるサスケ。

対して静かな表情で、サスケから奪った左眼を小瓶に収めるイタチ。

「これが実力の差だ」

小瓶の蓋が閉まる小さな音が、先ほどの凶器がぶつかり合う音よりも、ずっと恐ろしくナナの耳に響いた。

「これが、お前とオレの瞳力の差だ」

再び現れたイタチの分身がサスケを後ろから拘束した。

が、ナナはそれから視線を外した。

血まみれのイタチの手がサスケの右目に伸びるのも、サスケの呪印が濃くなるのも、見なかった。

ナナはただ、サスケの足もとに落ちる赤い点を見つめていた。

早く……終わって欲しいとさえ思った。

もう見たくない。

結局見届ける勇氣さえ、最後まで持てなかった……。

が、まだ結末を迎えることは許されなかった。

紅い点は突然、意志を持った生き物のようになごめき、形を変えた。

そしてひび割れた地面に吸い込まれていった。

ナナは虚ろな顔を上げた。

サスケの姿は、目の前に無かった。

少し視線を彷徨わすと、少し離れたところに呪印の影を持たぬサスケが居た。

彼は苦しげに息を吐きながら左眼を抑えて立っている。

そこからは、あれほど鮮明だった血は流れてなどいなかった。

「くっ……」

彼はそのまま、力尽きたように地面に両手をついた。

左の眼は、奪われずにちゃんと在った。

(どうして……)

ナナは再び視線を彷徨わす。

と、サスケと向き合う場所に居たイタチも膝をついた。

彼もまた左眼を押さえ、初めて息を荒げていた。

「お前……オレの月読を……!」

そして右眼でサスケを睨み、わなないた。

(月読……?)

ゆっくりと、ナナは事態を理解する。

今の惨劇はイタチの月読……幻術の中の出来事。

つまりは、幻。

そう気づけば、ナナが二人を見つめるこの場所は、先ほどと少しも違わなかった。

ナナは片手でサスケのマントを握りしめ、逆の手を背にやった。

カカシの忍刀はちやんとそこにあつた。

腹の底が軋んだ。

今の惨劇が幻だつたことに対する安堵は少しも無かつた。

サスケの写輪眼が、イタチの万華鏡写輪眼による月読を破つたことへの憂慮も無かつた。

たとえ幻の中であつても、サスケを護れなかつたこと。

その咎。

それ以上に、イタチに刃を向けたことへの咎。

その痛みだけだつた。

裁きの雷（いかずち）

「言つたはずだ」

先に立ち上がったのは、月読を破つたサスケだった。

「アンタがいくらその眼を使おうが、オレの憎しみで幻は現実になる……と」

ナナだけが、まだ幻と現実の狭間に漂っていた。

「幻が現実になる……か」

イタチも立ち上がり、フツと笑つた。

彼には似合わぬ、毒を持つた笑み。

「その台詞、そのまま返しておこう」

兄と弟は再び向き合つた。

「さっきの月読で、己の眼が奪われるのを見ただろう……？」

まだ幻から抜け出せないナナは、イタチの言葉にサスケの鮮血を想起する。

もう二度と……幻であつたとしても、二度と見たくはない光景のはずなのに、

「それを現実にしてやる」

言い放つイタチの言葉を、まだ信じられない自分に気づいている。

右眼を閉じ、印を結ぶイタチの行為を、まだ現実と思えない自分がいる。

だから、イタチが術を発動させる前にサスケが放った手裏剣が、イタチの足に突き刺さった時、ナナは歯を食いしばった。

初めて見るイタチの血の色。

気づいてしまった。

（私は……まだ……）

イタチを信じている。

あんな光景を見せられて、それを現実にしようとするイタチを見せられても、イタチをまだ信じている。

そして思い知らされる。

己にとって、イタチの真意はさっきの言葉などではなく、記憶の中にある温もり……。どんなにイタチが冷たい眼でそれらを打ち捨てようと、この心はそう信じたままだと。

幻術だったなどと信じられるわけがない。

感じた自分を信じたかった。

たとえサスケが殺されようと、自分が殺されようと、永遠に過去の記憶に捕らわれた

ままなのだ。

また、ひとつ罪が重なった。

(ごめんね……)

この痛みは逃れようもない罪。

(ごめんね……サスケ……)

ここまで来ても、変えられない心。

(私は……)

初めから……サスケを愛する資格など無かった。

そんな現実には、今さら目が眩みそうだった。

それでも目を閉じることさえできなかった。

二人が屋根の上へと消えて行った。

が、目を伏せることもできない。

突き破られた屋根が瓦礫の雨を降らせたが、それを避ける力も無かった。

二人の火遁が、ぶつかり合った。

その下で、ナナはただ己の身を抱いた。

なんとちっほけで愚かな存在だろう。

力など皆無。

止める力も、護る力も、ひと欠片だって持つてはいなかった。決意こそが幻だった。

二人を止めるのだとようやく持てた決意だったはずが、その実、どちらを止めるべきかわからなかっただけ。

どちらを護ればいいのか、選べなかっただけ。

サスケの傍にいた赤い髪の少女の蔑みを思い出した。

自分はどう、サスケには必要の無い存在。

彼女の言うとおりだった。

むしろ、出会わなければ良かったのだ。

サスケにも、イタチにも。

彼らと想いを交わしても、結局、何もわからないままだった。

抗う手は空を掴んだ。

もう何もできない。何もわからない。

このままサスケと供に、信じたイタチに殺されるのか。

信じたイタチと供に、サスケに殺されるのか。

ただ、この惨めな生の終わりを考える。

それを求めて頭上を見上げる。

イタチの黒炎が、呪印を浮かばせたサスケに襲いかかった。

あれを護って、サスケと逝こうか……

天井に新たな傷ができ、黒炎から逃れたサスケが現れた。

そして、呪印の力をさらに濃くして火遁を放った。

火龍は屋根のイタチに襲いかかった。

あれを護ってイタチと逝こうか……

ナナは静かに息をついた。

屋根はほとんど崩れ落ち、イタチの姿が見えていた。

右腕に傷を負い、右眼から血を流しているイタチ。

彼の向こうの空が、妖しげに鳴き始めていた。

それをぼんやりと見上げ、ナナはすぐそこにいるサスケに視線を戻す。

彼は疲れ切ったように膝をついた。

それでも、口の端を上げて切れ切れに言う。

「さすがのアンタも……さっきのあまてらす天照はかなりの負担がかかったようだな」

呪印が徐々に引いて行った。

ナナはもう一度イタチを見て、またサスケを見た。

「そろそろ決着をつけてやる……」

ゆつくりと立ち上がりながら、サスケは言った。

「オレの最後の術だ……」

最後……。

その言葉を、ナナは独り繰り返す。

「強がりはやせ……」

そして再びイタチを見上げる。

「さっきの大蛇丸流の変わり身の術……アレはそうとうな量のチャクラを使う」

イタチもまた、息を切らしながら言った。

「写輪眼はチャクラを見る眼だ。もうお前にチャクラが残っていないのは見えている」

嫌な風がナナの髪を揺らした。

「確かに、さっきの火遁で全て使い切ったからな……。オレにはもうチャクラが無い」

不吉な雲が立ち込めた。

「だが……」

ポツ……滴が空から落ちてきた。

「アンタを殺すために、オレが何もせずここまで来たと思うか？」

空が、鳴いていた。

「一瞬だ」

ナナはサスケに視線を移した。

「この術は絶対にかわすことは出来ない」

時を急かすかのように、滴はすぐに雨へと変わった。

「現実を見せてやろう……」

サスケは憎しみの心だけで立っていた。

「アಂತアの死を……！」

彼に降り注ぐ雨も、その憎しみを冷ますことなどできなかつた。

サスケはイタチを睨んでいた。深い憎しみを紅い眼に込めて。

ナナはじつとサスケを見つめた。彼の最後の術を待っていた。

が、サスケの視線が変わった。

イタチを通り越し、その向こうの空へ……。

イタチがそれに気づいて空を見上げた瞬間、眩い稲光が走った。

(雷……)

サスケの最後の術を待っただけと思つた時、ナナの心は初めて鎮まった。

あの雲が、サスケが作り出したものだとかわかつた。

さっきの火遁を打ち上げたのはイタチが狙いだったのでなく、気流を発生させるた

め。

この雷雲を生み出すため。

それが理解できるほど、頭も冷静さを取り戻していた。

意外とあつけない『答え』だった。

波打つ心など捨ててしまえばよかったのだ。

性質タチの悪い記憶も想いも、消してしまえばよかったのだ。

愚かな生など、さつさと投げ出してしまえばよかった。

サスケの腕で、千鳥が鳴いた。

（アレが……最後の術……）

サスケの目的を知り、ナナは息をついた。安堵と諦めが入り混じっていた。

サスケの雷遁は雷雲の力を得て、その威力を何倍にもするだろう。

そして彼が言ったとおり、落ちる雷を避けるすべはない。

たとえイタチでも……。

周囲に雷鳴が轟いた。

サスケはそれに誘われるように、空に近いところへ登って行った。

サスケの姿が遠くなって、ナナはゆっくりと立ち上がった。

久しぶりに力を入れた足は、少しフラついた。

「見ろ、天から降る雷だ……。オレはこれをアンタへと導く……！」

サスケはイタチを見下ろして言った。

彼のマントが、ナナの肩からすべり落ちた。

「術の名は、麒麟きりん……！」

サスケの向こうで、時を待ちわびる稲妻が光る。

その光はまさに麒麟のごとくに形を変え、大気を震わす声で鳴いた。

ナナは背の刀を抜いた。

（カカシ先生……）

そして切っ先を見つめて呟く。

（こんな使い方しかできなくて、ごめんなさい……）

古びた柄を両手で握る。

（綱手様……）

刃に映る自分の顔は、情けないほど青ざめていた。

（これを託してくれたのに……ごめんなさい）

そこに雨が伝い、ナナの姿はさらに醜く歪んだ。

（サクラちゃん……ナルト……）

ナナは顔を上げた。

（ごめんね……）

雨が痛いくらいに強く当たった。

（姉上……）

イタチはサスケを見上げて立っていた。

（ごめんなさい……）

そこへ行く力は無かった。

（イタチ……）

ナナは空を見たまま跪いた。

（ごめんね）

そして、

「雷鳴と共に散れ……」

サスケの最後の言葉とともに、ナナは小さく笑んだ。

そして、サスケは千鳥が泣きわめく左腕を振り下ろした。

憎むべき兄の元へ。

麒麟は導かれるがまま、其処に落ちた。

（サスケ……）

ナナは目を閉じた。

手にした刃が受ける雷光。

それが罰となることへの安堵だった。
未練は無かった。

後悔は山ほどあった。

それでも、心は痛まなかつた。

ただ、ひどく……疲れていた。

辿り着いた場所

サスケが生んだ「麒麟」は天から落ち、容赦なくその場を破壊した。

千鳥が鳴く声、建物が崩れる音、そして地鳴りが大気を激しく揺らす。それが鎮まり、雨が思い出したように其処に降り注いだ。

「終わった……」

サスケは弱い声で呟いた。

「……終わったぞ……!!」

もう聞くこともないはずだったその声を……ナナは聞いた。

（どうして………?）

目を見開いたが、視界は暗かった。

（なんで……私……）

握った手に、刀の感触はあった。

ここに、サスケの鉄槌が下るはずだったのに。

（なんでっ……）

息をしている。

(……………?!)

と、吸い込んだ息に覚えのある薫り。

「……………なっ……………!!!」

ナナは目の前の闇を払いのけた。

いや、目の前にあつたモノを押し退けた。

「なんで……………?!」

そこは最期に行きついた地獄じゃなく、

「イタチ……………」

イタチの腕の中だった。

「なんで……………私を……………」

「ぐっ……………!」

イタチは血を吐いた。

「なんで……………?」

彼は苦しげに息をしながら、ナナを見た。

「イタチ……………」

閉じたままの右眼から流れる血が、降り注ぐ雨に混じった。

「これが最期だと……」

そう思ったのに。

「……………」

イタチは無言のままナナの手から刀を奪い取り、脇に捨てた。

そして、

「どうして……私を……？」

声を振り絞るナナに

「言った……はずだ……」

切れ切れに言う。

「お前は……殺さず……生かす」

あくまでも、

「お前には……まだ『利用価値』が……ある」

冷たい言葉を。

「イタチ……っ……」

それをナナが信じられるはずもなく。

「そんな……こと……っ……！」

否定の言葉も覚束ないまま、

「イタチ……!!」

ナナは再び血を吐いたイタチに手を伸ばす。

が、

「イタチ……?!」

力尽き、イタチは目の前から煙となつて消え失せた。

ナナの手は空を抜け、地に落ちた。

そして、少し離れた場所から聞こえた声。

「これが……お前の求めた現実か……?」

ナナはよろめきながら、声のした方を探す。

瓦礫と煙の向こうで、イタチは血を滴らせながら立ち上がった。

「くそがア!!」

ナナがそれを理解する前に、サスケが怒号を響かせた。

「サスケ……」

彼は呪印に吞まれ、醜く姿を変えた。あの、ナルトと終末の谷で戦った時のように。

ナナの足もとで小石が割れた。

それだけで、ナナは怯えた。

「コレがなければ……やられていた……」

なぜなら、そう眩いたイタチは、得体のしれない何かに守られて立っていた。それはまるで、実体の無い鎧のようにイタチの周囲に在った。

霊的な存在を扱うナナだからこそ、それが忍の術にとどまらないものであることはわかった。

しかし、そんな思考はあっけなく打ち切られる。

イタチがこう言った。

「本当に……強くなったな……サスケ……」

ナナは息を呑んだ。

歯が音を立て、膝が震え、傍の瓦礫に手をついた。

単に口からついて出た言葉とは思えなかった。

そう言ったイタチの顔に覚えがあった。その声色も聞き覚えていた。罪にまみれた記憶が蘇る。

もう、それを懺悔することなどできなかつた。

イタチは……。

(違う……)

サスケにそう言ったイタチの顔は……。

(違う……!!)

幼きナナに、弟のことを語った時の顔だった。

「今度はオレの最後の術を見せてやろう……」

見間違うはずはない。

「スッ須佐熊乎^ノだ……」

忘れるはずはない。

「月読と天照を開眼した時に、この眼に宿ったもう一つの術だ」

だから、イタチがいくらサスケにそう話そうとも。

「お前の術はもう終わりか……?」

ゆっくりとサスケに向かっていこうとも。

「ああ、さっきのが最後と言っていたな……」

挑発的な言葉を投げかけようとも。

「ココからが……本番だ……」

そう告げようとも。

(ちがうっ……!!)

その姿は偽り。これは虚妄の世界。

ナナにはもう、そうとしか思えなかった。

イタチの纏うモノが、はつきりとした形を成した。

『須佐熊乎』は神々しくもおぞましい姿をしていた。

ナナはわずかに首を振った。

アレが……あんなモノがここに居て良いはずはない。

人外の力を扱うナナだからわかった。

負傷した人間があんな術を使って、無事であるわけがない。

(もう……やめて……)

浮かんだその想いは、何故か懐かしいもののように感じた。

(もう……終わりにして……)

ナナはサスケを見た。

髪も、肌も、眼も……すでに呪印によって色を変えていた。

その呪われた力を引つ張り出さなければ、立っていることすら困難な状態だった。

それでも、まだイタチにどす黒い殺気を飛ばしていた。

雨はいつの間にか止んでいた。

サスケの放った雷が、立ち込めた雲を飛散させたのだ。

ナナの心もまた、重く息苦しい雲が晴れたようだった。

(サスケ……)

「やっ」と言った。

ナナはここへきてやっとな、その足を進めた。

雲が晴れても、冷えた心は震えを止めなかった。

それでも、ナナは二人の元へ向かった。

決意を何度も手折られて、想いを強く打ち砕かれて、今になって零れ墜ちた力がようやく戻った。

心が、ようやく願いの先へと辿り着いた。

「もうやめて……!!」

そして、その願いを向けたのは、

「サスケ……!!」

“サスケに”……だった。

「お願いだから……」

向き合ったのは、

「もう終わりにして……!!」

サスケだった。

「二人とも、もう戦えない……!　これで終わりでいいでしょう?!」

サスケに向き合い、

「アナタはそんな姿になって……」

イタチに背を向け、

「イタチにもこれ以上こんな術を使わせたくない……!!」

ナナは初めて二人の間に立った。

早く終わらせなければ、どちらかが居なくなってしまう予感がしていた。

そんな最期は見たくなかったから、

「イタチの『本当の望み』は、私が聞くから……」

イタチではなく、サスケに向けて声をあげた。

「絶対に私が聞き出すから……!!」

サスケを止め、

「アナタにちゃんと伝えるから……」

イタチを護って立っていた。

「だから……」

小刻みに震える膝は止められない。呼吸は喉を掻き切る痛さを伴っていた。

それでもナナは、まっすぐにサスケを見据えた。

「サスケ……!!」

願いを込めた。
全てを懸けて。

たとえまた打ち砕かれようとも、今は心をそのままに伝えるしかなかった。
だが、

「其処が……」

サスケは昂るものを止めようとはしなかった。

「其処がお前の辿り着いた場所か……!!!」

それをぶつけられ、ナナは歯を食いしばった。

「言つたはずだ……オレの前に立ちはだかるならお前も殺す!!」

無理やり拳を握らなければ、彼の怒気に蹴倒されそうだった。

「わかつてる……」

だから、必死で顎を上げる。

「アナタは私を殺して、イタチも殺して……それで、後でヒトリで苦しむんでしよう……？」

押し寄せる悔恨は底なしの奈落だった。

「でもっ!!」

そこに落ちないように、全力でサスケに向き合う。

「イタチは私を殺さない!!」

そして、背にしたイタチへの想いを口にする。

声は少し震えた。

それでも……。

「絶対に……!!」

迷うのも、償うのも後にした。

「私を利用するためなんかじゃなくて……!」

今はただ、懸けるだけ。

「……そんな理由で私を生かすわけじゃないから!!」

命を。

「やっぱり……私はそう信じているから……」

そして想いを。

「だから私は、〃アナタを〃止めるっ!!」

今はここで懸けるしかできない。

「お願い……!!」

全てを、

「サスケ……」

彼に。

「もう……止めて……!!」

しかし、彼の心は応えなかった。

「ぐっ……!!」

憎しみと怒りを眼に滾らせたまま、彼は苦しげに膝をついた。

「サスケ……!!」

駆け寄ろうとしたナナに、彼はうずくまりながらもクナイを投げつけた。

憎悪の気流に乗った凶器は、ナナの足下に突き刺さった。

「……サスケ……」

ナナの声は、闇に吸い込まれた。

「……アナタは……」

虚無の風が吹いた。

「うっ……!!」

そしてサスケは、闇に呑み込まれて行った。

「ぐああああ!!!」

彼の背に、おぞましい蠢きがあった。

かと思うと、龍の如く巨大な蛇が彼の身体から天に昇った。

「サスケ……!!」

地面が割れた。

その亀裂に落ちて行くような錯覚を、ナナは必死に解く。

サスケから現れた蛇は、八つの頭を持っていた。

覚えのある嫌な気配が立ち込めていた。

ナナは身構えたが、蛇の金に光る十六の眼はどれも彼女を見なかった。

蛇は眼下のナナを無視したまま、不気味に鳴きながらイタチに食いつかんと牙をむく。

が、イタチを護る須佐熊乎は、右手のとつくりを剣に変えて八つの首を一気になぎ払う。

下草のように、あっけなく首は胴と切り離された。

それらが地に落ちた衝撃で地は大きく縦に揺れ、ナナはよろめき膝をついた。

飛礫が全身に降りかかった。

大蛇と須佐熊乎の間で、ナナは小石同然のちっぽけな存在に過ぎなかった。

(サスケ……)

それでも、ナナはサスケの名を呼んだ。

そして再び立ち上がった。

「サスケ……!!」

今は見えないサスケの姿を探した。

だが、切られた断面から新たな蛇の頭が生えた。

そしてその口からは、サスケに殺されたはずの大蛇丸が姿を現した。

「これよ!!」

大蛇丸は蛇の体液をねとねとと纏わりつかせながら狂喜した。

「この時を待っていたのよ!!」

ナナは遥か頭上の大蛇丸を睨んだ。

(アレが……サスケを……!!)

その視線を、大蛇丸は案外すぐに受け止めた。

そして、

「久しぶりねエ……ナナちゃん……」

前よりもずつと不気味に笑った。

償い

「あなたとイタチには礼を言うわ」

ナナは身構えた。

「あなたたちのお陰で、私を抑えていたサスケ君のチャクラが消えたわ!!」

大蛇丸にはなく、己の中の殺意に対して。

「これでサスケ君の体は私のモノ……!!」

抑えなければ、吐きそうだった。

それくらい強烈な殺意が、腹の奥から沸いていた。

「サスケは渡さない」

自身の殺気で眼の奥が痛んだ。

アレがサスケを闇に引きずり込んだ。サスケの傷に付け込んで、サスケの身体を付け

狙って……。

絶対に許せない相手だった。

「フッフ……」

だが、

「『渡さない』ですつて……?」

大蛇丸は嘲笑した。

「よく言うわね……ナナ……」

金色の目をナナに向け、嘲った。

「あなたが私にくれたのよ?」

大蛇丸の長い髪から伝い落ちた気味の悪い液体が、ナナの足下に落ちた。

「“私”が……?」

「……あなたがこうしてサスケ君に向き合い、イタチに背を向けていることが……」

嫌な臭いがした。

「それこそが、サスケ君の闇を濃くしたのよ?」

(サスケの……闇……)

それでもナナは目を逸らさなかった。

「私は側でずつとあのコを見てきたわ……。あなたの存在こそが、サスケ君の闇なのよ」

「」

また、ポタポタと水滴が落ちた。

「あるいはあなたが、イタチと関わりが無いただの小娘だったなら……。あのコは私の元

へは来なかったかもしれないわね」

「……………」

わかっていた。

覚悟はあった。

が、ナナはついにつつむいた。

「それ程に……………」

痛みで眼を瞑った。

「あのコのあなたへの想いは深かったわ」

知っているような口調で語る大蛇丸に、反論する言葉は見つけられなかった。

「今この瞬間に、イタチを守ろうと立ちはだかるあなたを見て、サスケ君の心が闇に呑まれないはずないでしょう？」

両手で強く、眼を抑えた。

奥から来る痛みを誤魔化すかのように。

「本当に可哀想なコ……………」

サスケの想いは知っていた。

なぜなら、自分の想いも同じモノだったから。

それは、苦しみを伴う想いだった。

だから怯えて、目を背けて、抗おうとした。
だが、今はもう……。

「でも、そのお陰で私は……」

「サスケは闇から引きずり出す!!」

その想いを誤魔化さなかった。

「今度こそ、私が……!」

「無駄よ。あのコはあなたに背を向けてるわ」

償いは後になると決めたから。

「それでもいい……!!」

また、背を向けられてもいい。

蔑むような視線を落とされてもいい。

「拒絶つ……されてもいい……!!」

あれほど怖かったサスケの拒絶。

それを受け止める覚悟ができた。

だからナナは、足元に突き刺さったクナイを引き抜いて再び上を向く。

「憎まれてでも、引きずり出す!!」

そしてベストを千切り、布を切り裂き、己の肌をさらけ出す。

「そんなモノで、今更どうしようというわけ？」

「私がアナタを、サスケから引き剥がす……!!」

ようやく持てた覚悟。

だがそこに、

「おとなしく、イタチに守ってもらったら？」

大蛇丸は凶器を穿つ。

それは鋭く突き刺さった。

一番深く、一番脆い所まで。

「結局あなたはイタチを選んだ……そういうことでしょうか？」

その冷たさに、クナイを持つ手が震えた。

「あなたはイタチを信じ、サスケ君を否定した……そうでしょうか？」

大蛇丸の凶器は、サスケが放ったものとなんら変わりはない。

「あなたこそがサスケ君の闇よ！ ナナ!!」

わかつている。

自分がサスケを傷つけた。

『二人を戦わせたくない』という願いを抱き続けてきたことこそが、サスケに対する罪。

サスケがいつそ、自分を憎んでくれればよかった。

サスケと自分が関わらなければ良かった。

でも、そうするには自分の想いが強すぎた。

闇に引かれるほど……深い深い想いだった。

そしてサスケと自分のそれが同じ深さであると知った時、向き合うほどに互いの闇を濃くすることも知ってしまった。

だが。

「アナタに……」

言葉はもつとも。

でも、

「アナタに何がわかるの?!」

サスケとイタチと自分の何がわかるというのか。

自分でさえ、今になってようやく知ったというのに。

「私の願いはっ……」

大蛇丸などにわかるはずもない。

「私はっ……」

もうずっと前から傍にあつたその願いは、

「サスケの闇を消し去りたかった……!!!」

そんな単純なコト。

『二人を戦わせたくない』。

ずっとそう願ってきた。

和泉でイタチに去られ、木ノ葉でサスケの闇を知り、それを願った。

大切な二人が敵対し合う現実が、何より悔しかった。

でも、サスケに拒絶されるのが怖くて、願いを口にする勇氣は無かった。

私はイタチを信じている。

だから復讐なんか止めて。

イタチを殺すために命を奉げないで。

サスケを想っているくせに、サスケの全てを否定する願い。

それこそが罪だと、確かにそう思った。

だが、本当はもつと単純なコトだった。

『二人を戦わせたくない』。

それは、

「イタチを止めてサスケを護りたいとか……、サスケを止めてイタチを護りたいんじゃないかって……」

初めから、二人の間に割って入りたかったわけではなく。

「そんなことじゃなくて……」

止めるとか、護るとか、そんな叶い難いことではなく。

本当は、

「私はただ、イタチに負わされたサスケの闇を消したかっただけ」

そんな単純な願いだった。

「……それだけだった……!!」

ナナは大蛇丸を見据えたまま、クナイを胸に突き刺した。

「フフ……何をするつもりかしら」

そこは、あの刻印が在った場所。姉につけられた傷の痕が、禍々しく残る場所。

ナナは醜い皮膚に、また赤い印をつける。

「こんな私の命でも……」

クナイの先は、奪われる前と同じ星の形を其処に描いた。

「アナタを葬る代償にはなる」

星の刻印は青白く浮かび上がった。

赤い血は、その光に溶かされた。

「まさか……其処に私を……!!?」

ようやくその禍々しきを見止めた金の目が、大きく見開いた。

「無駄よ！ 琴葉にその刻印を潰されたはずでしょう?」

ナナは小さく笑った。

「アレが無いと、この私力が使えないとも思った?」

大蛇丸の顔が引き攣った。

人外の存在となったからこそ、ナナの身に集まるチカラの強大さがわかったのか、心底初めて心底怯えた様子を露わにした。

「や……やめなさい……」

哀れだとも思わなかった。

「あ、あなたも無事じやすまないんでしょ?!」

醜いとすら思わなかった。

「たとえ私をサスケ君から引き剥がしても、サスケ君とイタチは止まらないわよ?!」

ただ……。

「サスケ……」

ナナはフツと笑って呟いた。

最期……サスケを守れることが嬉しかった。
うまくいくかはわからない。

が、闇の中でも、もう一度サスケの心を見つけられる自信はあった。

「サスケ……」

今度は迷わず、彼の手を取ろうと思った。

ナナは血まみれのクナイを捨て、印を結んだ。

「……に……来て……」

眩いて、唱えた。

幼いころから何万回も暗唱させられた、九尾を封じるための呪文を。

だが、最後の一節を唱えようとした時、

「許せ……ナナ……」

後ろから声がして、

「……えっ……?!」

ナナの身体に鈍い痛みが走った。

最果て

「許せ……ナナ……」

イタチの声が聞こえた瞬間、唱えていた呪文は途切れた。

そして、右半身に鈍い痛みがはしり、目の前に居たはずの大蛇丸が消えた。

自分が叩き飛ばされたと知ったのは、崩れた壁に背を打ち付け、瓦礫の中に倒れ伏してからだった。

「ぐっ……!!」

衝撃で意識は朦朧となった。

かろうじて視線を上げると、須佐熊乎の剣が大蛇丸の胸を貫いているのが見えた。

(あれ……は……)

その剣が『とつかのつるぎ十拳の剣』であることは、ナナにはひと目でわかった。

それは突き刺したモノを永久に幻術世界に封じ込める、封印の一太刀。

和泉にも伝説としか伝えられていないはずの霊剣だった。

そんなものをイタチが持っていたことに驚く間もなく、大蛇丸はあっさり消え失せ

た。

あれほど永遠の命に執着し、執念深くサスケの身体を付け狙っていた大蛇丸が消えた。

ナナが命をかけて葬ろうとした大蛇丸を、イタチは一瞬で葬り去った。

(サスケ……)

サスケは大蛇丸から解放された。

力を失い、膝をつきながらも、ちゃんと生きていた。

イタチは須佐熊乎を纏ったまま、ゆつくりとサスケに向かって歩みを進めた。

「ようやく邪魔者は去った……。これでお前の眼はオレのものだ……」

そんな恐ろしい言葉を吐きながら。

(イタチ……!!)

声が出ない。

視界が暗い。

耳も遠くなる。

(これじゃ……)

だが、ナナは薄れる意識を手繰り寄せるように、無理矢理身体を起こした。

(これじゃ……あの時と同じ……)

皮肉にも、短冊街で再会したときのこと鮮明に甦る。

あの時はサスケを背にイタチに向かって立った。サスケを護ってイタチと戦おうとした。

だがそれは、イタチによって遮られた。

イタチとサスケ、二人の前から弾き出され、身動き一つ出来ないまま。

声すら発せないままだったあの時……。

あの時と同じことはもう御免だった。

何もできない後悔は、未来を削ぎ取るほど恐ろしいものだと思った。

だから、ナナは傍に転がっていた瓦礫に手を伸ばした。

そして、それを胸に叩き付けた。

自らが作った傷に、瓦礫の角が突き刺さる。さらに、そこを抉るように力を込めた。

「ぐっ……!!」

ひび割れた地に、血が滴り落ちた。

その痛みが、やっとナナの意識を繋ぎ止めた。

(立たなくちゃ……！　立て……！　立て……！)

強引にそれを引っ張り上げた。そして同時に立ち上がった。

眩暈を振り払うように血まみれの塊を思い切り投げ捨てる。

が、それが砕けた音は、サスケとイタチ、二人の耳には届かなかった。イタチは明らかに弱った身体を、もっと力尽きているはずのサスケに向かって進めた。

「イタチ……!!」

彼の目的は、未だナナにはわからなかった。

だが、悪い予感だけが有り余るほど在った。

「待って……!!」

今さら、震えたナナの声は届くはずもなかった。

ただ願いだけで、竦んで曖昧に歪む心の形を保っていた。

そして、イタチが歩みを止めて血を吐いた時……。

「イタチ……!!」

ナナは再び走り出した。

傷の痛みは消えていた。焦りと予感で吐きそうだった。

だが、

「……っ……!!?」

その足はすぐに止まった。

ナナの行く手を遮るように、目の前に黒い炎が立ち上った。

「天照……!!」

黒炎の向こう、それを放ったはずのイタチはナナの存在を忘れたかのように、サスケを睨んでいた。

そしてサスケは、最後の力を振り絞ってフラフラとイタチに向かって行った。

「サスケ!!」

サスケに残されていたのは憎しみの力だけだった。

それだけに突き動かされてイタチに向かって行くサスケを、ナナは止めたかった。

「もうやめて……!!」

サスケが放った起爆札付きのクナイが、イタチの須佐熊乎に当たって爆音を響かせる。

ナナはその衝撃を避けもせず、目を見開いた。

「イタチ!!」

イタチはちゃんと、須佐熊乎の盾に守られていた。

が、彼の無事に安堵する間は一瞬たりとも与えられなかった。

すぐさまサスケのなりふりかまわぬ攻撃が続き、イタチはそれを跳ねつけた。

じわり、じわり……。

イタチはサスケとの距離を縮める。サスケの眼を奪おうと迫る。

だが、ナナが止めたいのはやはりサスケだった。

「サスケ!!」

だから、こう叫んだ。

「逃げて!!」

イタチがサスケの眼を奪おうとするなど信じない。

これほどまでに切羽詰った状況でも、ナナはまだイタチを信じた。悲しいほどに信じていた。

だからサスケに言う。

「お願いだから、ここから逃げて!!」

早く去って欲しかった。

イタチがその目的を果たす時こそ、絶望の時だとわかっていた。

それが「何」なのかはどうしてもわからない。

が、遂げさせては駄目だと血が叫ぶ。

それは、「イタチがサスケを殺す結末」じゃなく、別の何か……。

「サスケ!!」

根拠はなかった。

ただ、まだイタチを信じているから……。

それだけの理由。

それが果たして、正解かなどわからない。わかっていたらこんなにも心は細切れに切り裂かれたりしなかった。

目の前で、イタチがサスケを殺そうとしているのに……。
それでも。

「逃げて！ サスケ……!!」

イタチを止めるのではなく、サスケを止める。この光景を終わらせるために、サスケに去れと言う。胸の痛みは自業自得と割り切つて、悲鳴のように叫ぶ。

だが、憎しみの対象に殺意を向けられたサスケが逃げてくれるはずもなく。命を懸けて挑んだ復讐の道を、命惜しきで逸れるわけがなく。

まして、ナナの声に耳を貸すはずもなく……。

彼は草薙の剣を抜き、イタチに斬りかかる。

「サスケ……!!」

終わらない……。

終わらせたい……。

一刻も早く……。

願いが立ち消えたと同時に、ナナの心は停止した。考えるより早く、身体が勝手に動

いた。

サスケと同じように、なりふりはかまわなかった。

ナナは周囲を見回し、黒い炎の切れ目を探した。

が、イタチの放ったそれはナナを其処に閉じ込めるように、ぐるりと周囲を囲っていた。

ナナは手袋を脱ぎ捨て、掌に胸に滲む鮮血をつけた。そして両手を合わせ、和泉の術を発動した。

何と言う名の術だったか、何のための術だったか思い出さぬうち、その術を発した。目の前の黒い炎に両手を向けると、手のひらから吹いた青白い風によって、炎の勢いは弱まった。

ナナはそこから脱して、再び二人の元へと走り出す。

すでに、サスケは崩れ落ちた壁へと追い込まれていた。

何の皮肉か……その壁には“うちは”の家紋が彫られてあった。

「サスケ……!!」

壁を背にして逃げ場を無くしたサスケの眼に、イタチの手が伸びた。

「イタチ……!!」

最後……。

それを目前にしても、ナナの心は叫んだ。

「違うっ……!!」

目に映るものと、信じるものの矛盾。

それを抱えてナナは走った。

止めたいから。

護りたいから。

失いたくない……。

二人とも……。

だが……。

「……え……？」

その場所へ辿り着く前に、ナナの足はびたりと止まった。

思考も……、心も……、びたりと止まった。

信じ続けたその心が、

「……イタチ……？」

遂に、目に映る光景に押し流されて逝った。

惨絶

サスケの足元で、動かない身体。

ナナの瞳はそれに焦点を合わすこともできず、ただ足だけが先ほど下された命令のまま、そこに向かって動いていた。

瓦礫の中をどう進んだのか。どのくらいの時間をかけたのか……。

わかるはずもないままに、ナナはそこに立った。

僅かに開いたままの彼の眼は光を失い、何も映してはいなかった。

ぼろぼろの身体はピクリとも動かず、長い前髪だけが湿った風にかすかに揺らいでいた。

「イタチ……？」

応えて欲しかった。

「イタチっ……！」

名を呼ぶことしかできず、喉の奥で息が潰れるだけだった。

「……………」

指先は力を持たず、彼の汚れた頬に触れるしかなかった。

「……………」

冷たい……、いや、まだ温かい。

信じたかった。まだ、彼の魂が此処にあると。何かの間違いだと思いたかった。だが、ナナはそういう存在ではなかった。

心が、頭が……どれほど強く否定しても、ナナの血は“それ”を肯定していた。イタチはもう……此処には居ない。

逝ってしまった。

自分と、そして……サスケの目の前で……。

「……………!!」

悲しみか、怒りか……。

ナナの中の混沌とした感情が湧いた。

応えるように、側で石ころが鳴った。

見たくもないのにそちらを向く。

ポロポロで血まみれのサスケが、ほとんど崩れ落ちた壁に寄りかかり、うつろな顔で宙を見つめていた。

壁に彫られた“うちは”の紋章は今にも跡形も無く壊れそうなほどにひび割れて、ポ

ロボロと小さな破片を吐き出している。

「終わった……」

彼は確かにそう吐き出した。

反射的に歯を食いしばる。

そして立ち上がった。血が下がり、目が眩んだが、まっすぐにサスケを向いた。

「終わった……?」

立ち込める死の香りに犯されて、まるで狂気が顔をもたげたように……。

「これで……これで満足なの?!」

ナナは叫んだ。

「これが本当に……アナタが願ってたことなの?!」

疲れ果てたサスケの眼がこちらを向く。

弱い息……。

彼も、今にも崩れ落ちそうだ。

が、ナナは彼の胸に拳をぶつけた。

「ねえっ……! 答えてよ、サスケっ……!!」

ポツリ……。

空から涙雨が零れ始めた。

「本当につ、これで良かったの?！」

何度も、何度も……。

拳を当てて、そのたびに力が抜けていった。

「こんなつ……」

振り落ちる雫さえも、肩に重い。

「こんなつ……オワリ……!!」

オワリ……口にして、ナナは力尽きた。

サスケの肩の上で唇が震えた。言葉が失せた。

もう、何をどうすれば良いかもわからず。

情けなく……。

サスケの言葉を聞くことすらできず……。

「サスケっ……!!」

彼の肌に触れたまま、泣いて……その心には確かに彼を“殺したい”という感情があった。

いや、自分も“殺して欲しい”という感情があった。

憎しみなのか、怒りなのか、絶望なのか、感情の正体はわからない。

何かを壊したかった。同時に、壊されてしまいたかった。

が。

「……………」

サスケはとうとう言葉を発することないまま、ゆっくりと右腕を動かした。

そして、ナナの背に手を回し、暗部のベストを少しつまんで……そのまま力を失った。支える力などないナナは、そのままサスケの身体と共に濡れた地面にへたり込んだ。

サスケの体重と、体温を、しっかりと抱きしめたまま泣いた。

そしてすぐ傍の、イタチの手を握り締めた。強くは握れなかった。

冷たいイタチの手と……わずかに温もりのあるサスケの肌。

どちらもちゃんと触れているのに、失ったもののように感じる。

雨は、二人の兄弟に降り注ぐ。

ナナは愛しくも憎い二人の間で、激しく泣いた。

泣いて、泣いて、どれだけ泣いても、何も変わらなかった。

サスケは動かない。力を使い果して弱い呼吸を繰り返すだけで、何も返してはくれない。
い。

イタチも動かない。冷たい手は、二度と握り返してくれないどころか、1ミリも動かない。

この雨が、全てを流し去ってくれればいいと願っても、痛みも、悲しみも、怒りも、恨

みも、虚しさも、後悔も……何ひとつ無くなりはない。

“オワリ”はいつまでたつても終わらない。

だが、やがて雨が止み始めた頃……、ついに空気が揺らいだ。
ナナの背後に、突然無遠慮な気配が現れた。

「和泉菜々葉か」

それは唐突に声を出した。

だが、ナナにとってはそれが何者でもよかった。

自分の名を知っている者だとしても、どうでもよかった。

「……放つて……置いて……」

嗚咽の中にも、確実に怒りを込めてナナは言った。

「もう、私たちを放つておいてっ……!!」

後ろの男は淡々と何か言っていたが、ナナは吐き捨てた。

「放つておいてよっ……!!」

サスケを抱き、イタチの手を握り締めたまま……。

「やっど……」

やっど……

「やっと三人でっ……」

不毛な言葉は声にならなかつた。

やっと、三人で……

『いつか三人で……』

あの願いが、こんな形でオワリを迎えたのだから。

このまま三人で一緒に消え去りたかつた。ただそれだけ……。

どうにもならなくても、そう願うことしかできなかつた。

「可哀想に……」

背後の男はそう呟いた。

それに対する言葉をナナが返すことは無かつた。

男はサスケの肩に顔をうずめたままのナナの首に、手刀を打ち付けた。

薄れゆく意識を繋ぎ止める気力など、ナナにはもう残つてはいなかつた。

残像

暁の衣の男が二人……、ナナとサスケ、そしてイタチの遺体を連れて去った後、其の場所にはようやく木ノ葉の小隊が辿り着いた。

明らかに戦闘のために破壊された建物の残骸。

先ほどまで激しい雨が降っていたにもかかわらず、周囲には黒い炎が消えずに燻っている。

まだ新しいその爪痕を前に、彼らは立ち尽くしていた。
捜し求めていた“うちは”の者たちの姿は、すでに無かった。

少し前、彼らは暁の男と交戦中だった。

見たことも無いその特異な術に、カカシやヤマトすら動揺を隠せない中、突然戦闘は中断された。

「終ワツタゾ」

不意に、もう一人の暁の男が現れたのだ。

そして仲間にこう告げた。

「サスケの勝ちだよ。イタチは死んだ」

一瞬、木ノ葉の忍たちは引きつった。

あまりに唐突に突きつけられた結末……。

それが意味するものを、すぐには理解しようもなかった。

が、暁の者たちがそんな暇を与えるわけもなく。

「思ったとおりの結末だったな」

「サスケも倒れちゃった……。結構ギリギリの状態かも」

二人は淡々と言葉を交わし、彼らにとってさらに衝撃的な名を出した。

「和泉菜々葉はどうした？」

その名が誰を意味するのか、皆知っていた。

が、その名の持ち主が、〃そこ〃にいるのかはわからなかった。

「少しだけ匂いが残ってるけど……」

「この雨で流されたか……」

「これ以上の追跡は無理だな……」

カカシと忍犬は、うな垂れる部下を見ながら呟いた。

少し前まで確実にここに居たはずの「仲間」をまた見失い、誰も言葉を発せなかつた。

だが、沈黙は唐突に破られた。

「おい、これっ……………」

キバと赤丸が、カカシにあるものを見せた。

「これは……………」

瓦礫の中で見つけたというそれは、

「……………オレがナナに渡した物だ……………」

ひび割れた暗部の仮面と、焦げた忍刀だった。

彼らの中に、先ほどの暁の二人の会話が甦る。

『和泉菜々葉はどうした?』

『……………さすがの和泉の姫も、今度こそ壊れそうだ』

ナナは何を見た……………?

何をしようとした……………?

何を抱えていた……………?

「ナナは……………なんで、なんでナナがここに……………」

やっと、ナルトがそう呟いた。

ひび割れた面を手にとって、まるで泣いているように流れる雫をそつと拭う。

「ナナは……」

カカシは焦げた刀を見下ろして告げた。

「ナナは、うちはイタチを知っていた……」

「え……?」

「知ってた……?」

「な、なんで……」

湿った空気に動揺が走る。

ヤマトさえ、カカシの右目を凝視した。

「“うちは”と“和泉”……、一族同士が秘密裏に決めた許婚だったらしい……」

いち早く事情を飲み込んだヤマトとサクラは目を伏せた。

カカシの『秘密裏に』という言葉が、重く押し掛かる。

彼らはもう、ナナの“姓”と“血”を知らないわけではなかった。

伝説の一族が今も存在し、ナナがその末裔だったと知ったとき、ナナを理解できたつもりだった。

それと共に、ナナが抱えるものがわからなくなっていた。

なぜ、伝説の陰陽師一族の娘が、たった一人で忍里に来たのか……。

なぜ、忍になったのか……。

今また、新たにナナが背負わされたものの重さを知ることとなる。

なぜ、"うちは"の男と許婚だったのか……。

「ま、まさか……ナナは、うちはイタチのこと……」

キバが苦しげに呟いた。

絶望の時、たいてい推測は全て悪い方へと向かうものだ。

今回もその例に漏れず、彼らの推測は最悪の方向へ走っていた。

「……"大切な人間だ"と……ナナは言っていた……」

そして、カカシの答えはそれを肯定した。

あるいはその逆だったなら……。許婚とは名ばかりで、当人同士が疎遠な関係だったなら……。淡くそう思った。

だが、現実には残酷だった。

「じゃあ……ナナはどんな気持ちでっ……!」

想像できるはずなどなかった。

ナナがどんな気持ちで、"大切な人間"であるイタチと、彼を殺そうとしたサスケの間に立ったのか。この修羅の地に、どんな闇を抱えて立っていたのか。何を見つめ、何を思ったのか。

誰も、わかるはずなどなかった。

ナナが例えば、何処かで無事でいたとしても……イタチを殺したサスケと、サスケへの想いをどうするのか……。

ナナが何を護って、何を始末するのか……。

彼らが馳せる想いは、ただ湿った空気を虚しく彷徨うだけだった。

悪夢

イタチに愛され、自分が一族の誰からも愛されていないことを知った。

イタチが現れるたび、未来への希望が生まれた。

イタチに慣れて、忍になりたいと思った。

イタチの話を聞くと、サスケへの想いが募った。

目を開けても、悪夢が続いているかのようだった。

さつきまでのことはただの「悪夢」だったのだろうか……？

そう思えればよかった。たった一瞬でも。

だが残念ながら、ナナの思考はそう思えるような明朗なつくりではなかった。とても陰鬱だった。

なんだか薄暗くてジメジメとしたこの空間に溶け込んでしまいたかった。

が、そこに寝転がって絶望に身を任せることすらできず、ナナは重い身体を起こした。手にはまだ、イタチの冷たい手と、サスケの体温が残っている。

それをそのままにはできなかつた。

たとえ見たくないものを見たとしても、もうあの光景以上に悲惨なものはきつとないのだから。

ズキンと胸が痛んだ。自ら作つた傷が、場もわきまえずに悲鳴を上げている。

そこを見下ろすと、切り裂いた衣服の下にあるはずの傷には手当てがされていた。

「目覚めたか、和泉菜々葉……、いや、いずみナナと呼ぶべきか？」

聞き覚えがあるかどうか定かでない男の声がした。

蠟燭の灯が届かぬ闇から、男はゆっくりと姿を現した。

橙色の歪な面をつけた男……。見覚えは無い。

だが彼に対して、何も感じることはなかつた。

二つの名を知っている事実にも。

ただ、

「イタチと……サスケは……どこ……？」

そう問う。

喉の奥が干からびていた。

が、男は答えずに手にした何かを投げつけた。

「……………?!」

顔の近くでかろうじてそれを受け止め、何なのかを理解する前に男が言う。

「隣にサスケを寝かせている。手当てをしてやれ」

男は腕組みをしたままその場から動こうとはしなかった。

ナナはわずかに躊躇って、投げつけられたものを見下ろした。

これには覚えがある。自分のポーチだ。

「どうした？」

男が言わんとすることはわかっていた。

『イタチを殺した憎い相手を手当てすることはできないか？』

だから、ナナは彼をひと睨みし、立ち上がった。

胸の痛みも、頭の軋みも、感じないようにした。

いや、そんなものはどうだってよかった。

いや……、もうよくわからなかった。

男に反抗しているのか、それともただの使命感なのか、それすらよくわからぬまま、ナ

ナは男が指した『隣』の部屋へ向かった。

部屋といっても壁の向こうではなく、木の衝立で仕切られただけだった。

だから、すぐにサスケを見つけることができた。

何の役に立つのかわからない木箱に置かれた蠟燭が、横たわるサスケの顔を照らして

いる。

岩盤を削って無理やり人が過ごす空間を作ったかのような歪な場所だ。

陰気で、湿って、殺風景で……、床というか、岩肌にただ敷物をしいただけのところにサスケは寝かされている。さつきまでの自分と同じように。

ナナは唇を引き結んだまま彼の傍に膝をつき、ポーチから自身で作った傷薬を取り出した。

サスケの顔をまつすぐに見ることはできなかった。

どんな顔をして眠っているのか……、知りたくはなかった。その瞼が開くとき、目を合わせる瞬間のことを考えたくなかった。

顔を背けたまま薬の蓋を開けると、薬草の匂いが鼻について……涙が滲んだ。物心ついた頃から作り慣れた薬なのに、涙が止まらなかった。

サスケの身体に包帯を巻き終えても、頬から涙は消えなかった。

「うっ……………」

遂に片手でそれをぬぐったとき、いつの間にか傍に来ていた男が、先程より同情を含んだ声で言った。

「イタチの遺体は別の部屋に安置してある」

“遺体”という言葉に、ナナは唇をかみ締める。

「お前たちに話すことがある。お前たち二人にとつて、とても重要な話だ」
そう言われても、興味は少しも湧かなかつた。

「サスケが目を覚ますまで、お前も休んでいろ」

ナナはそのままサスケの傍らで、膝を抱えて顔をうずめた。

男が何を話そうとしているのか、男がサスケと自分にとつてどんな関わりのある人間なのか……そんなことはどうでも良かった。

ただ、放つておいて欲しかつた。

そうして、自分の感情に始末をつけたかつた。

だが、サスケの傍から離れることも、この何処だかわからない場所から逃げ出すこともできずに、力なくうずくまることしかできなかつた。

どのくらいの時間が経つたのか……。

ぐるぐると同じ想いが巡るばかりで、時の経過などさっぱりわからなかつた。

こんな時ほど早く過ぎ去つてしまえばいいと思うのに。

苦しみは少しも引かぬまま、とうとうサスケが目を開けた。

兄

知らない場所だった。

蠟燭の明かりで、洞窟のような場所だとわかる。

そんなことはどうでも良かった。

疑問すらもたずに、ただ無意識のうちに起き上がる。

と……、傍らでナナがじつとうずくまっていた。

泣いているのか、眠っているのか……。

髪の手すらピクリとも動かず、ただ蠟燭の明かりさえ拒絶するように身を縮めていた。

その姿に、確かに死したイタチの顔が重なった。

「勝ったのはお前だ、サスケ」

そのビジョンを見抜いたかのように、暗がりからくぐもった男の声がした。

「前に一度会ったのを覚えているな？ あの時敵としてだったが……」

見覚えのある、橙の面。暁の……確かデイダラとかいう男と組んでいたのを思い出

す。

彼は言った。

「お前といわずみナナに『ある事』を伝えるため、ここへ連れて来た」

自分とナナに……。

そう言われても、何の興味も湧かなかつた。

傍のナナも、少しも動かない。

あの男が何を言おうとも、自分が目覚めていようとも……、きつともうどうでも良いのだとサスケは思った。

放っておいて……。

ナナの心が見えるようだった。

もう、放っておいてくれ……。

自分もまた、同じだったから。

が、

「二人とも、まるで興味無し……か」

男はサスケとナナを捕えて放さなかつた。

「だが、こう言えば少しは聞く気になるだろう」

次の言葉に、サスケもナナも、かすかに視線を男に向ける羽目になる。

「オレの話は、うちはイタチについてだ」

サスケは横目で男を見やった。

ナナも、ようやく気だるそうに顔を上げた。

「聞く気になったか？」

男はひとつ溜息をつき、己の面に手をかけた。

「まずは自己紹介から始めよう……」

そして、

「オレはお前たちと同じ、うちは一族の生き残りであり……」

少しだけ、その面をずらして言った。

「うちはイタチの真実を知る者だ」

ドクン……と、サスケの心臓が鳴った。

男の言葉に対して……？

いや、それは男がわずかに見せた“右の眼”を見てしまったからだだった。

それは確かに“写輪眼”だった。本来うちは人間しか持たぬモノ。

が、それに心が、脳が、反応したというわけではなかった。何か別の、自分の五感とは関係ない何か、サスケにその反応をさせていた。

そして、それはさらにサスケを支配するように動かした。

感じたことのない力が流れ、左眼の痛みとともに男の姿が歪んだ。

「ぐあつ」

男は声を上げた。

カラン……という面が地面に落ちる音で、サスケは男の身に黒い炎が纏わりついたことを知る。

「ぐつ……」

サスケは左眼を抑えた。そこから脳に突き刺すような痛みが走る。

「ぐおおつ」

同時に、男が倒れこむようにして暗がりにも身を引いた。

「サスケっ……!?!」

悲哀に満ちた声がして、冷たい手が身体に触れた。

「うっ……」

ひどい疲労感がのしかかった。気づかなかった全身の傷の痛みも、この時ようやく表れる。

「サ……!」

反対に、冷えた指先は怯えたようにすぐに引つ込んで行った。

当然だと思った。

だから彼は、その残像を追わなかった。

そしてすぐ、男が再び姿を現した。

「これは恐らく……、イタチがお前に仕込んだ。『天照』だろうな……」

サスケは面をつけ直して立つ男の方を見た。

ナナが息を呑んだのがわかった。

「さすがはイタチだ。ここまで手を打っておくとは……」

男は独り言のように言う。

「一体、何のことだ……？」

ようやくサスケは言葉を出した。

と、男は勿体ぶらずに答えた。

「イタチはお前に術をかけていたのだ。オレを殺すため……、いや、お前からオレを遠ざけるためにな……」

それがどんな意味かはわからなかった。

「お前がその眼でオレを見ると、自動的に『天照』が発動するように仕掛けたんだろう」

ナナの気配が揺れていた。

「何の話をしている？」

サスケはそれを感じつつ、そう言った。

男は淡々と聞き返す。

「イタチは死ぬ前に、お前に何かをしたはずだ」

「……………?!」

瞬間、鮮やかに瞼裏に浮かぶ最後の光景。

追い詰められたあの時に、イタチは……………。

「最後の最後、イタチは己の瞳力を全てお前へ授けたのだ」

「何を言っている……………?」

とうとう、ナナが震え始めたのを感じた。

「どうしてイタチがそんなことを……………」

「わからないのか?」

だが、残酷にも男は「真実」とやらを告げた。

「お前を守るためだよ」

わずかに抵抗はした。

だが、それは無意味だった。

「イタチから聞いたんだろう?」

「あの夜」の協力者のことを」

“あの夜”……イタチが一族を殲滅した“あの夜”……。
それを思い起こす前に、男は容赦なく己の正体を明かした。

「オレがその、うちはマダラだ」

うちはマダラ……。

その名の記憶が断片的に蘇る。

が、それらを繋ぎ合わせる間もなく、彼は続けた。

「オレはイタチの全てを知っている」

否定する力を持つとうとするサスケと呼吸すら震わすナナに、マダラを名乗る男は苦笑とも嘲笑ともとれるものを混ぜながら言った。

「……まあ、イタチはそれに気づかずに死んだがな」

「うるせえ！」

怒りか憎悪か……、湧き上がるままにサスケは叫んだ。

「そんなことはもうどうだっていい！」

終わったはずだ。“あの夜”のことは全て……。

だから、

「オレたちの前から消えろっ!!」

もう終わったはずだから……。

だが、

「いや、聞いてもらう」

マダラは今までで一番強い声で言った。

「お前たちは聞かなくてはならない! それがお前たちの義務なのだ!」

身体に掛けられていた布を握りしめた。

ナナは耳を塞いだ。

「忍の世のため、木ノ葉のため……、そして何より弟のために全てを懸けた、うちはイタ

チの生き様を!!」

マダラは興奮を隠しもせずつぶつけた。

そして、自らのそれが収まるのを待つて語り出した。

「イタチの真実を知る者は四人いた……」

木ノ葉の三代目火影とダンゾウ、相談役のコハルとホムラ……。

三代目火影亡き今は、三人だけがその事実を知る。

彼らは絶対にこのことを口外しないだろう。

だから、イタチの真実はこのまま闇へと葬られる。

永久に……。

イタチ自身もそれを望んでいた。

だが、マダラもまたその真実を知っていた。

木ノ葉の過去、イタチの真実、忌まわしい事実……。

全て知っていたが、イタチはそのことには気づかずに死んでいった……。

マダラは淡々とそう語った。

「だが、イタチはずいぶんと用心深かったようだ。オレがその事実を知る可能性を考慮し、万が一の場合には『天照』でオレの口を封じようとしたのだろう」

容易に理解できない話の中、マダラの声に憐みが含まれた。

「オレがお前に話すとき、オレが写輪眼を見せることまで計算していた」

少し昔の物語に、急に自分が登場した。

「オレに……話すとき……？」

疑問は自然と声になった。

「何を言ってる……？」

ナナの気配はもう感じなかった。

いや、感じ取る余裕すらなくなっていた。

同じ疑問を持っているのか、マダラの話の聞いているのかさえもわからなかった。

「最初に言っただろう。お前を守るためにイタチはそうしたんだ」

ぐるぐると、ただぐるぐると頭の中を渦巻く言葉。

「オレを……守る……？」

浮かんだ疑問を、一向に考えようとしない脳。

「思い出せ、サスケ」

代わって、マダラがそれに命令をする。

「イタチのことを思い出すんだ」

呼応するように、呼吸が速くなる。

「優しかった兄を」

マダラの言葉はまるで催眠術のようだった。『優しかった兄』が、いとも簡単に脳裏

に蘇った。

「あ、アイツはオレを殺そうとした……」

あの笑顔、あの声……。

「オレの眼を……奪おうとした……！」

まるで拒絶反応を起こしたかのように、サスケは激しく咳込んだ。

「落ち着け、ゆつくりと息をしろ」

伸びた手を、サスケは払いのけた。

「触るなっ!!」

反動で、身体がガクンと傾いた。視界までが暗くなり、より鮮明にイタチの記憶がまぶたに映った。

「優しい兄」の顔、一族を殺した殺戮者の顔、兄としての笑み、眼を奪おうと伸びる手……。

最後に泣き叫ぶナナの顔が蘇った時、サスケは意識を失った。

(ナナ……)

ナナがこの瞬間に何を見つめているのか、知ることはできなかった。

真実への入り口

再び目を開けた時、身体は縛られ、座らされていた。

ナナはすぐ隣に居た。が、瞬きすら忘れたように宙を眺めていた。

「悪いが拘束させてもらった。おとなしく話を聞いてくれそうもなかったんでな」

マダラは腕組みしながらこちらを見下ろしていた。

「あいつは……」

サスケの口から、呪文のように言葉が出た。

「イタチは……敵だ……」

今まで在り続けた思いを呟く。

「父さんと、母さんを殺し……一族を皆殺しにし……」

自分に言い聞かせるように。

「木ノ葉の抜け忍で……暁のメンバーだ……」

そして、

「あいつは……憎むべき存在だ……」

そこに居る、ナナにさえも届くように。

「オレが……殺した……」

少しの沈黙があつた。

ナナはピクリとも動かなかつた。

サスケの声が、聞こえているのかどうか……それすらも分からないほどに。

だが、マダラはかまわず沈黙を破つた。

「“あの夜”……、イタチがうちは一族を皆殺しにしたのは事実だ。そしてイタチは木ノ葉を抜けた」

いや、『破つた』というよりは、残酷な言葉で切り裂いた。

「そうすることが木ノ葉から下された任務だったからだ」

「……………?!」

サスケは初めてまっすぐにマダラを向いた。

応えるようにマダラは言う。

「それが、イタチの真実への入り口だ」

「……………任務……………だと?」

何かが無理やりはがされて行くような感覚。

サスケはそれに身を任せるほかなかった。抗おうにも心は追い付かなかった。

「あの夜」、イタチは己を殺し、木ノ葉の忍としての任務をやり遂げたのだ」

「どういう事だ……?」

哀れにも、ナナもまた、ゆっくりとマダラに焦点を合わせていた。

その姿を視界の隅に留めて、サスケはさらなる「真実」を要求する。

「イタチの話をするには、まず木ノ葉創設期にまで話を遡らねばならない」

マダラは腕組みを解いて言った。

「イタチは犠牲になったのだ。古くから続く因縁……その犠牲にな」

因縁……。

木ノ葉隠れの里が創られた当時の因縁など、知るはずもなかった。そんなものが自分たちに関係があるなどとは思えなかった。

だが、

「これから話すことは全て事実だ」

マダラは話はじめた。

八十年以上も前の話を……。

国が権力を争っていた戦国時代……。

まだ忍は武装集団でしかなかったその時代時代、国に雇われて戦争に参加していた忍たちの中で、最も恐れられていた一族があった。

それが、千手一族と、うちは一族だった。

マダラはうちは一族の中でも、ずば抜けたチャクラを持つて生まれた。

その時代、忍は戦いに明け暮れ、うちはもまたそうだった。そしてマダラは、力を保持するために友も弟も手にかけて。

そうしてうちはのリーダーとなり、木遁を扱う忍の憧れ……千手一族と幾度となく戦った。

千住の長は、後の初代火影となる男、千手柱間だった……。

国と国との戦争で、一国が千住を雇えば、敵国はうちはを雇う。

二つの「名」はライバル同士のように戦いを重ねることで、世界に知れ渡った。

マダラは言った。

弟の眼を得たのは、名を上げるためではない。一族を守るためだと。

千手を初めとする外敵から一族を守るために、強くならねばならなかったのだと。

そして、弟は自ら眼を差し出した……と。

やがて、千手はうちはに休戦を申し入れた。双方の一族の誰もが、戦いに明け暮れた毎日に疲れ切っていたのだ。

が、マダラは一人、休戦に反対した。

今までの憎しみは……？

弟の犠牲は何のために……？

いずれは千手に駆逐されてしまうのでは……？

しかし、一族の休戦への願いは強かった。

マダラはリーダーとして、仕方なく千手の申し出を呑んだ。

やがて忍連合を築いた彼らは、火の国との協定にこぎつけた。

火の国と木ノ葉隠れの里という『一国一里』のシステムが生まれ、他国もそれを真似た。

そして、力の均衡がとれたことで、一時の平和が訪れた。

しかし、木ノ葉はすぐに混乱に陥る。

初代火影の座を巡っての争いが起こったのだ。

サスケやナナム、当然それが誰になったか知っている。

選ばれた千手の柱間に対し、マダラは危機を覚えた。

うちはが主権から遠ざかって行く……。

それはマダラにとつて「一族の危機」だったのだ。

だから、うちはを守るためにうちは主導の道を選び、彼は再び柱間と対立した。

しかし、平和を願ううちはの一族で、彼に従う者は無かった。

マダラは全てに裏切られ、里を出た。

やがて……。

復讐者となつた彼は、木ノ葉に戦いを挑んだ。

そして、終末の谷と呼ばれるあの場所で、破れ散つた。

マダラは死んだ。

戦つた柱間さえもそう思つて、歴史からマダラの名は消えて行つた。

その後、二代目火影は二度と同じ事が起こらぬよう、うちは一族に特別な役職を与えた。

それが今の『警務部隊』だった。

それは聞こえが良かったが、実態はうちはを里の政まつりごとから遠ざけ、一族をひとまとめに

して監視するものだった。

うちの中には、上層部の意図に気づく者もいた。

だが……時すでに遅し。

木ノ葉の主権は千手の手から離れることはなかった。

さらに、ある事件がきっかけで、うちには完全に駆逐されてしまう。

それがあの、「九尾来襲事件」だった。

「どういうことだ？」

サスケは口を開いた。

今までの、マダラが語った歴史は、彼の知る歴史の裏側だった。

信じられなくもなかった。

が、「九尾の事件」を出されて、黙って聞いていることはできなかった。

「九尾を手懐け、コントロールすることができるのは、和泉一族の陰陽術と、うちの瞳力だけだ」

マダラはサスケとナナを交互に見た。

「木ノ葉の上役たちは、あの事件を「うちは」か「和泉」の何者かによる仕業ではないかと勘ぐった」

サスケは視界の隅でナナを伺った。

弱った横顔に変化はなかった。ただ、膝に置かれた指の先がかすかに動いていた。

「だが実際、あれは自然発生的な天災というやつだ。うちには関係していない。それに

……」

マダラはうちは一族の関与を否定し、

「当時の和泉には、九尾を呼べるような術者など『和泉成葉』以外にはいなかったし、その成葉も木ノ葉の人間になっていた」

和泉一族の可能性も打ち捨てた。

「しかし双方に疑いはかけられた。うちはが里の主権を狙って、自分たちの手で九尾を操ったか、もしくは古くから繋がりがあった和泉に協力させたのではないか……とな」
「うちはと和泉が古くから親交があったのだと？」

しかし、新たな事実はナナの顔さえも引きつらせた。

「歴史が刻まれる前からの深い深い繋がりが……たとえば『対極』という位置でのな」
「対極……？」

サスケはついに、ナナを向いた。

「お前は知らされなかつただろうが……和泉の血を持つ者には一切の幻術が効かない。逆に、和泉の特殊な陰陽術は『万華鏡写輪眼』によって破られる」

「天敵……というヤツか……」

「そうだ。一族固有にして最強の術が、唯一効かない相手同士という関係だ」

ナナは……これを知っていた。

「だが、和泉は千年の歴史のなかで衰退していった。本来ならば世界を治めるほどの術を持ちながら、それを扱う者が産まれなくなつていった。特異なその血は当然外敵に狙われたが、自らを守る力すらなかった」

その証拠に、サスケの視線から逃れるようにうつむいた。

「だから木ノ葉隠れの里ができた時、不測の事態に木ノ葉の忍が和泉を守る代わりに、火の国にその類稀なる術を捧げるようにとの協定が交わされた。かつて地上の神とも呼ばれ、闇に消えてもなお伝説の一族と呼ばれた和泉が、ただの大名たちの『お抱え陰陽師』になり下がつたのだ」

マダラは淡々と続けた。

「和泉は力を失い闇に隠れ、うちはもまた里での権力を失つていた。木ノ葉の上層部は、対立し合いつつも繋がりを持っていた二つの特異な一族が、この期に手を取り合つて逆に踏み切つたのだとこじつけた」

和泉の歴史など、サスケはひとつも知らなかった。その存在自体、皆と同じで知らなかったのだから。

だが、彼の名とナナの名は、暗い闇の奥でこんなにも複雑に絡み合つていた。

「木ノ葉は暗部によつてうちは一族を徹底的に監視した。居住区も里の隅へ追いやり、隔離さながらの状態になつた」

知っていることと、マダラが口にするのが、だんだんとそれらを知らしめる。

「木ノ葉の追及を恐れた和泉は、反逆の意を否定するためと、九尾来襲を予言することができなかった償いのため、九尾が再び暴れ出した時のための『封じの器』を創り上げ……『保険』として差し出した」

知りたくなかったことまでも。

「そうやって産み出されたのが……和泉菜々葉だ」

「……………」

サスケはナナから目を逸らした。

そのために、そんな都合のために、ナナは意図的に産み出された……。

操られた生に、抗うことができるはずもない。ナナの諦めがこの絶望と同調しているように思えた。

「和泉は『保険』でなんとか誤解を解いた。が、里に住まううちには差別された。唯一、三代目がこの措置に異議を唱えたが、ダンゾウや相談役たちは認めなかった」

マダラはその全てを見据えたうえで、事実を明かす。

「不信はわだかまりを生み、疑いはやがて現実となっていく……」

その現実とは。

「うちは一族は実際にクーデターを企んだ。里を乗っ取るために」

サスケの……己の一族の謀反という現実。

「その動きに勘付いた木ノ葉上層部は、うちは一族にスパイを送った」
悲劇の真実。

「それがお前の兄、うちはイタチだ」

「……………!!」

それこそが、イタチの悲劇の始まりだったのだと……。

涙の答え

うちはがクーデターを企てていたこと、その首謀者がイタチとサスケの父、うちはフガクであったことは、当時幼かったサスケには知らされていなかった。

もちろん、イタチが父によって暗部……つまり里側へ送り込まれたスパイだったということも。

「だが……それは逆だった」

マダラは言った。

「イタチは逆に、里側にうちはの情報を流していたのだ」

俗に言う、〃二重スパイ〃だった。

なぜイタチは一族を裏切り、里についたのか……。

当然、サスケは疑問を吐きだす。

だが、マダラはこう答えた。

幼くして戦争の酷さを目の当たりにしたイタチは、平和を愛する男になったのだと。

里の安全のため……平和のために働いたのだと。

そして、その心を上層部の人間に利用された。

「眼には眼を……写輪眼には写輪眼を。うちには対抗するには写輪眼が必要だった」
上層部がイタチに命じたこととは……。

「うちは一族の全員の抹殺……」

サスケの肩が震えた。

マダラは「お前がイタチならどうする？」と問うたが、答えられるはずもなかった。

『想像を絶する』とはまさにこのことだ……。

イタチの心中……それを想像できないのではない。その悲痛さ、複雑さ、愛、憎しみ、後悔……それらの痛みの大きさを想像することができなかった。

イタチはその後、うちは一族に裏切られた恨みを抱いていたマダラと接触したという。

『里には手を出さない』という条件を出して、一族への復讐の手引をすと言ったのだ。

そして……唯一の三代目の和解策も失敗に終わり、イタチは“任務”を遂行した。

「任務だった」

マダラのやけにやんわりとした声が、部屋を冷たくした。

「一族を殺した犯罪者として汚名を背負ったまま抜け忍になること……その全てが里か

ら下された正式な任務だったのだ」

イタチは任務を全うした。

ただひとつの「失敗」を除いては。

弟だけは……殺せなかった。

イタチはサスケを守るよう三代目に嘆願し、ダンゾウに脅しをかけて里を抜けた。

サスケには、自分を恨むよう言い捨てて……。

何よりサスケのことを案じていたのだ。

自分を恨むことでも……サスケが強くなってくれることを願って。

そして、強くなったサスケと戦い、死ぬことを心に決めていた。

すべてが、その時からのイタチの計算だった。

何度もサスケを追い込んだのは、その身体に巣食った大蛇丸の痕を断つこと。そして、自分の死でサスケが万華鏡写輪眼を開眼すること……。

そのためにイタチが演じたことだった。

「血の涙を流しながら、全ての感情を断ち切って同胞を殺しまくった男が、弟だけは殺せなかったのだ」

マダラはサスケに近づき、縄を解いた。

が、サスケの身体は硬直したまま、体勢を変えなかった。

「イタチにとってお前の命は、里よりも重かった」

そのサスケに、マダラはイタチの真実を突きつける。

「里を抜け……血にまみれたままで、イタチは和泉の里へ向かった」

そしてマダラは久しぶりにナナを向いた。

「その時、お前に何を言ったのかは知らないが……」

ナナの視線は宙に浮いたままだった。

が、マダラは続けた。

「お前もイタチにとって大切な存在だったらしい」

ナナの視線がわずかに揺れた。

「イタチは……自らの手で最愛の弟につけた『傷』を、お前が癒すことを望んでいた。だからこそ、お前にも真実を告げなかったのだろう」

そしてついに、ナナの瞳がマダラを捉えた。

「お前がいつか木ノ葉の里に入った時、『兄に一族を抹殺された可哀想なサスケ』と、唯一心を許した許婚に裏切られた哀れなナナ』とが……ともに手を取り合って生きることを、イタチは望んだはずだ」

マダラは腕を組み換え、一度サスケを見据え、またナナに視線を戻した。

「だが……それならばお前には会わずに消えた方が効果的はず……」

ナナのかしこい脳が次の言葉を悟ってしまったかのように、その白い額がピクリと引き攣る。

「それでもイタチ自身が会いたかったほどに……いずみナナ、お前もイタチにとつては特別だったのだ」

少しの間……。

そしてナナの首が、呆けたように少し傾いた。

「木ノ葉を抜け、イタチは暁に入り込み、最も危険な組織を内部から見張っていた。それでもなお、何度かナナを救った」

マダラは立ち上がり、ピクリとも動かなくなった二人を見下ろした。

「イタチは……サスケに殺されることで、うちへの仇を討った。お前が木ノ葉の英雄になることで、うちへの誇りを取り戻そうとしたのだ」

サスケの視線も宙を彷徨っていた。

「そしてイタチは、最愛の弟に新しい力を与えるために死んだ」

二人とも、呼吸をしているのかどうかさえわからない様子だった。

「病に蝕まれながら、薬で無理に延命を続けて……」

が、マダラは淡々と告げた。

「それでも、どうしてもお前と戦い、お前の前で死ななければならなかったのだ」

『このオレを殺したくば恨め、憎め！　そして醜く生きのびるがいい。逃げて…逃げて…生にしがみつくだいい』

“あの夜”の聲が耳の奥から聞こえて来る。

言われたとおり、恨んで憎んだ。心の底から殺したいと思っていた。

そして…、それを叶えた。

あれは、挑発や蔑みではなかったというのだろうか。

全て、イタチの本当の望みだったのだろうか。

あの言葉を言いながら、イタチは何を思っていたのか…。

あの時、泣いてた…。

あの時の涙は、見間違いなんかじゃなかった。

歓喜の涙ではなかった。嘲笑でもなかった。

いったいなんだったのか…。

残酷な所業に対する無意味な後悔か。あるいは自身への憐みか。

ずっと心に引っかかっていた。

が、深く考えようとはしなかった。

憎しみがあの涙を踏みつけた。憎き男の心境などどうだってよかった。

だが、マダラが語ったことが全て真実だったとしたら……。

涙の答えに辿り着いてしまったのだろうか。

そう考えたくはなかった。

今度は絶望が、あの涙を踏みつけた……。

禁忌

イタチの真実を突きつけられ、サスケは身体の奥底から響いて来る声と戦っていた。

「駄目だ……」「認めるな……」「嘘に決まっている……」「イタチは悪だ！」

それは己自身を守ろうとする叫びだと気付いていた。

マダラの言った事を信じて、認めてしまえば……自分は……。

だが、首を横に振り続けることが無駄だと言うことにもまた、気づいてしまっていた。

その証拠に、今更ながらに思い出される「兄」の姿……。

あの日……一族が滅んだあの夜に、イタチは確かに涙をこぼしていた。その意味に、

今まで気付けなかった。

イタチは「兄」だった。弟だけは殺せなかった、「兄」だった。

落胆はなかった。

まだ、後悔すら沸き上がらなかった。

ただ、渦巻く絶望への対処も見いだせず、サスケは宙を眺めて座っていた。

だから気付けなかった。

「サスケ」

マダラが再び現れたことも。

「ナナはまだ戻らないのか？」

ナナの姿が消えていることも。



部屋の真ん中に、丈の低い寝台があつた。その脇の台に置かれたろうそくだけが、その部屋を照らしていた。

ナナはゆつくりと音も無く、寝台に歩み寄つた。

その上に、イタチが寝かされていた。

「イタチ……」

ナナのかすれた眩きは、蠟燭の火を少しだけ揺らした。

イタチの前髪が落す影が、青白い顔の上で形を変える。

ナナは跪き、そっとイタチの頬に触れた。

「冷たい……」

もう涙はこみ上げない。

動かないイタチを見つめるナナの心もまた、動くことを止めてしまったかのようにだつた。

しばし、ナナはイタチを見つめ続けた。

蠟が痺れを切らしたように蜀台に落ちた。

同時にナナは大きく息を吐いた。そして、印を結んだ。

イタチを見下ろしたままの瞳が、瑠璃紺にイ口を変える。

その変化に呼応して、灯火が明るく青白く光った。

風など無いのに、ナナとイタチの髪が揺れた。

「……イタチ……」

ナナはその名を呼んだ。

目の前に横たわる肉体ではなく、そこを離れてしまった彼の魂へ向けて……。

静かに吐いた息で、そこら中が冷えていく。

背にも冷たい闇を感じていた。

術者であるナナには、背に現れたものがわかつていた。

術が終わった時、その成果と引き換えに術者の魂を引きずり込まんとする“闇”が、

其処で口を開けている……。

だが、ナナには何の躊躇いもなかった。失敗するつもりもなかった。もちろん恐れも無い。

自信があるというよりは、ただそうすることがあたりまえだと思っていた。理性などとつくに失っていた。そんなものどうだつてよかつた。

ただ思うがままに……ナナは最初の呪しゅを唱えた。

ヒュウ……と、耳の奥で高い音が鳴った。

これで合っているのかは知らない。習ったことなどあるはずもない術だつた。

それでも、失敗するという予感は微塵もなかった。

このときばかりは己の身体を流れる和泉の血の濃さに感謝した。

ナナは二つ目の呪を唱え、腕を横に広げた。

見えない風が舞った。蠟燭の火が先ほどよりも激しく揺れる。イタチの髪もまたかすかに動いた。

「イタチ……」

傍に来ている……“彼の魂”が……。

それだけで、ナナは安堵した。

もうすぐ……もうすぐ叶う……。

身体の芯がだんだんと凍てつき、周りの空気に力を吸い取られていくような感覚が、術の順調な運びを示している。

「イタチ……」

願いを込めて、ナナは三つ目の呪を唱えた。

そして、彼の魂をその肉体に導くかのように、右手を彼の青い唇にかざした。

「もう一度……」

ただひとつだけ残った願いをささやいた。

「生きて……イタチ……」

その時、

「……痛っ……!?!」

イタチの身体に伸ばした腕を何かが阻んだ。いや、抑え込んだ。いや……噛み付いた。

「はっ……放してっ……!?!」

腕の痛みで、術へ注ぐ力が乱れた。

空気は歪み、ナナの動揺とともに青い灯が乱れる。

「放してホクトっ!!」

悲鳴のように叫んで、妨害するモノを払おうとした。

だが、腕にはしっかりと白い毛並みの三尾の狐が噛み付いている。

「ホクトっ!!」

湧き上がる怒りのままに、ホクトの牙から腕を引き抜こうとした。

食いちぎられても良かった。青い焰が消える前に、この術を終えなければ……。

「お願いっ……放してっ……!!」

ホクトの瑠璃色の目は、まっすぐにナナを見上げていた。

怒りも、哀れみも、何も映らぬ瞳。

わかっている……。

自分の分身と想っていたその神狐が言わんとしていることは、痛いほどにわかっている。
る。

だが、

「お願いだからっ……!!」

醜く泣きわめいてでも、この術を達成させたかった。

「イタチっ……イタチをつ……!!」

何を犠牲にしても、何をぶち壊してでも、イタチをこの世に生き返らせたかった。

「もう……いちどっ……」

心を乱し、息を切らし、これ以上呪を唱えることさえ出来なくなっても、ナナは力いっ

ばいホクトの牙から逃れようとした。

「やめろ、ナナ……!!」

腕を自ら引きちぎらんばかりに暴れるナナを、押さえ込んだのはマダラだった。

「ナナ、お前がその力で『世の理』を破ってどうする?!」

ホクトはようやく、ナナの腕から牙を放した。

そして、マダラすらも振りほどこうと取り乱すナナを、ただじつと見つめていた。

「お願いっ、放して!!」

「ナナ!!」

「まだっ……今ならまだ間に合うからっ……!!」

「ナナ、よせ!」

「イタチを、もう一回、イタチをつ……!!」

ナナは叫び続けた。

「イタチをつ、……もういちどっ……!!」

自分が何を言っているのか、わからぬまま……。

「イタチとっ……サスケをつ……!!」

だが、自ら発した『サスケ』の名に怯えた瞬間……、ついに青い焔は消えてしまった。

あつげなく、あたりまえのように。

ナナの悲鳴がサスケの胸を深く刺した。その感覚はあった。だが、痛みは無かった。

言葉にならないナナの叫び。

それでも、想いは伝わって来てしまう……。

いつの間にか、白い狐は消えていた。

それにやつと気づいたとき、サスケはマダラがこちらを向く前に、静かにその場から立ち去った。

引き潮

海を見渡す崖の上に、イタチの棺が埋葬された。

マダラの手によって。

サスケはそれすらもただ傍観していた。

今はもう、イタチの“何か”に関わることはできなかった。

息を吸うたびに、マダラの語った“イタチの真実”が身体に染み込んでいく。

それを止める術は無かった。

憎しみを思い起こしても、後悔さえ噛みしめてみても……、最期のイタチの笑顔が全てをかき消してしまう。

長い間抱えていたはずの憎しみ、怨み、望み……、あの夜のイタチの涙がそれらを偽りに塗り替えてしまう。

努力をするだけ無駄だった。どんなに憎んでも、“優しかった兄”を心の奥底から追いつけなかったのだから。

初めから、マダラの言葉を撥ね付けることなどできなかった。

ナナにはわかっていたのだ。

真実の中身は知らなくても、イタチの本質をわかっていた。

ずっとイタチを信じていた。妄信でなく、それこそが真実だった……。

だからイタチを護ろうとした。こちらに刃を向けて、イタチを護ろうとしたのだ。

あの時の目が眩むような醜い感情も、今はただ侘しいだけだ。

いつそ怒って欲しかった。憎んで欲しかった。罰して欲しかった。

ナナはあの瞬間に『これが本当に願っていたことなのか』と叫んで、胸を叩いた。『本当にこれで良かったのか』と責めて、泣いた。

そのまま……彼女の手が自分の全てを罰してくれば良かった。

が、それを今の彼女に求めるのはあまりに身勝手な酷だった。

その望みの欠片があまりに浅ましく、もう二度とナナに触れることはできなかった。

ナナが己の命と引き換えに、イタチを生き返らせるという禁を犯そうとしても、それを止められて狂ったように泣き叫んでも、電池が切れたように意識を失っても、死人のような顔でただ虚ろに宙を見つめていても、もう……こんな自分には触れることはできない。

マダラが全て世話をした。そんなマダラの姿も、彼女の視界には入っていないようだったけれど。

だから今も、少し離れた所で真新しいイタチの墓をぼんやりと眺めている彼女に、触れることはできなかつた。

側に寄り添うことも、言葉をかけることすらできなかつた。

マダラが隠れ家に戻るよう促したが、彼女にとってそれも風と同じだった。

諦めてマダラはこちらに向かつて来た。

「サスケ。お前の小隊を集めてある。戻るぞ」

サスケはうなずいた。

ここにいる意味はなかつた。

黙ってマダラの後に続いた。

身体が重い。

イタチの「墓」と取り残されたナナに背を向けて、言い様のない冷たいものに覆われる。

「……………」

それが何なのか敢えて確かめようとして、そつと後ろを振り返った。

と……、ナナはゆっくり、まるでため息を付くように崩れ落ち、地に手を付いた。

そして、そのまま膝を抱えてうずくまつた。

その姿はまるで、自分も一緒に地に溶けてしまいたがっているようだ……。

そう気づいた瞬間、矢が刺さったように胸が鋭く痛んだ。

それは……胸に取り込んだばかりで曖昧だった「真実」に、まっすぐ突き刺さっていた。

水月、重吾、香燐。隠れ家に集まった彼らの前に立った時にはもう、次にすべきことは決まっていた。

イタチを倒す目的のために結成した小隊だったが、彼らは新たな目的のためにも力を貸すと言ってくれた。

その真意はわからない。重吾はともかく、水月と香燐が何故この先も手を貸してくれるのかはわからなかった。

面白がっているわけでもないだろう……。

次の目的は単純に面白がるようなものでもない。

木ノ葉隠れの里を潰す……。

そんな狂気じみたことなのだから。

が、サスケに迷いはない。

「イタチ」と「ナナ」に背を向けた時、心は決まったのだ。

マダラの語った真実を受け入れ、木ノ葉に復讐をする……と。

今度はイタチへの復讐ではなく、イタチを利用した木ノ葉への復讐をする……と。

この復讐に意味がないのはわかっている。

もうイタチは戻って来ない。イタチにいろいろ質したくとも叶わない。

結果がどうであろうと、ナナが決して喜ばないのもわかっている……。

が、今の自分にはそうすることしか生きる理由がないのだ。

たとえイタチとナナが喜ばなくとも、
“二人のため”になる気がして仕方がないから。

“二人のため”に、それしかできないことがないと思うから。

そして新たな出立の日。

日が昇る海を眺めた。

波打ち際に佇んで塩辛い海風に吹かれながら、徐々に赤く染まる波を眺めた。

この朝の日や、朝の風、朝の波のように、自分の心も新しく生まれ変わったのだ。

そう思うと、ちゃんと足を進められそうだ。

この背に、新たに背負ったものと共に……。

だから、古きものはここに全て置いて行く。

波は都合よく流し去ってはくれないだろうが……、ここに置いて行こう。擦り切れそうな後悔も、哀情も、愛情も……。

流れ出た涙は不快ではなかった。

これで最後……、いや、最初で最後だ。イタチとナナを想って泣くのは。全部、全部、ここに置いて行く。

もう二度とこんな想いになることも、涙を流すこともないだろう。

慟哭は歯を食いしばって抑え込んだ。が、この背は情けなく揺れている。

それでも、誰も急かすことはなかった。水月と香燐さえもおし黙っている。

彼らの視線も、マダラの視線も、気にはならなかった。

気になるのはただひとつ……。

だがこの決意も、別れも、ナナに告げることはなかった。

あれから一度も、あの崖には行っていない。

だから、マダラがどんな言葉をかけようともあの場から離れようとしないうというナナの姿は、一度も見えていない。

今もナナは、イタチの墓の前でうずくまっているのだろうか。

いや、それも心残りになるほどでもない……。

だが、そうではなかった。

波音に紛れて、かすかに布のはためく音が近づいた。

それは砂を踏みしめる音を一切立てずに、まっすぐに、ゆつくりとサスケに歩み寄る。そしてとても自然に、サスケの横に並んだ。

その横顔を見ることはできなかった。

それでも、ナナがうつむきもせずに遠くの波間を見つめているのがわかった。

呼吸はとても穏やかで、なんだか懐かしい気がした。

いつだったか……、こうして二人並んで海を眺めてことがあった。

黒い海、そこに流れ落ちる星、波の音、潮の風、少し暖かくて、少し痛む胸……。

あの夜と同じところが同じように痛んだ。捨てようとした感情の最後のひとかけらが、足掻くように疼いたのだ。

それを感じた時、きつく握りしめていた拳にナナの指が触れた。冷たい肌がそつと繋がる。

涙の温度が変わった気がして、サスケはナナを抱きしめた。

ナナも抱き返した。今度は強く……。

この温もりを感じるのもこれで「最後」とわかっているのに、想い出がいくつも浮かび上がるといふことはなかった。

ただ「今」だけを抱きしめた。

今となつては、この存在を護りたかつたのか、傷つけたかつたのか、奪いたかつたのか、愛したかつたのか……、もうわからない。

わかるのは、とても「大切」だったことだけ。

だからこそ、これが「最後の別れ」と決めていた。

今度こそ、本当に……。

サスケは身体を離し、袖で涙を拭つた。そして、まっすぐにナナを見た。

同じ傷を刻まれたはずのナナは、とても静かにそこにいて、ちゃんと視線を受け止めてくれた。

きっとナナもわかっている。だから……。

「オレはこれから、木ノ葉を潰す」

そう、きつぱりと告げた。

その瞳は、やはり少しも揺れはしなかつた。

そして。

「ナナ……お前は……」

お前は……来るな……

そう告げる前に、ナナは言った。

「私に行かない」

涙を枯らしたナナの瞳は、とても静かだった。

「さようなら、サスケ」

何度も繰り返した別れの「最後」は、とても静かだった。

だがそれを波がかき消すことも無く……、二人でこの時間を分かち合った。

ちゃんと瞳を逸らさずに、互いの漆黒の色を最後の想い出として残すように。

そして、こうまで手折られても己の意思を告げるナナの魂が本当に、本当に「大切」

だったと……、そう胸に押し寄せたものがゆっくりと引いて言った時、サスケは黙って
ナナに背を向けた。

さようなら……。

それは言わなかった。これ以上この時を穢したくはなかったから。

背中にはもう視線を感じなかった。

それでよかった。

今まで身体の中にあつたものが、無くなつた気がした。
臓器の一部でも欠けてしまつたかのように。

これが“終わり”なのだと思つた時……、冷たい波が足元を濡らして、砂を連れて引いて行つた。

第4章 暁襲来編

鎖

波の音は懐かしかった。潮気を含んだ風も、今の心には丁度よかった。隣でサスケが泣いていた。

サスケの涙は初めてだった。

が、胸は痛まなかった。

憐みも、悲しみも、罪悪感もない。

ただ、『わかっている』と……、そういう思いで彼の震える拳に触れた。

サスケはすぐに、ナナを抱きしめた。

ナナも彼を抱いた。

こんなに自然な気持ちで触れ合ったのは、いつ以来だろう……。

ナナはサスケの体温を感じながらふと思った。

いったいいつから、傍に居ることが苦しかったのだろう……。

抱き合う二人の間に、もう苦しみはなかった。

亡くしたものが同じだから。後悔も、絶望も、全部同じだから。

だから、安らぎもなかった。

サスケは身体を離すと、まっすぐにこちらを見た。

その瞳は、前よりも透き通っていた。暗い……奥底までをさらけ出すかのように。

だからナナは、サスケがこう言うのを黙って聞いていた。

「オレはこれから、木ノ葉を潰す」

サスケの気持ちは良くわかった。

何を愁い、何を憎んでいるのかもわかった。

そして……。

「ナナ……お前は……」

次に言う言葉も。

だからナナは、先に応えた。

「私に行かない」

サスケの瞳にはかすかな動きもなかった。

サスケもまた、ナナの気持ちを知っている。

「さようなら、サスケ」

木ノ葉の暗部、三名スリーマンセル一小隊が森を駆けていた。

木ノ葉の暗部……といつても、彼らの所属は「根」。

彼らは火影ではなくダンゾウからの直々の命で動いていた。

「根」の中でも諜報活動に特化した彼らは、数時間前にある情報を得た。

「和泉一族」のいずみナナが、火影から特命を受けて単独で里を出たこと。それも、暗部の装束で。

彼らはもちろん、いずみナナがどんな存在であるかは知らされている。だからすぐさまダンゾウに報告した。

ダンゾウは『うちはサスケを単独で追つたのだろう』と予測した後、彼らに別の情報を与えた。それは、もう何十年も前にうち捨てられたという「うちは一族のアジト」の場所だ。

そしてダンゾウは、片目の奥をギラつかせて彼らに命を下したのだ。師と慕うダンゾウが、あれほど感情を露わにした瞬間は初めて見た。彼らはこの任務の重要性にうち震えながら、完遂を誓ったのだった。

忍犬のうちの1匹が戻って来た。

教えられた「うちはのアジト」を二ヶ所訪れたが、周囲に人がいた痕跡は無かった。

今回はようやく『当たり』だ。

彼らは犬を追って潮風の吹いてくる方へと走る。

日が傾き始めている。思ったより時間がかかったが、ついに標的ターゲットを見つけたのだ。逸る感情などいつさい滲み出さず、彼らはひと気のない砂浜に出た。

波打ち際、濡れそうになるかならないかのところに、彼女は膝を抱えて座っていた。まるで人形のように微動だにしない。砂浜に打ち上げられた流木のように、じつとそこにいる。

暗部装束でなく、淡い藤色の着物を着ているところを見ると、『特命の任務』は失敗に終わったのだろう。

だが彼らにとって、ナナのそれがどういう結末を迎えたのかなどどうでも良いことだった。もちろん、現在のナナの心境にも関心は無い。

ただ、ダンゾウの命を完璧に遂行するだけ……。

三人は顔を見合わせ、面越しに互いの行動を確認し合うと、それぞれ小さくうなずいた。

チャクラを溜めて跳躍し、軽やかに彼女の周囲に躍り出る。

「見つけたぞ、いずみナナ」

一瞬で接近した。が、彼女は少しも驚かなかった。

「『上』の命令だ。一緒に来てもらおう」

ピクリとも動かず、まるで彼らの存在を無い物のようにぼんやりと波を見つめていた。

「最初に警告しておく。無駄な抵抗はやめておくんだな」

ひとり一言ずつ声をかけた。

だが、いずみナナはどの声にも反応を示さず、手の中で貝殻を弄ぶばかりだ。

「我らは木ノ葉の『暗部』だ。抵抗すればお前は反逆者とみなされる」

重ねて警告すると、ナナは海に沈もうとする赤い塊を見上げてかすかに笑った。

歪んだ唇に色は無く、とても不自然な笑みだった。

「木ノ葉の暗部……?」

そしてナナは、ついに口を開いた。

薄くて弱いのに、波音に紛れずはつきりと聞こえる声だった。

「『木ノ葉の暗部』じゃなくて、『ダンゾウの手先』でしょう?」

それは、やけに冷え冷えと空気を伝った。

「貴様、ダンゾウ様への謀反か?」

「そのような口をきくとただではすまさんぞ」

ナナはクスリと息を吐きながら笑った。

「ダンゾウ……様……?」

夕日に染まらぬ暗い瞳でこう言った。

「殺したい相手に、様なんてつけるわけないでしょう?」

吐き捨てるようなその言葉尻に、ひとりが思わず呟く。

『資料』とはずいぶん雰囲気が違うようだな……」

ナナは初めて、首を傾けた。

「あなたたちの『資料』には何て?」

「おとなしく控え目で、集団の中で最も目立たぬガキだと伝えられていた」

彼らは三方からナナを取り囲み、懐の拘束具を挿んだ。

「へえ……そんなふうに見られてたんですね、私」

少女ひとりに対し、暗部が三人。にもかかわらず、そこに緊張感が漂っているのをそ

れぞれが気づいていた。

「実際はずいぶんと反抗的な態度をとるようだな」

「うちはサスケに逃げられ、ヤケを起こしたか?」

「それともそれが本性か……」

何がおかしかったのか……、ナナは噴き出すように笑った。

「懇意であったはずの『うちはサスケ』の名は、何の効力も示さないようだった。」

「何が本当の自分か……なんて、わからないと思いませんか？」

そう愉快そうに言いながら、ナナはやっと立ち上がった。

「妙なマネはよせ」

一人がそう警告したものの、ナナは未だ完全なる無防備だった。

身構えるどころか逃げようとする素振りも見せず、妖しく笑っている。

彼らはさらに警戒を強めた。

“和泉”の力で何かの術を始めるのか……。

チャクラを発してはいない……が……。

印を結び始めたなら一瞬で拘束だ。

スリーマンセル

三人一組を組んで長い彼らにとって、無言のうちにも意思疎通は容易だった。

が、ナナは彼らひとりひとりの内側を見透かしたように言った。

「べつに……今さら抵抗なんてしません」

そして、手にしていた貝殻をグシャリと潰した。

「連れて行けばいい……ダンゾウのところへ……」

一人が慎重に近づいた。

「ずつと……私を狙ってたつてことでしょうか？」

他の二人も、殺気を高めて身構える。

しかしナナはうすら笑って、潮風に貝の破片をさらわせると手を払った。

「余裕だな……。さすがは『和泉の姫』といったところか？」

「それとも逃れられぬと観念したか？」

その行為が術の発動でないことを確かめてから、カマをかけるように二人が言った。

「まあ……そんなところです」

ナナは掌に滲んだ血を眺めてから、顔を上げて答えた。

やはり、その顔は紅い日に照らされてはいなかった。

「あのダンゾウ様が私を欲しがっているのなら、簡単には逃れられないはずだから」

強がりでも挑発でもない、ただの『皮肉』。ナナの声はただそれだけだった。

三人は互いの相図もなしに、一斉に懐から拘束具を引き抜いて、全く同じ動作でそれをナナに投げつけた。

宙に放られたのは、特殊な呪印を刻まれた鋼の鎖。

それらが中心に位置していたナナの身体に容赦なく巻き付いて、三方向に綺麗に伸ばされた。

「木ノ葉の忍としてはここで『終わり』でも、無念に思うな」

身動きとれなくなったナナに、彼らは言った。

「お前の存在価値は『九尾の受け皿』だけには止まらない」

「お前はダンゾウ様によつて研究し尽くされ、やがて木ノ葉の武器となり、木ノ葉を平和へと導くのだ」

言い終えた瞬間、その場にそぐわぬ高らかな笑い声が響いた。

「な、なんだ……?」

その声はあまりに唐突で……精神も肉体も鍛え抜かれたはずの男たちの背に悪寒が走った。

声の主が誰なのか、一瞬判断を遅らせるほど。

「おい、やめろ!」

それを羞恥と感じたひとり、鎖を引いた。

他の二人も、少し遅れて力加減を合わせた。

彼らの中心で狂つたように笑う少女は、足元をふらつかせただけだった。

「黙れ!」

そう制するほどに、彼女の笑い方は異常だった。

不気味な振動が空気を伝い、鼓膜を揺らす。

何かの術を發動しているのかと疑つてみるが、彼ら自身に異常はない。こんなことで助けを呼んでいるようでもない。

ただ無邪気な笑いだ。

捕らわれの身でありながら、ナナは子供のようにケタケタと笑っている。面白くて面白くて仕方がない……といったように。

その異常さが彼らを惑わせているのは確かだった。

「おい、やるぞー！」

ついにナナが咳き込んだ時、ひとりが言った。

彼らはいっせいに鎖を引き、もう一方の手で印を結んだ。そして全く同じタイミングで術を発動した。

瞬時に不気味な笑い声は止んだ。

彼らの耳には、波と風の音だけが入り込む。

「何の抵抗もしなかったな……」

「ああ……」

そう言葉を交わしつつも、誰も手を緩めない。

彼らが発動したのは封印術だ。ダンゾウの指示で、いつか九尾を封じられるようにと、任務の合間に鍛錬を続けている。

まだそこまで達してはいないが、相当な手練れでも一瞬にして“仮死状態”にできるほどの技となっていた。

ナナは……、間違いないで死んでいた。

鎖のおかげで砂の上に倒れ伏してはいないが、目から光は消えている。歪んだ口元からは、笑い声どころか呼吸音も聞こえてこない。

が、彼らはしばらく様子をうかがった。

「和泉」についてはダンゾウから聞かされている。師の話聞く限り、彼らにとってその血は未知なる驚異であった。

だから十分に用心した。が、ナナはもう動かなかった。

「よし、連れて行くぞ」

近くの木でカラスが突然鳴いた時、彼らはようやく行動を再開した。

伸びていた鎖も全てナナの身体に巻き付けたところで、目配せし合う。

彼ら是对等であったが、一番年嵩でなんとなく最初に行動を起こす役割の者が、ぎこちなくナナの脛を下ろした。

「本当に、何もしなかったようだな……」

「ただの薄気味悪いガキか……」

「うちはサスケを逃してヤケにでもなつてたんじやないか？」

「ああ。ダンゾウ様からいただいた資料通りならそういうことになるだろうな」

他の二人がそう言いながら、鎖の塊を担ぎ上げた。

「とにかくこの『和泉の姫』とやらを例の場所へお連れしよう」

「ダンゾウ様もお喜びになるだろう」

彼らはナナを連れて走り出した。もちろん、砂浜にはひとつも足跡を残さなかつた。それを見送ってから、カラスは静かに飛び去って行った。

アクアリウム

イタチの死……サスケとナナの消息不明……そして自来也の死。

木ノ葉隠れの里は不吉な暗雲がかかったかのようだった。

しかし、忍たちに悲しみに暮れている暇などなかった。

暁がいつ動き出すかわからない今、火影は自来也の残した「暗号」の解読を最優先事項として命じ、里の総力を上げてこれに取り掛かっていた。

そんな中、カカシ、ヤマト、サイの三人スリーマンセル一組は、里を離れて周囲の警戒任務に当たっていた。

暗号解読をナルトとサクラに任せた彼らは、任務に当たりつつもある期待を胸の奥に潜ませていた。

それは、行方不明となつているサスケとナナの消息を掴むこと……。

二人の生死すら不明である今、わずかな情報でも手にしたいのが本心だった。

が、暁の猛威が迫っているこの時期に、たつた二人のために当てもなく時間も人員も割けるはずもない。彼らは日々淡々と警備の任をこなすだけだった。

特にカカシにとっては、やりきれない想いを抱きながらの任務だった。

サスケもナナも大切な部下で……その性格もよく知っている。

ナナは秘めた心を自分にだけ打ち明けてもくれた。

そのナナを修羅の場へ行かせたのも自分だと悔いてもいる。

二人を見つけたとして、連れ帰ることができるとは思わない。見つけれられる可能性も低いと知っている。

ただ、ひとつだけ望みを懸けていた。

サスケとナナが……一緒に居てくれること。

それだけはまだ願っていた。

「カカシ先生」

少しだけ二人に想いを馳せていた時、合流地点に定刻通り現れたサイが報告した。

「南東の森、異常ありませんでした」

「よし、ヤマトの報告を待って、そつちも何も無ければ里に帰るぞ」

タイミングよくヤマトも木陰から現れた。

だが、木の幹から現れたそれはヤマト本体でなく彼の木遁分身だった。

「カカシ先輩」

「どうした？ 異常発見か？」

「ハイ」

あまり表情のないヤマトだったが、その顔を見てカカシに嫌な予感が走った。

「すぐに来てください……」

カカシとサイは、ヤマトの分身に誘導されて岩の転がる沢へたどり着いた。

岩影に身を潜めて待つていたヤマト本体は、黙って少し先の崖を指さす。

「数分前、あの斜面から木ノ葉の暗部の者が一人現れ、明らかに疲弊した様子で木ノ葉の方角に走り去りました」

ヤマトは簡潔にそう言った。

「疲弊していた？ 戦闘による怪我か？」

「いえ、怪我をしているようには見えませんでした。チャクラを消耗しているような……。周囲の警戒もおろそかで、明らかに様子がおかしかった」

ヤマトはカカシの代わりに第七班を率いる直前まで暗部に居た。

だから『明らかに様子がおかしい』は、ただの印象ではなく明らかな事実だった。

そして、

「それにあれは正規の暗部でなく……、*〃根〃*の者でした」
内情も知っていた。

「*〃根〃*……ダンゾウの部下か」

カカシはそう呟き、チラリとサイをうかがった。

彼もまた顔には出さないタイプだから、何を考えているのかはわからなかった。

「様子のおかしな *〃根〃*の者……。ここで何をしていたか……」

カカシは周囲や崖の斜面を注意深く見回した。

辺りは岩が整然と並ぶばかりで、雑草が踏み荒らされた跡すらない。斜面にも特に不自然な物はないように見える。もちろん自然界にはない匂いも感じ取れない。

さすがは暗部……。痕跡を消すのは得意なのだ。かつての自分やヤマトと同じで。が、そのヤマトが違和感を覚えている。

この辺りで何かがあつたか、この辺りに何かがあるのは間違いない気がした。
その時。

「この *〃地形〃* に覚えがあります」

何の前触れもなく、黙っていたサイが口を開いた。

「地形？」

カカシとヤマトはサイを向いた。

サイもまた『ダンゾウの部下』である。今もその立ち位置は変わらないはずだったが、彼は相変わらずの無表情のまま、ためらいもなく二人に情報を差し出した。

「『根』では、こういった沢付近の崖の斜面に『施設』の入り口を作っていました」

カカシは敢えてサイの真意を確かめず、差し出されたその情報を受け取った。

「『施設』ってことは、ダンゾウの研究所か何かか？」

「僕は詳しく聞かされていませんでしたが、術の研究施設や、極秘に拘束した者たちの留置所など……いろいろだったと思います」

ヤマトも周囲を見回しながら言った。

「ここらにもその『施設』への入り口が隠される可能性が高いってことかい？」

サイは大きくうなずいた。ただそれだけだ。二人を説得しようとか、誘導しようとか、そういった意思は感じられない。

カカシには、その後の指示を従順に受け入れるという態度に見えた。

「その入り口はわかりそうか？」

「あの斜面を探せば、見つけられると思います」

やはりサイは淡々と答える。

ヤマトは表情さえ変えないものの、内心でサイの動向を注視しているのがわかってた。

「よし」

そんな二人に、カカシは言った。

「探索しよう」

二人の目が、まっすぐにこちらを見た。

「『根』が表立って活動を始めた今、少しでも異変を感じた場合は調査する必要がある」
カカシはサイの視線に合わせる。

明らかな『敵対宣言』と思われるも仕方がなかった。『根』とは一線を画すと……。

だがやはり、『根』であるはずのサイの顔色は少しも変わらなかった。

「では行きましょう」

罨とは思えなかった。

だからカカシは、黙ってサイの後に続いた。ヤマトも何も言わない。

そしてサイは、わずか10分程度で施設の入り口と思える場所を見つけて知らせた。

「(ハハ)です」

サイは斜面を覆う木立の隙間に小さな穴を見つけた。

「これが入り口か？」

「はい、間違いありません」

大人の男の身体がようやく通り抜けられるくらいの穴だ。確かに、隠れ家としては申

し分ない。

カカシは最初にその穴に身体をねじ込んだ。続いてサイが、最後にヤマトが入った。入ってみると、立って歩けるほどの通路が広がっていた。

明らかに人為的に彫られており、ここがダンゾウの何らかの「施設」で間違いはないようだった。

念には念を……という用心深いダンゾウのことだ。この先の油断は許されなかった。他に人の気配は無かったが、周囲にトラップが張り巡らされている。

「この土壁……匂いを分解する物質を多く含んでいるんだろう。匂いがあまりしない」カカシの鼻も役に立つ場所ではなかった。

ダンゾウの施設に出入りしたことのあるサイがトラップの傾向を説明していなければ、いくらカカシとヤマトでも、無傷で進むことは難しかっただろう。

やがて、彼らは施設の中心部と思われる広間に出た。そこからまた奥に、数本の道が伸びている。

ここまで来てもまだ、これが何のための施設なのかということさえわからなかった。

どのくらいの間使われていたのか、最近も使われていたのか……そんな痕跡さえまったく読み取れない。

改めてダンゾウの用心深さを思い知らされた。

何年前か前、もつと木ノ葉に近い場所に設けられた同じような施設に行ったことがあった。

そこで、一ヶ月間「読書」をするのがダンゾウからの命令だった。

今にして思えば、あの施設は各国から集められた多様な書物を保管しておく施設だったのだろう。

彼が読まされたのは、どれも他国の危険人物や凶悪事件について書かれた書物だったから、おそらくは木ノ葉の里には持ち込むことができない種類だったのだ。

山ほど読んだ内のどれか一冊でもタイトルを思い出そうとしながら、サイは最後の扉を開けた。

「え……」

そしてノブを握ったまま凍りついた。

その扉はすんなりと開いたくせに、内にはとんでもないものを隠していた。

「ナナ……!?!」

彼の眼に飛び込んで来たのは、暗い部屋に青白く浮かびあがるナナだった。

「ナナっ!!」

部屋の中の様子を細かく確認する余裕などなかった。

サイは飛びつくようにナナに駆け寄った。

ナナは筒の形をした「水槽」に入れられていた。薄緑の液体の中、両腕は頭上で鎖に繋がれ、身体には何十本もの管がつけられ、口には酸素マスクのようなものを宛てられている。

意識はなかった。

ドンドンとガラスを叩いても、瞼はきつく閉じられたまま、何の反応も無かった。

口元から出ては消える水泡の音が、ゴボゴボと不気味に聞こえている。

「ナナ!!!」

サイはもう一度、思い切り水槽を殴った。

水槽が少し振動したものの、やはりナナは目を開けなかった。

サイは動揺を押さえ込み、一度深呼吸をしてから足もとの鼠たちにカカシとヤマトを呼ぶように命じた。

その時に始めて気がついた。

水槽の周りに数人の人間が倒れている……。

面をした暗部……恐らく「根」の者が二人。そして白衣を着た白髪の男が一人。

彼らはサイが騒いでいても起きる気配は無い。死んでいるのかと思ったが、かすかに

身体が規則正しく上下している。

改めて辺りを見回すと、壁に沿って長机が並べられており、試験管やら器具やら書物やらが所狭しと乗っかっている。ちょうど部屋の中央にこの水槽が置かれているようだった。

（実験室……）

嫌な単語が脳裏に浮かんだ瞬間、サイは白衣の男の傍に転がっていた椅子を引つつかんだ。

彼の周りには書類が散らばっている。

だが、サイはそれらを一瞥しただけで椅子を手に再び水槽へ戻った。そして一気に椅子を水槽に叩きつけた。

大きな音がして、水槽は意外と簡単に割れた。中の液体が解放され、部屋中に流れ出る。

サイはその行方も見届けず、ナナに駆け寄った。

「ナナ……！」

恐る恐る首筋に手を添える。弱弱しいが規則正しい脈があった。

「よかった……」

呟いた声は震えていた。触れた肌が怖いくらいに冷え切っていたのだ。

「なんで、こんなこと……」

下から照らすライトが、いつそう顔色の悪さを際立たせていた。

サイは奥歯をグッと噛んで、ナナの身体に捕りついた管を注意深く外し始めた。中にはかなり奥の血管にまで差し込まれているものもあり、慎重さを要した。

サイは自身の手先が震えているのを感じた。

ナナの身体の白さと、胸の傷……。青い唇に濡れた黒髪……。

どこを見ても胸が痛んだ。確かに、胸が痛んでいた。

ほどなく、カカシとヤマトが駆けつけた。

サイの目にも、カカシのシヨックが見て取れた。

「そうか……このための施設だったわけね……」

いつもの口調だったが、彼の右目からは殺気がこぼれ出ていた。

「ヤマト、転がってるヤツらから事情を聞き出せ」

「わかりました」

カカシはヤマトに淡々とした口調でそう言うと、サイの側に立った。

「鎖をはずすから、ナナを支えてろ」

カカシが頭上の装置を壊して鎖をはずした。

サイは崩れ落ちるナナの身体を抱きとめたが、案の定、それほど重くは無かった。

二人はナナを横たえ、無言のまますばやく傷の手当を施す。

そこであろうやく、カカシがヤマトの方を向いた。

「どうだ？」

「どうやら強力な幻術で眠らされていたようです。今、術を解きました」

ヤマトの足元に倒れていた暗部のひとりが、ゆつくりと上体を起こした。

頭痛がするの、片手で頭を抑えている。

「ハ、ハハハは……」

わずかにずれた面から漏れた声は男のものだった。が、まるで年老いた者のように掠れていた。

「君たちは『根』の者だね？」

ヤマトが静かな口調で、だが決して隙を与えないような高圧的な態度で尋問を始めた。

「ここで何があったか、話してもらおうか」

「ハハハ……で……？」

男は辺りを見回した。

まだ倒れている仲間と、白衣の男と、そしてナナを取り囲むサイとカカシを見て、最

後にヤマトを見上げた。

明らかに様子がおかしかった。

「根」のサイだからわかる。いや、カカシとヤマトも男の様子がおかしいことには気づいている。

暗部ほどの忍であれば、たとえどんな状況でもこんなふうに無防備に呆けたりはしない。

「サイ」

カカシの声が鋭く突き刺さり、サイは止まっていた手を再び動かした。

「他の部屋から毛布を持って来てくれ」

尋問はヤマトに任せている。

が、カカシは明らかにここから男を威圧していた。

一流の忍……、元暗部の忍の洗練された殺気を感じ、サイはすぐさま言われた通りに行動した。

ほんの2、3分後に毛布を抱えて戻ると、状況は少しだけ進展していた。

もうひとりの暗部と白衣の男が上体を起こしていたのだ。

「もう一度聞くよ。君たちはここで何をしていたんだい？」

ヤマトは曖昧な問いを繰り返している。

それも意図的なのだろう。

「オ、オレは……」

「う、うう……」

二人の男もまた、まともに口が利ける状態ではないようだった。

「カカシ先生、これを」

「ああ」

サイは彼らを横目に、毛布をカカシに手渡した。

カカシはナナをすっぽりと毛布で包んだ。サイはそれを手伝ったが、そうしなければならぬほどナナの身体はぐにやりとして力なく、まるで人形のようなだった。

「ダンゾウ様から、『いずみナナを拉致しろ』という命令を受けたのかい？」

そのままカカシがナナを抱き上げると同時に、ヤマトが急に核心を突いた。
すると。

「いずみ……ナナ……」

それが鍵だったかのように、最初に目覚めた男がハツとして首を回した。

男が面越しにカカシに抱かれたナナを見た瞬間に……。

「くそっ！」

と悪態ついて壁に飛び退った。

よほど強力な幻術にかかっていたのか、まだ彼の体幹は安定していないように見え
た。

それでも彼は後ろ手で壁際の机の下に手を伸ばし、何かを叩いた。

ほぼ同時に、ゴオンという地の底から響いて来るような音がして、全体が揺れ始める。
すぐに床、壁、天井に亀裂が走った。

「ここを破壊するつもりか？」

男を拘束しようとヤマトが両手を伸ばした。

二人の間にもサイたちの周りにも、上から瓦礫が落ち始める。

「ニレ！ 博士を連れて脱出するぞ！」

男はもうひとり暗部にそう言うと、ドアとは反対の壁に走った。

ニレと呼ばれた猫面の男はようやく四肢に力を入れ、まだぼーつとしている白衣の男
を担ぎ上げる。

「待て！」

ヤマトがそれを制した。

が、

「オレたちは同じ木ノ葉の忍……、仲間だ。ここでやり合う意味はない」

男が落ち着いた声で言う。すっかり暗部としての己を取り戻したようだ。

「その『仲間』をあんな姿にしておいて、そんな言い分が通るとでも？」
やや苛立ちを交えてヤマトが反論する。

が、ニレと『博士』が側に寄つたと同時に男は壁を叩いた。

先ほどから崩れ始めていた壁だったが、叩かれたと同時に綺麗に四角く剥がれ落ち、奥へと続く通路をさらけ出した。

ニレが博士を担いだまま、その暗がりに吸い込まれるように消え去る。

「逃がさないよー！」

残つた男は術を発動しようとしたヤマトをけん制してこう言った。

「話は木ノ葉で。お互い無事にここを脱出しよう。検討を祈る！」

そしてちょうど頭上から降つて来た瓦礫をクナイで弾き、ヤマトの腕から伸びて来た木にぶつめた。

「待てー！」

ヤマトがすぐに追おうとした。

だが。

「追わなくていい、テンゾウ」

カカシが低い声でそれを制した。

通路の入り口はすぐさま男によって崩され、塞がれる。

「先輩?!」

「今はナナを無事に脱出させることが優先だ」

有無を言わさぬ『先輩』の声に、テンゾウと呼ばれたヤマトは大きく深呼吸した。

「わかりました」

落ち着いた彼は塞がれた脱出口や潰れかけたドアには目もくれず、瓦礫が積もり始めた床に手をついた。

「木遁の術……!!」

床から2本の木が生えた。それらはまるで蛇のようになねうねと絡み合うように動きながら、天上向かって物凄いスピードで伸びる。

衝突で天井がますます崩れたが、2本の木が作る螺旋状の構造物は上への通路となっていた。

「先輩!」

ヤマトの合図でカカシが螺旋の中に入る。そして、木を蹴りながら一気に上へと駆け上がって行った。

「サイも!」

土砂やら岩やらを避けながら、ヤマトが叫んだ。

サイも人間の頭より大きな瓦礫を払いのけると、咄嗟に辺りに散らばっていた書類を

かき集めて土埃ごと懐に突っ込んだ。そして、カカシの後を追う。

ものの数秒で崖の上に出た。

後からヤマト現れた瞬間、その場が大きく陥没した。ダンゾウの「施設」が完全に崩壊したのだ。

「木ノ葉に帰るぞ」

それを見届けることも無く、カカシはそう言つてナナを抱きしめたまま走り出した。

サイは一度ヤマトと視線を交わし、二人同時に彼を追った。

それから木ノ葉に帰還するまでずっと、誰も口を開こうとはしなかった。

棘

「外傷は大したことない。サイが持ち帰った資料のおかげで、投与されていた薬品もだいたい判明した。臓器も傷つけられてはいない。だが……」

火影は苛立ったようにカルテをパンパンと叩きながら告げた。

「血を抜かれ過ぎている」

「血……」

病室のベッドに寝かされたナナは、弱々しくもちゃんと自分で呼吸していた。

いや、呼吸しかしていなかった……という表現が正しい。カカシにはそう思えた。

「出血性ショックを起こさないギリギリの量だ……」

「『和泉の血』について研究しようとしていたんでしよう」

カカシは反射的にそう言った。

ヤマトもサイも口にしなかったことだ。が、二人もとづくに気づいていた。

火影も何も答えない。

ナナは……『和泉の血』は、いかにもダンゾウが好みそうな秘めた力を持つ血……。

ナナが単独で里を出た絶好のタイミングで、あの男はそれを手に入れようとしたのだろう。きつともうずっと前から、いや、最初からそれを狙っていたに違いない。

部下に命じてついにナナの捕獲に成功したが、その部下が何故か最後まで役目を果たせなかったのだ。

「“あの方”を締め上げたところで、そんな施設は知らないとシラを切りとおすに決まっていますか」

ヤマトとサイの存在があつたおかげでどうにか今まで冷静さを保っていたが、火影の前でつい棘のある口調になってしまう。

「あの場にいた“根”の者や“博士”と呼ばれていた者たちを捕まえようにも、とつくに“あの方”に報告した後で姿を消しているはずですしね」

「消しているか、消されているか……」

火影は同調するように吐き捨てた。

カカシはため息をつきながらナナに視線を戻した。

懸命に戦つて、抗つて、傷つき果てたナナ。その敵は決して自分から産み出したものでなく、理不尽に降りかかっていた厄災であるのに……。

あの時と同じだった。カカシの脳裏に、あの時の光景が自然と浮かび上がる。

サスケの奪還に失敗し、実の姉に呪印を奪われ、ボロボロの状態でこんなふうになっ

ドに横たわっていたときの光景が……。目を覚まして、生気を失って蠟人形のようだったナナの姿が。

「ナナを行かせた結果がこれだ……。私は自分の判断を呪うよ」

火影も同じものを見たのだろうか。低い声でそうつぶやいた。

「ナナにその意志をもたせたのはオレです」

里の長としての立場も、長く里に貢献する忍の立場も忘れ、二人して弱い言葉を呟く。今さら何を話しても少しも慰めにならないことは、互いに良くわかつているはずなのに。

「ナナは……」

それでもカカシは真実を明かした。

「イタチの許婚だったそうです……」

ナナがイタチとサスケの争いを止めたかった訳を。

「あんな使命を背負わされて、和泉の里での孤独な暮らしを強いられた中で、たったひとり、心を許せる相手だったと……」

ナナにとってイタチという存在がいかに大切だったかを。

「だから、ナナはイタチがしたことを信じていなかった」

それを失ったナナ……。そして、失わせたのは……。

「……サスケとすれ違うわけだ……」

火影はその事実が今更明らかになされたことでなく、その「結果」に対して擦り切れた言葉をこぼした。

ナナの想いを知らないわけじゃなかった。

カカシも火影も、それなりに内容の濃い人生を歩んできている。

人より辛いことも経験し、人の心の深いところを見てきてもいた。

だからこそ、まだ幼さの残るナナが負った傷の痛みがわかってしまう。

「そんなところを狙いやがってっ……ダンゾウめっ！」

火影の方から歯が軋む音が聞こえた。

「『あの方』は鼻が利く……。すでに地下に隠れているでしょうが、次に見かけたらオレも平静でいる自信はないですね」

カカシも憚らずそんなことを口にした。

怒りと悲壮感が空気に溶け込んだ。

「とにかく、医療班総出でナナの回復に努める」

それに染まってしまいそうになる前に、火影はすっかりよれたカルテをめぐりながら言った。

「……と言っても、お前も知っているだろうがナナに輸血はできない。自己血輸血で貯

血はあるが……、ナナはもともと貧血体質だからな。今あるストックではとても足りない。造血薬が必要になる」

「しばらくは安静が必要ですね……」

「ああ。回復には時間がかかるだろうが……。病室は私の手の者に警護させる」

『私の手の者』を強調し、火影はカルテを閉じた。

「もうすぐナルトが駆け込んでくるだろう……」

そしてため息をついた。

「アイツがダンゾウを探しに飛び出して行かないようにだけ注意してくれ」

「わかっています」

少しだけ苦笑した。

血相を変えて飛んで来るナナの仲間たちが想像できた。

彼らの悲しみ、怒りに共感できることは、ほんの少しだけ救いだった。

「それと、お前もな」

火影は念を押すように鋭い視線を向けた。

「はい」

それを受け止め、自身にも念を押した。

今動いても、恐らく成果は得られない。ダンゾウという人を見くびってはいけない。

だからこそ火影は何も命じなかった……。

「警護の者を手配するまでお前がついててやれ」

火影はそう言っただけで病室を去った。

カカシはサイから事情を聞いたナルトが飛び込んで来るまでずっと、死人のようなナナの顔を見つめていた。

第一段階

自来也が命と引き換えに残した暗号、「ペイン」の遺体、そして捕虜。その解読も檢視も尋問も、未だ「ペイン」という驚異の謎を解くには至らなかつた。

具体的な対策もとれぬまま、木ノ葉はどうとう「暁」の襲来を許した。

「くそっ……なんだってんだ……!!」

紅を避難所まで送り届けたシカマルは、土埃の中、轟音の鳴りやまぬ空に向かって悪態づいた。

辺りは避難所へ駆け込む住人たちの悲鳴と罵声に満ちている。その後ろからは倒壊する建物の瓦礫が迫っていた。

「みんな！ 急いで避難所に入れ!!」

シカマルは現場の中忍たちと共に非戦闘員である住人らを誘導した。

そして目の前で躓いて転んだ子供を助け起こした時、すぐ近くで爆音が鳴った。

見上げれば、目の前の森の上空にたつぷりと木片や岩を含んだキノコ雲が出来上がっていく。

「あんなのが降ってこられたんじゃあ……!!」

シカマルは影を操るべくチャクラを練った。

が、彼の術は多角攻撃に対抗するに適してはいない。あの雲が降らすものを全て防ぐのは不可能だった。

絶望を予感した悲鳴がいつそう耳をつんざいた。

その時、土埃と喧騒の中に一陣の涼やかな風が舞った。

そこだけ塵も音も消え去って、代わりに人の形が浮かび上があった。

「お、お前っ……」

“それ”はまっすぐに暗くなった空を見上げ、静かに印を結んだ。

すると……、落ちて来るはずの無数の瓦礫や岩は空中で何かにぶち当たり、弾かれて粉々になった。

シカマルはそれらの行方も見届けず、この修羅場に現れた途端、一瞬にして今の大技をやつてのけた者に向かって叫んだ。

「ナナっ!?!」

入院着のナナが立っていた。怖ろしく青白い顔に、何の表情も浮かべずに。

「ナナ、お前っ……なんで……」

今朝まで一度も目を覚まさなかつたはずだ。

“何かの事情”に巻き込まれて負傷したところを、カカシらが見つけて連れ帰ったと聞かされていた。

詳しくは知らない。いのも、サクラさえも多くを語ろうとはしなかった。いや、二人も詳しい事情を知らないようだった。

カカシや火影に尋ねようにも、何かがおかしかった。明らかに、自分たちに対してただ事実をはぐらかしているのではなかった。

恐らく皆、誰一人として、“何かの事情”に巻き込まれる以前にナナの身に何が起きたのかを知らないのだ。

そしてナナが目覚めたとして……、その口で真実を語るのかもわからなかった。

「この避難所の近くに、私の式神を置いておいたの」

そのナナは、まだ印を結んだまま答えた。

「この場所が危険にさらされた時、護れるように」

混乱のさ中に目覚めたばかりとは思えないほど、淡々と。

「式神……？」

『式神』という単語を知ってはいたが、当然聞き慣れぬ言葉だった。

というよりも、ナナがあまりにも平靜な姿だから、頭が良く働かなかった。

「私は木ノ葉隠れの里を守るためにここへ来たのに……」

ナナは「壁」に当たって弾け飛ぶ瓦礫を見上げながら言う。

「大蛇丸の時にはその使命を果たせなかった……」

物憂げでもないその物言いに、何かが引つかかった。

だから、シカマルもようやく頭を働かせる。

「『使命』ってお前……」

ナナがここにいる理由は、単純なようで複雑だった。

まるで目の前のナナが、出会う前のナナであるかのように思えた。

「だからあの後……里が襲われたらここを護れるように、式神を隠しておいたの」

「ナナ、だからってお前は……」

そんな身体で……

シカマルはそう言おうとして言葉を失った。

ナナが初めてまっすぐに彼を見たからだだった。

「シカマルはもう、知ってるでしょう？」

「……………」

「私の使命のこと」

「使命……」

「私が『何』から木ノ葉を護らなければならなかったのか」

黒い瞳には、強い使命感など浮かんでいなかった。悲壮感も恐怖感も、動揺や気合いも、何ひとつ見受けられない。

彼の頭脳をもつてしても、ナナが今、何を想ってそんなことを言っているのかわからなかった。

「でも……お前の身体はまだ……」

シカマルの言葉を遮るように、ナナは再び空を見上げた。

ようやく、先ほどの爆発で発生した木っ端や飛礫は無くなり始めていた。

「『九尾』が具現化したら、まず避難所に結界を張り非戦闘員の安全を確保する」

『九尾』という言葉にドキリとした。

「それが私に課せられたプログラムの第一段階」

「プログラムって……」

そしてその台詞で、ナナの『使命』がどれほど重かったのか理解させられた。

「大丈夫」

だがナナはやはり淡々と語った。まるで説明書を読み上げるかのように。

「たとえ私が死んでも、一度発動させれば私の死後も七日は消滅しない『結界』だから」

「結界……」

今ここで、術の強度を心配しているわけではないことはわかっているのだろうか……。

シカマルはもどかしさで逆に言葉を失った。

「私はそういう術を、何通りも、何万回も修行してきたから」
だから、自分が弱っていても「心配ない」と、ナナは言う。
「そのために産み出されたんだから」

ちがう、そうじゃない……

そんなことを言わせたいんじゃない……

肩をつかんでそう言いたかった。

が、こんなナナを「否定」するすべを持たなかった。

「里を襲っているのが『九尾』じゃなくても……護らなきや」

ナナはほんの少しだけ笑んだ。決意にも皮肉にもとれる笑みだった。

喉の奥に気分の悪い塊りが現れて、シカマルは拳を握った。

使命なんかどうでもいい！ お前は休んでろ！

そう言いたかった。

「ナナ！」

が、一言も発せぬうちに、二人の前に気配もなく小さな子供が現れた。

「姫様」

ナナに向って「姫」と呼んだのは、薄青の着物を着た見慣れぬ少女だった。

「呪符を張り終えました」

ナナと同じように無表情のまま報告した少女の目に、シカマルの姿は映っていないかった。

「できるだけ強く結界を張りなさい」

「かしこまりました」

二人の静かな会話と反対に、また空が轟いた。

ナナと少女がそちらを見上げたが、シカマルはナナから視線を外せなかった。

「いつも……」

ナナは再びシカマルを見た。

「私のこと、心配してくれてありがとう、シカマル」

その口から自分の名が出たことで、彼はいくらか安堵した。

「ナナ……」

やっと、ナナの瞳にかすかな光が灯ったように思えた。

「私……、なんで木ノ葉にいるのか、よく思い出せなくて……。話さなきゃいけないことも、たぶんたくさんあるんだけど……」

ほんの小さなともし火のようだったけれど。

「今は……。使命を果たす」

その言葉のどこにも、熱は籠っていないかったけれど。

「ナナ……」

シカマルは言葉を全て呑み込んだ。

いつも考えていた、ナナの中の自分の価値、自分の役割、存在の大きさ……。それを思い出し、彼はナナに背を向けた。

「んじや、オレもオレの役目を果たすか」

『役目』と言った。ナナのように『使命』とは言えなかった。

それでも自身で強がりに聞こえたが、今はこれが精一杯だった。

「シカマル、また後で」

最後にかけてられた言葉にだけ満足し、返事は喉の奥に押し込んで、彼は戦場へと駆け出した。

第二段階

木ノ葉病院の待合ホールは怪我人で埋め尽くされていた。椅子もベッドも足りず、床に寝かされたり座らされたりと、まさに足の踏み場もない状態だ。

その上さらに、戦闘で負傷した忍たちが次から次へと運びこまれる。

サクラはそこで、綱手の弟子としての責務を果たさねばならなかった。

ここも一つの戦場だった。

その殺伐とした状況で、不意に柔い声がかけられた。

「サクラちゃん」

振り返ると、白い入院着を土埃で汚した姿のナナが居た。

「ナナ?!」

ナナは表情のないままに、用件だけを言った。

「クナイを一本貸してくれる? メスでもいい」

サクラの脳で、ナナの姿はパズルになっていた。

今朝病室を訪れた時、ナナはまだ目を覚ましていなかった。重度の貧血から回復の兆

しはまだ見られなかったはずだった。

そしてこの凶事が起きた直後、マニュアルに従って各病室に駆けつけた担当の医療忍者から、すでにナナのベッドは空っぽだったと先ほど報告を受けていた。

そのナナが、目の前に居る……。

「クナイってどういうこと?! あんたも早く避難所へ……」

「避難所なら大丈夫」

ナナはサクラの言葉を遮り、淡々と言った。

「結界を張って、私の式神に護らせた。避難所への通路も来る途中に結界で護りを固めて来たから」

「そ、そう言うことじゃなくて……!」

避難所の心配ではなく、ナナの身体の心配を……それを伝えようとしたが、ナナはまた言葉遮って、機械のように説明した。

「さつきシカマルにも心配されたけど私は大丈夫。私が木ノ葉へ来たのは、里の人たちを護るためなんだから、そのための術の修行は十分してる」

「修業……?」

「今は戦う力が足りなかったとしても、戦えない人たちは護れる。そういう術を習って来てるから大丈夫」

そして手を差し出した。

「ここにも境界を張るから、クナイを貸してほしいの」

クナイと結界……それがどう結びつくのかサクラにはわからなかった。

だが、差し出された方と反対の手を見て気づいた。

そこからは、血がポタポタと落ちていた。

「ナナ、その怪我……!」

サクラはそつちの方へと手を伸ばした。が、ナナはそれすらも遮った。

「サクラちゃんのチャクラは怪我した人たちのために使って」

サクラの周囲は重症者で溢れている。

確かに、彼らを救うためのチャクラは貴重だった。

「でもっ……」

「少しでも多くの人を治療しなくちゃ」

「ナナ……!」

「それがサクラちゃんの役目でしょう?」

ナナはやつと“人”らしい表情を見せた。

サクラは諦めてクナイを一本手渡した。

護るためなら命を惜しまない……その気持ちはよくわかっていた。

自分が同じ状態でも、じっと大人しくしてなどいないだろう。

「ナナ、無理はしないで」

冷たい金属に想いを込めた。

「わかってる」

それが伝わったかのように、ナナは少し笑った。

「大丈夫、そんなに難しいことじゃないから」

「ナナ……」

立ち上がり背を向けたナナは、夢げでも凜としていた。

「それに……私はまだ死ねない」

サクラはその背をまっすぐに見上げた。

そして次の瞬間、聞こえて来たのは……。

「サスケが来るまでは死ねないから」

「意味がわからない」と判断するのに時間がかかった。

「え……？」

やっと短く聞き返した時、すでにナナの姿は消えていた。



目が覚めたのは、たくさんの「声」が聞こえたから。

その主は、この里に留まる「見えない者たち」だった。

「急げ」「目を覚ませ」「里を護れ」「愛する者を助けてくれ」……。そんな彼らの声に耳を傾けた時に目が覚めて、この惨状を知った。

窓の外に立ち上る煙や次々に壊れていく建物。そして、身体に感じる地響き。

それは信じがたい光景だった。

「何故またこの里にいるのか」「あの海からどうやって戻ったのか」「瞬そう思ったが、追及する気は逸れた。

これから何をしなければならないのかが、自動的に頭の中に浮かび上がった。

この里に来る前に、身体にしつかりと刻み込まれていたからだだった。

そして、いつかはこうなるという予感もあった。

あの時……波打ち際でサスケの意志を聞かされた時から、この時が来ると知っていた。

点滴を引っこ抜き、ベッドから降りて、窓を開けた。

土埃の匂いが木の葉中に巻き上がっていた。手をかざすと、ピリピリと張り詰めた空気を感じた。

空は鳴いていた。この里の平和が終わったことを嘆くように……。

だが、この現状は“予感”とは違っていた。

「ちがう……」

ナナは呟いた。

「……サスケじゃない……」

安堵したのか失望したのか……。

自分でもどちらかわからなかった。

その、安堵か失望かわからないものをぶら下げたまま、ここまで来た。

シカマルもサクラムも、とても心配してくれていた。

だが、その想いは風のように身体を通り過ぎるだけで、心を揺らしはしなかった。

ただやるべきことをやるだけ。使命を果たすだけ。それだけで良いはずだった。

木ノ葉病院の屋根の上は、意外にも静かだった。階下の惨状や、向こうの喧騒とは切

り離されたように。

ナナはサクラから借りたクナイを左の手のひらに突き立てた。

塞がりかけた傷口から、新しい滴が乾いた屋根に落ちた。その円がある程度まで大きくなると、指で広げるようにして紅い星を描く。

そして、両手を組んで呪文を唱えた。呪文はスラスラと淀みなく口から零れた。四つか五つのときに覚えて以来、一度も忘れたことのない呪文だった。

五分もかけてそれを唱え終わると、術は難なく発動され、木ノ葉病院は結界に包まれた。

ナナは立ち上がり、ひとつ溜息をついた。

プログラムは第二段階まで完了した。

次の第三段階は「敵」をくい止めている木ノ葉の忍を撤退させること。

その次は「敵」と一対一の状況を作り出すために、「敵」と自分だけの空間を結界で作りに出すこと。

そこまで終わらせた時、いよいよ「敵」と対峙する……。

その全ては、「敵」Ⅱ「九尾」を想定してのプログラムだった。

今回、想定とは状況が異なる。

が、ナナは「敵」が「九尾」でなくても出来る限りそれを遂行するつもりだった。

この身体で、できるところまで……。

それは決意というより、本能というほうが正しかった。

決意とか使命とか……想いとか……。そんなことを考える気力はない。

幼いころに身体に叩き込まれたことを、無意識的に機械のように……
“道具として”
実行する方が楽だった。

ただ、死ぬわけにはいかなかった。

サクラに言ったように、まだ死ねない。

この襲撃が、“サスケでない”のなら……。まだ死ぬことはできない。

サスケが“来る”までは……。まだ……。

ナナは再び吐息をついた。

敵が口寄せした巨獣がすぐ近くで暴れていた。

まずはあれから……

そう思った時、急に体から力が抜けた。ガクンと膝が折れ、屋根の上に手をつく。指の先まで震えていた。

そのわけは……。

「そんな……」

目覚めてから初めて心が揺れていた。

魂の行方を知ることができないナナの血が、それを伝えていたのだ。

「カカシ……せんせい……」

カカシの魂が、この世から去ったことを。

第三段階

ただ本能のままに……そう、里を護るプログラムを遂行していた。

何を想うわけでもなく、何かを感じることもせず、ただ脳に刻まれたこと、身体が覚えていたことを実行するだけ……。

そのはずだったのに、性懲りもなく涙が流れた。

また、大切な人を失った。

あれほど泣いたのに……もう心は砕けてしまつて、形などないと思つていたのに……、胸の中で悲しみが暴れ出す。

それでもナナは無理やり立ち上がった。

この痛みに耐える気力はとつと捨て去つていたから、また立ち上がった。さつきまでの自分に戻るために。

『決意』や『想い』なんかじゃなく、ただ本能のままに使命を果たすだけの自分に戻るために。

ナナは思い浮かぶカカシの姿を振り払った。

そして血がついたままの手で涙を拭くと、一気に戦場へと駆け出した。

裸足のまま揺れる地面に降り立つと、瓦礫の影から小さな白い生き物が寄って来た。

綱手の口寄せ、『カツユ』だった。

「ナナ様！」

「カツユ？」

ナナはそれを片手で拾い上げた。

「そんなお身体で戦うおつもりですか？」

「それが私の使命だから」

カツユでさえも戸惑いを見せた。が、それ以上は何も言わなかった。

「では、私をつけて戦ってください。里のみなさんについた私の分身を通じて、情報を共有しますから」

「里のみななについたの？」

「はい、ほぼ全員に。傷の治癒などを行っています」

ナナは小さくうなずいて、カツユを肩に乗せた。

「一番近くの敵は？」

「あの壊れた建物の向こうです。忍が二名戦っていますが、危険な状況です」

「わかった」

ナナはすぐさま走りだした。

途中、カツユは現状をまとめて伝えた。

里を襲う敵……ペインのことで、明かされたことを全て。そしてそのための犠牲も……。

ナナは特に反応を返さず、敵の居場所まで走り切った。

そこでは暁の衣をまとった男が木ノ葉の忍を捉えていた。両腕にそれぞれ一人ずつ、首根つこを捕まえ締め上げている。

「うずまきナルトはどこだ？ この里にいるのか？ いないのか？」

忍は二人とも、苦しみながらこう答えた。

「知らねーよー！」

「さっさと失せろ!!」

そこへ、ナナはサクラのクナイを飛ばした。

クナイは暁の男の額にまっすぐ向かったが、男はそれを避けた。当たりはしなかったが、反動で手から力が抜け、忍たちは解放されて下に落ちた。

「ここから撤退してください」

ナナは暁の男を見据えたまま彼らに言った。

当然、忍たちは共に戦うことを主張するが、ナナはそれを黙らせた。

「ここは私がやります。負傷者を早く病院に運んでください」

忍は口をつぐみ、負傷者と遺体を担いでその場を去った。

暁の男は彼らを追わず、体勢を立て直してナナに向き合った。

「お前は知っているか？」

少しずつ、近づいて来ながら。

「うずまきナルトはどこにいる？」

そう問うた。

「ナルトを探してるの……？」

ナナは冷ややかに笑った。

「〃口で〃聞かれても答えるわけないでしょう？」

男は目つきを鋭くした。そして時間の無駄とでも言うように、すぐさま術を発動させた。

男の手が伸びて、あっさりとナナの首を掴んだ。

「ナナ様?!」

ナナの肩にいたカツユが払い落された。

木ノ葉の忍たちを逃がしたからといって、ナナに男と戦う気はまったくなかった。今

の状態で戦えると意気込むほど、うぬぼれてはいなかった。

「言え、うずまきナルトはどこだ？」

と、ナナの目には男の背後に『王』の冠をつけた物体が現れるのが見えた。

「言わぬのなら、『判決』をくだしてやろう……」

男がそう言うのと、その物体の『口』のような部分がガバツと開き、中から手が現れた。それと同時に、ナナの体内からも何かが吐き出されるような感覚があった。

「なる……ほどね……」

気道を抑えられ、呼吸は苦しかった。が、ナナは冷たく呟いた。

その感覚は知っていた。彼女自身、よく『扱う』ものだったからだ。

「それで……魂を吸い取るっ……てこと……う？」

男の表情が一瞬強張った。奇妙な物体から伸びて来た手も、ナナの目の前で止まる。

ナナは血が滲んだままの手で印を結んだ。

それは目の前の男ではなく、その後ろの物体に対しての術だった。

キインと耳をつんぎくような高い音がして、それは一瞬でかき消えた。同時に、男も力を奪われたかのようにナナを放して尻もちをついた。

「お、お前は……」

男は咳き込むナナに向かって叫んだ。

「お前は何者だっ?！」

焦りを見せた男に対し、ナナは息を整えて答えた。

「あなたにとつて私は『天敵』かもね……」

「なに……?！」

ナナは再び立ち上がり、落ちていたサクラのクナイを拾った。

「その術は私には効かない。絶対に」

そう言いながらその切っ先に術をかけた。もちろんそれも、忍の術ではないものだった。

「お前……和泉の人間か?」

ナナはクナイを構えた。

「そう」

そして短く答え、それを放った。

しかし、クナイが男に突き刺さることはなかった。

男が逃げたのではない。

「消えた……?」

まるで分身が解けた時のように、男の姿が煙となって消えたのだった。

「……………?！」

だが深く考える必要はなかった。はるか上空からただならぬ悪寒を感じ取ったのである。

ナナは空を見上げた。

暁の衣が、青い空にはためくのが見えた。

「あれは……う？」

「ペインです……!!」

カツユがナナの肩に飛び乗って伝えた。

「何かしようとしています!!」

言われずともわかった。空の一点に、嫌な空気が集まっているようだ。

ナナはそれに近づこうと走り出した。

が、そうするにはあまりに力を使いすぎていた。

「ナナ様?!」

力が入らなかった。

瓦礫に手をつけて息を整えるが、視界が狭くなり始めていた。

「ナナ様!」

カツユの声が遠くから聞こえた。

(使命……を……)

声に出す力は無かった。

もどかしさに歯を食いしばることもできず、ナナはただ空を見上げた。
暁の衣が風にはためいていた。

ほんの一瞬……、なんだか懐かしい気持ちになった。

零地点

「あの崩れた壁の向こうです！」

カツユが耳元で叫んだ。

冷静なはずのこの口寄せ動物も、今は口調に焦りが現れている。

だが、シカマルはもつと焦っていた。

つい先ほど負傷者と遺体を担いだ忍らとすれ違った。彼らは父のシカクにこう報告したのだ。

『向こうで得体の知れぬ技を使う暁の忍と、いずみナナが交戦中』
と。

シカマルは反射的に走り出した。

普段なら「焦るな」とか「ひとまず落ち着け」とか言いそうな父も、何も言わずについて来た。

シホがいるのにも関わらず、カツユにその場へと誘導させ、シカマルは走った。

そして崩れた壁を飛び越えた時、走り出そうとして膝を付くナナの姿を視界にとらえ

た。

「ナナ!!」

そのままバラバラに壊れてしまいそうでゾツとした。思わず足が凍り付いたが、無理やりそれを動かした。

「ナナ! 大丈夫か?!」

肩に触れた。布越しでも、その身体が死人のように冷えきっているのがわかる。

「シカマル……」

ナナは懸命に意識を繋ぎ止めながら、彼と空の影を交互に見た。そして最後に、肩のカツユに視線を移した。

「ナナ、どっかに避難を……」

言ったところでどこに逃げれば良いのかはわからない。

わかるのはただ、もう時間がないことと、逃げ場がないことだけ……。

「とりあえずここから離れるぞ!」

我ながら情けない策だ。が、今はそれしかなかった。

あの空の不気味な物体から、少しでも離れなければ……。

だが、抱き上げようとナナの身体に腕を回した時。

「カツユ、里のみんなについてるんだよね?」

ナナは鋭い声で言った。

「は、はい……ほぼ全員です」

そしてカツユが戸惑いながら答えると、続けざまにシカマルに言った。

「シカマル、あのコを護って」

「え？」

「早く！」

ナナの指は少し遅れてよろけながら走って来るシホを指していた。

そして、側に来ていた父を向く。

「シカクさん、クナイを一本貸してください」

「クナイ？ 悪いがもう切らしちまって……」

「何か刃物は？」

「護身用にもならねえ小刀が……これだ」

「貸してもらえますか？」

「あ、ああ」

さらに、カツユにも。

「カツユ、アナタの身体を通してみんなに私の術を伝えて」

「え……？」

「でぎるでしよつ…」

「は、は、は………」

誰もが言うとおりにせざるを得なかった。疑問を持つ隙間すら作らせない、切迫した空気がナナから醸し出されている。

ナナは再び上空を見上げた。

シカマルはシホの所まで戻り、ナナを振り返った。ナナが握りしめていた小刀の切っ先が、ナナの胸を抉った。

「ナナ?!」

すぐ側にいた父さえも止める間はなかった。

ナナはそのまま自分の肌に刀を滑らせ、呪を唱えた。

それと同時に、上空の影が一瞬強烈なチャクラを発したかと思うと、一瞬で感覚をもぎ取るような爆発が起きた。

木ノ葉の里は、一瞬にして形を失くした。

まるで隕石でも落ちたかのように、中心から深くえぐられ、建物も地形すらも原型を留めてはいなかった。

「ぐっ………」

シカマルは瓦礫から這い出してその光景を目にした。

この惨状で自分が生きていることが不思議だった。そう思わざるを得ないくらい、辺りには何も残っていなかった。

「おい、シホ！」

「うう……」

すぐに側にいたシホの無事を確認し、ナナと父の方を向いた。

瓦礫と土埃のせいで二人の姿は見えない。

背筋が冷たくなった、その時。

「シカマルさん、無事ですか？」

その背に乗っていたカツユが言った。

「あ、ああ……オレたちは……」

「ナナ様が、私の身体をとおしてみなさんを結界で包み込みました」

「結界？」

「はい。そうしなければ、全員吹き飛ばされて死んでいました」

「ナナは?!」

シカマルは無理やり立ち上がった。が、すぐに片膝が崩れ落ちる。足は言うことを聞かなかった。

「くそ！ 折れちまったか……」

「あ、わ、私をかばって……！！」

シホが真つ青な顔で言う。

「いや、気にすんな。それより……」

そう、それよりも気になることがある。

シカマルはもう一度立ち上がりながら、ナナと父の姿を探した。

「親父!!」

むくりと起き上がる大きな影を見つけ、わずかに安堵する。

そして……。

「ナナ!!」

その父が、すぐにナナを見つけて抱き起していた。

「……………!!」

声は出なかった。

ここからでも、父の腕の中で、ナナの四肢にはどこにも力が入っていないことがわかったのだ。

懸命に足を動かした。

シホが肩を貸してくれた。

ナナと父の元まで行くのに、もどかしいくらいの距離を感じた。

「ナナ……!」

ようやく辿り着いたとき、父は初めてこちらを見た。

「お前ら……無事だったか?」

「わ、私は大丈夫で……」

シカマルはやはり、声を出すことができなかつた。

横たわるナナが、まるで死人のようだったから。

そして、その胸の「紅い星」の鮮やかさに目を奪われたから。

「ナナ……」

自ら作った傷は浅いようだった。首筋に触れると、弱々しくも息をしていた。

が、人の温度とは思えぬほど冷たい肌だった。

「とりあえず止血だ」

「こ、これを使ってください」

シホが着ていた白衣を破り、父に手渡した。

「カツユ、ナナを治してやってくれ!」

シカマルは思い出したようにそう言った。

同時に目の前が明るくなった。治療能力のあるカツユがいたのはラッキーだと思っ

た。

だが……、カツユは残念そうにうつむいた。

「どうした、カツユ?!」

じれったを感じながら言う。

と、

「ナナ様の身体は、私には治すことはできません……」

カツユは消え入るようにそう答えた。

「そ、そんな……」

特殊な血……。特別な存在……。

それを改めて思い知らされた。

「くそっ……!!」

遠くで爆音がした。

カツユは、ナルトが戻ってきてペインと戦っているのだと伝えた。

今の彼らには、ナルトの援護に向かうことすらできなかつた。

そこへ、

「シカマルー!!」

いのやいのいちらが現れた。

シズネも一緒だったが、彼女の息はすでに絶えていた。

絶望と無力感の中、いのはナナの治療を試みる。

「とりあえず、この傷だけでも塞がないと……！」

しかし、はだけた胸につけられた傷口はなかなか塞がらなかった。

いのが能力が足りなかったわけではない。チャクラが不足していたという理由でもない。

「ナナの身体が特別だから……、細胞も……。集中力があるし、チャクラも大量に使う……」

いこの額から汗が流れた。目じりには涙も滲んでいた。

彼女の「言い訳」を誰も責められなかった。

「それに、血圧が低い……血を流しすぎよ……！」

ナナの唇は紫色をしていた。

よほど近くで確かめなければ、死人と見まがう姿だった。

「ナナの入院中、サクラと交替でナナを看ていたから……状態はよく知ってたわ」

いのは手元に力を込めながら言った。

「発見された時、ナナは……生きられるギリギリのところまで血を抜かれたそうよ」

それは周囲の怒りを誘う言葉だった。

「綱手様たち医療班がみんなでなんとか治療したけど……血が足りなくて……」
「輸血したんだろ?!」

焦りを覚えながらシカマルはそう聞いた。

いのは一瞬だけこちらに視線を投げた。

そして、

「ナナの血に合う『型』なんて、誰もいない……」

そう告げた。

いの自身も、ナナの看病に携わるようになって初めて知らされたことだったのだ。

「しかし、ナナは自己輸血してたはずだろ?」

言葉を失くしたシカマルの代わりにいのいちが問う。

「特異な血」を持つ者は、もしもの時のため、定期的に自分の血をストックしていた。

当然ナナもそうしていたはずだった。

「そうだけど、ナナは元々貧血気味だったし……全然足りなかったのよ」

「そんな……」

遠くでナルトとペインが激しく戦っていた。大気が騒ぎ、地も揺れた。

轟音の中で、彼らは沈黙した。

「そ、そうだ」

それを破ったのは、いのだった。

「シズネ先輩なら、造血剤を持ってたかも」

「造血剤？」

はつとして、シホがシズネの遺体を遠慮がちに探った。そして、懐から巾着を取り出した。

「広げて見せて」

「は、はい」

いのは治療を続けながら、中から出て来た何種類もの丸薬に目をこらした。

「それだわ、黒っぽい茶色の丸薬」

「これですか？」

シホがそれをつまみ上げた。

「それをすりつぶして……注射器があればいいんだけど……」

いのが呟くと同時に、シホは再びシズネが注射器を持っているかを確認めようとした。

シカマルは彼女の手から丸薬を奪った。そしてそのままそれを口に含み、噛み砕いた。

「シカマル？」

「シカマルさん？」

横から、父が黙って水筒を出す。シカマルはそれも口に含んでナナを抱き起した。

「シカマル……？」

そのまま口移しで薬を飲ませる。と、ナナの喉は小さく動いた。

「とりあえず飲んでくれたか」

父もほっと息をついた。

そのままいのちにナナの治療を続けさせながら、父といのちはペインについて知恵を絞り出す。

ペイン “本体” の居場所を。

ナルトが独りで戦っているというが、カツユからの情報ではそれがペインという忍の “本体” ではないということだった。

一刻も早く “本体” の居場所を突き止め、そこを潰さねばならない。

あれほどの力を見せつけられただけに、皆、焦りを露わにした。

「ペインと接触した人たちから、カツユをとおして情報を集めよう」

父がナナを見つめたまま言った時、

「そうか……わかつてきたぞ、ペイン本体の居場所が……！」

いのいちが突然そう叫んだ。

「本当か?! いのいちー!」

いのいちちは自らを落ち着かせながら、自来也が捉えた雨隠れの忍を調べた時の状況を踏まえて、ペイン「本体」の居場所を分析した。

それは、チャクラを「送信」するために最も効率的な場所……。木ノ葉近くの「一番高い場所」であった。

「早急にその場所を探し出すぞ。カツユ、このことを動ける者たちに伝達してくれ」

「わかりました」

「オレたちも行こう!」

負傷したシカマル、非戦闘員のシホ、目を開けぬナナと、ナナを看るいのをその場に置いて、父といのいちちは動き出そうとした。

その時。

「な、なんだ?!」

「きやつ……!!」

ナルトとペインが戦っている方から、今までにない強烈なチャクラが発せられた。

それはまるで火柱のように天に向かって昇り立ち、邪悪な気は彼らのもとにまで熱風となつて吹き付けた。

「九尾化か……」

父が奥歯を噛みしめた。

「何故だ!? ヤマトとカカシで封印していたはずだぞ!」

いのいちの言葉に、カツユが伝達した。

助けに入ったヒナタがペインにやられ、それで「籬」が外れたのだと……。誰も九尾を押さえ込むことができるヤマトの登場を願った。

が、その時、

「……ナルト……」

かすれた声で、ナナが呟いた。

「ナナ!？」

いのが確かめる。

「意識は無いわ……!」

が、

「ナルト……」

ナナはうわごとのように言った。

「止め……なきや……」

うつすらと開かれた瞼だが、その瞳にはそこにいる誰も映っていない。

「私が……」

ダラリと下がったはずの手を、なけなしの力で差し伸ばす。

「わたし……が……止め……なきや……」

「ナナ！ お前はもういいから！」

「ナナ、あんたはもう動ける身体じゃないのよ！」

シカマルといのどで止めるが、ナナには聞こえていなかった。

「ぐっ……」

さらに苦しそうに胸を抑えた。

「まさか……！」

シカマルははつきりと覚えていた。

以前、こうしてナナが胸を抑えて苦しみ出した時、自分で言っていた。

『九尾とまだ繋がっている』と。

反射的に、ナナの胸から止血布を取り去って傷を露わにした。

「ちよ、ちよつと、シカマル?!」

その行動を問いただそうとした誰もが息を呑んだ。

「こ、これって……」

そこには真新しい「赤い星」があつた。だが、その傷の下には決して消えかかつたとは言えないもうひとつの「星の痕」があつた。

少し歪なそれは、まるで皮膚の下に妖しい生き物が巣食っているかのよう、うねうねと蠢いていた。

「わたしが……止め……る……から……」

刷り込まれた呪文のようにナナは言った。

「……わたしが……きゆうび……を……」

まるで壊れた機械のように頼りなく繰り返した。

「ナナ……!」

シカマルはふらふらと宙に伸ばされた手を思わず握った。

「わたしが……止める……」

そして、

「……ナルト……」

その名を呟いた時、ナナの姿は彼らの前から煙のようにかき消えた。

刻印

目を開いた瞬間、自分がどこにいるのかわからなかった。

とりあえず何か動いた気配を感じて足元を見下ろすと、膝の辺りまで温い水に浸かっていた。

いつの間にか、白い袴を身にまとっていた。

生暖かい風が髪をさらった。

それが吹いてきた方を向こうとした時、頭上から声が響いた。

「やつと来たか、和泉の姫」

腹を揺さぶる、低く、しわがれた大きな声。

それは、聞いたことのない声だった。が、知っているような気もした。

ナナは黙って振り仰いだ。

薄暗い空間の向こうに、星のように妖しく光る目が二つ。

暗がりにも目が慣れるまでもなかった。

「九……尾……」

ソレは聞かされていた通りの姿をしていた。おぞましく、醜悪で、狂気すらまといいた。

「九尾……アナタは……」

が、初めてわかったこともあった。

「アナタは……そんなものでできていたの……？」

九尾はナナを見下ろして、にやりと笑った。

「そうだ……。今ならわかるだろう？ 和泉の姫」

そこから感じられるのはただの悪しき「気」ではなく……、激しい『憎しみ』、深い『恨み』、そして『嫌悪』『絶望』『殺意』『苦しみ』……闇の気配だった。

「ワシを封じに来たか？」

九尾の目が妖しく光った。

「あのガキのタガはもうすぐ外れる。そうすれば、ワシを閉じ込めるのはお前の役目だ」
言葉に反して、九尾は楽しんでる。

不気味な狂気を感じ、ナナは胸に手をやった。目の前のモノを封じ刻印があつたはずの場所を探した。

「ワシをその身に封じればいい」

それを見て、九尾はそう誘った。

「私はもう『刻印』を持たない……。だから……アナタを封印する力はない」
産み出された目的が消滅したことを、鼻先に精一杯突きつける。

自分を倒す力がないと宣言されて、九尾は笑った。

しかしそれは、天敵が『必殺技を失ったただの人』となり下がった……という理由ではなかった。

「和泉の姫……お前ならば『刻印』などなくとも、このワシを封印できるはずだ」
九尾は己が喜ぶべき事態に、全く逆のことを言つてのけた。

嘘だ。そんなわけがない。

ナナはそう言おうとして留まった。

嫌な予感が背をつたつた。

「ただのヒトが『人柱力』になれるのに、和泉の姫ができないわけがないだろう？」
「え……？」

その言葉は、ナナの根幹を揺るがす。

「お前が産み出されたあの日から、お前とワシはともに生きる運命なのだ」

「共に生きるって……ど、どういう意味……？」

ナナの目には、もう九尾の妖しい光しか映らなかつた。

「お前がワシを封じること、ワシとお前はひとつの存在として生まれ変わる」

が、九尾はナナの恐れに構わず悦に入った。

「今の」お前となら、この世に敵うモノがないほどのチカラを手に行けるだろう」
九尾は笑い、口が耳まで裂けた。その妖気はとくにナナを包み込み、意識まで束縛しようとしていた。

「私と、九尾が……ひとつの存在に……？」

戯言……と言いつつ聞かせようとしても、言葉は見つからなかった。新たに疑問を投げかけようとも、その答えが恐ろしかった。

ナナはグツと喉に力を込めた。何か言えば、意識を囚われそうだった。

「さあ、ワシを封じろ、和泉の姫!! あのガキが、もうすぐ自ら封印を解きに来る」

巨大な体を揺さぶって、九尾は笑った。

「ナ……ルト……」

ナナは精一杯、信じたはずの存在を思い浮かべた。

「ナルトは……」

こんな日が来なければいい……きつと来ない……そう思つて過ごした木ノ葉での日々。

まっすぐで、まぶしくて、強く惹かれた存在だった。

救われた。自分の使命を忘れられた。

だから、

「ナルトは封印なんて解かない!!!」

ついに、ナナは叫んだ。

「ナルトはつ……アナタの声なんか聞かない!!!」
絡みつく醜悪なチャクラが途切れた。

「ナルトがもしここへ来ても……私が止める!!!」

九尾も一瞬、瞬きした。

「アナタを絶対に開放しない!!!」

が、

「お前がナルトを “止める” だと……?」

九尾は今ままで一番高らかに鳴いた。

そして、

「ではなぜ、お前は “コチラ側” にいる?」

そう言った。

「え……?」

ナナは後ろを振り返った。

巨大な九尾の身体を閉じ込める柵が、巨木のようにそびえていた。

「(ハ)、(ハ)は……」

そう、そこは九尾の『檻の中』。

「なんで……？」

九尾を封じる使命を持った自分が、何故檻の内側に居るのか……。

疑問はすぐにまた恐れと直結した。

「お前とワシはひとつになる運命だと言ったはずだ」

恐れに染まった心が、知らずと九尾の言葉に呼応した。

「もう楽になれ……どうせお前に今のナルトは止められない」

耳から心へ、そして脳へ……九尾の言葉はナナの深みへと侵攻していく。

「お前もわかつているはずだ、何故、封印が解かれようとしているのか」

言いながら、九尾はナナの後ろへと視線を向けた。

操られるように、ナナも後ろを振り返る。

柵の向こうに、見慣れた影が立っていた。

「ほら……来たぞ」

九尾は小さくほくそ笑んだ。

「感じるだろうか？ 和泉の姫」

ナナは、檻の前にフラフラと立つ「ナルト」に息を呑んだ。
「あのガキの、混乱や憎しみを……!!」

「ナルト!!」

その名を叫んだ。が、また声を失っていた。

走り寄ろうとも、膝を曲げることすらできなかつた。

『なんでだ……?!』

逆に、ナルトの声が聞こえた。

『なんでこうなっちまうんだよ……?!』

激しい感情も伝わって来た。

『苦しい……』

混乱と苛立ち、絶望、嫌悪、憎しみ……ぐちゃぐちゃに混ざったそれは、受け止めるのに耐えきれぬものではなかつた。

『イヤだ……』

次第にそれが己の奥深くにあるものと同調するのを感じた。

それも、止められるものではなかつた。

『オレってばどうすればいい?!』

ナナは何もできなかった。

つい先ほど、「ナルトを止める」と言った矢先であるのに、声のひとつも出ない。

『誰か助けてくれ!!』

弱い言葉も、諦めも……とても似合わぬ姿を見せつけられても、何もできなかった。

『誰か答えを教えてください!!』

「全てを壊せ」

代わりに、九尾が言った。

「ワシに預けろ」

薄暗い空間に、星のように妖しく目を光らせて。

「お前の心を、全て」

そうナルトを誘った。

「そうすれば、お前を苦しみから救ってやる」

甘い誘いだった。

ナルトにとつても、そしてナナにとつても。

「ぐっ……!!」

九尾の誘いに答えるかのように、ナルトの腹の封印式が壊れた。

「そうだ……それでいい」

頭上の声は満足げだった。

「ナルト!!」

何が起ころうとしているか、もちろんわかりきっていた。

だから、ナナは本能のままに叫んだ。

が、やはり己の声は聞こえなかった。足も、その場に根をはやしたかのようにピクリとも動かなかった。

「ナルト!! ダメだよっ!」

精一杯叫んだ。喉に痛みも感じていた。

それでも、声は出なかった。

「さあ こっちに来い」

反対に、九尾はますます饒舌になる。

「この封印の札を引き千切れ!」

「ダメだよっ、こんなのっ!!」

届かぬ声に意味はなく……ナナの目には、誘われるがままにこちらに近づいて来るナルトの姿が映った。

「ナルト! 来ちゃだめ!!」

ナルトの意識は消滅していた。

反対に、憎しみの感情がナナの意識になだれ込んでくる。

「ナルト……!!」

必死で言葉を探した。届かなくとも、彼を止める言葉を探した。

「……………」

が、見つからなかった。

頭上で九尾が喉を鳴らした。

ナルトの手が、檻に張られた札にかかった。

もう、ナナの脳は、その先に起こることを受け入れようとしていた。

「……………」

と、その時……。突然白い影が現れてナルトの手を掴んだ。

そしてそのまま、ナルトを九尾から引き離れた。

「お、お前は!!」

ナナより先に、九尾が反応した。

怒りの火花が、頭上から落ちた。

同時に、ナルトの目に色が戻った。

「火影……様……?」

現れたのは、〃四代目火影〃だった。

影

「父ちゃん」

ナルトはようやくやくそう呼んだ。

やっと知った『父親』という存在。

それがわかったという喜びは、言葉に表せるものではなかった。

憧れてやまなかつた四代目火影と、父子という深い絆で繋がっていたことが嬉しかった。

何故、九尾をこの身に封印したのか……。当然、積年の疑問と怒りもこみ上げた。

だがそれをぶつけてみて、受け止められたとき……。やはり喜びが勝ってしまった。

「お前に九尾のチャクラを半分残して封印したのは、お前がきつとこの力を使いこなすと信じていたからだ。オレの息子だからね」

そんなふうに言われたから。

そしてまた、そうせざるを得なかった然るべき理由も明かされた。

16年前の九尾襲来。あれは天災などではなく、九尾を操った黒幕がいる……。と。

父は、それが暁の面の男で、彼はきつとまた木ノ葉を襲うだろうとも言った。そして、ペインは木ノ葉への恨みをその面の男に利用され、操られたのだろうと。

混乱の中、父は自分に“答え”を託した。

忍の世に産まれ続ける『争い』、そして『憎しみ』の連鎖。決して抜け出すことのできない『必然』。それを終わらせる“答え”とは……？

ペインに投げかけられた問いにも答えることができなかつた。

本当の平和とは何なのか……どうすれば掴みとれるのか……。

四代目火影の父ですら「わからない」と言い切る。

「エロ仙人や四代目にわかんなかつたことが、オレにできるわけねーだろー！」

が、父はナルトの頭に手をやってはつきりと言った。

「ナルト、お前ならその“答え”をみつけられる」

まっすぐな瞳だつた。

「オレはそう信じている……」

その笑みに、ナルトは本当に彼が“父親”なのだ実感した。

まぎれもなく、親が子に与える想いがあつたから。知らなかつたはずなのに、それがわかつたから。

チャクラが消えかけ、父の姿が霞み始めた。

別れの時がもう訪れていた。

父は最後のチャクラで封印を組み直し、そして全てを託すような強い視線をよこしてから、ふいに笑んで言った。

「ほら、『迎え』が来たよ、ナルト」

「え……？」

その視線につられて後ろを振り返る。

何もなかった空間に、白い袴姿の少女が立っていた。

「ナナ……?!」

ナナは怯えたような顔をしていた。

自身がどこにいるかわからないような戸惑いを、素直にかもし出していた。

「四代目さま……？」

ナナは震えるような瞳で、すでに消えかかっている父を見上げた。

「木ノ葉はまだやりなおせる……頼んだよ、ナルト」

いよいよ別れの時が迫っていた。もう、父の姿は陽炎のようになっている。

「ナナを護れよ」

四代目は最後にナルトにそう言って笑った。

「任せろってばよ！ 父ちゃん！」

力いっばいいうなずいた瞬間、その姿は幻のように目の前から消えた。

「ナナ……」

父を見送って、ナルトは再びナナを見た。

「ナルト……」

その目はナルトを遠慮がちに見返した。

ナルトは思わず、ナナの冷たい手を握っていた。

ナナの目から涙がこぼれた……。

その雫が落ちる瞬間、優しく温かい空間は消え去った。

ひとつ瞬きをした後、優しさと温かさの代わりに、怒りと冷たさに包まれていた。

だが、もうそんな空気に侵されはしなかった。

（ありがとう、父ちゃん……！）

ペインの造った巨大な土の塊が、木ノ葉近くの森の上に浮かんでいた。

二人はその上に立っている。

放せばすぐに遥か地上へと落ちて行きそうなナナをしつかり抱えて、ナルトはペイン

を見据えた。

里の方から土煙が上がり続けているのが視界に入った。

嫌な予感と焦りを抑えつけ、ナルトはナナを地上に降ろした。

そして再びペインと対峙する。

「お前の『本体』のところへ連れて行け！ 直接話したいことがある！」

自身の中に強い芯を感じていた。

「ナルト……」

と、ナナは不安気にこちらを見つめる。

『ナナを護れ』という父の言葉も、その芯の一部になっている。

「ナナ、お前はここで待ってる。心配すんな、オレがなんとかするってばよ！」

そう言つて、ナナの細い肩に上着をかけた。

「ナルト……！」

壊れそうなくせに、ナナはまだ足を動かさそうとする。

「もう、お前はなにもしなくていい……！」

それを押し留めた。

「大丈夫だ！」

そして、できるだけいつものようにそう言つて、ペインの方へと走つた。

胸の中には『強さ』を感じた。さつきまでの迷いは消えた。『まっすぐ』な強さだった。

父が信じてくれた。師からも託された。一番近くにナナがいる。彼女も仲間たちを護りたい。里も護りたい。

想いは力になった。呆れるほど単純に。

「答え」を持たぬお前ごとき……！ 諦めろ！」

ペインは怒りや憎しみをぶつけて来た。

だが、迷わず投げ返した。

「オレが諦めるのを諦めろ!!」

渾身の螺旋丸が、ペインの感情を粉碎した。

乾いた空気が土煙を巻き上げ、視界が霞む。

息を整えながら、しばしの沈黙に浸った。

と……。

「ナルト」

背にひどく弱々しい声がかけられた。

「ナナ、オレは……ペインの本体のここに行く」

続けてナナが何か言う前にそう告げた。

決意は必然だった。

カツユが「今度こそ増援」をと言ったが、首を横に振った。

決着をつけなければならぬ。自分が。

信じてもらった自分が、託された自分が。

だが。

「私も行く」

ナナは折れそうな姿でまっすぐにそう言った。

改めて彼女を見つめる。

ただでさえ頼りない入院着は汚れてボロボロで、胸の辺りは赤黒い血に染まっている。むき出しの手足はあちこち擦り向けて、髪も乱れてボサボサだ。

そしていつものように顔色が最悪で、目の下は窪み、唇も紫で、やっと呼吸しているようにも見える。涙の痕さえも埃で黒ずんでいる。

が……。

「私も連れて行って」

その目には光が在った。

決して強くない。だがまっすぐで……、悲しくて綺麗で哀れな光に見えた。

「私は……」

ナナはその目を伏せた。

「私はナルトの『影』だから……」

そしてそんなことを言う。

「アナタが確かめようとしてるなら、私は見届けたい」

決意の言葉とは裏腹に、ナナの姿は儂げだった。

「私がさつき……あそこに居たわけを……ナルトはもう……知ってるでしょう……？」
そう……ナルトは知っていた。

九尾と対峙して、さらに父とまで出会った空間にナナが現れたことを、自分は少しも不思議に思わなかった。

「私は……」

ナナは初めて口にする言葉を紡ぐ。

きつと、決して告げることが許されなかった真実を。ずっと抱え込んできたモノを。

「アナタを殺すために作られた……」

不思議と、衝撃も驚愕も無かった。

あるのはただ、ナナがそれを面と向って告げたことへの戸惑いが少しだけ。

「アナタが九尾に喰われれば、私はアナタを殺して九尾の新たな器となる……。私はそのため産み出され、木ノ葉へ来た」

「ナナ……」

ナナはひと息に全てを語った、

「もう……知ってたよね……？」

ナナの「血」が明らかに変わった時、本当は気づいていた。

何故「和泉」の少女が木ノ葉へ来て、忍になるうとしていたのか。何故「和泉」の少女がいつも自分の側にいたのか。

「九尾の封印が解ければ、私は九尾を封じる。そうすればアナタは死ぬ……。九尾を封じた私も、私じゃなくなる。だから……」

風はまだきな臭かった。

「アナタが消えれば私も消えるってことだから……」

それでも、ナナの周りに流れるのは冷涼な風だった。

「だから……私はアナタの「影」」

「ナナ……」

ナルトは拳を握った。ナナの言葉を否定することなどできなかつた。現に先刻、九尾の「棲みか」にナナが居たから。

慰めなんて要らない。無駄なことだ。自分はそれを知っている。

「ナナ……」

ナルトは腹に手をやった。

(こんなモノでも……)

「コイツのせいでも……お前とオレは繋がってたんだな」

二人のその繋がりが「絆」という形であることを願って、ナルトは言った。

「ナルト……」

ナナは驚いたように目を見開いた。

彼女のうしろめたさはわかっていた。

でも、ずっと前から自分に向けられた笑みが偽りなんかじゃないと、ナルトは言いき
れた。

「そうだな……影っていうか、オレとお前は『運命共同体』ってヤツなんだな……」
だから自然と笑えた。

事実、悲しくなかなかった。

ナナもかすかに口元を揺らした。

そう……どんな形でも、二人の間には確かな「絆」があつたのだ。

「ナルト……アナタの『答え』を、私に見届けさせて」

それをはっきりと確信して、ナルトは腹のあたりをギユツと抑えた。
ナナも胸のあたりをギユツと抑えた。

「わかった……！」

カツユは止めたが、聞き入れる気は無かった。

二人は「運命共同体」……一蓮托生なのだから。

「一緒に行こう」

ナルトはナナの手をとった。

「うん」

ナナはその手をしっかりと握り返した。

兄弟子

シカクといのいちは、日向の男をつれてペインの“本体”を搜索していた。里に近く、高い場所。

いのいちの分析では、そこにペインがいるはずだった。

途中、日向の男がナルトとナナを発見した。

「ナルト！」

巨木の枝の上、ナルトはナナを背負ったまま立ち止まり、振り返った。

ナルトはペイン“本体”の居場所を見つけたと言い切り、そこへはナナと二人で行くのだと言った。

「確かめたいことがある」……と。

いのいちはもちろん止めた。

これまでの戦闘で、ナルトのチャクラが消耗しきっていることはわかっていた。

それに、青白い顔で沈黙をまもるナナに、戦える様子は欠片もない。

が、シカクは許した。

それを知って、『答え』を出すのだと。

「いいだろう……、オレたちの痛みを教えてやる」

小南は止めた。

が、長門もまたナルトの『答え』を知りたがった。

そして長門は、彼らの身に起こった忌まわしいできごとを語った。

それはまさに忍の世の『負の連鎖』を表すものだった。

長門の話を聞きながら、ナナはずっとナルトの背中だけをみつめていた。

終わらない憎しみの連鎖……。

それを聞かされて、ナルトが何を『答え』とするのか。

一番知りたいのはナナだった。

「エロ仙人は、オレのことを信じて託してくれたんだ……」

ナルトは、まっすぐに言った。

迷いはあつた。確かに、彼らしくない弱さはいま見えていた。

が、決してうつむきはしなかった。

「だからオレは……、エロ仙人の信じたことを信じてみる」

いつか来る「平和」。

ナルトはそれを信じると言い切った。

「それがオレの『答え』だ」

そしてナルトは、ポケットから自来也の本を出した。

長門のことが書かれ、その主人公の名が「ナルト」であるという本を。その瞬間、長門の目の光が色を変えた。

ナルトは全てを背負った。

自来也の果たせなかつた理想の平和……そして、長門と小南の絶望も。

「お前を信じてみよう……うずまきナルト」

長門はそう言い、小南が止めるのもかまわず印を結んだ。

そして、

「外道 輪廻転生の術……」

術を発動した。

「やめて！ 長門！」

小南が悲鳴に近い声を上げた。

「な、なんだ?! 何の術だ?!」

ナルトも動揺する。

が、

「手伝え、いずみナナ」

長門は唐突に言った。

「え……う？」

ナルトが驚いて振り返る。

視線を合わせた。優しさが、彼の碧い瞳の中を漂っている。

そこに少しだけ安堵して、ナナは彼の前を通り過ぎた。

「な、なんでナナに……？」

「長門、まさか……」

動揺するナルトと小南をよそに、ナナは静かに長門に近づいた。

「和泉一族のお前なら、全員を『呼び戻せる』だろう……」

長門は苦しそうにそう言った。

「輪廻の眼……」

彼を見上げて、ナナは思わず小さく呟いた。

その眼について詳しくは知らない。不吉なようで神聖なものにも感じる。

「そうだ……。この眼を得たという六道仙人も、もとは和泉の血をひいている……。和泉の直系のお前に、この術のサポートができないはずはない……」

長門は皮肉ともとれるようなことを言った。

その痩せた体には汗が流れ始めている。

ナナは振り返り、小南に言った。

「本当に……いいの……？」

そうしなければいけない気がしたからだ。

小南は長門を見て、ナルト見た。そして最後に、ナナに視線を返した。

諦めた目をしていた。

胸が痛んだ。

「早く……しろ……」

長門はチャクラを最大にまで練りこんだ。

ナナはもう一度だけ小南を見て……両手を長門の乗る台座についた。

そして目を閉じた。

もうその先は、現実世界ではなかった。

輪廻転生

焚き火がパチパチと音を立てていた。

このどこかよくわからない静かな場所で、思いがけずに“父”との再会を果たした。今さらだったのが、“父”に思っていたことを伝えられた。別れた当初はとても言えなかつた言葉を、今なら素直に言えた。

やっと、胸のつかえがひとつとれた。

父も穏やかな顔をしている。

少しだけ気恥ずかしくて、心からほっとしたその時、

『カカシ先生……!』

どこからか、自分を呼ぶ声が聞こえた。

「……………?!」

“こんな場所”に、何故……?!

辺りを見回すが、暗いだけで何も無い。

『カカシ先生……!!』

声は何故だか悲痛だった。

「まさか……」

その声に、確かに聞き覚えがあった。

「迎えが来たようだな」

父が言った。

「迎え？」

「お前がこつちに来るにはまだ早すぎたようだ。お前にはまだやるべきことがある」

「父さん……!」

父の姿が霞み始めた。

「お前と話せてよかったよ、カカシ。オレを許してくれて本当にありがとう」

父は安堵の笑みを浮かべていた。

「これでやっと、母さんに会える」

父はその言葉を残して消えてしまった。

「……………!?!」

声が途切れた瞬間に、焚き火も消えた。

辺りは上も下もわからぬほどの暗闇になった。

「カカシ先生!!」

が、惑う暇はなかった。

すぐにまた、か細い声が聞こえた。

「ナナ?!」

瞬間、覚えのある細い腕が思い切りしがみついて来た。

「……ナナ……?!」

恐る恐る、その身体に手を沿える。

「カカシ先生……」

ナナはゆっくりとこちらを見上げた。

次第に、周囲は明るくなり始めた。

「よかった……見つけられた……」

ナナは、安堵したような困ったような、複雑な顔をしていた。

この場所がどこで、ナナが何をしに来たのか、カカシはやっとわかった。

「先生……まだ逝っちゃダメだよ」

「ナナ……」

「勝手にいなくなるなんて……」

「ごめんね……」

ナナは弱々しく笑んだ。

纏う純白の袴に溶けそうなほど、青白い頬で。

「先生、帰ろ」

そして、そう言つてカカシの腕にしがみついたまま、闇の奥へ視線を向けた。

「みんな！ こつち……!!」

ナナは暗闇に向かつて声をかけた。

カカシの感覚では、何の気配もないただの暗闇だった。

が、ナナの声に呼応するように、次々と人の姿が浮かび上がっていく。

「みんな……！ 私声を聞いて……！ 私を見つけて……！」

ナナの声色は決して強くはなかった。だが、抗うことができない不思議な響だった。

そろり、そろり……と、人々はナナの方へ近づいて来た。

年をとつた者、働き盛りの若者、中年の男女、そして忍装束の者。子供もいた。

「大丈夫、みんな帰ろう……！」

その誰もが、木ノ葉の人間だった。

「木ノ葉に帰ろう……！」

知っている顔もあった。

「シズネさん！ こつち！」

「え、ええ……」

皆、少しずつナナの声に反応し、徐々に表情を取り戻していく。すると、ひとりの子供が大声で泣き出した。

「大丈夫だよ」

ナナはカカシの腕を掴んだまま、子供に手を差し伸べた。

「一緒に帰ろう」

「おうち、帰れる？」

子供はしゃっくり上げながら、ナナにしがみついて来た。

「大丈夫だよ、もうすぐおうちに帰れるから」

ナナは優しくその子の頭を抱いた。

そして、

「ちゃんとして来てね」

里の者たちにもそう言つて、最後にカカシを見上げた。

カカシが小さくうなずくと、ナナは後ろを振り返った。

いつの間にか、そこには白い光の塊があった。

「ほら……木ノ葉に帰ろ」

ナナはまるで自分に言い聞かせるようにつぶやいて、光に向かって一歩踏み出した。

カカシも、子供も、つられて一歩……里の者たちも、足を一歩進めた……。

そうして突然、強い光に包まれ目が眩んだ。

次に目を開けると、もうナナはいなかった。

そして、見覚えのある青い空が広がっていた。

「カカシ先生?!」

自分を呼ぶ声がして反射的に起き上がると、チヨウジとチヨウザが驚いた顔で駆け寄って来た。

「カカシ! やはりお前もか!」

傍にいたカツユが全てを語ってくれた。

ナルトのとった行動と、長門の術……そして、

「ナナ……」

ナナの「技」を。

ナナの「導き」は夢でなかった。

彼女が今、ナルトと一緒にいると聞いて安心はした。

が、やけに強くしがみついて来たナナの手の感触がまだ、腕にしつかりと残っていた。

英雄の帰還

「弥彦と長門が私の全てだった」

全てが終わった後、二人の亡骸を紙で包み、小南は言った。

「弥彦と長門……、二人の夢がお前に託されたのなら、これからはお前が二人の夢だ」
彼女の目に涙は無かった。まっすぐにナルトを見つめていた。

「長門がお前を信じたのなら、私もお前を信じよう」

そして柔く笑みながら、ナルトの背後に立つナナに視線を向けた。

ナルトは強くうなずき、ナナを振り返った。

ナナの表情は、小南とは対照的だった。

「どうして……?」

ナナから発せられる陰のこもった声に、ナルトは背筋が冷えるのを感じた。

瞬間、ナナは力を失って膝をついた。

「ナナ!？」

ここに来る前からナナの体力は限界だった。

ナルトがペインと戦っている間、ナナが何をしていたのかは知らない。

だが、ナナは傷ついた身体で戦ったのだ。足りない血を流し、安静にしていなければならぬ者が身に付けるはずの入院着をボロボロにして……。

「ナナ……大丈夫か?!」

ナルトが着せた上着を通して、肌の冷たさが伝わって来た。

「どう……して……?」

が、ナナはナルトを見ず、泣きそうな顔で小南を見上げたまま言う。

「アナタは……裏切られて大切な人を失い……今、もう一人の大切な人に死なれたのに……」

小南の表情も変わった。

「どうして、まだ『信じる』ことができるの……?」

「ナナ……」

「お前……」

たった今、長門を失った小南よりもっと深い闇に、ナナは居る。

そう思った。

「大切な人を傷つけられ、殺されて……、勝手に死なれて……、どうして『憎しみ』とか『後悔』とか『絶望』とかに……飲み込まれずにいられるの?」

暗い場所から湧き出る言葉を吐き出しながら、ナナは徐々意識を手放していく。

「アナタは……まだ信じ……られるの……？」

「ナナ……！」

ナルトの腕の中に、ナナはゆっくりと落ちて行く。

「どうやったら…… “コレ” を抱えて……生きて……いける……の……？」

自分の言葉を拒否するように、ナナはついに眠りについた。怖ろしいほど冷たい身体を抱いて、ナルトは途方に暮れた。

「まるで……」

小南がかすれた声でつぶやいた。

「まるで、引きずり込まれるようだな……」

ナルトはナナを見た。瞼が透けそうなほど白かった。

「和泉の姫が抱えるものを、私は知らない……」

小南はナルトに言った。

「だが、弥彦が死んだ時に私や長門が “感じたもの” を……そいつにも感じる」

ナルトは奥歯を噛みしめた。『絶望』の二文字が、ナナの白い肌からにじみ出るようだった。

「そこから救うことなど他人には到底出来ない……が、信じさせることは出来るかも知

れない」

小南は黙りこくったナルトに言った。

「お前が、長門や私に見せたように、信じさせる力をそいつに見せればいい」

少しの希望を。

「……ああ……」

それではしゃぐほど、ナルトはもう子供ではなかった。

「オレが、ナナをもう一回笑わせてやる……」

だから、自身の心に刷り込むようにそう言った。

「オレとナナは、一緒に生きてく運命みたいだからな！」

そして、笑った。それが「使命」じゃなく、「絆」であることを願って。

ナナは息をしているのかも分からないほど、静かに眠っていた。

「だったら、離れるな……」

小南は大人びた笑みを浮かべながらそう言って、「二人」を連れて去って行った。

「ナナ……」

ナナと二人、静寂に包まれる中、ナルトは様々なことに想いを巡らせた。

九尾のこと。自来也のこと。カカシのこと。長門と小南のこと。ヒナタのこと。サ

クラのこと。仲間たちのこと。サスケのこと。父のこと……。そして、ナナのこと。

みんな繋がっている。
そう思った。

みんなと繋がって、自分はこのまで来ることができた。木ノ葉を守ることができた。それに、ずっと一人きりだと思っていた頃も、本当はそうじゃなかった。

ナナとは知り合う前から繋がっていたのだ。

それはとても幸福なことには思えた。お互いに、一人きりだった瞬間などなかったのだ。

たとえば、望まなくとも……。

「きつと……」

サスケも……。

ナナの閉じられた臉を見て、続きを呑み込んだ。

『どうして、まだ “信じる” ことができるの……？』

闇の奥底から響くようなナナの声が、まだ耳に残っている。

『どうやったなら……、 “コレ” を抱えて……生きて……いける……の……？』

底まで引きずり込まれそうな絶望を、ナルトは知ってしまった。

大切な人を失う絶望を……。

「さてと！」

ナルトはわざとらしく気を取り直して、ナナを抱き上げた。

「里に帰るってばよ……!」

木ノ葉の住人たちを連れ戻したナナを、早く木ノ葉に連れ帰りたかった。



『先生……まだ逝っちゃダメだよ』

子供っぽいのに大人びて、怒っているのに泣きそうで……。

『勝手にいなくなるなんて……』

そんなナナの顔を、暗がりでもはつきりと見た。あの、生と死の狭間の場所で。

まるで夢のような出来事に、しばし呆けていても良いはずだった。

父と再会を果たし、言葉を交わし、積年の想いを交わして……。

あれが現実だとは思えなかった。いや、現実ではないのだから当然だった。

が、ひどく曖昧な空間の中で、ナナの存在だけは確かだった。

『大丈夫、みんなで帰ろう……!』

闇に在る唯一の光だった。

『木ノ葉に帰ろ』

それは光り輝く……とは程遠い、控え目なともし火のようだった。

それでも、彼女は大勢を導いた。自分はともかく、失わなくて良かった多くの命を再び生の世界へと導いた。

それだけははつきりとわかるから……。

だから、呆けているわけにはいかなかった。

大切な仲間たちの戦いは、まだ終わっていない。

まだ、救われた命でやれることはあるはずだった。

「間違いない、ナルトだ……！」

先を走る。パツクンの声が珍しく裏返った。

と同時に、前方の大木の枝に“黄色の風”を見る。

それはバランスを崩して、足元を踏み外した。

「ナルト……！」

その身体が枝からずり落ちる前に、どうにか腕を伸ばした。

「カカシ先生……！」

見るからにボロボロだった。

「ナルト……よくやったな」

が、ナルトは白い歯を見せて笑った。

そして、

「ナナも……相当ムリしたみたいだな」

カカシはナルトの背で眠るナナをみやった。

「カカシ先生、ナナってば……」

ナルトの言葉は遮った。

「ああ、わかってる」

そう言いながら、人形のようなナナを抱き取る。

「ざっき会ったから、知ってるよ」

異様に冷たい身体だが、かすかに呼吸しているのが確認できた。

ナルトは何も言わなかった。ただ、ナナの青白い横顔を見つめていた。

「里まで踏ん張れるか？」

「もちろんだってばよ！」

「バテバテのくせに」

「カカシ先生だって生き返ったばっかのくせに！」

なんとなく言い合ったのは、ナナに聞こえていればいいと……そう思ったからだ。

ナルトも同じ思いに違いなかった。

「里に帰ろう、先生！ ナナを連れて！」

ナナと同じ言葉を聞いて、カカシはどこことなく安堵し、大きくうなずいた。

里に戻ったナルトを待ち受けていたのは、信じられない光景だった。

それは跡形もなくなつた里の景観ではなく、彼を「英雄」として迎える里の者たちの晴れ晴れとした顔だった。

サクラとの再会を果たすやいなや、ナルトはあつという間に彼らによつて取り囲まれ、胸上げまでされていた。

疎まれ、嫌悪されてきた彼が、里中の皆に認められた瞬間だった。

その光景を、サクラも、仲間たちも、イルカも、涙ながらに見守っていた。

「ナナ……」

そしてカカシも、背にナナの弱い吐息を感じながら見つめていた。

「ナルトはこの里の『英雄』になつたよ」

と……。

「先生……」

だらんと垂れ下がったナナの指先がピクリと動いた。

「ナナ?!」

自分の背に居るといふのに、間抜けにも振り返る。

ナナの表情は見えなかった。
だが。

「見たかった……。この、景色……」

カカシにだけ聞こえる声で、ナナは確かに言葉を発した。

「ナナ……」

そして、

「わかってたよ……。私には……」

そう言つて、そつと息を吐いた。

「ナナ……!」

同時にまた指から力が抜けた。

「ナナ!」

もう、声は無かった。代わりに、弱い呼吸が規則正しく聞こえて来た。

「カカシ先生!」

カカシの動揺に気づいてか、サクラが駆けて来た。

「先生? ナナ? ナナは!」

背負つた者を見つけると、すぐに医療忍者の顔になる。

「診せて!」

ナナを背から降ろして抱きかかえると、サクラはすぐさまその手を取った。

肌の冷たさに一瞬だけ驚いて、脈を診て、奇妙な顔をする。

カカシは小さく息をついた。

「ナナ……」

サクラは困惑した顔でカカシを見上げた。

ナナの肩は冷えきっていて、脈も弱くて、それでもどうにか無事で……サクラは安堵しただろう。が、こんな顔をしているのは……。

「ナルトを祝福してるんだよ」

ナナの口元が満足げに笑みを浮かべていたからだった。